



Cisco IronPort AsyncOS 7.5 for Email 上級 コンフィギュレーション ガイド

20011 年 6 月 29 日

【注意】 シスコ製品をご使用になる前に、安全上の注意 (www.cisco.com/jp/go/safety_warning/) をご確認ください。

本書は、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動 / 変更されている場合がありますことをご了承ください。

あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。

また、契約等の記述については、弊社販売パートナー、または、弊社担当者にご確認ください。

このマニュアルに記載されている仕様および製品に関する情報は、予告なしに変更されることがあります。このマニュアルに記載されている表現、情報、および推奨事項は、すべて正確であると考えていますが、明示的であれ黙示的であれ、一切の保証の責任を負わないものとします。このマニュアルに記載されている製品の使用は、すべてユーザ側の責任になります。

対象製品のソフトウェア ライセンスおよび限定保証は、製品に添付された『Information Packet』に記載されています。添付されていない場合には、代理店にご連絡ください。

The Cisco implementation of TCP header compression is an adaptation of a program developed by the University of California, Berkeley (UCB) as part of UCB's public domain version of the UNIX operating system. All rights reserved. Copyright © 1981, Regents of the University of California.

ここに記載されている他のいかなる保証にもよらず、各社のすべてのマニュアルおよびソフトウェアは、障害も含めて「現状のまま」として提供されます。シスコおよびこれら各社は、商品性の保証、特定目的への準拠の保証、および権利を侵害しないことに関する保証、あるいは取引過程、使用、取引慣行によって発生する保証をはじめとする、明示されたまたは黙示された一切の保証の責任を負わないものとします。

いかなる場合においても、シスコおよびその供給者は、このマニュアルの使用または使用できないことによって発生する利益の損失やデータの損傷をはじめとする、間接的、派生的、偶発的、あるいは特殊な損害について、あらゆる可能性がシスコまたはその供給者に知らされていても、それらに対する責任を一切負わないものとします。

Cisco and the Cisco logo are trademarks or registered trademarks of Cisco and/or its affiliates in the U.S. and other countries. To view a list of Cisco trademarks, go to this URL: www.cisco.com/go/trademarks. Third-party trademarks mentioned are the property of their respective owners. The use of the word partner does not imply a partnership relationship between Cisco and any other company. (1110R)

このマニュアルで使用している IP アドレスおよび電話番号は、実際のアドレスおよび電話番号を示すものではありません。マニュアル内の例、コマンド出力、ネットワーク トポロジ図、およびその他の図は、説明のみを目的として使用されています。説明の中に実際のアドレスおよび電話番号が使用されていたとしても、それは意図的なものではなく、偶然の一致によるものです。

Cisco IronPort AsyncOS 7.5 for Email 上級コンフィギュレーションガイド

Copyright © 2011 Cisco Systems, Inc.

All rights reserved.

Copyright © 2011–2012, シスコシステムズ合同会社 .

All rights reserved.



CONTENTS

はじめに **xxi**

このマニュアルをお読みにする前に **xxi**

クラウド電子メール セキュリティ ユーザに対する注意点 **xxii**

ドキュメント セット **xxii**

このマニュアルの構成 **xxii**

表記法 **xxiv**

シスコのテクニカル サポート **xxiv**

CHAPTER 1

リスナーのカスタマイズ **1-1**

リスナーの概要 **1-2**

GUI を使用したリスナーの設定 **1-5**

リスナーのグローバル設定 **1-7**

リスナーのグローバル設定 **1-11**

リスナーの作成 **1-11**

SMTP アドレス解析オプション **1-13**

Strict モード **1-13**

Loose モード **1-14**

その他のオプション **1-14**

部分ドメイン、デフォルト ドメイン、不正な MAIL FROM **1-16**

高度な設定オプション **1-17**

LDAP オプション **1-18**

クエリーの受け入れ **1-18**

ルーティング クエリー **1-19**

クエリーのマスカレード	1-19
グループクエリー	1-20
リスナーの編集	1-20
リスナーの削除	1-20
CLI を使用したリスナーの設定	1-21
HAT の詳細パラメータ	1-22
SenderBase 設定と HAT メール フロー ポリシー	1-24
SenderBase クエリーのタイムアウト	1-25
HAT Significant Bits 機能	1-26
TLS を使用した SMTP カンバセーションの暗号化	1-33
証明書の取得	1-33
中間証明書	1-34
自己署名証明書の作成	1-35
証明書のインポート	1-37
証明書のエクスポート	1-37
認証局のリストの管理	1-38
カスタム認証局リストのインポート	1-39
システム認証局リストのディセーブル化	1-39
認証局リストのエクスポート	1-39
リスナー HAT の TLS のイネーブル化	1-40
証明書の割り当て	1-41
ロギング	1-42
GUI の例	1-42
CLI の例	1-43
配信時の TLS および証明書検証のイネーブル化	1-44
要求された TLS 接続が失敗した場合のアラートの送信	1-48
ロギング	1-48
CLI の例	1-48
HTTPS の証明書のイネーブル化	1-53

CHAPTER 2

ルーティングおよび配信機能の設定 2-1

ローカル ドメインの電子メールのルーティング 2-2

SMTP ルートの概要 2-2

デフォルトの SMTP ルート 2-3

SMTP ルートの定義 2-4

SMTP ルートの制限 2-4

SMTP ルートと DNS 2-5

SMTP ルートとアラート 2-5

SMTP ルート、メール配信、およびメッセージ分裂 2-5

SMTP ルートと発信 SMTP 認証 2-6

GUI を使用した SMTP ルートの管理 2-6

SMTP ルートの追加 2-6

SMTP ルートの編集 2-7

SMTP ルートの削除 2-7

SMTP ルートのエクスポート 2-8

SMTP ルートのインポート 2-8

アドレスの書き換え 2-11

エイリアス テーブルの作成 2-11

コマンド ラインからエイリアス テーブルの設定 2-12

エイリアス テーブルのエクスポートおよびインポート 2-13

エイリアス テーブルのエントリの削除 2-14

エイリアス テーブルの例 2-14

aliasconfig コマンドの例 2-17

マスカレードの設定 2-24

マスカレードと altsrchost 2-25

スタティック マスカレード テーブルの設定 2-25

プライベート リスナー用マスカレード テーブルの例 2-27

マスカレード テーブルのインポート 2-27

マスカレードの例 2-28

ドメイン マップ機能 2-41

ドメイン マップ テーブルのインポートおよびエクスポート	2-48
バウンスした電子メールの処理	2-50
配信不可能な電子メールの処理	2-50
ソフト バウンスおよびハード バウンスに関する注意	2-51
バウンス プロファイルのパラメータ	2-52
ハード バウンスと status コマンド	2-54
カンバセーション バウンスおよび SMTP ルートのメッセージ フィルタ アクション	2-54
バウンス プロファイルの例	2-55
配信ステータス通知形式	2-56
遅延警告メッセージ	2-56
遅延警告メッセージとハード バウンス	2-56
新しいバウンス プロファイルの作成	2-57
デフォルトのバウンス プロファイルの編集	2-58
minimalist バウンス プロファイルの例	2-59
リスナーへのバウンス プロファイルの適用	2-60
電子メール配信の管理	2-63
メール配信に使用するインターフェイスの決定	2-64
デフォルトの配信制限	2-64
[Destination Controls] の使用	2-65
ドメインに対する接続、メッセージ、受信者の数の管理	2-65
TLS の管理	2-67
IronPort バウンス検証タギングの管理	2-68
バウンスの管理	2-68
新しい宛先制御エントリの追加	2-68
宛先制御エントリの編集	2-68
宛先制御エントリの削除	2-69
宛先制御エントリ コンフィギュレーションのインポートおよびエクスポート	2-69
宛先制御と CLI	2-74

IronPort バウンス検証	2-75
概要 : タギングと IronPort バウンス検証	2-76
着信バウンス メッセージの処理	2-76
IronPort の [Bounce Verification Address Tagging Keys]	2-77
IronPort バウンス検証と HAT	2-78
IronPort バウンス検証の使用	2-79
[Bounce Verification Address Tagging Keys] の設定	2-80
IronPort バウンス検証設定の設定	2-80
IronPort バウンス検証と CLI	2-81
IronPort バウンス検証とクラスタ設定	2-81
電子メール配信パラメータの設定	2-81
デフォルトの配信 IP インターフェイス	2-82
Possible Delivery 機能	2-82
デフォルトの最大同時接続数	2-82
deliveryconfig の例	2-83
Virtual Gateway™ テクノロジー	2-86
概要	2-86
Virtual Gateway アドレスの設定	2-87
仮想ゲートウェイで使用する新しい IP インターフェイスの作成	2-87
メッセージから配信用 IP インターフェイスへのマッピング	2-91
altsrchost ファイルのインポート	2-92
altsrchost の制限	2-92
altsrchost コマンド用に有効なマッピングが記載されたテキストファイルの例	2-93
CLI を使用した altsrchost マッピングの追加	2-93
Virtual Gateway アドレスのモニタ	2-97
Virtual Gateway アドレスごとの配信接続の管理	2-98
グローバル配信停止機能の使用	2-99

CLI を使用したグローバル配信停止へのアドレスの追加 2-100
 グローバル配信停止ファイルのエクスポートおよびインポート 2-103

確認：電子メール パイプライン 2-106

CHAPTER 3

LDAP クエリー 3-1

概要 3-2

LDAP クエリーの概要 3-2

LDAP と AsyncOS との連携の仕組み 3-4

AsyncOS を LDAP と連携させるための設定 3-5

LDAP サーバ プロファイルの作成 3-6

LDAP サーバのテスト 3-9

LDAP、LDAP クエリー、およびリスナーとの連携 3-10

グローバル設定の設定 3-10

LDAP サーバ プロファイル作成の例 3-10

パブリック リスナー上の LDAP クエリーのイネーブル化 3-12

プライベート リスナーでの LDAP クエリーのイネーブル化 3-13

Microsoft Exchange 5.5 に対する拡張サポート 3-14

LDAP クエリーに関する作業 3-17

LDAP クエリーのタイプ 3-17

ベース識別名 (DN) 3-18

LDAP クエリーの構文 3-19

セキュア LDAP (SSL) 3-20

ルーティング クエリー 3-20

匿名クエリー 3-20

Active Directory の実装に関する注意 3-24

LDAP クエリーのテスト 3-25

LDAP サーバへの接続のトラブルシューティング 3-27

受け入れ (受信者検証) クエリー 3-28

受け入れクエリーの例	3-28
Lotus Notes の場合の受け入れクエリーの設定	3-29
ルーターティング : エイリアス拡張	3-30
ルーターティング クエリーの例	3-30
マスカレード	3-31
マスカレード クエリーの例	3-31
「フレンドリ名」のマスカレード	3-31
グループ LDAP クエリー	3-33
グループ クエリーの例	3-33
グループ クエリーの設定	3-34
例 : グループ クエリーを使用してスパムとウイルスのチェックをスキップする	3-37
ドメインベース クエリー	3-39
ドメインベース クエリーの作成	3-40
チェーン クエリー	3-41
チェーン クエリーの作成	3-42
LDAP によるディレクトリ ハーベスト攻撃防止	3-43
SMTP カンバセーション中のディレクトリ ハーベスト攻撃防止	3-44
作業キュー内でのディレクトリ ハーベスト攻撃防止	3-46
作業キュー内でディレクトリ ハーベスト攻撃防止するための設定	3-46
SMTP 認証を行うための AsyncOS の設定	3-48
SMTP 認証の設定	3-49
パスワードを属性として指定	3-50
SMTP 認証クエリーの設定	3-51
第 2 の SMTP サーバ経由での SMTP 認証 (転送を使用する SMTP Auth)	3-52
LDAP を使用する SMTP 認証	3-54
リスナーでの SMTP 認証のイネーブル化	3-55

- 発信 SMTP 認証 3-59
- ログインと SMTP 認証 3-61
- ユーザの外部認証の設定 3-61
 - ユーザ アカウント クエリー 3-62
 - グループ メンバーシップ クエリー 3-63
- スパム検疫へのエンドユーザ認証のクエリー 3-65
 - Active Directory エンドユーザ認証の設定の例 3-66
 - OpenLDAP エンドユーザ認証の設定の例 3-66
- スパム検疫のエイリアス統合のクエリー 3-67
 - Active Directory エイリアス統合の設定の例 3-68
 - OpenLDAP エイリアス統合の設定の例 3-68
- AsyncOS を複数の LDAP サーバと連携させるための設定 3-69
 - サーバとクエリーのテスト 3-70
 - フェールオーバー 3-70
 - LDAP フェールオーバーのための IronPort アプライアンスの設定 3-70
 - ロード バランシング 3-71
 - ロード バランシングのための IronPort アプライアンスの設定 3-71

CHAPTER 4

- SMTP サーバを使用した受信者の検証 4-1**
 - SMTP Call-Ahead 受信者検証：概要 4-1
 - SMTP Call-Ahead 受信者検証の設定 4-4
 - Call-Ahead サーバ プロファイルの設定 4-5
 - SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルの設定 4-6
 - Call Ahead Server Responses 4-10
 - パブリック リスナーでの SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルのイネーブル化 4-11
 - LDAP ルーティング クエリーの設定 4-12
 - SMTP Call-Ahead クエリーのルーティング 4-13

SMTP Call-Ahead 検証のバイパス 4-15

CHAPTER 5

電子メール認証 5-1

電子メール認証の概要 5-2

DomainKeys および DKIM 認証：概要 5-2

AsyncOS の DomainKeys および DKIM 署名 5-4

DomainKeys および DKIM 署名の設定 5-5

署名キー 5-5

署名キーのエクスポートとインポート 5-6

公開キー 5-7

ドメイン プロファイル 5-7

ドメイン プロファイルのエクスポートとインポート 5-8

送信メールの署名のイネーブル化 5-9

バウンスおよび遅延メッセージの署名のイネーブル化 5-9

DomainKeys/DKIM 署名の設定 (GUI) 5-10

DomainKeys 署名のドメイン プロファイルの作成 5-11

DKIM 署名の新しいドメイン プロファイルの作成 5-13

新しい署名キーの作成 5-16

署名キーのエクスポート 5-16

既存の署名キーのインポートまたは入力 5-17

署名キーの削除 5-17

DNS テキスト レコードの生成 5-18

ドメイン プロファイルのテスト 5-19

ドメイン プロファイルのエクスポート 5-20

ドメイン プロファイルのインポート 5-20

ドメイン プロファイルの削除 5-20

ドメイン プロファイルの検索 5-21

ドメイン キーとロギング 5-21

DKIM 検証の設定 5-22

メール フロー ポリシーでの DKIM 検証の設定 5-23

DKIM 検証とロギング	5-24
DKIM 検証済みメールのアクションの設定	5-24
SPF および SIDF 検証の概要	5-26
有効な SPF レコードに関する注意	5-26
IronPort 電子メール セキュリティ アプライアンスでの SPF の操作	5-28
SPF と SIDF のイネーブル化	5-29
CLI を使用した SPF および SIDF のイネーブル化	5-32
Received-SPF ヘッダー	5-39
SPF/SIDF 検証済みメールに対して実行するアクションの決定	5-40
検証結果	5-40
CLI での spf-status フィルタ ルールの使用	5-41
GUI での spf-status コンテンツ フィルタ ルール	5-43
spf-passed フィルタ ルールの使用	5-44
SPF/SIDF 結果のテスト	5-45
SPF/SIDF 結果の基本の詳細度のテスト	5-45
SPF/SIDF 結果の高い詳細度のテスト	5-46

CHAPTER 6

メッセージ フィルタを使用した電子メール ポリシーの適用	6-1
概要	6-2
メッセージ フィルタのコンポーネント	6-3
メッセージ フィルタ ルール	6-3
メッセージ フィルタ アクション	6-3
メッセージ フィルタの構文例	6-4
メッセージ フィルタ処理	6-5
メッセージ フィルタの順番	6-6
メッセージ ヘッダー ルールおよび評価	6-7
メッセージ本文と メッセージ添付ファイル	6-7
コンテンツ スキャンの一致のしきい値	6-9

メッセージ本文と添付ファイルのしきい値スコア	6-10
しきい値スコア マルチパート / 代替 MIME 部分	6-10
コンテンツ ディクショナリを使用したしきい値のスコアリング	6-12
メッセージ フィルタ内の AND テストと OR テスト	6-12
メッセージ フィルタ ルール	6-14
フィルタ ルールの概要の表	6-14
ルールで使用する正規表現	6-23
メッセージのフィルタリングでの正規表現の使用	6-25
正規表現の使用に関するガイドライン	6-26
正規表現と非 ASCII 文字セット	6-26
n テスト	6-27
大文字と小文字の区別	6-27
効率的なフィルタの作成	6-28
PDF と正規表現	6-29
スマート ID	6-29
スマート ID の構文	6-30
メッセージ フィルタ ルールの例	6-31
true ルール	6-31
valid ルール	6-32
件名ルール	6-32
エンベロープ受信者ルール	6-33
グループ内エンベロープ受信者ルール	6-34
エンベロープ送信者ルール	6-35
グループ内エンベロープ送信者ルール	6-35
送信者グループ ルール	6-36
本文サイズ ルール	6-36
リモート IP ルール	6-37
受信リスナー ルール	6-38
受信 IP インターフェイス ルール	6-38

日付ルール	6-39
ヘッダー ルール	6-39
乱数ルール	6-40
受信者数ルール	6-41
アドレス数ルール	6-42
本文スキャン ルール	6-42
本文スキャン	6-43
暗号化検出ルール	6-44
添付ファイル タイプ ルール	6-45
添付ファイル名ルール	6-46
DNS リストルール	6-47
SenderBase 評価ルール	6-48
辞書ルール	6-49
SPF-Status ルール	6-52
SPF-Passed ルール	6-54
workqueue-count ルール	6-55
SMTP Authenticated User Match ルール	6-55
Signed ルール	6-58
Signed Certificate ルール	6-59
メッセージ フィルタ アクション	6-64
フィルタ アクション一覧表	6-64
添付ファイル グループ	6-71
アクション変数	6-74
非 ASCII 文字セットとメッセージ フィルタ アクション変数	6-77
該当コンテンツの表示	6-77
メッセージ フィルタ アクションの例	6-78
「残りのメッセージ フィルタをスキップ」アクション	6-78
ドロップ アクション	6-79
バウンス アクション	6-79

暗号化アクション	6-80
通知およびコピー通知アクション	6-80
ブラインドカーボンコピーアクション	6-84
検疫および複製アクション	6-86
受信者変更アクション	6-88
配信ホスト変更アクション	6-89
送信元ホスト (Virtual Gateway アドレス) 変更アクション	6-90
アーカイブアクション	6-91
ヘッダー削除アクション	6-92
ヘッダー挿入アクション	6-93
ヘッダーテキスト編集アクション	6-94
本文編集アクション	6-94
HTML 変換アクション	6-96
バウンス プロファイルアクション	6-97
アンチスパム システムのバイパスアクション	6-97
アンチウイルス システムのバイパスアクション	6-98
ウイルス感染フィルタのスキヤニング処理バイパスアクション	6-98
メッセージ タグ追加アクション	6-99
ログ エントリ追加アクション	6-99
添付ファイルのスキヤン	6-100
添付ファイルのスキヤンで使用するメッセージ フィルタ	6-100
イメージの分析	6-103
スキヤン値の設定	6-104
イメージ分析メッセージ フィルタの使用	6-108
イメージ分析コンテンツ フィルタの使用	6-109
通知	6-110
添付ファイルのスキヤン メッセージ フィルタの例	6-111
ヘッダーの挿入	6-111
ファイル タイプによる添付ファイルのドロップ	6-112

ディクショナリの一致による添付ファイルのドロップ	6-113
保護された添付ファイルの検疫	6-114
保護されていない添付ファイルの検出	6-114
CLI を使用したメッセージ フィルタの管理	6-115
新しいメッセージ フィルタの作成	6-116
メッセージ フィルタの削除	6-117
メッセージ フィルタの移動	6-117
メッセージ フィルタのアクティベーションとディアクティベーション	6-118
メッセージ フィルタのアクティベーションまたはディアクティベーション	6-122
メッセージ フィルタのインポート	6-123
メッセージ フィルタのエクスポート	6-123
非 ASCII 文字セットの表示	6-124
メッセージ フィルタ リストの表示	6-124
メッセージ フィルタの詳細の表示	6-125
フィルタ ログ サブスクリプションの設定	6-125
スキャン パラメータの変更	6-127
scanconfig の使用	6-128
メッセージのエンコードの変更	6-134
サンプル メッセージ フィルタの作成	6-136
メッセージ フィルタの例	6-145
オープンリレー防止フィルタ	6-145
ポリシー強制フィルタ	6-146
件名に基づき通知するフィルタ	6-146
競合他社に送信されたメールの BCC およびスキャン	6-146
特定のユーザをブロックするフィルタ	6-146
メッセージのアーカイブおよびドロップ フィルタ	6-147
大きい「To:」ヘッダーのフィルタ	6-147
空白の「From:」フィルタ	6-148

SRBS フィルタ	6-149
SRBS フィルタの変更	6-149
ファイル名の正規表現フィルタ	6-149
ヘッダー内の SenderBase 評価スコアの表示フィルタ	6-150
ポリシーのヘッダーへの挿入フィルタ	6-150
多数の受信者のバウンス フィルタ	6-151
ルーティングおよびドメイン スプーフィング	6-151
仮想ゲートウェイ フィルタの使用	6-151
配信とインジェクションのリスナーが同じフィルタ	6-152
単一インジェクタ フィルタ	6-152
スプーフィング ドメインのドロップ フィルタ (単一のリスナー)	6-152
スプーフィング ドメインのドロップ フィルタ (複数のリスナー)	6-153
別のスプーフィング ドメインのドロップ フィルタ	6-153
ルーピングの検出フィルタ	6-154

CHAPTER 7
高度なネットワーク構成 7-1

イーサネット インターフェイスのメディア設定	7-1
etherconfig を使ったイーサネット インターフェイスのメディア設定の編集	7-1
メディア設定の編集例	7-3
ネットワーク インターフェイス カードのペアリング / チーミング	7-5
NIC ペアリングと VLAN	7-6
NIC ペアの名前	7-6
NIC ペアリング / チーミングの設定とテスト	7-6
NIC ペアリングと既存のリスナー	7-7
etherconfig コマンドを使った NIC ペアリングのイネーブル化	7-8
NIC ペアリングに対する failover サブコマンドの使用	7-10
NIC ペアリングの確認	7-12

- 仮想ローカル エリア ネットワーク (VLAN) 7-13
 - VLAN と物理ポート 7-15
 - VLAN の管理 7-16
 - etherconfig コマンドによる新しい VLAN の作成 7-16
 - interfaceconfig コマンドによる VLAN 上の IP インターフェイスの作成 7-19
- Direct Server Return 7-23
 - Direct Server Return のイネーブル化 7-23
 - etherconfig コマンドによるループバック インターフェイスのイネーブル化 7-25
 - interfaceconfig コマンドによるループバック上の IP インターフェイスの作成 7-26
 - 新しい IP インターフェイス上のリスナーの作成 7-29

CHAPTER 8

- 中央集中型管理 8-1**
 - クラスタの要件 8-2
 - クラスタの構成 8-3
 - 初期設定 8-5
 - クラスタの作成とクラスタへの参加 8-6
 - clusterconfig コマンド 8-6
 - 既存のクラスタへの参加 8-8
 - SSH を使った既存クラスタへの参加 8-9
 - CCS を使った既存クラスタへの参加 8-11
 - グループの追加 8-15
 - クラスタの管理 8-15
 - CLI でのクラスタの管理 8-15
 - 設定のコピーと移動 8-16
 - 新しい設定の実験 8-17
 - クラスタからの脱退 (削除) 8-18
 - クラスタ内のマシンのアップグレード 8-18

コンフィギュレーション ファイル コマンド	8-20
設定のリセット	8-20
CLI コマンドのサポート	8-20
すべてのコマンドがクラスタに対応	8-20
commit および clearchanges コマンド	8-21
新たに追加された操作	8-21
制限コマンド	8-22
GUI でのクラスタの管理	8-23
クラスタ通信	8-27
DNS とホスト名の解決	8-27
クラスタリング、完全修飾ドメイン名、およびアップグレード	8-28
クラスタ通信のセキュリティ	8-28
クラスタの整合性	8-29
切断 / 再接続	8-30
互いに依存する設定	8-32
ベスト プラクティスとよくあるご質問	8-34
ベスト プラクティス	8-34
コピーと 移動	8-35
適切な CM の設計方法	8-35
手順：サンプル クラスタの設定	8-36
GUI でクラスタのデフォルト以外の CM 設定を使用する場合のオプションの要約	8-38
セットアップと設定に関する質問	8-39
一般的な質問	8-40
ネットワークに関する質問	8-41
計画と設定	8-42

APPENDIX A **AsyncOS クイック リファレンス ガイド** A-1

APPENDIX B **アプライアンスへのアクセス** B-1
 FTP アクセス B-2
 セキュア コピー (scp) アクセス B-6
 シリアル接続経由のアクセス B-7

INDEX



はじめに

『Cisco IronPort AsyncOS 7.5 for Email 上級コンフィギュレーションガイド』では、Cisco IronPort 電子メール セキュリティ アプライアンスのセットアップ方法、管理方法、およびモニタ方法について説明します。これらの説明は、ネットワークや電子メール管理に関する知識を備えた経験豊富なシステム管理者を対象としています。

このマニュアルをお読みになる前に

クイックスタートガイドと、アプライアンスに付属の製品リリースノートをお読みください。このマニュアルでは、お客様がすでにアプライアンスを開梱し、ラックキャビネットに設置し、電源をオンにしたものと見なします。



(注)

すでにアプライアンスをネットワークにケーブル接続した場合は、Cisco IronPort アプライアンスのデフォルトの IP アドレスがネットワーク上の他の IP アドレスと競合しないことを確認してください。工場出荷時に Management ポートに割り当てられた IP アドレスは、192.168.42.42 です。Cisco IronPort アプライアンスに対する IP アドレス割り当ての詳細については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Setup and Installation」および付録 B 「アプライアンスへのアクセス」を参照してください。

クラウド電子メール セキュリティ ユーザに対する注意点

3.0.0 リリースから、Cisco IronPort クラウド電子メール セキュリティを動作させる基本技術用の新しいフォーム ファクタを導入しています。つまり、クラウド電子メール セキュリティは、シスコの管理対象データセンターの仮想アプライアンスまたはハードウェア アプライアンスから起動できるようになりました。この変更は、Cisco IronPort ハイブリッド電子メール セキュリティ製品のクラウド層にも適用されます。これに従い、この文書の「アプライアンス」、「電子メール セキュリティ アプライアンス (ESA)」、「セキュリティ管理アプライアンス (SMA)」という表現はすべて、物理アプライアンスまたは仮想アプライアンスを意味します。どちらのフォーム ファクタでも使用できる機能に変わりはありません。このサービスは利用者にシームレスに提供されます。

ドキュメント セット

AsyncOS のドキュメント セットは、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』、『Cisco IronPort AsyncOS CLI Reference Guide』、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide』、およびこのマニュアルの 4 つに分かれており、このマニュアルには高度な機能と設定に関する情報が記載されています。このマニュアルでは、各トピックの追加情報に関して他のマニュアルを参照することがあります。

このマニュアルの構成

第 1 章「リスナーのカスタマイズ」では、エンタープライズ電子メール ゲートウェイの設定を調整するプロセスについて説明します。この章では、ゲートウェイ経由で電子メールの受信を処理するようにインターフェイスとリスナーを設定するときに使用できる高度な機能について詳しく説明します。

第 2 章「ルーティングおよび配信機能の設定」では、Cisco IronPort アプライアンスを通過する電子メールのルーティングと配信に影響を与える機能について説明します。

第 3 章「LDAP クエリー」では、Cisco IronPort アプライアンスと社内の Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) サーバを接続してクエリーを実行し、受け入れる受信者（グループのメンバーシップを含む）の確認、メールルーティングとアドレス書き換え、ヘッダーのマスカレード、および SMTP 認証のサポートを行う方法について説明します。

第 5 章「電子メール認証」では、IronPort アプライアンスで電子メール認証を設定してイネーブルにするプロセスについて詳しく説明します。IronPort AsyncOS は、複数のタイプの電子メール認証をサポートしています。これには、着信メールの Sender Policy Framework (SPF) 検証、Sender ID Framework (SIDF) 検証、DomainKeys Identified Mail (DKIM) 検証、および発信メールの DomainKeys 署名と DKIM 署名が含まれます。

第 6 章「メッセージフィルタを使用した電子メール ポリシーの適用」では、メッセージフィルタを使って電子メールを処理するルールを規定する方法について説明します。これには、添付ファイルフィルタ、イメージ分析、コンテンツディクショナリの各機能を使ったメッセージコンテンツの変更が含まれます。

第 7 章「高度なネットワーク構成」では、NIC ペアリング、仮想 LAN、およびその他の機能に関して説明します。

第 8 章「中央集中型管理」では、複数のアプライアンスを管理および設定できる集中管理機能について説明します。中央集中型管理機能によって、ネットワーク内の信頼性、柔軟性、およびスケーラビリティが向上し、ローカルポリシーを順守しながらグローバルな管理を行うことができます。

付録 A「AsyncOS クイック リファレンス ガイド」では、CLI のほとんどのコマンドに関するクイック リファレンスを示します。

付録 B「アプライアンスへのアクセス」では、Cisco IronPort アプライアンスにアクセスし、Cisco IronPort アプライアンスのファイルを送受信する方法について説明します。

表記法

書体または記号	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力。	Please choose an IP interface for this Listener. sethostname コマンドは、Cisco IronPort アプライアンスの名前を設定します。
AaBbCc123	ユーザ入力（画面上のコンピュータ出力と対比される場合）。	mail3.example.com> commit Please enter some comments describing your changes: []> Changed the system hostname
AaBbCc123	マニュアルのタイトル、新しい語句や用語、強調する語句。コマンドライン変数（実際の名前や値に置き換えられる部分）。	『Cisco IronPort Quickstart Guide』をお読みください。 Cisco IronPort アプライアンスは、発信パケットを送信するインターフェイスを一意に選択できる必要があります。 Before you begin, please reset your password to a new value. Old password: ironport New password: <i>your_new_password</i> Retype new password: <i>your_new_password</i>

シスコのテクニカル サポート

次の URL にアクセスして、シスコのテクニカル サポートを最大限に活用してください。

<http://www.cisco.com/en/US/support/index.html>。

以下を含むさまざまな作業にこの Web サイトが役立ちます。

- テクニカル サポートを受ける
- ソフトウェアをダウンロードする

- セキュリティの脆弱性を報告する、またはシスコ製品のセキュリティ問題に対する支援を受ける
- ツールおよびリソースへアクセスする
 - Product Alert の受信登録
 - Field Notice の受信登録
 - Bug Toolkit を使用した既知の問題の検索
- Networking Professionals (NetPro) コミュニティで、技術関連のディスカッションに参加する
- トレーニング リソースへアクセスする
- TAC Case Collection ツールを使用して、ハードウェアや設定、パフォーマンスに関する一般的な問題をインタラクティブに特定および解決する
- Japan テクニカル サポート Web サイトでは、Technical Support Web サイト (<http://www.cisco.com/techsupport>) の、利用頻度の高いドキュメントを日本語で提供しています。

Japan テクニカル サポート Web サイトには、次の URL からアクセスしてください。

<http://www.cisco.com/jp/go/tac>





CHAPTER 1

リスナーのカスタマイズ



クラウド電子メールセキュリティ アプライアンスでリスナーを追加、変更、削除しないことをお勧めします。

『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』では、IronPort AsyncOS オペレーティング システムで企業内の着信電子メールゲートウェイとして IronPort アプライアンスを機能させる方法について説明しました。これにより、インターネットからの SMTP 接続の実行、メッセージの受信、およびこれらの接続に対するリスナーの実行をイネーブル化して適切なシステムにメッセージをリレーすることができます。

リスナーとは、特定の IP インターフェイスで設定される電子メール処理サービスのことです。リスナーは IronPort アプライアンス、またはネットワークの内部システムまたはインターネットから受信する電子メールだけに適用されます。IronPort AsyncOS では、リスナーを使用して、メッセージの受信および受信ホストへのリレーのための条件を指定します。リスナーは、指定した各 IP アドレスの特定のポート上で実行する「電子メール インジェクタ」または「SMTP デーモン」と見なすことができます（システム設定ウィザードまたは `systemsetup` コマンドで設定した初期アドレスを含む）。



(注)

『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Setup and Installation」の説明に従って GUI のシステム設定ウィザード（またはコマンドライン インターフェイスの `systemsetup` コマンド）を完了し、変更を確定した場合は、少なくとも 1 つのリスナーがアプライアンスに設定されている必要があります。

この章では、GUI の [Network] メニューの [Listeners] ページまたは CLI の `listenerconfig` コマンドを使用して IronPort アプライアンスに設定されたリスナーの詳細な受信プロパティの一部をカスタマイズする方法（新しいリスナーの

作成を含む) について説明します。次の第 2 章「ルーティングおよび配信機能の設定」では、システムで設定したリスナーの配信プロパティをカスタマイズする方法について説明します。

ここでは、次の内容を説明します。

- 「リスナーの概要」 (P.1-2)
- 「GUI を使用したリスナーの設定」 (P.1-5)
- 「CLI を使用したリスナーの設定」 (P.1-21)
- 「SenderBase 設定と HAT メール フロー ポリシー」 (P.1-24)
 - 「HAT Significant Bits 機能」 (P.1-26)
- 「TLS を使用した SMTP カンパセーションの暗号化」 (P.1-33)

リスナーの概要

[Network] > [Listeners] ページおよび CLI の `listenerconfig` コマンドを使用して、リスナーを作成、編集、削除できます。IronPort AsyncOS では、メッセージを受信し、受信ホストやネットワークの内部またはインターネット上の外部の受信者のいずれかにリレーするための条件を指定する必要があります。

これらの対象となる条件はリスナーで定義されます。最終的に、これらの条件が一括されてメール フロー ポリシーが定義され、強制されます。リスナーでは、IronPort アプライアンスで電子メールを送信するシステムと通信する方法も定義されます。

各リスナーは、表 1-1 に示す条件で構成されます。

表 1-1 リスナーの条件

名前	リスナーには、簡単に参照できるように一意の名前を付けてください。リスナーに定義する名前は大文字と小文字が区別されます。AsyncOS では複数のリスナーに同一の名前を付けることはできません。
IP インターフェイス	リスナーは IP インターフェイスに割り当てられます。IP インターフェイスは <code>interfaceconfig</code> コマンドで定義します。リスナーを作成および割り当てる前に、システム設定ウィザード、 <code>systemsetup</code> コマンド、または [IP Interfaces] ページ (あるいは <code>interfaceconfig</code> コマンド) を使用して IP インターフェイスを設定する必要があります。

表 1-1 リスナーの条件 (続き)

メール プロトコル	電子メールの受信時に、SMTP または QMQP のいずれかのメール プロトコルを使用します (CLI の <code>listenerconfig</code> コマンドを使用した場合のみ使用可能)。	
IP ポート	リスナーへの接続で使用する特定の IP ポート。デフォルトでは、SMTP ではポート 25 を使用し、QMQP ではポート 628 を使用します。	
リスナーの種類 :	パブリック	パブリック リスナーおよびプライベート リスナーは、ほとんどの設定に使用されます。一般的に、プライベート リスナーはプライベート (内部) ネットワークに使用されます。パブリック リスナーには、インターネット経由の電子メールの受信のためのデフォルトの特性があります。
	プライベート	
	ブラックホール	「ブラックホール」リスナーは、テストやトラブルシューティングを目的として使用されます。ブラックホール リスナーの作成時に、メッセージを削除する前にそのメッセージをディスクに書き込むかどうかを選択します。(詳細については、『 <i>Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide</i> 』の「Testing and Troubleshooting」を参照してください)。メッセージを削除する前にディスクに書き込むと、受信レートおよびキューの速度の測定に役立ちます。メッセージをディスクに書き込まないリスナーは、メッセージ生成システムからの純粋な受信レートの測定に役立ちます。このリスナーのタイプは CLI の <code>listenerconfig</code> コマンドを使用した場合にだけ利用できます。

これらの条件に加えて、各リスナーに次の設定を行うことができます。

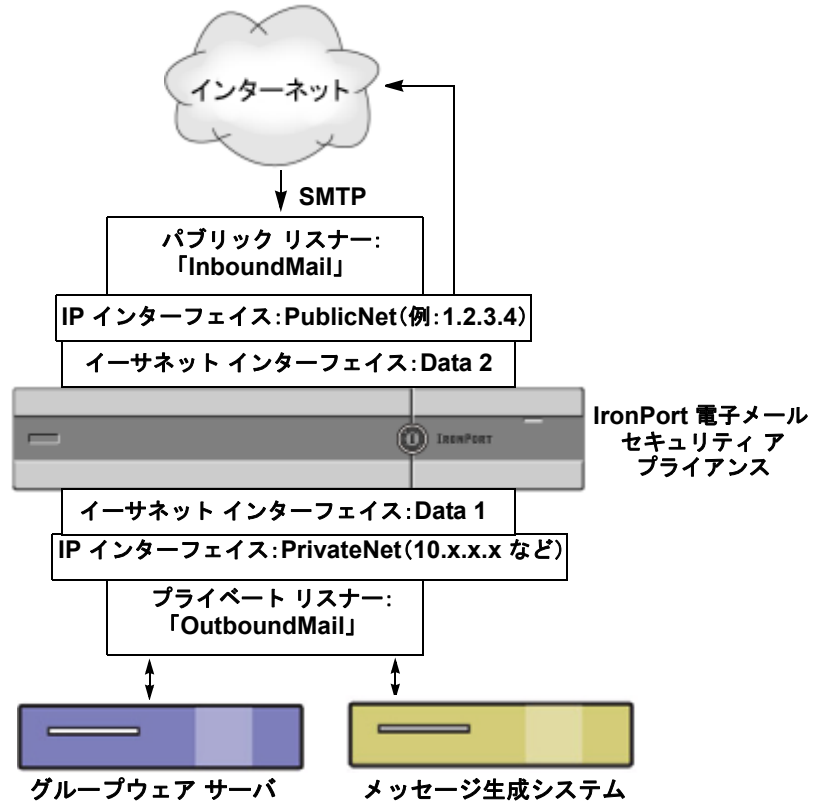
- SMTP アドレス解析オプション (SMTP の「MAIL FROM」および「RCPT TO」の解析を管理するオプションの設定。「SMTP アドレス解析オプション」(P.1-13) を参照)
- 高度な設定オプション (リスナーの動作をカスタマイズするオプションの設定。「高度な設定オプション」(P.1-17) を参照)
- LDAP オプション (このリスナーに関連付けられた LDAP クエリーを制御するオプションの設定。「LDAP オプション」(P.1-18) を参照)

また、すべてのリスナーに適用するグローバル設定があります。詳細については、「[リスナーのグローバル設定](#)」(P.1-7)を参照してください。

リスナーを作成する場合、Host Access Table (HAT; ホスト アクセス テーブル) を介してリスナーに接続できるホストを指定します。パブリック リスナーの場合、アプライアンスで受信者アクセス テーブル (RAT) を使用するためのメッセージを受け入れるすべてのドメインも定義します。RAT はパブリック リスナーだけに適用されます。ホスト アクセス テーブルおよび受信者アクセス テーブル エントリの詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「Configuring the Gateway to Receive Mail」の章を参照してください。

図 1-1 に、エンタープライズ ゲートウェイとして設定された IronPort アプライアンスとともに使用できるパブリック リスナーおよびプライベートリスナーを示します。詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「Enterprise Gateway Configuration」を参照してください。

図 1-1 エンタープライズ ゲートウェイ設定のパブリック リスナーおよびプライベート リスナー



GUI を使用したリスナーの設定

GUI の [Network] メニューの [Listeners] ページを使用して、現在設定されているリスナーのリストにリスナーを追加します。

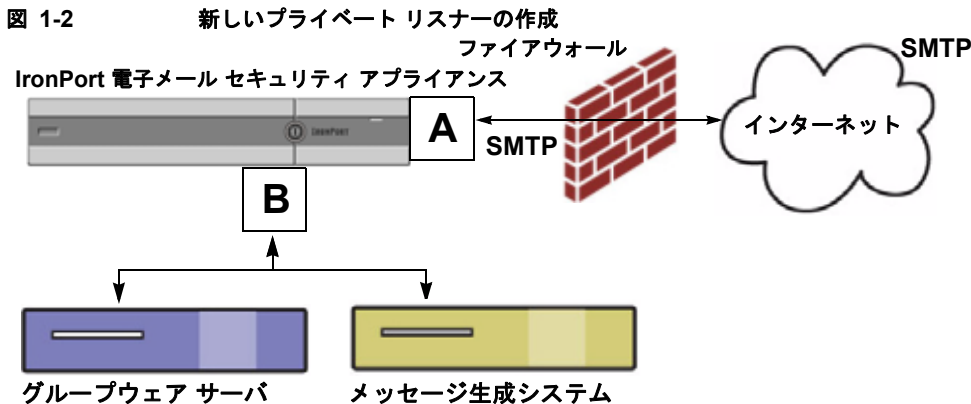


(注)

『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Setup and Installation」の説明に従って GUI のシステム設定ウィザード（またはコマンドラインインターフェイスの `systemsetup` コマンド）を完了し、変更を確定した場合は、少なくとも 1 つのリスナーがアプライアンスに設定されている必要があ

ります。(GUI システム設定ウィザードの「Create a Listener」セクションまたは CLI の `systemsetup` コマンドで入力した設定を参照)。メールを受け入れる特定のアドレスおよび最初の SMTP ルート エントリもこの時点で入力されています。

図 1-2 では、リスナー A はシステムのセットアップ時に作成された InboundMail という名前のパブリック リスナーを表します。リスナー B は、ユーザが作成したオプションのプライベート リスナーを表します。



[Network] > [Listeners] ページを使用して、リスナーを追加、削除、または変更します。[Listeners] ページでは、リスナーのグローバル設定にもアクセスできます。

図 1-3 [Listeners] ページ
Listeners

Listener Name	Interface	Port	Host Access Table	Recipient Access Table	Delete
IncomingMail	Data 1 (172.19.1.11)	25	HAT	RAT	
OutgoingMail	Data 2 (172.19.2.11)	25	HAT	N/A	

Global Settings	
Maximum Concurrent Connections:	300
Maximum Concurrent TLS Connections:	100
Caching SenderBase Data:	Allow SenderBase to determine cache time.
Injection Counters Reset Period:	1h
Timeout for Unsuccessful Inbound Connections:	5m
Total Time Limit for All Inbound Connections:	15m

リスナーのグローバル設定

リスナーのグローバル設定は、IronPort アプライアンスで設定されたすべてのリスナーに影響します。

次に、グローバル設定を示します

表 1-2 リスナー グローバル設定

グローバル設定	説明
Maximum Concurrent Connections	リスナーに同時に接続できる最大数を設定します。デフォルト値は 300 です。
Maximum Concurrent TLS Connections	すべてのリスナーでの同時 TLS 接続の最大数を設定します。デフォルト値は 100 です。
Caching SenderBase Data	SenderBase 情報サービスによって自動的にキャッシュ時間を決定する（推奨）ことも、独自のキャッシュ時間を指定することもできます。キャッシングをディセーブルにすることもできます。

表 1-2 リスナー グローバル設定 (続き)

グローバル設定	説明
Injection Counters Reset Period	<p>インジェクション制御カウンタがいつリセットされるかを調整できます。多数の IP アドレスのカウンタを管理している非常にビジーなシステムの場合、カウンタをより頻繁に（たとえば、60 分間隔ではなく 15 分間隔で）リセットするように設定します。これにより、データが管理不能なサイズにまで増大したり、システムのパフォーマンスに影響を与えたりすることを回避できます。</p> <p>現在のデフォルト値は 1 時間です。最小 1 分（60 秒）から最大 4 時間（14,400 秒）までの期間を指定できます。</p> <p>「インジェクション制御期間」(P.1-29) を参照してください。</p>
Timeout Period for Unsuccessful Inbound Connections	<p>AsyncOS の時間の長さを設定すると、失敗した着信接続が閉じられるまで、接続をそのまま保持できます。</p> <p>失敗した接続は SMTP カンバセーションとなり、正常なメッセージインジェクションが発生することなく、SMTP コマンドまたは ESMTP コマンドが発行され続けます。指定されたタイムアウトに到達すると、次のようなエラーが送信され、切断されます。</p> <p>「421 Timed out waiting for successful message injection, disconnecting.」</p> <p>正常なメッセージインジェクションが発生するまで、接続に失敗したと見なされます。</p> <p>パブリック リスナーでの SMTP 接続のみに使用可能です。デフォルト値は 5 分です。</p>

表 1-2 リスナー グローバル設定 (続き)

グローバル設定	説明
Total Time Limit for All Inbound Connections	<p>AsyncOS の時間の長さを設定すると、発信接続が閉じられるまで、接続をそのまま保持できます。</p> <p>この設定は、最大接続時間を強制することによって、システムリソースを保持することを目的としています。この最大接続時間に達すると、次のメッセージが発行されます。</p> <p>「421 Exceeded allowable connection time, disconnecting.」</p> <p>パブリックリスナーでの SMTP 接続のみに使用可能です。デフォルト値は 15 分です。</p>

表 1-2 リスナー グローバル設定 (続き)

グローバル設定	説明
HAT delayed rejections	<p>メッセージ受信者レベルで HAT 拒否を実行するかどうかを設定します。デフォルトでは、HAT で拒否された接続では SMTP カンパセーションの開始時にバナー メッセージが表示されて閉じられます。</p> <p>HAT 「拒否」 設定で電子メールが拒否されると、AsyncOS では SMTP カンパセーションの開始時ではなく、メッセージ受信者レベル (RCPT TO) で拒否を実行できます。この方法でメッセージを拒否すると、AsyncOS で拒否されたメッセージの詳細な情報が保持されるため、メッセージの拒否およびメッセージのバウンスが遅れます。たとえば、ブロックされたメッセージのアドレスおよび各受信者のアドレスからメールを表示できます。また、HAT 拒否の遅延によって、MTA の送信が何度も再試行される可能性も小さくなります。</p> <p>HAT 遅延拒否をイネーブルにすると、次の動作が発生します。</p> <ul style="list-style-type: none"> -- MAIL FROM コマンドが許可されるが、メッセージ オブジェクトは作成されない。 -- 電子メールの送信のためのアクセスが拒否されたというメッセージが表示され、すべての RCPT TO コマンドが拒否される。 -- SMTP AUTH を使用して MTA 送信が認証される場合、RELAY ポリシーが許可され、メールを通常どおりに送信できる。 <p>注意：CLI の listenerconfig --> setup コマンドからのみ設定できます。</p>

複数のエンコーディングが含まれるメッセージの設定 : localeconfig

メッセージ処理中のメッセージのヘッダーおよびフッターのエンコードの変更に関する AsyncOS の動作を設定できます。この設定は GUI から行えません。かわりに、CLI の localeconfig を使用して設定できます。

リスナーのグローバル設定

リスナーのグローバル設定を編集するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** [Network] > [Listeners] ページで [Edit Global Settings] をクリックします。[Edit Listeners Global Settings] ページが表示されます。

図 1-4 [Edit Listeners Global Settings] ページ
Edit Listeners Global Settings

Global Settings	
Maximum Concurrent Connections: ?	300
Maximum Concurrent TLS Connections: ?	100
Caching SenderBase Data:	
	<input checked="" type="radio"/> Allow SenderBase to determine cache time. <input type="radio"/> Do not cache SenderBase data. <input type="radio"/> Specify number of seconds to cache SenderBase data 300
Injection Counters Reset Period: ?	1h (e.g. 220s, 5m 30s, 4h)
Timeout for Unsuccessful Inbound Connections:	5m (e.g. 220s, 5m 30s, 4h)
Total Time Limit for All Inbound Connections:	15m (e.g. 220s, 5m 30s, 4h)
<input type="button" value="Cancel"/> <input type="button" value="Submit"/>	

- ステップ 2** 設定を変更して、[Submit] をクリックします。
- ステップ 3** 変更が反映された [Listeners] ページが表示されます。
- ステップ 4** 変更を確定します。

リスナーの作成

新規のリスナーを追加するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** [Network] > [Listener] ページで [Add Listener] をクリックします。[Add Listener] ページが表示されます。

図 1-5 [Add Listener] ページ
Add Listener

Listener Settings	
Name:	<input type="text"/>
Type of Listener:	<input checked="" type="radio"/> Public <input type="radio"/> Private
Interface:	Management TCP Port: 25
Bounce Profile:	Default
Disclaimer Above:	None <small>Disclaimer text will be applied above the message body.</small>
Disclaimer Below:	None <small>Disclaimer text will be applied below the message body.</small>
SMTP Authentication Profile:	None
Certificate:	System Default
▶ SMTP Address Parsing Options:	Optional settings for controlling parsing in SMTP "MAIL FROM" and "RCPT TO"
▶ Advanced:	Optional settings for customizing the behavior of the Listener
▶ LDAP Queries:	No LDAP Server Profiles have been created. Profiles can be defined at System Administration > LDAP
SMTP Call-Ahead Profile:	None

- ステップ 2** リスナーの名前を入力します。
- ステップ 3** 次のリスナー タイプを選択します。
- ステップ 4** リスナーを作成するインターフェイスおよび TCP ポートを選択します。
- ステップ 5** バウンス プロファイルを選択します (CLI の `bounceconfig` コマンドを使用して作成されたバウンス プロファイルがリストで使用可能です。「[新しいバウンス プロファイルの作成](#)」(P.2-57) を参照)。
- ステップ 6** 電子メールの上または下に添付する免責条項を選択します ([Mail Policies] > [Text Resources] ページまたは CLI の `textconfig` コマンドで作成された文章がリストで使用可能です。『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「Text Resources」の章を参照)。
- ステップ 7** SMTP 認証プロファイルを指定します。
- ステップ 8** リスナーへの TLS 接続のための証明書を指定します ([Network] > [Certificates] ページまたは CLI の `certconfig` コマンドで追加された証明書がリストで使用可能です。「[TLS を使用した SMTP カンバセーションの暗号化](#)」(P.1-33) を参照)。
- ステップ 9** オプションの SMTP アドレス解析、詳細設定、および LDAP オプションのいずれかを設定します (次の項で詳しく説明します)。
- ステップ 10** 変更を送信して確定します。

SMTP アドレス解析オプション

SMTP アドレス解析オプションにアクセスするには、リストから [SMTP Address Parsing] をクリックしてセクションを展開します。

図 1-6 リスナーの SMTP アドレス解析オプション

SMTP Address Parsing Options:	Address Parser Type:	Loose
	Allow 8-bit User Names:	<input checked="" type="radio"/> Yes <input type="radio"/> No
	Allow 8-bit Domain Names:	<input checked="" type="radio"/> Yes <input type="radio"/> No
	Allow Partial Domains:	<input checked="" type="radio"/> Yes <input type="radio"/> No
	Source Routing:	<input checked="" type="radio"/> Strip <input type="radio"/> Reject
	Unknown Address Literals:	<input checked="" type="radio"/> Reject <input type="radio"/> Accept
	Reject These Characters in User Names:	

SMTP アドレス解析では、AsyncOS アドレス解析ツールでの SMTP の「MAIL FROM」コマンドおよび「RCPT TO」コマンドに対する動作の厳密性を制御します。SMTP アドレス解析には、Strict と Loose の 2 つのモードと、複数の解析オプション（アドレス解析モードとは関係なく設定される）があります。

解析モードまたは解析タイプを選択することで、アプライアンスが RFC2821 の規格に厳密に準拠するかどうかを決定できます。

Strict モード

Strict モードは RFC 2821 に準拠します。Strict モードでは、アドレス解析が RFC 2821 の規格に準拠しますが、次の例外および追加機能があります。

- 「MAIL FROM : <joe@example.com>」のように、コロンの後にスペースを挿入できます。
- ドメイン名に下線を使用できます。
- 「MAIL FROM」コマンドおよび「RCPT TO」コマンドでは、大文字と小文字が区別されます。
- ピリオドは特殊な用途に使用できません（たとえば、RFC 2821 では「J.D.」のようなユーザ名を作成できません）。

次の項で説明する追加オプションは、技術的に RFC 2821 に違反するため、イネーブルにできます。

Loose モード

Loose 解析は基本的に AsyncOS の以前のバージョンからの既存の動作です。電子メールアドレスの「検索」を最優先し、次のことを行います。

- コメントの無視。ネストされたコメント（かっこで囲まれている）がサポートされ、それらは無視されます。
- 「RCPT TO」コマンドおよび「MAIL FROM」コマンドで指定された電子メールアドレスの前後には山カッコが不要です。
- 複数のネストされた山カッコを使用できます（最も深いネスト レベルの電子メールアドレスが検索される）。

その他のオプション

2 つの解析モードに加えて、表 1-3 に示す追加のアイテムの動作を指定できます。

表 1-3 SMTP アドレス解析の追加オプション

オプション	説明	デフォルト
Allow 8-bit username	イネーブルにすると、(エスケープ処理なしで) アドレスのユーザ名部分に 8 ビットの文字を使用できます。	on
Allow 8-bit domain	イネーブルにすると、アドレスのドメイン部分に 8 ビットの文字を使用できます。	on

表 1-3 SMTP アドレス解析の追加オプション (続き)

オプション	説明	デフォルト
Allow partial domain	イネーブルにすると、部分ドメインを使用できます。部分ドメインは完全なドメインではなく、ドットなしのドメインです。	on
Add Default Domain	<p>次のアドレスは、部分ドメインの例です。</p> <ul style="list-style-type: none"> - foo - foo@ - foo@bar <p>デフォルトのドメイン機能を正常に動作させるために、このオプションをイネーブルにする必要があります。</p> <p>[Add Default Domain] : 完全修飾ドメイン名ではなく、デフォルトのドメインを電子メール アドレスに使用します。[SMTP Address Parsing options] で [Allow Partial Domains] がイネーブルになっていない限り、このオプションはディセーブルです (「SMTP アドレス解析オプション」(P.1-13) を参照)。これは「デフォルト送信者ドメイン」を送信者のアドレスおよび完全修飾ドメイン名を含まない受信者のアドレスに追加することによって、リスナーがリレーする電子メールを変更する方法に影響します。(言い換えると、リスナーの「そのままの」アドレスの処理方法をカスタマイズできます)。</p> <p>従来のシステムで、送信者アドレスに企業のドメインを追加 (付加) せずに電子メールを送信する場合、これを使用してデフォルトの送信者ドメインを追加できます。たとえば、従来のシステムでは電子メールの送信者として自動的に文字列「joe」のみが入力された電子メールが作成されます。デフォルトの送信者ドメインを変更すると、「@yourdomain.com」が「joe」に付加され、完全修飾送信者名 joe@yourdomain.com が作成されます。</p>	

表 1-3 SMTP アドレス解析の追加オプション (続き)

オプション	説明	デフォルト
Source routing: reject, strip	「MAIL FROM」アドレスおよび「RCPT TO」アドレスで送信元ルーティングが検出された場合の動作を決定します。送信元ルーティングは、複数の「@」文字を使用してルーティングを指定する、電子メールアドレスの特殊な形式です (例: @one.dom@two.dom:joe@three.dom)。「reject」を設定すると、アドレスは拒否されます。「strip」を設定すると、アドレスの送信元ルーティング部分が削除され、メッセージが通常どおり挿入されます。	discard
Reject User Names containing These Characters:	文字 (たとえば、% や!) を含むユーザ名を入力すると、拒否されます。	% ! : @
Unknown Address Literals (IPv6, etc.): reject, accept	システムで処理できないアドレス リテラルを受信したときの動作を決定します。現在は、IPv4 以外のすべてです。そのため、たとえば IPv6 アドレス リテラルの場合、プロトコル レベルで拒否するか、受信後すぐにハードバウンスを行うことができます。 リテラルが含まれる受信者アドレスは即時ハードバウンスの原因となります。送信者アドレスは配信される場合があります。メッセージを配信できない場合、ハードバウンスがハードバウンスされます (二重ハードバウンス)。 拒否された場合、送信者と受信者のアドレスがプロトコル レベルですぐに拒否されます。	reject

部分ドメイン、デフォルトドメイン、不正な MAIL FROM

エンベロープ送信者検証をイネーブルにした場合、またはリスナーの SMTP アドレス解析オプションで部分ドメインの許可をディセーブルにした場合、リスナーのデフォルトドメイン設定が使用されなくなります。

これらの機能は相互に排他的です。

高度な設定オプション

高度なオプションにアクセスするには、リストから [Advanced] をクリックしてセクションを展開します。

図 1-7 リスナーの高度なオプション

▼ Advanced:	<input checked="" type="checkbox"/>	Add Received Header
	<input checked="" type="checkbox"/>	Clean Messages of Bare CR/LF
	<input checked="" type="checkbox"/>	Use SenderBase IP Profiling
		Timeout for Queries: <input type="text" value="5"/>
		SenderBase Timeout per Connection: <input type="text" value="20"/>
		Maximum Connections: <input type="text" value="1000"/>
		TCP Listen Queue Size: <input type="text" value="50"/>

次に、高度な設定オプションを示します。

- [Add Received Header]: Received: ヘッダーを受信したすべての電子メールに追加します。また、リスナーは各メッセージに Received: ヘッダーを追加してリレーする電子メールを変更します。Received: ヘッダーが含まれないようにするには、このオプションを使用してディセーブルにします。



(注) Received: ヘッダーは、作業キューの処理ではメッセージに追加されません。このヘッダーは配信のためにメッセージがキューから出たときに追加されます。

Received: ヘッダーをディセーブルにすると、インフラストラクチャの外部に送信されるすべてのメッセージで内部サーバの IP アドレスまたはホスト名が表示されることによって、ネットワークのトポロジが公開されないようにすることができます。Received: ヘッダーをディセーブルにする際には注意が必要です。

- [Change bare CR and LF characters to CRLF]: この新機能では、そのままの CR 文字および LF 文字が CRLF 文字に変換されます。
- Use SenderBase IP Profiling
 - Timeout for Queries
 - SenderBase Timeout per Connection
- Maximum Connections

- TCP Listen Queue Size (SMTP サーバが受け入れる前に AsyncOS で管理される接続のバックログ)

LDAP オプション

LDAP オプションにアクセスするには、リストから [LDAP Options] をクリックしてセクションを展開します。

リスナーの LDAP オプション設定は、リスナーの LDAP クエリーをイネーブルして使用します。このオプションを使用する前に、LDAP クエリーを作成しておく必要があります。クエリーの各タイプ ([Accept]、[Routing]、[Masquerade]、[Group]) には、個別のサブセクションがあります。クエリーのタイプをクリックしてサブセクションを展開します。

LDAP クエリー作成の詳細については、「[LDAP クエリー](#)」(P.3-1) を参照してください。

クエリーの受け入れ

クエリーを受け入れるには、使用するクエリーをリストから選択します。LDAP Accept を作業キューの処理中に実行するか、SMTP カンバセーションで実行するかを指定できます。

作業キューの処理中に LDAP Accept を実行する場合、一致しない受信者に対する動作として、バウンスまたはドロップに指定します。

SMTP カンバセーションで LDAP Accept を実行する場合、LDAP サーバに到達できない場合にメールを処理する方法を指定します。メッセージを許可するか、コードとカスタム応答で接続をドロップするかを選択できます。最後に、SMTP カンバセーションで Directory Harvest Attack Prevention (DHAP; ディレクトリハーベスト攻撃防止) しきい値に達した場合に接続をドロップするかどうかを選択します。

SMTP カンバセーションで受信者の検証を行うと、複数の LDAP クエリー間の遅延を低減できます。したがって、対話形式の LDAP Accept をイネーブルにした場合、ディレクトリ サーバの負荷が増大することに注意してください。

図 1-8 リスナーの [Accept Query] オプション

The screenshot shows a configuration window for a listener. At the top, there is a dropdown menu labeled 'Accept Query' with the value 'exampleTest.accept'. Below this, there are two main sections: 'Work Queue' and 'SMTP Conversation'. The 'Work Queue' section has a radio button and a dropdown menu for 'Non-Matching Recipients' set to 'Bounce'. The 'SMTP Conversation' section has a radio button and two sub-sections. The first sub-section, 'If the LDAP server is unreachable:', has two radio buttons: 'Allow Mail in' (unselected) and 'Drop Connection, return error code:' (selected). Below this are input fields for 'Code' (451) and 'Text' (Temporary recipient validation er). The second sub-section, 'When the Directory Harvest Attack Prevention threshold (maximum invalid recipients per hour) is reached:', has input fields for 'Code' (550) and 'Text' (Too many invalid recipients). At the bottom, there is a checked checkbox for 'Drop Connection if the Directory Harvest Attack Prevention threshold (maximum invalid recipients per hour) is reached within an SMTP conversation.'

詳細については、「概要」(P.3-2)を参照してください。

ルーティング クエリー

クエリーをルーティングするには、リストからクエリーを選択します。詳細については、「概要」(P.3-2)を参照してください。

クエリーのマスカレード

クエリーをマスカレードするには、リストからクエリーを選択して、マスカレードするアドレスを選択します。

図 1-9 リスナーの [Masquerade Query] オプション

▼ Masquerade

Masquerade Query:

Addresses to Masquerade:

- Envelope Sender
- From (Header)
- To (Header)
- CC (Header)
- Reply-To (Header)

詳細については、「概要」(P.3-2) を参照してください。

グループクエリー

クエリーをグループ化するには、リストからクエリーを選択します。詳細については、「概要」(P.3-2) を参照してください。

リスナーの編集

リスナーを編集するには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [Network] > [Listeners] ページのリストからリスナーの名前をクリックします。
 - ステップ 2** リスナーを変更します。
 - ステップ 3** 変更を送信して確定します。

リスナーの削除

リスナーを削除するには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [Network] > [Listeners] ページで対応するリスナーの [Delete] 列にあるごみ箱のアイコンをクリックします。
 - ステップ 2** 削除を確認します。
 - ステップ 3** 変更を確認します。

CLI を使用したリスナーの設定

表 1-4 に、リスナーの作成および編集に関連するタスクに使用する複数の listenerconfig サブコマンドを示します。

表 1-4 リスナーを作成するタスク

リスナーを作成するタスク	コマンドおよびサブコマンド	参考資料
新しいリスナーの作成	listenerconfig -> new	
リスナーのグローバル設定の編集	listenerconfig -> setup	「リスナーのグローバル設定」(P.1-7)
リスナーのバウンス プロファイルを指定	bounceconfig, listenerconfig -> edit -> bounceconfig	「新しいバウンス プロファイルの作成」(P.2-57)
リスナーへの免責条項の関連付け	textconfig, listenerconfig -> edit -> setup -> footer	『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』で説明されています
SMTP 認証を設定	smtpauthconfig, listenerconfig -> smtpauth	
SMTP アドレス解析を設定	textconfig, listenerconfig -> edit -> setup -> address	
リスナーのデフォルト ドメインを設定	listenerconfig -> edit -> setup -> defaultdomain	
Received: ヘッダーを電子メールに追加	listenerconfig -> edit -> setup -> received	
そのままの CR 文字および LF 文字を CRLF 文字に変更	listenerconfig -> edit -> setup -> cleansmtp	
ホスト アクセス テーブルを修正	listenerconfig -> edit -> hostaccess	『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』で説明されています
ローカル ドメインまたは特定のユーザ (RAT) への電子メールの受け入れ (パブリック リスナーのみ)	listenerconfig -> edit -> rcptaccess	『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』で説明されています

表 1-4 リスナーを作成するタスク (続き)

リスナーの暗号化カンパセーション (TLS)	certconfig, settls, listenerconfig -> edit	「TLS を使用した SMTP カンパセーションの暗号化」 (P.1-33)
証明書の選択 (TLS)	listenerconfig -> edit -> certificate	「TLS を使用した SMTP カンパセーションの暗号化」 (P.1-33)

電子メールのルーティングおよび配信設定の詳細については、第 2 章「ルーティングおよび配信機能の設定」を参照してください。

HAT の詳細パラメータ

表 1-5 では、HAT の詳細パラメータの構文を定義しています。次の値は数値であり、後に **k** を追加してキロバイトで表すか、後に **M** を追加してメガバイトで表すことができます。文字のない値はバイトと見なされます。アスタリスク (*) でマーク付けされたパラメータでは、表 1-5 で示す変数構文がサポートされません。

表 1-5 HAT 詳細パラメータの構文

パラメータ	構文	値	値の例
接続ごとの最大メッセージ数	max_msgs_per_session	数値	1000
メッセージごとの最大受信者数	max_rcpts_per_msg	数値	10000 1k
最大メッセージ サイズ	max_message_size	数値	1048576 20M
リスナーへの最大同時接続数	max_concurrency	数値	1000
SMTP バナー コード	smtp_banner_code	数値	220
SMTP バナー テキスト (*)	smtp_banner_text	文字列	Accepted
SMTP 拒否バナー コード	smtp_banner_code	数値	550
SMTP 拒否バナー テキスト (*)	smtp_banner_text	文字列	Rejected

表 1-5 HAT 詳細パラメータの構文 (続き)

パラメータ	構文	値	値の例
SMTP バナー ホスト名の上書き	use_override_hostname	on off default	default
	override_hostname	文字列	newhostname
TLS の使用	tls	on off required	on
anti-spam スキャンの使用	spam_check	on off	off
ウイルス スキャンの使用	virus_check	on off	off
1 時間あたりの最大受信者数	max_rcpts_per_hour	数値	5k
1 時間あたりのエラーコードの最大受信者数	max_rcpts_per_hour_code	数値	452
1 時間あたりのテキストの最大受信者数	max_rcpts_per_hour_text	文字列	Too many recipients
SenderBase の使用	use_sb	on off	on
SenderBase 評価スコアの定義	sbrs[value1:value2]	-10.0- 10.0	sbrs[-10:-7.5]
Directory Harvest Attack Prevention : 1 時間あたりの無効な受信者の最大数	dhap_limit	数値	150

SenderBase 設定と HAT メール フロー ポリシー

アプリケーションへの接続を分類してメールに（レート制限が含まれる場合と含まれない場合がある）フロー ポリシーを適用するには、リスナーの Host Access Table (HAT) で次の方法を使用します。

分類 -> 送信者グループ -> メール フロー ポリシー -> レート制限

詳細については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Configuring the Gateway to Receive Email」の章の「Sender Groups Defined by Network Owners, Domains, and IP Addresses」を参照してください。

「分類」段階では、送信側ホストの IP アドレスを使用して、（パブリック リスナーで受信した）受信 SMTP セッションを送信者グループに分類します。送信者グループに関連付けられたメール フロー ポリシーには、レート制限をイネーブルにするパラメータがある場合があります。（レート制限によって、セッションごとのメッセージの最大数、メッセージごとの受信者の最大数、メッセージの最大サイズ、リモート ホストから受け入れる同時接続の最大数が制限される）。

通常、このプロセスでは、対応する名前の送信者グループの各送信者に対して受信者をカウントします。同じ時間帯に複数の送信者からメールを受信した場合、すべての送信者に対する受信者の合計数が制限値と比較されます。

このカウント方法には、次に示すいくつかの例外があります。

ステップ 1 ネットワーク オーナーによって分類が行われた場合、SenderBase 情報サービスによってアドレスの大きなブロックが小さなブロックに自動的に分割されます。

このような小さな各ブロックに対して、受信者と受信者レート制限のカウントが別々に実行されます（通常、/24 CIDR ブロックと同じですが、必ずしも同じではありません）。

ステップ 2 HAT Significant Bits 機能を使用する場合について説明します。この場合、ポリシーに関連付けられた significant bits パラメータを適用して、大きなブロックのアドレスが小さなブロックに分割されます。

このパラメータはメール フロー ポリシー -> レート制限フェーズに関連しています。送信者グループの IP アドレスの分類に使用する [network/bits] CIDR 表記法は、[bits] フィールドとは異なります。

デフォルトでは、SenderBase 評価フィルタおよび IP プロファイリングのサポートが、パブリック リスナーに対してはイネーブルで、プライベート リスナーに対してはディセーブルです。

SenderBase クエリーのタイムアウト

SenderBase 情報サービス (SenderBase DNS クエリーと SenderBase 評価サービス スコア (SBRS スコア) の両方) に対してクエリーを行う方法は AsyncOS の 4.0 リリース以降で改善されています。それ以前は、設定可能な最大タイムアウト値が 5 秒で、そのために SenderBase 情報サービスに到達不能または使用不能な場合に、負荷の高い複数の IronPort アプライアンスに対するメール処理で遅延が生じることがありました。

新しいタイムアウト値は、`listenerconfig -> setup` コマンドを発行して SenderBase 情報サービス データのキャッシングのグローバル設定を変更することによって設定できます。SenderBase 情報サービスによって自動的にキャッシュ時間を決定する (推奨) ことも、独自のキャッシュ時間を指定することもできます。キャッシングをディセーブルにすることもできます。

リスナーに対する `listenerconfig -> setup` コマンドによって、SenderBase 情報サービスでの「検索」をイネーブルにします。

この例では、この機能がイネーブルになっており、(クエリーに対する、および接続ごとのすべてのクエリーに対する) デフォルトのタイムアウト値が受け入れられています。

```
Would you like to enable SenderBase Reputation Filters and IP Profiling
```

```
support? [Y]> y
```

```
Enter a timeout, in seconds, for SenderBase queries. Enter '0' to  
disable SenderBase Reputation Filters and IP Profiling.
```

```
[5]>
```

```
Enter a timeout, in seconds, for all SenderBase queries per
connection.
```

```
[20]>
```

次に、`listenerconfig -> hostaccess -> edit` コマンドを使用して、メールごとにフロー ポリシーに基づいて、各メール フロー ポリシーに対する SenderBase 情報サービスの「検索」を許可します。

```
Would you like to use SenderBase for flow control by default?
(Yes/No/Default) [Y]>
```

GUI で次のことを実行します。

図 1-10 メール フロー ポリシーに対する SenderBase のイネーブル化



HAT Significant Bits 機能

AsyncOS の 3.8.3 リリース以降では、大きな CIDR ブロック内のリスナーの Host Access Table (HAT) の送信者グループ エントリを管理しながら、IP アドレス単位で受信メールの追跡およびレート制限を実行できます。たとえば、着信接続がホスト「10.1.1.0/24」と一致した場合、すべてのトラフィックを 1 つの大きなカウンタに集約するのではなく、範囲内の個別のアドレスに対してカウンタが生成されます。



(注) HAT ポリシーの significant bits オプションを有効にするには、HAT フロー制御オプションの「User SenderBase」をディセーブルにする必要があります (または、CLI の場合、`listenerconfig -> setup` コマンドで SenderBase 情報サービスをイネーブルにするための質問「Would you like to enable SenderBase Reputation Filters and IP Profiling support?」に **no** と回答します)。つまり、Hat Significant Bits 機能と SenderBase IP プロファイリング サポートのイネーブル化は相互に排他的です。

ほとんどの場合、この機能を使用して送信者グループを広く定義し（つまり、「10.1.1.0/24」や「10.1.0.0/16」のような IP アドレスの大きなグループ）、IP アドレスの小さなグループにメールフローレート制限を狭く適用します。

HAT Significant Bits 機能は、次のようなシステムのコンポーネントに対応しません。

HAT Configuration

HAT の設定には、送信者グループとメールフローポリシーの 2 つの部分があります。送信者グループの設定では、送信者の IP アドレスの「分類」（送信者グループに入れる）方法を定義します。メールフローポリシー設定では IP アドレスからの SMTP セッションの管理方法を定義します。この機能を使用すると、IP アドレスは「CIDR ブロックで分類された」（たとえば、10.1.1.0/24）送信者グループとなり、個々のホスト（/32）として制御されます。これは「significant_bits」ポリシー設定を使用して実行されます。

Significant Bits HAT ポリシー オプション

HAT 構文では significant_bits 設定オプションを使用できます。HAT でデフォルトメールフローポリシーまたは特定のメールフローポリシーを編集する場合（たとえば、listenerconfig -> edit -> hostaccess -> default コマンドを発行する場合）、次のような質問が表示されます。

- レート制限がイネーブルになっているか
 - フロー制御のための SenderBase の使用がディセーブルになっているか
 - Directory Harvest Attack Prevention (DHAP ディレクトリハーベスト攻撃防止) がメールフローポリシー（デフォルトメールフローポリシーまたは特定のメールフローポリシー）に対してイネーブルになっているか

次の例を参考にしてください。

```
Do you want to enable rate limiting per host? [N]> y
```

```
Enter the maximum number of recipients per hour from a remote host.
```

```
[ ]> 2345
```

Would you like to specify a custom SMTP limit exceeded response? [Y]>
n

Would you like to use SenderBase for flow control by default? [N]> n

Would you like to group hosts by the similarity of their IP addresses? [N]> y

Enter the number of bits of IP address to treat as significant, from 0 to 32.

[24]>

また、この機能は [Mail Policies] > [Mail Flow Policies] ページの GUI にも表示されます。

図 1-11 HAT Significant Bits 機能のイネーブル化

Rate Limiting:	Max. Recipients Per Hour:	<input checked="" type="radio"/> Unlimited <input type="radio"/> []
	Max. Recipients Per Hour Code:	[452]
	Max. Recipients Per Hour Text:	Too many recipients received this hour
Flow Control:	Use SenderBase for Flow Control:	<input checked="" type="radio"/> On <input type="radio"/> Off
	Group by Similarity of IP Addresses:	This Feature can only be used if Senderbase Flow Control is off. <input checked="" type="radio"/> Off <input type="radio"/> [] (significant bits 0-32)

フロー制御に SenderBase を使用するオプションが [OFF] になっているか、または Directory Harvest Attack Prevention (DHAP; ディレクトリ ハーベスト攻撃防止) がイネーブルになっている場合、「significant bits」値は、接続している送信者の IP アドレスに適用され、結果的に CIDR 表記法が、HAT 内の定義済みの送信者グループと一致させるためのトークンとして使用されます。CIDR ブロック

で囲まれた一番右のビットは、文字列の作成時に「ゼロ設定」になります。そのため、接続が IP アドレス 1.2.3.4 から確立され、`significant_bits` オプションが 24 に設定されたポリシーと一致する場合、結果として生じる CIDR ブロックは 1.2.3.0/24 になります。この機能を使用すると、HAT 送信者グループ エントリ（たとえば、10.1.1.0/24）には、グループに割り当てられたポリシー内の有効ビット エントリ（上記の例では、32）とは異なる数のネットワーク有効ビット（24）が存在する可能性があります。

インジェクション制御期間

インジェクション制御カウンタがリセットされた場合に調整できるグローバル設定オプションがあります。多数の IP アドレスのカウンタを管理している非常にビジーなシステムの場合、カウンタをより頻繁に（たとえば、60 分間隔ではなく 15 分間隔で）リセットするように設定します。これにより、データが管理不能なサイズにまで増大したり、システムのパフォーマンスに影響を与えたりすることを回避できます。

現在のデフォルト値は 3600 秒（1 時間）です。最小 1 分（60 秒）から最大 4 時間（14,400 秒）までの期間を指定できます。

GUI でグローバル設定を使用してこの期間を調整します（詳細については、「[リスナーのグローバル設定](#)」(P.1-7) を参照してください）。

また、CLI の `listenerconfig -> setup` コマンドを使用してこの期間を調整することもできます。

```
mail3.example.com> listenerconfig
```

```
Currently configured listeners:
```

1. InboundMail (on PublicNet, 192.168.2.1) SMTP TCP Port 25 Public
2. OutboundMail (on PrivateNet, 192.168.1.1) SMTP TCP Port 25 Private

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new listener.
- EDIT - Modify a listener.

- DELETE - Remove a listener.
- SETUP - Change global settings.

```
[ ]> setup
```

Enter the global limit for concurrent connections to be allowed across all listeners.

```
[300]>
```

Enter the global limit for concurrent TLS connections to be allowed across all listeners.

```
[100]>
```

Enter the maximum number of message header lines. 0 indicates no limit.

```
[1000]>
```

1. Allow SenderBase to determine cache time (Recommended)
2. Don't cache SenderBase data.
3. Specify your own cache time.

```
[1]> 3
```

Enter the time, in seconds, to cache SenderBase data:

```
[300]>
```

Enter the rate at which injection control counters are reset.

[1h]> 15m

Enter the timeout for unsuccessful inbound connections.

[5m]>

Enter the maximum connection time for inbound connections.

[15m]>

What hostname should Received: headers be stamped with?

1. The hostname of the Virtual Gateway(tm) used for delivering the message
2. The hostname of the interface the message is received on

[2]>

The system will always add a Message-ID header to outgoing messages that don't already have one. Would you like to do the same for incoming messages? (Not recommended.) [N]>

By default connections with a HAT REJECT policy will be closed with a banner message at the start of the SMTP conversation. Would you like to do the rejection at the message recipient level instead for more detailed logging of rejected mail? [N]>

Currently configured listeners:

1. InboundMail (on PublicNet, 192.168.2.1) SMTP TCP Port 25 Public
2. OutboundMail (on PrivateNet, 192.168.1.1) SMTP TCP Port 25 Private

[]>

TLS を使用した SMTP カンバセーションの暗号化

エンタープライズ ゲートウェイ（またはメッセージ転送エージェント、つまり MTA）は、通常インターネット上で「クリアに」通信します。つまり、通信は暗号化されません。場合によっては、悪意のあるエージェントが、送信者または受信者に知られることなく、この通信を傍受する可能性があります。通信は第三者によってモニタされる可能性や、変更される可能性さえあります。

Transport Layer Security (TLS; トランスポート レイヤ セキュリティ) は Secure Socket Layer (SSL; セキュア ソケット レイヤ) テクノロジーを改良したバージョンです。これは、インターネット上で SMTP カンバセーションの暗号化に広く使用されているメカニズムです。AsyncOS では SMTP への STARTTLS 拡張 (セキュアな SMTP over TLS) がサポートされます。詳細については、RFC 3207 を参照してください (これは、廃止になった RFC 2487 に代わるバージョンです)。

AsyncOS の TLS 実装では、暗号化によってプライバシーが確保されます。これによって、X.509 証明書および証明書認証サービスからの秘密キーをインポートしたり、アプライアンス上で使用する自己署名証明書を作成したりできます。AsyncOS では、パブリック リスナーおよびプライベート リスナーに対する個々の TLS 証明書、インターフェイス上の Secure HTTP (HTTPS) 管理アクセス、LDAP インターフェイス、およびすべての発信 TLS 接続がサポートされます。

IronPort アプライアンスで TLS を正しく設定するには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1 証明書を取得します。
 - ステップ 2 IronPort アプライアンスに証明書をインストールします。
 - ステップ 3 受信、配信、または両方を行うシステムで TLS をイネーブルにします。

証明書の取得

TLS を使用するには、IronPort アプライアンスに対する受信および配信のための X.509 証明書および一致する秘密キーが必要です。SMTP での受信および配信の両方には同じ証明書を使用し、インターフェイス (LDAP インターフェイス) 上での HTTPS サービスや宛先ドメインへのすべての発信 TLS 接続には別の証明書を使用することも、それらのすべてに対して 1 つの証明書を使用することもできます。

既知の認証局サービスから認証および秘密キーを購入できます。認証局は、ID の検証および公開キーの配布に使用されるデジタル証明書を発行する第三者機関または企業です。これによって、有効で信頼できる身元によって証明書が発行されたことがさらに保証されます。IronPort では、サービスの重複が推奨されていません。

Cisco IronPort アプライアンスでは、独自の自己署名証明書を作成して、公開証明書を取得するために認証局に送信する Certificate Signing Request (TLS; 証明書署名要求) を生成できます。認証局は、秘密キーによって署名された信頼できる公開証明書を返送します。GUI の [Network] > [Certificates] ページまたは CLI の `certconfig` コマンドを使用して自己署名証明書を作成し、CSR を生成して、信頼できる公開証明書をインストールします。

最初に証明書を取得または作成する場合、インターネットで「certificate authority services SSL Server Certificates (SSL サーバ証明書を提供している認証局)」を検索して、お客様の環境のニーズに最適なサービスを選択してください。サービスの手順に従って、証明書を取得します。

`certconfig` を使用して証明書を設定した後で、GUI の [Network] > [Certificates] ページおよび CLI の `print` コマンドを使用して証明書のリスト全体を表示できます。`print` コマンドでは中間証明書が表示されないことに注意してください。



警告

IronPort アプライアンスには TLS および HTTPS 機能がテスト済みであることを示すデモ証明書が同梱されますが、デモ証明書付きのサービスのいずれかをイネーブルにすることはセキュアではないため、通常の使用には推奨できません。デフォルトのデモ証明書が付属しているいずれかのサービスをイネーブルにすると、CLI に警告メッセージが表示されます。

中間証明書

ルート証明書の検証に加えて、AsyncOS では、中間証明書の検証の使用もサポートされます。中間証明書とは信頼できるルート認証局によって発行された証明書であり、信頼の連鎖を効率的に作成することによって、追加の証明書を作成するために使用されます。たとえば、信頼できるルート認証局によって証明書が発行する権利が与えられた `godaddy.com` によって証明書が発行されたとします。`godaddy.com` によって発行された証明書では、信頼できるルート認証局の秘密キーと同様に `godaddy.com` の秘密キーが検証される必要があります。

自己署名証明書の作成

で自己署名証明書を作成するには、GUI の [Network] > [Certificates] ページの [Add Certificate] をクリックします（または、CLI の `certconfig` コマンドを使用する）。[Add Certificate] ページで、[Create Self-Signed Certificate] を選択します。

図 1-12 に、[Create Self-Signed Certificate] オプションが選択された [Add Certificate] ページを示します。

図 1-12 [Add Certificate] ページ
Add Certificate

The screenshot shows the 'Add Certificate' configuration page. The 'Add Certificate' dropdown menu is set to 'Create Self-Signed Certificate'. Below this, there are several input fields: 'Common Name', 'Organization', 'Organizational Unit', 'City (Locality)', 'State (Province)', and 'Country'. The 'Duration before expiration' is set to 3650 days. The 'Private Key Size' is set to 2048 bits, with radio buttons for 2048 and 1024. At the bottom, there are 'Cancel' and 'Next >' buttons.

自己署名証明書に、次の情報を入力します。

Common Name	完全修飾ドメイン名。
Organization	組織の正確な正式名称。
Organizational Unit	組織の部署名。
City (Locality)	組織の本拠地がある都市。
State (Province)	組織の本拠地がある州、郡、または地方。
Country	組織の本拠地がある 2 文字の ISO 国名コード。
Duration before expiration	証明書が期限切れになるまでの日数。
Private Key Size	CSR 用に生成する秘密キーのサイズ。2048 ビットおよび 1024 ビットだけがサポートされます。

[Next] をクリックして、証明書および署名情報を確認します。図 1-13 に、自己署名証明書の例を示します。

図 1-13 [Certificate] ページの表示
View Certificate example.com

The screenshot shows a web form titled "Add Certificate". The form fields are as follows:

- Certificate Name: example.com
- Common Name: example.com
- Organization: Example
- Organization Unit: Org
- City (Locality): San Francisco
- State (Province): CA
- Country: US

Below the form, there is a section for "Signature Issued By" with the following details:

- Common Name (CN): example.com
- Organization (O): Example
- Organizational Unit (OU): Org
- Issued On: Feb 17 21:45:33 2010 GMT
- Expires On: Feb 15 21:45:33 2020 GMT

There are two links: "Download Certificate Signing Request..." and "Upload Signed Certificate:". The "Upload Signed Certificate:" link has a "Browse..." button next to it. Below these links, there is a note: "Uploading a new certificate will overwrite the existing certificate." At the bottom of the form, there is a link for "Intermediate Certificates (optional)" and a "Submit" button.

証明書の名前を入力します。AsyncOS のデフォルトでは、共通の名前が割り当てられます。

自己署名証明書の CSR を認証局に送信する場合、[Download Certificate Signing Request] をクリックしてローカルまたはネットワーク マシンに PEM 形式で CSR を保存します。[Submit] をクリックして証明書を保存し、変更を確定します。

秘密キーによって署名された信頼できる公開証明書を認証局が戻すと、[Certificates] ページの証明書の名前をクリックしてローカル マシンまたはネットワーク上のファイルへのパスを入力することで、信頼できる公開証明書をアップロードします。受信した信頼できる公開証明書が PEM 形式であるか、またはアプライアンスにアップロードする前に PEM を使用するように変換できる形式であることを確認します。(変換ツールは <http://www.openssl.org> の無料のソフトウェア OpenSSL に含まれています)。

認証局から証明書をアップロードすると、既存の証明書が上書きされます。自己署名証明書に関連する中間証明書をアップロードすることもできます。パブリック リスナーまたはプライベート リスナー、IP インターフェイスの HTTPS サービス、LDAP インターフェイス、または宛先ドメインへのすべての発信 TLS 接続に証明書を使用できます。

証明書のインポート

AsyncOS では PKCS #12 形式で保存された証明書をインポートしてアプライアンスで使用することもできます。GUI の [Network] > [Certificates] ページまたは CLI の certconfig コマンドのいずれかを使用して、証明書をインポートできます。

図 1-14 [Add Certificate] ページ
Add Certificate

GUI を使用して証明書をインポートするには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [Network] > [Certificates] ページの [Add Certificate] をクリックします。
 - ステップ 2** [Import Certificate] オプションを選択します。
 - ステップ 3** ネットワーク上またはローカル マシンの証明書ファイルへのパスを入力します。
 - ステップ 4** ファイルのパスワードを入力します。
 - ステップ 5** [Next] をクリックして証明書の情報を表示します。
 - ステップ 6** 証明書の名前を入力します。AsyncOS のデフォルトでは、共通の名前が割り当てられます。
 - ステップ 7** [Submit] をクリックして証明書を保存し、変更を確定します。

証明書のエクスポート

証明書をエクスポートするには、次のように GUI を使用して PKCS #12 形式で保存します。

-
- ステップ 1** [Network] > [Certificates] ページの [Export Certificate] をクリックします。
[Export Certificate] ページが表示されます。

図 1-15 [Export Certificate] ページ
Export Certificate

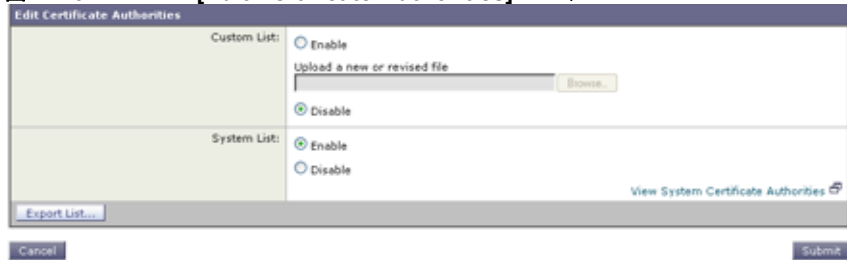
- ステップ 2** エクスポートする証明書を選択します。
- ステップ 3** 証明書のファイル名を入力します。
- ステップ 4** 証明書ファイルのパスワードを入力します。
- ステップ 5** [Export] をクリックします。
- Web ブラウザに、ファイルを保存するかどうかを確認するダイアログボックスが表示されます。
- ステップ 6** ファイルをローカル マシンまたはネットワーク マシンに保存します。
- ステップ 7** さらに証明書をエクスポートするか、または [Cancel] をクリックして [Network] > [Certificates] ページに戻ります。

認証局のリストの管理

アプライアンスには信頼できる証明書のリストがあらかじめインストールされています。このリストは、リモート ドメインから証明書を検証して、ドメインのクレデンシャルを確立するために使用します。アプライアンスの信頼できる CA のカスタム リストをインポートして、あらかじめインストールされているシステム リストとともに、またはシステム リストの代わりに使用できます。GUI の [Network] > [Certificates] > [Edit Certificate Authorities] ページまたは CLI の `certconfig > certauthority` コマンドを使用してリストを管理できます。

図 1-16 に、カスタム認証局リストとシステム認証局リストを管理する GUI の [Edit Certificate Authorities] ページを示します。

図 1-16 [Edit Certificate Authorities] ページ



システム リストに含まれている信頼できる認証局を表示するには、[Edit Certificate Authorities] ページの [View System Certificate Authorities] をクリックします。

カスタム認証局リストのインポート

信頼できる認証局のカスタム リストを作成して、アプライアンスにインポートできます。ファイルは PEM 形式にして、アプライアンスで信頼する認証局の証明書が含まれている必要があります。GUI を使用してリストをインポートするには、カスタム リストの [Enable] をクリックし、ローカル マシンまたはネットワーク マシンのカスタム リストへのフル パスを入力します。変更を送信して確定します。

システム認証局リストのディセーブル化

あらかじめインストールされているシステム認証局のリストはアプライアンスから削除できませんが、リモート ホストからの証明書の検証にカスタム リストのみを使用できるように、ディセーブルにすることはできます。GUI を使用してこのリストをディセーブルにするには、[Edit Certificate Authorities] ページの [System List] で [Disable] をクリックします。変更を送信して確定します。

認証局リストのエクスポート

システム内の信頼できる認証局のサブセットのみを使用するか、既存のカスタム リストの編集を行う場合、リストを .txt ファイルにエクスポートして、認証局を追加または削除するように編集できます。リストの編集が完了したら、ファイルをカスタム リストとしてアプライアンスにインポートします。

図 1-17 に、システム リストおよびカスタム リストをエクスポートする GUI の [Export Certificate Authority List] ページを示します。

図 1-17 [Export Certificate Authority List] ページ
Export Certificate Authority List



GUI を使用してリストをエクスポートするには、[Export Certificate Authority List] ページの [Export List] をクリックします。[Export Certificate Authority List] ページが表示されます。エクスポートするリストを選択し、リストのファイル名を入力します。[Export] をクリックします。.txt ファイルとしてリストを開くか、または保存するかを確認するダイアログボックスが表示されます。

リスナー HAT の TLS のイネーブル化

暗号化が必要なリスナーに対して TLS をイネーブルにする必要があります。インターネットに対するリスナー（つまり、パブリック リスナー）には TLS をイネーブルにしますが、内部システムのリスナー（つまり、プライベート リスナー）には必要ありません。また、すべてのリスナーに対して暗号化をイネーブルにすることもできます。

リスナーの TLS に対して 3 つの異なる設定を指定できます。表 3-19 を参照してください。

表 1-6 リスナーの TLS 設定

TLS 設定	意味
1. No	TLS では着信接続を行えません。リスナーに対する接続では、暗号化された SMTP カンバセーションは必要ありません。これは、アプライアンス上で設定されるすべてのリスナーに対するデフォルト設定です。

表 1-6 リスナーの TLS 設定 (続き)

TLS 設定	意味
2. Preferred	TLS で MTA からのリスナーへの着信接続が可能です。
3. Required	TLS で MTA からリスナーへの着信接続が可能です。また、STARTTLS コマンドを受信するまで IronPort アプライアンスは NOOP、EHLO または QUIT 以外のすべてのコマンドに対してエラー メッセージで応答します。この動作は RFC 3207 によって指定されています。RFC 3207 では、Secure SMTP over Transport Layer Security の SMTP サービス拡張が規定されています。TLS が「必要」であることは、送信側で TLS の暗号化を行わない電子メールが、送信前に IronPort アプライアンスによって拒否されることを意味し、このため、暗号化されずにクリアに転送されることが回避されます。

デフォルトでは、プライベート リスナーとパブリック リスナーのどちらも TLS 接続を許可しません。電子メールの着信 (受信) または発信 (送信) の TLS をイネーブルにするには、リスナーの HAT の TLS をイネーブルにする必要があります。また、プライベート リスナーおよびパブリック リスナーのすべてのデフォルト メール フロー ポリシー設定で `tls` 設定が「off」になっています。

リスナーの作成時に、個々のパブリック リスナーに TLS 接続の専用の証明書を割り当てることができます。詳細については、「[リスナーの作成](#)」(P.1-11) を参照してください。

証明書の割り当て

個々のパブリック リスナーまたはプライベート リスナーに TLS 接続の専用の証明書を割り当てするには、[Network] > [Listeners] ページまたは CLI の `listenerconfig -> edit -> certificate` コマンドのいずれかを使用します。

GUI で TLS 証明書を割り当てするには、リスナーの作成時または編集時に [Certificate] セクションで証明書を選択し、変更を送信して確定します。

図 1-18 リスナーの証明書の選択



CLI でリスナーに証明書を割り当てするには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** `listenerconfig -> edit` コマンドを使用して、設定するリスナーを選択します。
 - ステップ 2** `certificate` コマンドを使用して、使用できる証明書を表示します。
 - ステップ 3** プロンプトが表示されたら、リスナーを割り当てる証明書を選択します。
 - ステップ 4** リスナーの設定が完了したら、`commit` コマンドを発行して、変更をイネーブルにします。

ロギング

TLS が必要であるにもかかわらず、リスナーで使用できない場合、IronPort アプライアンスによってメール ログ インスタンスで通知されます。次の条件を満たした場合、メール ログが更新されます。

- リスナーに対して TLS が「required」と設定されている。
- IronPort アプライアンスで「Must issue a STARTTLS command first」コマンドが送信された。
- 正常な受信者が受信せずに接続が終了した。

TLS 接続が失敗した理由に関する情報がメール ログに記録されます。

GUI の例

GUI でリスナーの HAT メール フロー ポリシーの TLS 設定を変更するには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [Mail Flow Policies] ページからポリシーを変更するリスナーを選択し、編集するポリシー名のリンクをクリックします。(デフォルト ポリシー パラメータも編集可能)。
[Edit Mail Flow Policies] ページが表示されます。
 - ステップ 2** 「Encryption and Authentication」セクションの [TLS:] フィールドで、リスナーの TLS のレベルを選択します。

図 1-19 リスナーのメール フロー ポリシー パラメータで要求される TLS

Encryption and Authentication:	TLS:	<input checked="" type="radio"/> Off <input type="radio"/> Preferred <input type="radio"/> Required
	SMTP Authentication:	<input checked="" type="radio"/> Off <input type="radio"/> Preferred <input type="radio"/> Required
	If Both TLS and SMTP Authentication are enabled:	<input type="checkbox"/> Require TLS To Offer SMTP Authentication

ステップ 3 変更を送信して確定します。

選択した TLS 設定が反映されてリスナーのメール フロー ポリシーが更新されます。

CLI の例

CLI でリスナーの TLS デフォルト設定を変更するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** listenerconfig -> edit コマンドを使用して、設定するリスナーを選択します。
- ステップ 2** リスナーのデフォルトの HAT 設定を編集するには、hostaccess -> default コマンドを使用します。
- ステップ 3** 次の質問が表示されたら、次の選択肢のいずれかを入力して TLS 設定を変更します。

```
Do you want to allow encrypted TLS connections?
```

1. No
2. Preferred
3. Required

```
[1]> 3
```

```
You have chosen to enable TLS. Please use the 'certconfig' command to ensure that there is a valid certificate configured.
```

この例では、リスナーで使用できる有効な証明書があるかどうかを確認するために certconfig コマンドを使用するかどうかを質問しています。証明書を作成していない場合、リスナーではアプライアンスにあらかじめインストールされているデモ証明書を使用します。テスト目的でデモ証明書で

TLS をイネーブルにすることはできますが、セキュアではないため、通常の使用には推奨できません。リスナーに証明書を割り当てるには、`listenerconfig -> edit -> certificate` コマンドを使用します。

TLS を設定すると、CLI でリスナーの概要に設定が反映されます。

```
Name: Inboundmail

Type: Public

Interface: PublicNet (192.168.2.1/24) TCP Port 25

Protocol: SMTP

Default Domain:

Max Concurrency: 1000 (TCP Queue: 50)

Domain map: disabled

TLS: Required
```

ステップ 4 変更をイネーブルにするには、`commit` コマンドを発行します。

配信時の TLS および証明書検証のイネーブル化

[Destination Controls] ページまたは `destconfig` コマンドを使用すると、TLS をイネーブルにして、特定のドメインに電子メールを配信するように要求できます。

TLS だけでなく、ドメインのサーバ証明書の検証も要求できます。このドメイン証明書は、ドメインのクレデンシャルを確立するために使用されるデジタル証明書に基づいています。証明プロセスには次の 2 つの要件が含まれます。

- 信頼できる Certificate Authority (CA; 認証局) によって発行された証明書で終わる SMTP セッションの証明書発行者のチェーン。
- 受信マシンの DNS 名またはメッセージの宛先ドメインのいずれかと一致する証明書に表示された Common Name (CN)。

または

メッセージの宛先ドメインが、証明書のサブジェクト代替名 (subjectAltName) の拡張の DNS 名のいずれかと一致している (RFC 2459 を参照)。この一致では、RFC 2818 のセクション 3.1 で説明されているワイルドカードがサポートされます。

信頼できる CA は、ID の検証および公開キーの配布に使用されるデジタル証明書を発行する、第三者機関または企業です。これによって、有効で信頼できる身元によって証明書が発行されたことがさらに保証されます。

エンベロープ暗号化の代わりに TLS 接続を介してドメインにメッセージを送信するように IronPort アプライアンスを設定できます。詳細については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「IronPort Email Encryption」の章を参照してください。

すべての発信 TLS 接続に対してアプライアンスで使用する証明書を指定できます。証明書を指定するには、[Destination Controls] ページの [Edit Global Settings] をクリックするか、または CLI の `destconfig -> setup` を使用します。証明書はドメインごとの設定ではなく、グローバル設定です。

[Destination Controls] ページまたは `destconfig` コマンドを使用してドメインを含める場合、指定されたドメインの TLS に 5 つの異なる設定を指定できます。TLS のエンコードにドメインとの交換が必須であるか、または優先されるかの指定に加えて、ドメインの検証が必要かどうかも指定できます。設定の説明については、表 1-7 を参照してください。

表 1-7 配信の TLS 設定

TLS 設定	意味
Default	デフォルトの TLS 設定では、リスナーからドメインの MTA への発信接続に [Destination Controls] ページまたは <code>destconfig -> default</code> サブコマンドを使用するように設定されています。 質問「Do you wish to apply a specific TLS setting for this domain?」に「no」と回答すると、「Default」値が設定されます。
1. No	インターフェイスからドメインの MTA への発信接続には、TLS がネゴシエートされません。

表 1-7 配信の TLS 設定 (続き)

TLS 設定	意味
2. Preferred	IronPort アプライアンス インターフェイスからドメインの MTA への TLS がネゴシエートされます。ただし、(220 応答を受信する前に) TLS ネゴシエーションに失敗すると、SMTP トランザクションは「クリアな」(暗号化されない)ままです。証明書が信頼できる認証局によって発行された場合、検証は行われません。220 応答を受信した後にエラーが発生した場合、SMTP トランザクションはクリア テキストにフォールバックされません。
3. Required	IronPort アプライアンス インターフェイスからドメインの MTA への TLS がネゴシエートされます。ドメインの証明書の検証は行われません。ネゴシエーションに失敗すると、電子メールはその接続を介して送信されません。ネゴシエーションに成功すると、暗号化されたセッションを経由して電子メールが配信されます。

表 1-7 配信の TLS 設定 (続き)

TLS 設定	意味
4. Preferred (Verify)	<p>IronPort アプライアンスからドメインの MTA への TLS がネゴシエートされます。アプライアンスはドメインの証明書の検証を試行します。</p> <p>次の 3 つの結果が考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • TLS がネゴシエートされ、証明書が検証される。暗号化されたセッションによってメールが配信される。 • TLS がネゴシエートされるものの、証明書は検証されない。暗号化されたセッションによってメールが配信される。 • TLS 接続が確立されず、証明書は検証されない。電子メール メッセージがプレーン テキストで配信される。
5. Required (Verify)	<p>IronPort アプライアンスからドメインの MTA への TLS がネゴシエートされます。ドメインの証明書の検証が必要です。</p> <p>次の 3 つの結果が考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • TLS 接続がネゴシエートされ、証明書が検証される。暗号化されたセッションによって電子メール メッセージが配信される。 • TLS 接続がネゴシエートされるものの、信頼できる CA によって証明書が検証されない。メールは配信されない。 • TLS 接続がネゴシエートされない。メールは配信されない。

グッド ネイバー テーブルに指定された受信者ドメインの指定されたエントリがない場合、または指定されたエントリが存在するものの、そのエントリに対して指定された TLS 設定が存在しない場合、[Destination Controls] ページまたは `destconfig -> default` サブコマンド (「No」、「Preferred」、「Required」、「Preferred (Verify)」、「Required (Verify)」) を使用して動作を設定する必要があります。

要求された TLS 接続が失敗した場合のアラートの送信

TLS 接続が必要なドメインにメッセージを配信する際に TLS ネゴシエーションが失敗した場合、IronPort アプライアンスがアラートを送信するかどうかを指定できます。アラート メッセージには失敗した TLS ネゴシエーションの宛先ドメイン名が含まれます。IronPort アプライアンスは、システム アラートのタイプの警告重大度レベル アラートを受信するよう設定されたすべての受信者にアラートメッセージを送信します。GUI の [System Administration] > [Alerts] ページ (または CLI の `alertconfig` コマンド) を使用してアラートの受信者を管理できます。

TLS 接続アラートをイネブルにするには、[Destination Controls] ページの [Edit Global Settings] をクリックまたは `destconfig -> setup` サブコマンドを使用します。これは、ドメイン単位ではなく、グローバルな設定です。アプライアンスが配信を試行したメッセージの情報については、[Monitor] > [Message Tracking] ページまたはメール ログを使用します。

ロギング

ドメインに TLS が必要であるにもかかわらず、使用できない場合、IronPort アプライアンスによってメール ログ インスタンスで通知されます。TLS 接続を使用できなかった理由も記載されています。次の条件のいずれかを満たす場合、メール ログが更新されます。

- リモート MTA で ESMTP がサポートされない (たとえば、IronPort アプライアンスからの EHLO コマンドが理解できない)。
- リモート MTA で ESMTP がサポートされるものの、「STARTTLS」が EHLO 応答でアドバタイズされる拡張のリストにない。
- リモート MTA で「STARTTLS」拡張がアドバタイズされたものの、IronPort アプライアンスで STARTTLS コマンドを送信した際にエラーが返される。

CLI の例

この例では、`destconfig` コマンドを使用して、TLS 接続の要求および「`partner.com`」ドメインの暗号化されたカンバセーションを実行します。リストが表示されます。

example.com の証明書は、あらかじめインストールされているデモ証明書の代わりに発信 TLS 接続で使用されます。テスト目的でデモ証明書で TLS をイネーブルにすることはできますが、セキュアではないため、通常の使用には推奨できません。

```
mail3.example.com> destconfig
```

```
There is currently 1 entry configured.
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- SETUP - Change global settings.
- NEW - Create a new entry.
- DELETE - Remove an entry.
- DEFAULT - Change the default.
- LIST - Display a summary list of all entries.
- DETAIL - Display details for one destination or all entries.
- IMPORT - Import tables from a file.
- EXPORT - Export tables to a file.

```
[ ]> setup
```

```
The "Demo" certificate is currently configured. You may use "Demo",  
but this will not be secure.
```

1. example.com
2. Demo

Please choose the certificate to apply:

[1]> **1**

Do you want to send an alert when a required TLS connection fails?

[N]>

There is currently 1 entry configured.

Choose the operation you want to perform:

- SETUP - Change global settings.
- NEW - Create a new entry.
- DELETE - Remove an entry.
- DEFAULT - Change the default.
- LIST - Display a summary list of all entries.
- DETAIL - Display details for one destination or all entries.
- IMPORT - Import tables from a file.
- EXPORT - Export tables to a file.

[]> **new**

Enter the domain you wish to limit.

[]> **partner.com**

Do you wish to configure a concurrency limit for partner.com? [Y]> **n**

Do you wish to apply a messages-per-connection limit to this domain?
[N]> **n**

Do you wish to apply a recipient limit to this domain? [N]> **n**

Do you wish to apply a specific bounce profile to this domain? [N]>
n

Do you wish to apply a specific TLS setting for this domain? [N]> **y**

Do you want to use TLS support?

1. No
2. Preferred
3. Required
4. Preferred (Verify)
5. Required (Verify)

[1]> **3**

You have chosen to enable TLS. Please use the 'certconfig' command to ensure that there is a valid certificate configured.

Do you wish to apply a specific bounce verification address tagging setting for this domain? [N]> **n**

Do you wish to apply a specific bounce profile to this domain? [N]> n

There are currently 2 entries configured.

Choose the operation you want to perform:

- SETUP - Change global settings.
- NEW - Create a new entry.
- EDIT - Modify an entry.
- DELETE - Remove an entry.
- DEFAULT - Change the default.
- LIST - Display a summary list of all entries.
- DETAIL - Display details for one destination or all entries.
- CLEAR - Remove all entries.
- IMPORT - Import tables from a file.
- EXPORT - Export tables to a file.

[]> **list**

	Rate		Bounce	Bounce
Domain	Limiting	TLS	Verification	Profile
=====	=====	=====	=====	=====
partner.com	Default	Req	Default	Default

```
(Default)      On          Off          Off          (Default)
```

```
There are currently 2 entries configured.
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- SETUP - Change global settings.
- NEW - Create a new entry.
- EDIT - Modify an entry.
- DELETE - Remove an entry.
- DEFAULT - Change the default.
- LIST - Display a summary list of all entries.
- DETAIL - Display details for one destination or all entries.
- CLEAR - Remove all entries.
- IMPORT - Import tables from a file.
- EXPORT - Export tables to a file.

```
[1]>
```

HTTPS の証明書のイネーブル化

GUI の [Network] > [IP Interfaces] ページまたは CLI の `interfaceconfig` コマンドのいずれかを使用して、IP インターフェイスで HTTPS サービスの証明書をイネーブルにできます。GUI を使用して IP インターフェイスを追加する場合、HTTPS サービスに使用する証明書を選択し、[HTTPS] チェックボックスをオンにして、ポート番号を入力します。

次の例では、`interfaceconfig` コマンドを使用して、ポート 443（デフォルトポート）上で HTTPS サービスをイネーブルにするように IP インターフェイス `PublicNet` を編集します。インターフェイスのその他のすべてのデフォルトが受け入れられます。（プロンプトで `Enter` と入力すると、角カッコで囲まれて表示されるデフォルト値が受け入れられる）。

この例では、アプライアンスにあらかじめインストールされているデモ証明書を使用します。テスト目的でデモ証明書で HTTPS サービスをイネーブルにすることはできますが、セキュアではないため、通常の使用には推奨できません。



(注)

GUI のシステム設定ウィザードを使用して HTTPS サービスをイネーブルにできます。『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「*Setup and Installation*」の章の「*Define the Default Router (Gateway), Configure the DNS Settings, and Enabling Secure Web Access*」を参照してください。

このコマンドからの変更が確定されると、ユーザがセキュア HTTPS の URL (`https://192.168.2.1`) を使用して **Graphical User Interface (GUI; グラフィカルユーザ インターフェイス)** にアクセスできるようになります。

```
mail3.example.com> interfaceconfig
```

```
Currently configured interfaces:
```

1. Management (192.168.42.42/24: mail3.example.com)
2. PrivateNet (192.168.1.1/24: mail3.example.com)
3. PublicNet (192.168.2.1/24: mail3.example.com)

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new interface.
- EDIT - Modify an interface.
- GROUPS - Define interface groups.

- DELETE - Remove an interface.

```
[> edit
```

Enter the number of the interface you wish to edit.

```
[> 3
```

IP interface name (Ex: "InternalNet"):

```
[PublicNet]>
```

IP Address (Ex: 192.168.1.2):

```
[192.168.2.1]>
```

Ethernet interface:

1. Data 1

2. Data 2

3. Management

```
[2]>
```

Netmask (Ex: "255.255.255.0" or "0xffffffff"):

```
[255.255.255.0]>
```

Hostname:

```
[mail3.example.com]>
```

Do you want to enable FTP on this interface? [N]>

Do you want to enable Telnet on this interface? [N]>

Do you want to enable SSH on this interface? [N]>

Do you want to enable HTTP on this interface? [Y]>

Which port do you want to use for HTTP?

[80]>

Do you want to enable HTTPS on this interface? [N]> **y**

Which port do you want to use for HTTPS?

[443]> **443**

Do you want to enable Spam Quarantine HTTP on this interface? [N]>

Do you want to enable Spam Quarantine HTTPS on this interface? [N]>

The "Demo" certificate is currently configured. You may use "Demo", but this will not be secure. To assure privacy, run "certconfig" first.

Both HTTP and HTTPS are enabled for this interface, should HTTP requests redirect to the secure service? [Y]>

Currently configured interfaces:

1. Management (192.168.42.42/24: mail3.example.com)
2. PrivateNet (192.168.1.1/24: mail3.example.com)
3. PublicNet (192.168.2.1/24: mail3.example.com)

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new interface.
- EDIT - Modify an interface.
- GROUPS - Define interface groups.
- DELETE - Remove an interface.

[]>



CHAPTER 2

ルーティングおよび配信機能の設定

この章では、Cisco IronPort アプライアンスを通過する電子メールのルーティングおよび配信機能について説明します。リスナーを使用して電子メールを受信するようにゲートウェイを設定したら、着信（インターネットからメールを受信）と発信（社内システムからメールを送信）の両方の処理について、アプライアンスで実行されるルーティングおよび配信の設定をさらに調整できます。

この章は、次の内容で構成されています。

- 「ローカルドメインの電子メールのルーティング」(P.2-2) ([SMTP Routes] ページおよび `smtproutes` コマンド)
- 「アドレスの書き換え」(P.2-11)
- 「エイリアステーブルの作成」(P.2-11) (`aliasconfig` コマンド)
- 「マスカレードの設定」(P.2-24) (`masquerade` サブコマンド)
- 「ドメインマップ機能」(P.2-41) (`domainmap` サブコマンド)
- 「バウンスした電子メールの処理」(P.2-50) ([Bounce Profiles] および `bounceconfig` コマンド)
- 「電子メール配信の管理」(P.2-63) ([Destination Controls], `destconfig` コマンド、および `deliveryconfig` コマンド)
- 「IronPort バウンス検証」(P.2-75)
- 「電子メール配信パラメータの設定」(P.2-81)
- 「Virtual Gateway™ テクノロジー」(P.2-86) (`altsrghost` コマンド)
- 「グローバル配信停止機能の使用」(P.2-99) (`unsubscribe` コマンド)

ローカル ドメインの電子メールのルーティング

第 1 章「リスナーのカスタマイズ」では、エンタープライズ ゲートウェイ設定に対して SMTP 接続を提供するようにプライベートとパブリックのリスナーをカスタマイズしました。これらのリスナーは、特定の接続を処理したり（HAT 変更経由）、特定ドメインのメールを受信したり（パブリック リスナーの RAT 変更経由）するようにカスタマイズされています。

Cisco IronPort アプライアンスでは、メールをローカル ドメイン経由で、[Network] > [SMTP Routes] ページ（または `smtproutes` コマンド）を使用して指定されたホストにルーティングします。この機能は、`sendmail` の `mailertable` 機能に似ています。



(注) GUI で System Setup Wizard（またはコマンドライン インターフェイスで `systemsetup` コマンド）を実行し（『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Setup and Installation」の章を参照）、変更を確定した場合、そのときに入力した RAT エントリごとに、アプライアンスで最初の SMTP ルート エントリが定義されています。

SMTP ルートの概要

SMTP ルートを使用すると、特定ドメインのすべての電子メールを別の Mail eXchange (MX; メール交換) ホストへリダイレクトできます。たとえば、`example.com` から `groupware.example.com` へのマッピングを作成できます。このマッピングにより、エンベロープ受信者アドレスに `@example.com` が含まれる電子メールは、代わりに `groupware.example.com` に転送されます。`groupware.example.com` で「MX」のルックアップが実行されてから、ホストで「A」のルックアップが実行されます。これは、通常の電子メール配信と同じです。この代替 MX ホストは、DNS の MX レコードにリストされている必要はなく、電子メールがリダイレクトされているドメインのメンバである必要もありません。IronPort AsyncOS オペレーティング システムでは、Cisco IronPort アプライアンスで最大 4 万の SMTP ルート マッピングを設定できます。（「SMTP ルートの制限」(P.2-4) を参照）。

この機能を使用すると、ホストを「ひとかたまりにする」ことができます。
.example.com のようにドメインの一部を指定した場合は、example.com で終わるすべてのドメインがこのエントリに一致します。たとえば、fred@foo.example.com と wilma@bar.example.com は、どちらもこのマッピングに一致します。

SMTP ルート テーブルにホストがない場合は、DNS を使用して MX ルックアップが実行されます。結果は、SMTP ルート テーブルに対して再チェックされません。foo.domain の DNS MX エントリが bar.domain の場合、foo.domain に送信されるすべての電子メールが bar.domain に配信されます。bar.domain から他のホストへのマッピングを作成した場合、foo.domain へ送信される電子メールは影響を受けません。

つまり、再帰的なエントリは続きません。a.domain から b.domain にリダイレクトされるエントリがあり、b.domain から a.domain にリダイレクトされるエントリがその後にある場合、メールのループは作成されません。この場合、a.domain に送信される電子メールは、b.domain で指定された MX ホストに配信されます。反対に、b.domain に送信される電子メールは、a.domain で指定された MX ホストに配信されます。

SMTP ルート テーブルは、電子メールの配信のたびに上から順に読み込まれます。マッピングと一致する最も具体的なエントリが使用されます。たとえば、SMTP ルート テーブルで host1.example.com と .example.com の両方についてマッピングがある場合は、host1.example.com のエントリが使用されます。具体的ではない .example.com エントリの後に出現した場合であっても、このエントリのほうが具体的なエントリであるためです。そうでない場合は、エンベロープ受信者のドメインで通常の MX ルックアップが実行されます。

デフォルトの SMTP ルート

特殊なキーワード ALL を使用して、デフォルトの SMTP ルートも定義できます。ドメインが SMTP ルート リストで前のマッピングと一致しない場合のデフォルトは、ALL エントリで指定された MX ホストにリダイレクトされます。

SMTP ルート エントリを出力すると、デフォルトの SMTP ルートは ALL: として表示されます。デフォルトの SMTP ルートは削除できません。入力した値をクリアすることのみ可能です。

デフォルトの SMTP ルートを設定するには、[Network] > [SMTP Routes] ページまたは smtproutes コマンドを使用します。

SMTP ルートの定義

ルートを構築するには、[Network] > [SMTP Routes] ページ（または `smtproutes` コマンド）を使用します。新しいルートを作成するには、まず、永続的なルートを作成するドメインまたはドメインの一部を指定する必要があります。次に、宛先ホストを指定します。宛先ホストは、完全修飾ホスト名または IP アドレスで入力できます。特殊な宛先ホスト `/dev/null` を指定して、エントリに一致するメッセージを廃棄することもできます。（つまり、デフォルトルートに `/dev/null` を指定することで、アプライアンスで受信されたメールが配信されないようにすることができます）。

受信側のドメインに複数の宛先ホストを設定できます。MX レコードと同様に、それぞれの宛先ホストにはプライオリティ番号が割り当てられています。最低番号が割り当てられた宛先ホストは、受信側ドメインのプライマリ宛先ホストであることを示します。一覧にある他の宛先ホストは、バックアップとして使用されます。

プライオリティが同じ宛先は、「ラウンドロビン」方式で使用されます。ラウンドロビン処理は、SMTP 接続に基づいていて、必ずしもメッセージに基づくものではありません。また、1 つ以上の宛先ホストが応答しない場合は、到達可能ないずれかのホストにメッセージが配信されます。設定されているすべての宛先ホストが応答しない場合、メールは受信側ドメインのキューに入れられ、宛先ホストへの配信が後で試みられます。（MX レコードの使用へのフェールオーバーは行われません）。

CLI で `smtproutes` コマンドを使用してルートを構築するときは、ホスト名または IP アドレスに続けて `/pri=` とその後にプライオリティを割り当てるための整数 `0 ~ 65535`（`0` はプライオリティ最高）を使用して、各宛先ホストにプライオリティを設定できます。たとえば、`host1.example.com/pri=0` のプライオリティは、`host2.example.com/pri=10` よりも高くなります。複数のエントリを指定する場合は、カンマで区切ります。

SMTP ルートの制限

ルートを **40,000** まで定義できます。ALL による最終的なデフォルトルートは、この制限に含まれます。そのため、定義できるのは **39,999** 個のカスタムルートと、特殊なキーワード `ALL` を使用する 1 つのルートです。

SMTP ルートと DNS

特殊なキーワード `USEDNS` を使用すると、特定ドメインの次のホップを決定する MX ルックアップがアプライアンスで実行されます。これは、サブドメイン宛のメールを特定ホストへルーティングする必要があるときに便利です。たとえば、`example.com` 宛のメールを会社の Exchange サーバに送信する場合は、次のような SMTP ルートを使用できます。

```
example.com exchange.example.com
```

ただし、さまざまなサブドメイン (`foo.example.com`) 宛のメールの場合は、次のような SMTP ルートを追加します。

```
.example.com USEDNS
```

SMTP ルートとアラート

[System Administration] > [Alerts] ページ (または `alertconfig` コマンド) で指定されたアドレスにアプライアンスから送信されたアラートは、これらの宛先に対して定義された SMTP ルートに従います。

SMTP ルート、メール配信、およびメッセージ分裂

着信：1 つのメッセージに 10 人の受信者がいて、全員が同じ Exchange サーバに属する場合、AsyncOS では TCP 接続を 1 つ開き、メールストアには 10 の別々のメッセージではなく、メッセージを 1 つのみ配置します。

発信：動作は同様ですが、1 つのメッセージが 10 の異なるドメインの 10 人の受信者に送信される場合、AsyncOS では 10 の MTA に対する 10 の接続を開き、それぞれ 1 つの電子メールを配信します。

分裂：1 つの着信メッセージに 10 人の受信者がいて、全員が別々の着信ポリシーグループ (10 グループ) に属する場合、10 人の受信者全員が同じ Exchange サーバに属していても、メッセージは分裂されます。つまり、10 の別々の電子メールが 1 つの TCP 接続で配信されます。

SMTP ルートと発信 SMTP 認証

発信 SMTP 認証プロファイルが作成されたら、SMTP ルートに適用できます。これによって、ネットワーク エッジにあるメールリレー サーバの背後に IronPort アプライアンスが配置されている場合に、発信メールを認証できます。発信 SMTP 認証の詳細については、「[発信 SMTP 認証](#)」(P.3-59) を参照してください。

GUI を使用した SMTP ルートの管理

Cisco IronPort アプライアンスの SMTP ルートを管理するには、[Network] > [SMTP Routes] ページを使用します。テーブルでマッピングの追加、変更、および削除ができます。SMTP ルート エントリをエクスポートまたはインポートできます。

図 2-1 [SMTP Routes] ページ
SMTP Routes

Receiving Domain	Destination Hosts	All Delete
.example.com	exchange4.example.com	<input type="checkbox"/>
All Other Domains		<input type="checkbox"/>

SMTP ルートの追加

SMTP ルートを追加するには、次の手順に従います。

- ステップ 1** [Network] > [SMTP Routes] ページの [Add Route] をクリックします。[Add SMTP Route] ページが表示されます。

図 2-2 [Add SMTP Route] ページ
Add SMTP Route

Priority	Destination	Port
0		25

Ex. exchange.example.com, [exchange.example.com] or 10.1.1.2

- ステップ 2** 受信側ドメインと宛先ホストを入力します。複数の宛先ホストを追加するには、[Add Row] をクリックし、新しい行に次の宛先ホストを入力します。



(注) ポート番号を指定するには、宛先ホストに「:<ポート番号>」を追加します (例: example.com:25)。

- ステップ 3** 複数の宛先ホストを追加する場合は、ホストのプライオリティを割り当てるために、0 ~ 65535 の整数を入力します。0 が最上位の優先レベルです。詳細については、「SMTP ルートの定義」(P.2-4) を参照してください。
- ステップ 4** [Submit] をクリックします。[SMTP Routes] ページが表示され、変更が反映されます。
- ステップ 5** 変更を確定します。

SMTP ルートの編集

SMTP ルートを編集するには、次の手順に従います。

- ステップ 1** SMTP ルートのリストで、既存の SMTP ルートの名前をクリックします。[Edit SMTP Route] ページが表示されます。
- ステップ 2** ルートを編集します。
- ステップ 3** [Submit] をクリックします。
- ステップ 4** [SMTP Routes] ページが表示され、変更が反映されます。
- ステップ 5** 変更を確定します。

SMTP ルートの削除

SMTP ルートを削除するには、次の手順に従います。

ステップ 1 削除する SMTP ルートの右側にあるチェックボックスをオンにします。

ステップ 2 [Delete] をクリックします。

すべての SMTP ルートを削除するには、[All] というラベルの付いたチェックボックスをオンにして [Delete] をクリックします。

SMTP ルートのエクスポート

Host Access Table (HAT) および Recipient Access Table (RAT) の場合と同様に、ファイルをエクスポートおよびインポートして SMTP ルート マッピングを変更することもできます。SMTP ルートをエクスポートするには、次の手順に従います。

ステップ 1 [SMTP Routes] ページの [Export SMTP Routes] をクリックします。[Export SMTP Routes] ページが表示されます。

ステップ 2 ファイルの名前を入力し、[Submit] をクリックします。

SMTP ルートのインポート

Host Access Table (HAT) および Recipient Access Table (RAT) の場合と同様に、ファイルをエクスポートおよびインポートして SMTP ルート マッピングを変更することもできます。SMTP ルートをインポートするには、次の手順に従います。

ステップ 1 [SMTP Routes] ページの [Import SMTP Routes] をクリックします。[Import SMTP Routes] ページが表示されます。

ステップ 2 エクスポートされた SMTP ルートが含まれているファイルを選択します。

ステップ 3 [Submit] をクリックします。インポートにより既存の SMTP ルートがすべて置換されることを示す警告が表示されます。テキスト ファイル内のすべての SMTP ルートがインポートされます。

ステップ 4 [Import] をクリックします。

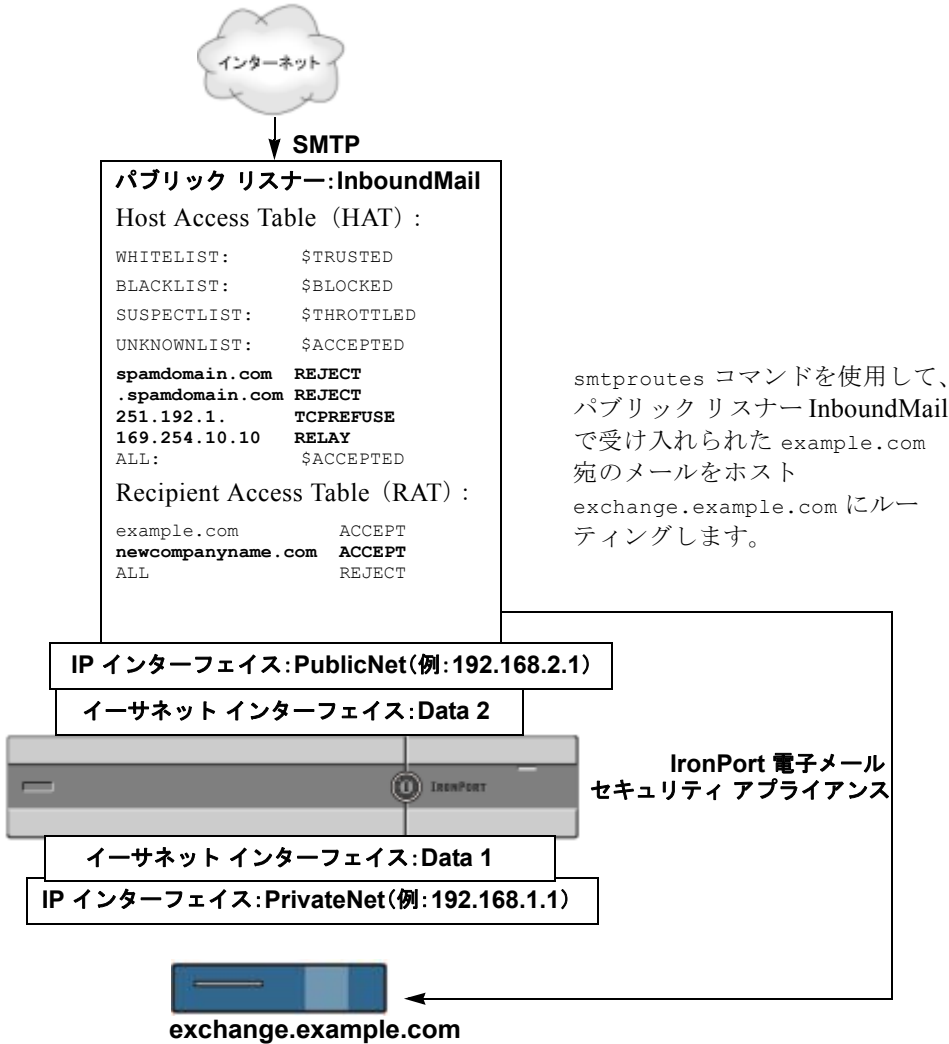
ファイルには「コメント」を配置できます。「#」文字で始まる行は、AsyncOS によってコメントであると見なされて無視されます。次の例を参考にしてください。

```
# this is a comment, but the next line is not
```

```
ALL:
```

この時点で、電子メール ゲートウェイの設定は次のようになります。

図 2-3 パブリック リスナー用に定義された SMTP ルート



アドレスの書き換え

AsyncOS では、電子メールパイプラインでエンベロープ送信者および受信者のアドレスを書き換える方法が複数あります。アドレスの書き換えは、たとえばパートナー ドメインに送信されたメールをリダイレクトする場合や、社内インフラストラクチャを隠す（マスクする）場合に使用できます。

表 2-1 に、送信者および受信者の電子メールアドレスを書き換えるために使用される各種機能の概要を示します。

表 2-1 アドレスの書き換え方法

元のアドレス	変更後	機能	作業対象
*@anydomain	user@domain	エイリアス テーブル（「エイリアス テーブルの作成」(P.2-11) を参照）	<ul style="list-style-type: none"> エンベロープ受信者のみ グローバルに適用 エイリアスを電子メールアドレスまたは他のエイリアスにマッピング
*@olddomain	*@newdomain	ドメイン マッピング（「ドメイン マップ機能」(P.2-41) を参照）	<ul style="list-style-type: none"> エンベロープ受信者のみ リスナーごとに適用
*@olddomain	*@newdomain	マスカレード（「マスカレードの設定」(P.2-24) を参照）	<ul style="list-style-type: none"> エンベロープ送信者、および To:、From:、または CC: ヘッダー リスナーごとに適用

エイリアス テーブルの作成

エイリアス テーブルには、1 人以上の受信者にメッセージをリダイレクトするメカニズムが備わっています。エイリアスからユーザ名や他のエイリアスへのマッピング テーブルは、一部の UNIX システムで `sendmail` コンフィギュレーションの `/etc/mail/aliases` 機能と同様の方法で作成できます。

リスナーが受信した電子メールのエンベロープ受信者 (Envelope To または RCPT TO と呼ばれます) がエイリアステーブルで定義されているエイリアスと一致する場合、電子メールのエンベロープ受信者アドレスが書き換えられます。



(注) RAT チェックの後からメッセージフィルタの前までに、リスナーはエイリアステーブルをチェックし、受信者を変更します。『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Understanding the Email Pipeline」を参照してください。



(注) エイリアステーブル機能により、電子メールのエンベロープ受信者が実際に書き換えられます。これは、電子メールのエンベロープ受信者を書き換えず、電子メールを指定されたドメインに再ルーティングするだけの `smtproutes` コマンド (「バウンスした電子メールの処理」(P.2-50) を参照) とは異なります。

コマンドラインからエイリアステーブルの設定

エイリアステーブルは、セクションで定義されます。各セクションの先頭にはドメインコンテキスト (そのセクションに関連するドメインのリスト) があり、その後にはマップのリストが続きます。

ドメインコンテキストは、1 つ以上のドメインまたは部分ドメインのリストです。カンマで区切り、角カッコ (「[」および「]」) で囲みます。ドメインは、文字、数字、ハイフン、およびピリオドで構成される文字列です (RFC 1035、セクション 2.3.1. の「Preferred name syntax」を参照)。部分ドメイン (.example.com など) は、ピリオドで始まるドメインです。部分ドメインに一致するサブ文字列で終わるようなすべてのドメインは、一致であると見なされません。たとえば、ドメインコンテキスト .example.com は、mars.example.com および venus.example.com と一致します。ドメインコンテキストの後には、マップ (エイリアスと受信者リスト) のリストがあります。マップは、次のように構成されます。

表 2-2 エイリアステーブルの構文

左辺 (LHS)	区切り文字	右辺 (RHS)
一致する 1 つ以上のエイリアスのリスト	コロン文字 (「:」)	1 つ以上の受信者アドレスまたはエイリアスのリスト

左辺のエイリアスでは、次の形式を使用できます。

username	一致するエイリアスを指定します。先行する「ドメイン」属性がテーブルで指定されている必要があります。このパラメータがないと、エラーになります。
user@domain	一致する正確な電子メール アドレスを指定します。

左辺 1 行あたり複数のエイリアスをカンマで区切って入力できます。

右辺の各受信者は、user@domain 形式の完全な電子メール アドレス、または別のエイリアスを指定できます。

エイリアス ファイルには、暗黙的なドメインのない「グローバルな」エイリアス（特定ドメインではなく、グローバルに適用されるエイリアス）、エイリアスに 1 つ以上の暗黙的なドメインのあるドメイン コンテキスト、またはその両方を含めることができます。

エイリアスの「チェーン」（再帰的なエントリ）を作成することはできますが、完全な電子メール アドレスで終わる必要があります。

sendmail コンフィギュレーションのコンテキストと互換性を持たせるために、メッセージを廃棄するための特殊な宛先である /dev/null がサポートされています。エイリアス テーブルによってメッセージが /dev/null にマッピングされると、ドロップ済みカウンタが増分します。（『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide*』の「Managing and Monitoring via the CLI」を参照）。受信者は受け入れられますが、キューには入りません。

エイリアス テーブルのエクスポートおよびインポート

エイリアス テーブルをインポートするには、先に[付録 B「アプライアンスへのアクセス」](#)を確認し、アプライアンスにアクセスできるようにします。

既存のエイリアス テーブルを保存するには、aliasconfig コマンドの export サブコマンドを使用します。ファイル（ファイル名は自分で指定）は、リスナーの /configuration ディレクトリに書き込まれます。このファイルを CLI の外部で変更し、インポートし直すことができます。（ファイルに形式が不正なエントリがある場合は、ファイルのインポート時にエラーが出力されます）。

エイリアス テーブル ファイルを /configuration ディレクトリに配置し、aliasconfig コマンドの import サブコマンドを使用してファイルをアップロードします。

テーブルの行の先頭でナンバー記号 (#) を使用すると、その行がコメントアウトされます。

コンフィギュレーションの変更が反映されるように、エイリアス テーブル ファイルをインポートした後で `commit` コマンドを発行してください。

エイリアス テーブルのエントリの削除

Command Line Interface (CLI; コマンドライン インターフェイス) を使用してエイリアス テーブルからエントリを削除する場合は、先にドメイン グループを選択するように求められます。「ALL (any domain)」エントリを選択すると、すべてのドメインに適用されるエイリアスの番号付きリストが表示されます。その後、削除するエイリアスの番号を選択します。

エイリアス テーブルの例



(注)

このテーブル例のすべてのエントリは、コメントアウトされています。

```
# sample Alias Table file

# copyright (c) 2001-2005, IronPort Systems, Inc.

#

# Incoming Envelope To addresses are evaluated against each
# entry in this file from top to bottom. The first entry that
# matches will be used, and the Envelope To will be rewritten.

#

# Separate multiple entries with commas.

#

# Global aliases should appear before the first domain
# context. For example:
```

```
#  
  
# admin@example.com: administrator@example.com  
  
# postmaster@example.net: administrator@example.net  
  
#  
  
# This alias has no implied domain because it appears  
# before a domain context:  
  
#  
  
# someaddr@somewhere.dom: specificperson@here.dom  
  
#  
  
# The following aliases apply to recipients @ironport.com and  
# any subdomain within .example.com because the domain context  
# is specified.  
  
#  
  
# Email to joe@ironport.com or joe@foo.example.com will  
# be delivered to joseph@example.com.  
  
#  
  
# Similarly, email to fred@mx.example.com will be  
# delivered to joseph@example.com  
  
#  
  
# [ironport.com, .example.com]  
  
#  
  
# joe, fred: joseph@example.com
```

```
#  
  
# In this example, email to partygoers will be sent to  
# three addresses:  
#  
# partygoers: wilma@example.com, fred@example.com,  
barney@example.com  
#  
# In this example, mail to help@example.com will be delivered to  
# customercare@otherhost.dom. Note that mail to help@ironport.com  
will  
# NOT be processed by the alias table because the domain context  
# overrides the previous domain context.  
#  
# [example.com]  
#  
# help: customercare@otherhost.dom  
#  
# In this example, mail to nobody@example.com is dropped.  
#  
# nobody@example.com: /dev/null  
#  
# "Chains" may be created, but they must end in an email address.
```



```
# For example, email to "all" will be sent to 9 addresses:

#

# [example.com]

#

# all: sales, marketing, engineering

# sales: joe@example.com, fred@example.com, mary@example.com

# marketing:bob@example.com, advertising

# engineering:betty@example.com, miles@example.com,
  chris@example.com

# advertising:richard@example.com, karen@advertising.com
```

aliasconfig コマンドの例

この例では、`aliasconfig` コマンドを使用してエイリアス テーブルが作成されます。まず、**example.com** のドメイン コンテキストが指定されます。次に、**customercare** のエイリアスが作成され、`customercare@example.com` に送信されたすべての電子メールが `bob@example.com`、`frank@example.com`、および `sally@example.com` にリダイレクトされるようにします。さらに、**admin** のグローバル エイリアスが作成され、`admin` に送信された電子メールが `administrator@example.com` にリダイレクトされるようにします。最後に、確認用にエイリアス テーブルが出力されます。

テーブルの出力時に、`admin` のグローバル エイリアスは、`example.com` の最初のドメイン コンテキストの *前* に出現します。

```
mail3.example.com> aliasconfig
```

```
No aliases in table.
```

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new entry.
- IMPORT - Import aliases from a file.

```
[> new
```

How do you want your aliases to apply?

1. Globally
2. Add a new domain context

```
[1]> 2
```

Enter new domain context.

Separate multiple domains with commas.

Partial domains such as .example.com are allowed.

```
[> example.com
```

Enter the alias(es) to match on.

Separate multiple aliases with commas.

Allowed aliases:

- "user" - This user in this domain context.
- "user@domain" - This email address.

```
[> customercare
```

Enter address(es) for "customercare".

Separate multiple addresses with commas.

```
[ ]> bob@example.com, frank@example.com, sally@example.com
```

Adding alias customercare:

```
bob@example.com, frank@example.com, sally@example.com
```

Do you want to add another alias? [N]> n

There are currently 1 mappings defined.

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new entry.
- EDIT - Modify an entry.
- DELETE - Remove an entry.
- PRINT - Display the table.
- IMPORT - Import aliases from a file.
- EXPORT - Export table to a file.
- CLEAR - Clear the table.

```
[ ]> new
```

How do you want your aliases to apply?

1. Globally
2. Add a new domain context
3. example.com

```
[1]> 1
```

Enter the alias(es) to match on.

Separate multiple aliases with commas.

Allowed aliases:

- "user@domain" - This email address.
- "user" - This user for any domain
- "@domain" - All users in this domain.
- "@.partialdomain" - All users in this domain, or any of its sub domains.

```
[> admin
```

Enter address(es) for "admin".

Separate multiple addresses with commas.

```
[> administrator@example.com
```

Adding alias admin: administrator@example.com

Do you want to add another alias? [N]> n

There are currently 2 mappings defined.

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new entry.
- EDIT - Modify an entry.
- DELETE - Remove an entry.
- PRINT - Display the table.
- IMPORT - Import aliases from a file.
- EXPORT - Export table to a file.
- CLEAR - Clear the table.

```
[ ]> print
```

```
admin: administrator@example.com
```

```
[ example.com ]
```

```
customer care: bob@example.com, frank@example.com, sally@example.com
```

There are currently 2 mappings defined.

Choose the operation you want to perform:

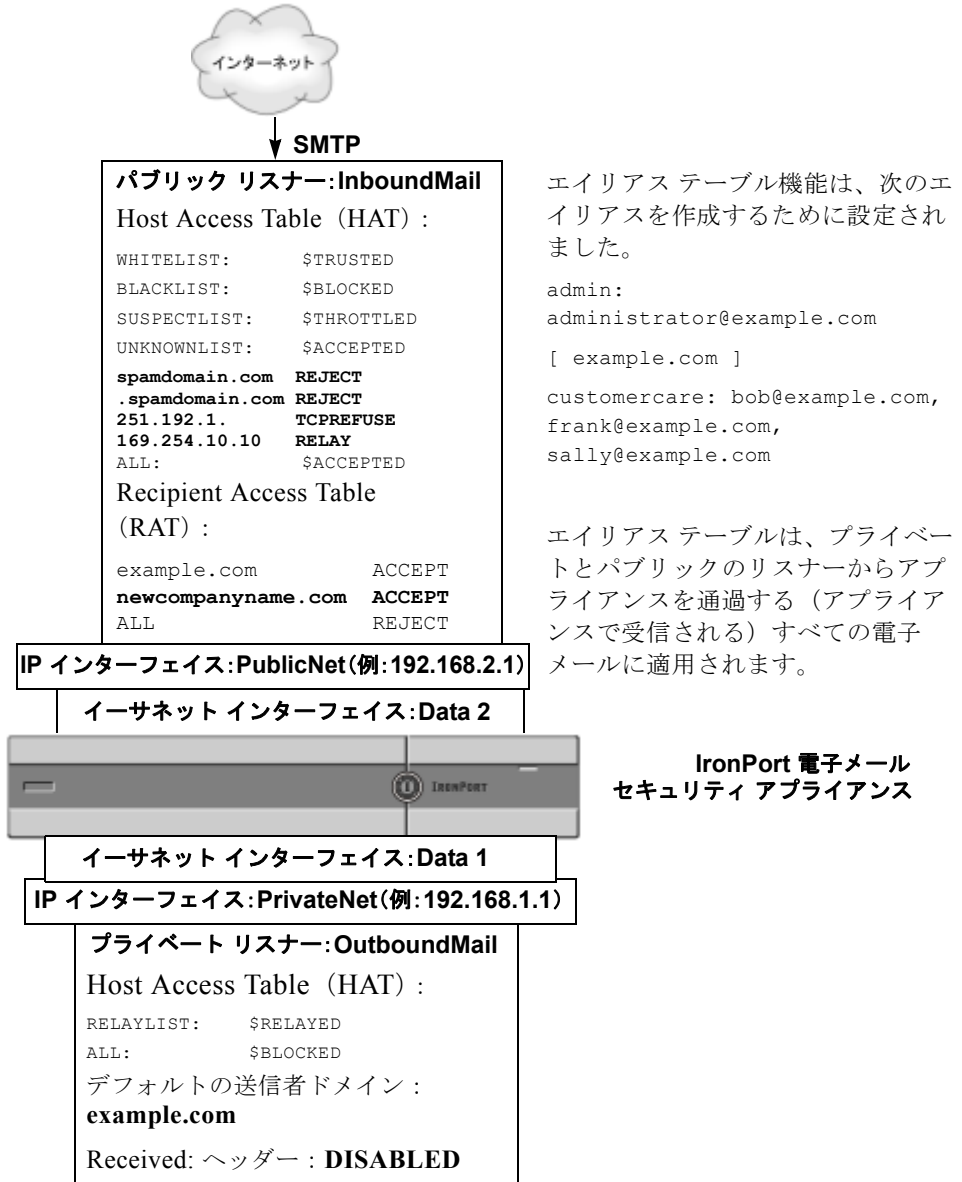
- NEW - Create a new entry.
- EDIT - Modify an entry.

- DELETE - Remove an entry.
- PRINT - Display the table.
- IMPORT - Import aliases from a file.
- EXPORT - Export table to a file.
- CLEAR - Clear the table.

[]>

この時点で、電子メール ゲートウェイの設定は次のようになります。

図 2-4 アプライアンスに定義されたエイリアス テーブル



マスカレードの設定

マスカレードは、作成したテーブルに従って、エンベロープ送信者（送信者または MAIL FROM とも呼ばれます）、およびリスナーで処理される電子メールの To:、From:、CC: ヘッダーを書き換える機能です。この機能の典型的な実装例は、「仮想ドメイン」です。単一のサイトから複数のドメインをホストできます。もう一つの典型的な実装は、電子メールヘッダー内の文字列からサブドメインを「取り除く」ことで、ネットワーク インフラストラクチャを「隠す」ことです。マスカレード機能は、プライベート リスナーとパブリック リスナーの両方で利用できます。



(注) マスカレード機能は、システム全体に対して設定されるエイリアス テーブル機能とは異なり、リスナー単位で設定されます。



(注) リスナーは、LDAP 受信者受け入れクエリの直後で LDAP ルーティング クエリの前、メッセージが作業キュー内にある間に、マスカレード テーブルで一致を探して受信者を変更します。『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Understanding the Email Pipeline」を参照してください。

マスカレード機能により、エンベロープ送信者および受信した電子メールの To:、From:、CC: フィールドのアドレスが実際に書き換えられます。作成するリスナーごとに別々のマスカレード パラメータを指定できます。2 つある方法のいずれかを使用します。

ステップ 1 作成したマッピングのスタティック テーブルを使用、または

ステップ 2 LDAP クエリを使用。

このセクションでは、スタティック テーブルを使用する方法について説明します。テーブルの形式は、一部の UNIX システムで sendmail コンフィギュレーションの /etc/mail/genericstable 機能と前方互換性があります。LDAP マスカレード クエリの詳細については、第 3 章「LDAP クエリー」を参照してください。

マスカレードと altsrchoost

一般に、マスカレード機能ではエンベロープ送信者が書き換えられ、メッセージで実行されるそれ以降のアクションは、マスカレードされたアドレスから「トリガー」されます。ただし、CLI から altsrchoost コマンドを実行した場合、altsrchoost マッピングは元のアドレスからトリガーされます（つまり変更後のマスカレードされたアドレスではない）。

詳細については、「[Virtual Gateway™ テクノロジー](#)」(P.2-86) および「[確認：電子メールパイプライン](#)」(P.2-106) を参照してください。

スタティック マスカレード テーブルの設定

マッピングのスタティック マスカレード テーブルを設定するには、listenerconfig コマンドの edit -> masquerade サブコマンドを使用します。また、マッピングが含まれるファイルをインポートできます。「[マスカレード テーブルのインポート](#)」(P.2-27) を参照してください。サブコマンドにより、入力アドレス、ユーザ名、およびドメインを新しいアドレスおよびドメインにマッピングするテーブルが作成および維持されます。LDAP マスカレードクエリの詳細については、[第 3 章「LDAP クエリー」](#) を参照してください。

メッセージがシステムに挿入されるときは、テーブルが参照され、ヘッダーに一致が見つかり、メッセージが書き換えられます。

ドメインのマスカレード テーブルは、次のように構成されます。

表 2-3 マスカレード テーブルの構文

左辺 (LHS)	区切り文字	右辺 (RHS)
一致する 1 つ以上のユーザ名 やドメインのリスト	空白文字（スペース またはタブ文字）	書き換え後のユーザ名や ドメイン

次の表に、マスカレード テーブルで有効なエントリを示します。

左辺 (LHS)	右辺 (RHS)
<code>username</code>	<code>username@domain</code>
このエントリは、一致するユーザ名を指定します。左辺のユーザ名に一致する着信電子メールメッセージは、一致となり、右辺のアドレスで書き換えられます。右辺は、完全なアドレスである必要があります。	
<code>user@domain</code>	<code>username@domain</code>

左辺 (LHS)	右辺 (RHS)
このエントリは、一致する正確なアドレスを指定します。左辺の完全なアドレスに一致する着信メッセージは、右辺のアドレスで書き換えられます。右辺は、完全なアドレスである必要があります。	
<code>@domain</code>	<code>@domain</code>
このエントリは、指定されたドメインの任意のアドレスを指定します。左辺の元のドメインは、右辺のドメインで置き換えられますが、ユーザ名は変化しません。	
<code>@.partialdomain</code>	<code>@domain</code>
このエントリは、指定されたドメインの任意のアドレスを指定します。左辺の元のドメインは、右辺のドメインで置き換えられますが、ユーザ名は変化しません。	
ALL	<code>@domain</code>
ALL エントリは、そのままのアドレスに一致し、右辺のアドレスで書き換えます。右辺は、ドメインの先頭に「@」を付ける必要があります。このエントリは、テーブル内の位置に関係なく、常に優先度最低になります。	
(注) ALL エントリは、プライベートリスナーのみに使用できます。	

- ルールは、マスカレードテーブルでの出現順序に従って一致します。
- デフォルトでは受信時にヘッダーの From:、To:、および CC: フィールド内のアドレスが一致し、書き換えられます。エンベロープ送信者に一致して書き換えるようにオプションを設定することもできます。エンベロープ送信者および書き換え対象ヘッダーは、config サブコマンドを使用して有効と無効を切り替えます。
- テーブルの行の先頭でナンバー記号 (#) を使用すると、その行がコメントアウトされます。行の末尾で # から始まる部分は、すべてコメントであると見なされて無視されます。
- マスカレードテーブルは、最大で 400,000 エントリです。これは、new サブコマンドを使用した場合も、ファイルからインポートした場合も同じです。

プライベート リスナー用マスカレード テーブルの例

```
# sample Masquerading file

@example.com @example.com # Hides local subdomains in the header

sales sales_team@success.com

@techsupport tech_support@biggie.com

user@localdomain user@company.com

ALL @bigsender.com
```

マスカレード テーブルのインポート

従来の `sendmail` の `/etc/mail/genericstable` ファイルをインポートできます。`genericstable` ファイルをインポートするには、先に[付録 B「アプライアンスへのアクセス」](#)を確認し、アプライアンスにアクセスできるようにします。

`genericstable` ファイルを `configuration` ディレクトリに配置し、`masquerade` サブコマンドの `import` サブコマンドを使用してファイルをアップロードします。コマンドは、次の順序で使用します。

```
listenerconfig -> edit -> injector_number -> masquerade -> import
```

または、`export` サブコマンドを使用して既存のコンフィギュレーションをダウンロードできます。ファイル（ファイル名は自分で指定）は、`configuration` ディレクトリに書き込まれます。このファイルを CLI の外部で変更し、インポートし直すことができます。

`import` サブコマンドを使用するときは、ファイルに有効なエントリのみが含まれているようにしてください。無効なエントリ（左辺があって右辺がない場合など）があると、ファイルのインポート時に CLI で構文エラーが発生します。インポート中に構文エラーが発生すると、ファイル全体でマッピングがインポートされません。

リスナーのコンフィギュレーションの変更が反映されるように、`genericstable` ファイルをインポートした後で `commit` コマンドを発行してください。

マスカレードの例

この例では、`listenerconfig` の `masquerade` サブコマンドを使用して、**PrivateNet** インターフェイス上にある「**OutboundMail**」という名前のプライベートリスナー用に、ドメインマスカレードテーブルを作成します。

まず、マスカレードに LDAP を使用するオプションが宣言されます。(LDAP マスカレードクエリの設定については、参照してください。LDAP マスカレードクエリの詳細については、[第 3 章「LDAP クエリー」](#)を参照してください)。

次に、`@.example.com` の部分ドメイン表記が `@example.com` にマッピングされます。これにより、サブドメイン `.example.com` 内にある任意のマシンから送信されるすべての電子メールが `example.com` にマッピングされます。さらに、ユーザ名 `joe` がドメイン `joe@example.com` にマッピングされます。両方のエントリを確認するためにドメインマスカレードテーブルが出力されて、`masquerade.txt` という名前のファイルにエクスポートされます。`config` サブコマンドを使用して、`CC`: フィールドのアドレスの書き換えが無効になり、最後に変更が確定されます。

```
mail3.example.com> listenerconfig
```

```
Currently configured listeners:
```

1. InboundMail (on PublicNet, 192.168.2.1) SMTP TCP Port 25 Public
2. OutboundMail (on PrivateNet, 192.168.1.1) SMTP TCP Port 25 Private

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new listener.
- EDIT - Modify a listener.
- DELETE - Remove a listener.
- SETUP - Change global settings.

```
[ ]> edit
```

Enter the name or number of the listener you wish to edit.

[]> 2

Name: OutboundMail

Type: Private

Interface: PrivateNet (192.168.1.1/24) TCP Port 25

Protocol: SMTP

Default Domain:

Max Concurrency: 600 (TCP Queue: 50)

Domain Map: Disabled

TLS: No

SMTP Authentication: Disabled

Bounce Profile: Default

Footer: None

LDAP: Off

Choose the operation you want to perform:

- NAME - Change the name of the listener.
- INTERFACE - Change the interface.
- LIMITS - Change the injection limits.
- SETUP - Configure general options.

- HOSTACCESS - Modify the Host Access Table.
- BOUNCECONFIG - Choose the bounce profile to use for messages injected on this listener.
- MASQUERADE - Configure the Domain Masquerading Table.
- DOMAINMAP - Configure domain mappings.
- LDAPACCEPT - Configure an LDAP query to determine whether a recipient address should be accepted or bounced/dropped.
- LDAPROUTING - Configure an LDAP query to reroute messages.
- LDAPGROUP - Configure an LDAP query to determine whether a sender or recipient is in a specified group.
- SMTPAUTH - Configure an SMTP authentication.

```
[ ]> masquerade
```

```
Do you want to use LDAP for masquerading? [N]> n
```

```
Domain Masquerading Table
```

```
There are currently 0 entries.
```

```
Masqueraded headers: To, From, Cc
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new entry.

- DELETE - Remove an entry.
- PRINT - Display all entries.
- IMPORT - Import all entries from a file.
- EXPORT - Export all entries to a file.
- CONFIG - Configure masqueraded headers.
- CLEAR - Remove all entries.

```
[> new
```

Enter the source address or domain to masquerade.

Username like "joe" are allowed.

Full addresses like "user@example.com" are allowed.

Full addresses with subdomain wildcards such as "username@.company.com" are allowed.

Domains like @example.com and @.example.com are allowed.

Hosts like @training and @.sales are allowed.

```
[> @.example.com
```

Enter the masqueraded address or domain.

Domains like @example.com are allowed.

Full addresses such as user@example.com are allowed.

```
[> @example.com
```

```
Entry mapping @.example.com to @example.com created.
```

```
Domain Masquerading Table
```

```
There are currently 1 entries.
```

```
Masqueraded headers: To, From, Cc
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new entry.
- DELETE - Remove an entry.
- PRINT - Display all entries.
- IMPORT - Import all entries from a file.
- EXPORT - Export all entries to a file.
- CONFIG - Configure masqueraded headers.
- CLEAR - Remove all entries.

```
[> new
```

```
Enter the source address or domain to masquerade.
```

```
Username like "joe" are allowed.
```

```
Full addresses like "user@example.com" are allowed.
```

```
Full addresses with subdomain wildcards such as  
"username@.company.com" are allowed.
```

```
Domains like @example.com and @.example.com are allowed.
```


Hosts like @training and @.sales are allowed.

```
[> joe
```

Enter the masqueraded address.

Only full addresses such as user@example.com are allowed.

```
[> joe@example.com
```

Entry mapping joe to joe@example.com created.

Domain Masquerading Table

There are currently 2 entries.

Masqueraded headers: To, From, Cc

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new entry.
- DELETE - Remove an entry.
- PRINT - Display all entries.
- IMPORT - Import all entries from a file.
- EXPORT - Export all entries to a file.
- CONFIG - Configure masqueraded headers.
- CLEAR - Remove all entries.

```
[> print
```

```
@.example.com    @example.com
```

```
joe      joe@example.com
```

Domain Masquerading Table

There are currently 2 entries.

Masqueraded headers: To, From, Cc

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new entry.
- DELETE - Remove an entry.
- PRINT - Display all entries.
- IMPORT - Import all entries from a file.
- EXPORT - Export all entries to a file.
- CONFIG - Configure masqueraded headers.
- CLEAR - Remove all entries.

```
[> export
```

Enter a name for the exported file:

```
[> masquerade.txt
```

Export completed.

Domain Masquerading Table

There are currently 2 entries.

Masqueraded headers: To, From, Cc

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new entry.
- DELETE - Remove an entry.
- PRINT - Display all entries.
- IMPORT - Import all entries from a file.
- EXPORT - Export all entries to a file.
- CONFIG - Configure masqueraded headers.
- CLEAR - Remove all entries.

[> **config**

Do you wish to masquerade Envelope Sender?

[N]> **y**

Do you wish to masquerade From headers?

[Y]> **y**

Do you wish to masquerade To headers?

[Y]> **y**

Do you wish to masquerade CC headers?

[Y]> **n**

Do you wish to masquerade Reply-To headers?

[Y]> **n**

Domain Masquerading Table

There are currently 2 entries.

- NEW - Create a new entry.
- DELETE - Remove an entry.
- PRINT - Display all entries.
- IMPORT - Import all entries from a file.
- EXPORT - Export all entries to a file.
- CONFIG - Configure masqueraded headers.
- CLEAR - Remove all entries.

[]>

Name: OutboundMail

Type: Private

Interface: PrivateNet (192.168.1.1/24) TCP Port 25

Protocol: SMTP

Default Domain:

Max Concurrency: 600 (TCP Queue: 50)

Domain Map: Disabled

TLS: No

SMTP Authentication: Disabled

Bounce Profile: Default

Footer: None

LDAP: Off

Choose the operation you want to perform:

- NAME - Change the name of the listener.
- INTERFACE - Change the interface.
- LIMITS - Change the injection limits.
- SETUP - Configure general options.
- HOSTACCESS - Modify the Host Access Table.
- BOUNCECONFIG - Choose the bounce profile to use for messages injected on this listener.
- MASQUERADE - Configure the Domain Masquerading Table.

- DOMAINMAP - Configure domain mappings.
 - LDAPACCEPT - Configure an LDAP query to determine whether a recipient address should be accepted or bounced/dropped.
 - LDAPROUTING - Configure an LDAP query to reroute messages.
 - LDAPGROUP - Configure an LDAP query to determine whether a sender or recipient is in a specified group.
 - SMTPAUTH - Configure an SMTP authentication.
- []>

Currently configured listeners:

1. InboundMail (on PublicNet, 192.168.2.1) SMTP TCP Port 25 Public
2. OutboundMail (on PrivateNet, 192.168.1.1) SMTP TCP Port 25 Private

Choose the operation you want to perform:

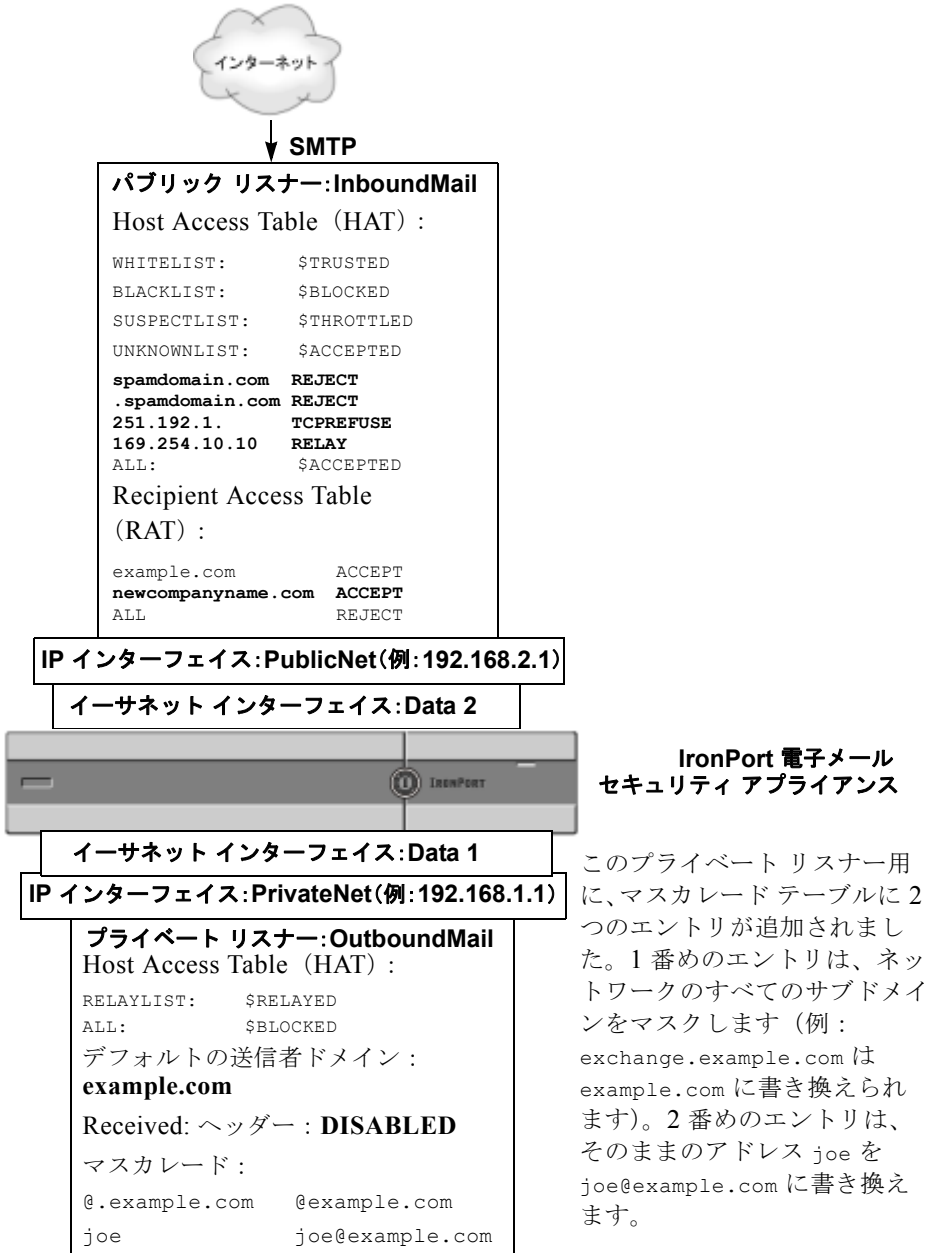
- NEW - Create a new listener.
- EDIT - Modify a listener.
- DELETE - Remove a listener.
- SETUP - Change global settings.

[]>

mail3.example.com> **commit**

これでエンタープライズ ゲートウェイの設定は次のようになります。

図 2-5 プライベート リスナー用に定義されたマスカレード



ドメイン マップ機能

リスナー用に「ドメイン マップ」を設定できます。設定するリスナーごとに、ドメイン マップ テーブルを作成できます。ドメイン マップ テーブルは、ドメイン マップ テーブル内のテーブルに一致するメッセージの受信者ごとに、エンベロープ受信者を書き換えます。この機能は、**sendmail** の「ドメイン テーブル」機能または **Postfix** の「仮想テーブル」機能に似ています。この機能では、エンベロープ受信者のみが影響を受け、「To:」ヘッダーは書き換えられません。



(注) ドメイン マップ機能の処理は、RAT の直前でデフォルト ドメインの評価直後に発生します。『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「Understanding the Email Pipeline」を参照してください。

ドメイン マップ機能でよくある実装では、複数のレガシー ドメインの着信メールを受け入れます。たとえば、会社が他の会社を買収した場合に、**Cisco IronPort** アプライアンスにドメイン マップを作成して買収したドメインのメッセージを受け入れ、エンベロープ受信者を会社の現在のドメインに書き換えることができます。



(注) 一意のドメイン マッピングを最大で 20,000 個設定できます。

表 2-4 ドメイン マップ テーブルの構文の例

左側	右側	コメント
<code>username@example.com</code>	<code>username2@example.net</code>	右側は完全なアドレスのみ
<code>user@.example.com</code>	<code>user2@example.net</code>	
<code>@example.com</code>	<code>user@example.net</code> または <code>@example.net</code>	完全なアドレス、または完全修飾ドメイン名。
<code>@.example.com</code>	<code>user@example.net</code> または <code>@example.net</code>	

次の例では、`listenerconfig` コマンドの `domainmap` サブコマンドを使用して、パブリック リスナー「**InboundMail**」用のドメイン マップが作成されます。このドメイン、および `oldcompanyname.com` のサブドメインのメールは、ドメイン `example.com` にマッピングされます。マッピングは、確認のために出力されません。この例は、両方のドメインをリスナーの **RAT** に配置するコンフィギュレーションとは異なります。ドメイン マップ機能により、実際にエンベロープ受信者 `joe@oldcomapanynname.com` が `joe@example.com` に書き換えられます。一方、リスナーの **RAT** 内にドメイン `oldcompanyname.com` を置くと、`joe@oldcompanyname.com` のメールが受け入れられて、エンベロープ受信者を書き換えずにルーティングされます。また、エイリアス テーブル機能とも異なります。エイリアス テーブルでは、明示的なアドレスに解決されることが必要です。「任意のユーザ名@domain」を「同じユーザ名@newdomain」にマッピングするようには作成できません。

```
mail3.example.com> listenerconfig
```

```
Currently configured listeners:
```

1. Inboundmail (on PublicNet, 192.168.2.1) SMTP TCP Port 25 Public
2. Outboundmail (on PrivateNet, 192.168.1.1) SMTP TCP Port 25 Private

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new listener.
- EDIT - Modify a listener.
- DELETE - Remove a listener.
- SETUP - Change global settings.

```
[ ]> edit
```

```
Enter the name or number of the listener you wish to edit.
```

```
[ ]> 1
```

```
Name: InboundMail
```

```
Type: Public
```

```
Interface: PublicNet (192.168.2.1/24) TCP Port 25
```

```
Protocol: SMTP
```

```
Default Domain:
```

```
Max Concurrency: 1000 (TCP Queue: 50)
```

```
Domain Map: Disabled
```

```
TLS: No
```

```
SMTP Authentication: Disabled
```

```
Bounce Profile: Default
```

```
Use SenderBase For Reputation Filters and IP Profiling: Yes
```

```
Footer: None
```

```
LDAP: Off
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NAME - Change the name of the listener.
- INTERFACE - Change the interface.
- LIMITS - Change the injection limits.
- SETUP - Configure general options.
- HOSTACCESS - Modify the Host Access Table.

- RCPTACCESS - Modify the Recipient Access Table.
- BOUNCECONFIG - Choose the bounce profile to use for messages injected on this listener.
- MASQUERADE - Configure the Domain Masquerading Table.
- DOMAINMAP - Configure domain mappings.

```
[> domainmap
```

```
Domain Map Table
```

```
There are currently 0 Domain Mappings.
```

```
Domain Mapping is: disabled
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new entry.
- IMPORT - Import domain mappings from a file.

```
[> new
```

```
Enter the original domain for this entry.
```

```
Domains such as "@example.com" are allowed.
```

```
Partial hostnames such as ".example.com" are allowed.
```

```
Email addresses such as "test@example.com" and "test@.example.com" are also allowed.
```

```
[ ]> @.oldcompanyname.com
```

Enter the new domain for this entry.

The new domain may be a fully qualified
such as "@example.domain.com" or a complete
email address such as "test@example.com"

```
[ ]> @example.com
```

Domain Map Table

There are currently 1 Domain Mappings.

Domain Mapping is: enabled

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new entry.
- EDIT - Modify an entry.
- DELETE - Remove an entry.
- PRINT - Display all domain mappings.
- IMPORT - Import domain mappings from a file.
- EXPORT - Export domain mappings to a file.
- CLEAR - Clear all domain mappings.

```
[ ]> print
```

```
@.oldcompanyname.com --> @example.com
```

```
Domain Map Table
```

```
There are currently 1 Domain Mappings.
```

```
Domain Mapping is: enabled
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new entry.
- EDIT - Modify an entry.
- DELETE - Remove an entry.
- PRINT - Display all domain mappings.
- IMPORT - Import domain mappings from a file.
- EXPORT - Export domain mappings to a file.
- CLEAR - Clear all domain mappings.

```
[ ]>
```

```
Name: InboundMail
```

```
Type: Public
```

```
Interface: PublicNet (192.168.2.1/24) TCP Port 25
```

```
Protocol: SMTP
```

```
Default Domain:  
  
Max Concurrency: 1000 (TCP Queue: 50)  
  
Domain Map: Enabled  
  
TLS: No  
  
SMTP Authentication: Disabled  
  
Bounce Profile: Default  
  
Use SenderBase For Reputation Filters and IP Profiling: Yes  
  
Footer: None  
  
LDAP: Off
```

Choose the operation you want to perform:

- NAME - Change the name of the listener.
- INTERFACE - Change the interface.
- LIMITS - Change the injection limits.
- SETUP - Configure general options.
- HOSTACCESS - Modify the Host Access Table.
- RCPTACCESS - Modify the Recipient Access Table.
- BOUNCECONFIG - Choose the bounce profile to use for messages injected on this listener.
- MASQUERADE - Configure the Domain Masquerading Table.
- DOMAINMAP - Configure domain mappings.

```
[ ]>
```

ドメイン マップ テーブルのインポートおよびエクスポート

ドメイン マップ テーブルをインポートまたはエクスポートするには、先に付録 B「[アプライアンスへのアクセス](#)」を確認し、アプライアンスにアクセスできるようにします。

マッピングするドメインのエントリが含まれるテキスト ファイルを作成します。エントリは空白文字（タブ文字またはスペース）で区切ります。テーブルの行の先頭でナンバー記号（#）を使用すると、その行がコメントアウトされます。

ファイルを `configuration` ディレクトリに配置し、`domain` サブコマンドの `import` サブコマンドを使用してファイルをアップロードします。コマンドは、次の順序で使用します。

```
listenerconfig -> edit -> inejctor_number -> domainmap -> import
```

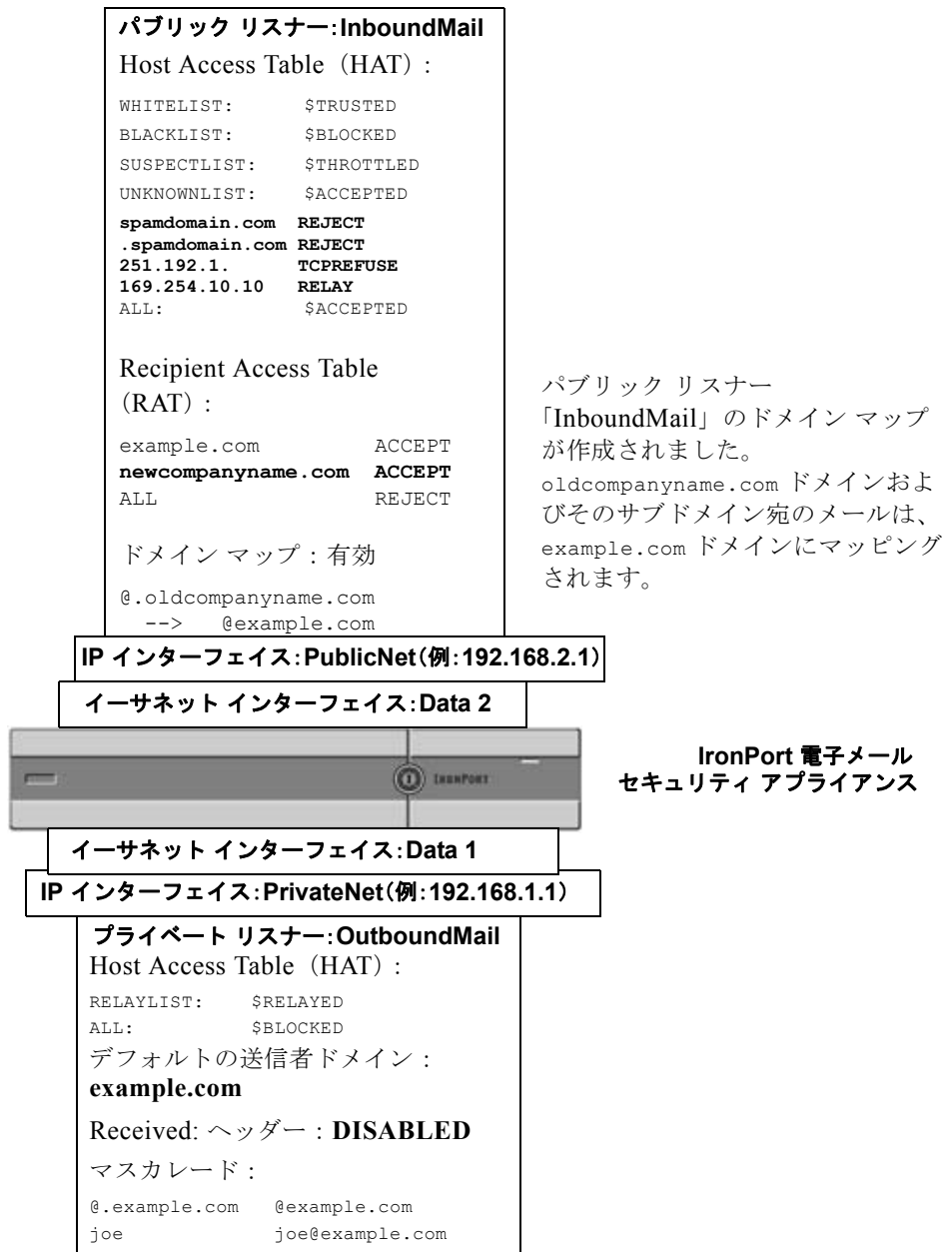
または、`export` サブコマンドを使用して既存のコンフィギュレーションをダウンロードできます。ファイル（ファイル名は自分で指定）は、`configuration` ディレクトリに書き込まれます。このファイルを CLI の外部で変更し、インポートし直すことができます。

`import` サブコマンドを使用するときは、ファイルに有効なエントリのみが含まれているようにしてください。無効なエントリ（左辺があって右辺がない場合など）があると、ファイルのインポート時に CLI で構文エラーが発生します。インポート中に構文エラーが発生すると、ファイル全体でマッピングがインポートされません。

リスナーのコンフィギュレーションの変更が反映されるように、ドメイン マップ テーブル ファイルをインポートした後で `commit` コマンドを発行してください。

これでエンタープライズ ゲートウェイの設定は次のようになります。

図 2-6 パブリック リスナー用に定義されたドメイン マップ



パブリック リスナー「InboundMail」のドメイン マップが作成されました。oldcompanyname.com ドメインおよびそのサブドメイン宛のメールは、example.com ドメインにマッピングされます。

**IronPort 電子メール
セキュリティ アプライアンス**

バウンスした電子メールの処理

バウンスした電子メールは、あらゆる電子メール配信においてやむを得ないものです。Cisco IronPort アプライアンスでは、詳細に設定できるさまざまな方法で、バウンスした電子メールを処理できます。

このセクションでは、IronPort アプライアンスで着信メールに基づいて発信バウンスを生成する方法の制御について説明します。IronPort アプライアンスが発信メールに基づいて着信バウンスを制御する方法について管理するには、IronPort バウンス検証を使用します（「IronPort バウンス検証」(P.2-75) を参照）。

配信不可能な電子メールの処理

IronPort AsyncOS オペレーティングシステムでは、配信不可能な電子メール（「バウンスしたメッセージ」）は、次のカテゴリに分類されます。

「カンパセーションの」バウンス：

最初の SMTP カンパセーションで、リモート ドメインがメッセージをバウンスします。

ソフト バウンス	一時的に配信不可能なメッセージ。たとえば、ユーザのメールボックスがいっぱいです。これらのメッセージは、後で再試行できます。（例：SMTP 4XX エラー コード）。
ハード バウンス	永続的に配信不可能なメッセージ。たとえば、そのユーザはそのドメインにはもう存在しません。これらのメッセージは、再試行されません。（例：SMTP 5XX エラー コード）。

「遅延」(または「カンパセーションでない」) バウンス：

リモート ドメインは、メッセージを配信するために受け入れて、後でのみバウンスします。

ソフト バウンス	一時的に配信不可能なメッセージ。たとえば、ユーザのメールボックスがいっぱいです。これらのメッセージは、後で再試行できます。（例：SMTP 4XX エラー コード）。
ハード バウンス	永続的に配信不可能なメッセージ。たとえば、そのユーザはそのドメインにはもう存在しません。これらのメッセージは、再試行されません。（例：SMTP 5XX エラー コード）。

GUI の [Network] メニューの [Bounce Profiles] ページ（または `bounceconfig` コマンド）を使用して、作成するリスナーごとにハードおよびソフトのカンパセーションバウンスの処理方法を設定します。バウンス プロファイルを作成したら、[Network] > [Listeners] ページ（または `listenerconfig` コマンド）を使用して、プロファイルを各リスナーに適用します。メッセージフィルタを使用して、特定のメッセージにバウンス プロファイルを割り当てることもできます。（詳細については、第 6 章「メッセージフィルタを使用した電子メールポリシーの適用」を参照してください）。

ソフト バウンスおよびハード バウンスに関する注意

- カンパセーション ソフト バウンスの場合、ソフト バウンス イベントは、受信者への配信が一時的に失敗するたびに定義されます。単一の受信者が複数のソフト バウンス イベントを繰り返し発生させることがあります。
[Bounce Profiles] ページまたは `bounceconfig` コマンドを使用して、各ソフト バウンス イベントのパラメータを設定します。（「バウンス プロファイルのパラメータ」(P.2-52) を参照）。
- デフォルトでは、ハード バウンスした受信者ごとにバウンス メッセージが生成され、元の送信者に送信されます。（メッセージは、メッセージエンベロープのエンベロープ送信者アドレスで定義されたアドレスに送信されます。Envelope From も通常エンベロープ送信者を意味します）。この機能をディセーブルにし、代わりにハード バウンスに関する情報をログ ファイルに頼ることもできます（『Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide』の「Logging」を参照）。
- キュー内での最大時間または再試行の最大回数のどちらかに達すると、ソフト バウンスはハード バウンスになります。

バウンス プロファイルのパラメータ

バウンス プロファイルを設定するときは、次のパラメータを使用して、メッセージごとにカンパセーション バウンスを処理する方法を制御します。

表 2-5 バウンス プロファイルのパラメータ

Maximum number of retries	ソフト バウンスしたメッセージを配信し直すために、ハード バウンス メッセージとして扱われるようになる前に、受信者のホストに再接続が試みられる回数。デフォルトの再試行回数は 100 回です。
Maximum number of seconds in queue	ソフト バウンスしたメッセージを配信し直すために、ハード バウンスしたメッセージとして扱われるようになる前に、受信者のホストに再接続が試みられるのに費やされる時間。デフォルトは 259,200 秒 (72 時間) です。
Initial number of seconds to wait before retrying a message	ソフト バウンスしたメッセージを最初に配信し直すまでの待機時間。デフォルトは 60 秒です。初回再試行時間を大きい値に設定すると、ソフト バウンスの試行頻度が低下します。逆に頻度を上げるには、小さい値にします。
Maximum number of seconds to wait before retrying a message	ソフト バウンスしたメッセージを配信し直すまでに待機する最大時間。デフォルトは 3,600 秒 (1 時間) です。これは、次の試行までの間隔ではなく、再試行回数を制御するために使用できるもう 1 つのパラメータです。初回再試行間隔の上限は、最大再試行間隔に制限されます。計算された再試行間隔が最大再試行間隔を超える場合は、最大再試行間隔が使用されます。
Hard bounce message generation format	ハード バウンス メッセージの生成がイネーブルかディセーブルかを指定します。イネーブルの場合は、メッセージの形式を選択できます。デフォルトでは、生成されるバウンス メッセージで DNS 形式 (RFC 1894) が使用されます。バウンス メッセージに使用するカスタム通知テンプレートを選択できます。詳細については、『 <i>Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide</i> 』の「Text Resources」を参照してください。 バウンス応答から DSN の status フィールドを解析するかどうかを選択することもできます。「はい」の場合、AsyncOS は DSN ステータス コード (RFC 3436) を検索し、そのコードを配信ステータス通知の Status フィールドで使用します。

表 2-5 バウンス プロファイルのパラメータ (続き)

Send delay warning messages	<p>遅延の警告を送信するかどうかを指定します。イネーブルにした場合は、メッセージ間の最小間隔、および送信する最大再試行回数を指定します。</p> <p>警告メッセージに使用するカスタム通知テンプレートを選択できます。詳細については、『<i>Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide</i>』の「Text Resources」を参照してください。</p>
Specify Recipient for Bounces	<p>メッセージのバウンス先としてデフォルトのエンベロープ送信者アドレスではなく、別のアドレスにすることができます。</p>
Use DomainKeys signing for bounce and delay messages	<p>バウンス メッセージおよび遅延メッセージの署名に使用する DomainKeys プロファイルを選択できます。DomainKeys の詳細については、「DomainKeys および DKIM 認証：概要 (P.5-2)」を参照してください。</p>
グローバル設定	
<p>これらの設定を行うには、[Bounce Profiles] ページの [Edit Global Settings] リンクを使用するか、または CLI で <code>bounceconfig</code> コマンドでデフォルトのバウンス プロファイルを編集します。</p>	
Initial number of seconds to wait before retrying an unreachable host	<p>システムが到達不可能なホストへの再試行を待機する時間。</p> <p>デフォルトは 60 秒です。</p>
Max interval allowed between retries to an unreachable host	<p>システムが到達不可能なホストへの再試行を待機する最大時間。デフォルトは 3,600 秒 (1 時間) です。ホストがダウンしているために配信が最初に失敗すると、再試行値の最小秒数で開始し、ダウンしたホストに対するその後の再試行では、間隔を徐々に延ばしていきます。最大で、この最大秒数になります。</p>

ハード バウンスと status コマンド

ハード バウンス メッセージの生成がイネーブルの場合、アプライアンスで配信用のハード バウンス メッセージが生成されるたびに、status および status detail コマンドの次のカウンタが増えています。

Counters:	Reset	Uptime	Lifetime
Receiving			
Messages Received	0	0	0
Recipients Received	0	0	0
Gen. Bounce Recipients	0	0	0

詳細については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide』の「Monitoring and Managing via the CLI」を参照してください。ハード バウンス メッセージの生成がディセーブルの場合、受信者でハード バウンスが発生しても、これらのカウンタはどれも増えません。



(注)

メッセージ エンベロープのエンベロープ送信者アドレスは、メッセージ ヘッダーの「From:」とは異なります。IronPort AsyncOS では、ハード バウンス メッセージをエンベロープ送信者アドレスとは異なる電子メール アドレスに送信するように設定できます。

カンバセーション バウンスおよび SMTP ルートのメッセージ フィルタ アクション

SMTP ルート マッピングおよびメッセージ フィルタ アクションは、カンバセーション バウンスの結果としてアプライアンスで生成された SMTP バウンス メッセージのルーティングには適用されません。IronPort アプライアンスでカンバセーション バウンス メッセージが受信されると、元のメッセージのエンベロープ送信者に返送する SMTP バウンス メッセージが生成されます。この場合、アプライアンスでは実際にメッセージが生成されるため、リレー用に挿入されたメッセージに適用されるすべての SMTP ルートは適用されません。

バウンス プロファイルの例

これら 2 つの例では、異なるバウンス プロファイル パラメータが使用されます。

表 2-6 例 1 : バウンス プロファイル パラメータ

パラメータ	値
Max number of retries	2
Max number of seconds in queue	259,200 秒 (72 時間)
Initial number of seconds before retrying	60 秒
Max number of seconds to wait before retrying	60 秒

例 1 では、受信者への最初の配信は、 $t = 0$ で実行されます。これは、メッセージが Cisco IronPort アプライアンスに挿入された直後です。デフォルトの初回再試行時間は 60 秒であるため、最初の再試行は約 1 分後の $t = 60$ で実行されます。再試行間隔が計算されます。再試行間隔は、最大再試行間隔である 60 秒を使用して決定されます。そのため、2 回目の再試行は、 $t =$ 約 120 で実行されます。最大再試行回数は 2 であるため、この再試行の直後にその受信者のハードバウンス メッセージが生成されます。

表 2-7 例 2 : バウンス プロファイル パラメータ

パラメータ	値
Max number of retries	100
Max number of seconds in queue	100 秒
Initial number of seconds before retrying	60 秒
Max number of seconds to wait before retrying	120 秒

例 2 では、最初の配信は $t = 0$ 、最初の再試行は $t = 60$ で実行されます。2 回目の配信 ($t = 120$ で発生するようにスケジュール) の直前にメッセージがハードバウンスされます。なぜなら、この時点でキュー内での最大時間である 100 秒を超過しているためです。

配信ステータス通知形式

システムによって生成されるバウンス メッセージは、デフォルトではハードとソフトの両方のバウンスで **Delivery Status Notification (DSN; 配信ステータス通知)** 形式を使用します。DSN は、RFC 1894 (<http://www.faqs.org/rfcs/rfc1894.html> を参照) で規定されている形式であり、「メッセージを 1 人以上の受信者に配信したときの結果をレポートするために、**Message Transfer Agent (MTA; メッセージ転送エージェント)** または電子的なメール ゲートウェイで使用できる **MIME コンテンツ タイプ** を定義」します。デフォルトでは、配信ステータス通知には配信ステータスの説明、およびメッセージのサイズが 10 k よりも小さい場合は元のメッセージが含まれます。メッセージ サイズが 10 k よりも大きい場合、配信ステータス通知には、メッセージ ヘッダーのみが含まれます。メッセージ ヘッダーが 10 k を超える場合は、配信ステータス通知ではヘッダーが切り捨てられます。DSN に 10 k よりも大きいメッセージ (またはメッセージ ヘッダー) を含める場合は、`bounceconfig` コマンドの `max_bounce_copy` パラメータを使用できます (このパラメータは CLI からのみ利用できます)。

遅延警告メッセージ

システムで生成される **Time in Queue Message (遅延通知メッセージ)** でも、DSN 形式が使用されます。デフォルト パラメータを変更するには、**[Network]** メニューの **[Bounce Profiles]** ページ (または `bounceconfig` コマンド) を使用して、既存のバウンス プロファイルを編集するか新規に作成し、以下のパラメータのデフォルト値を変更します。

- 遅延警告メッセージが送信される最小間隔。
- 遅延警告メッセージが送信される受信者あたりの最大数。

遅延警告メッセージとハード バウンス

「キュー内での最大時間」設定と「遅延警告メッセージが送信される」最小間隔設定の両方を非常に小さい時間に設定した場合は、同じメッセージに対して遅延警告とハード バウンスの両方を *同時に* 受信することが可能です。IronPort Systems では、遅延警告メッセージの送信をイネーブルにする場合は、これらの設定のデフォルト値を最小設定として使用することを推奨します。

さらに、アプライアンスによって生成される遅延警告メッセージおよびバウンスメッセージは、処理中に最大で 15 分遅延することがあります。

新しいバウンス プロファイルの作成

次の例では、[Bounce Profiles] ページを使用して、`bouncepr1` という名前のバウンス プロファイルが作成されます。このプロファイルでは、ハード バウンドされたすべてのメッセージが代替アドレスである `bounce-mailbox@example.com` に送信されます。遅延警告メッセージはイネーブルです。受信者あたり警告メッセージが 1 つ送信されます。警告メッセージ間のデフォルト値は 4 時間 (14400 秒) です。

図 2-7 バウンス プロファイルの作成
Add Bounce Profile

Add Bounce Profile	
Profile Name:	bouncepr1
Maximum Number of Retries:	100 <small>(between 0 and 20000)</small>
Maximum Time in Queue:	259200 seconds <small>(between 0 and 3000000)</small>
Initial Time to Wait per Message:	60 seconds <small>(between 60 and 86400)</small>
Maximum Time to Wait per Message:	3600 seconds <small>(between 60 and 86400)</small>
Hard Bounce and Delay Warning Messages:	
Send Hard Bounce Messages:	
<input type="radio"/> Use Default (Yes) <input checked="" type="radio"/> Yes <input type="radio"/> No Use DSN format for bounce messages: <input type="radio"/> Use Default (Yes) <input checked="" type="radio"/> Yes <input type="radio"/> No Message Composition Message Subject: Delivery Status Notification (Failure) Parse DSN "Status" field from bounce responses: <input type="radio"/> Use Default (No) <input type="radio"/> Yes <input checked="" type="radio"/> No Notification Template: System Generated Preview Message	
Send Delay Warning Messages:	
<input type="radio"/> Use Default (No) <input type="radio"/> Yes <input checked="" type="radio"/> No Message Composition Message Subject: Delivers Status Notification (Delay) Notification Template: System Generated Preview Message Minimum Interval Between Messages: 3600 seconds Maximum Number of Messages to Send: 1	
Recipient for Bounce and Warning Messages:	
<input checked="" type="radio"/> Message sender <input type="radio"/> Alternate:	
Use Domain Key Signing for Bounce and Delay Messages:	
<input checked="" type="radio"/> Use Default (No) <input type="radio"/> Yes <input type="radio"/> No <i>There is no signing profile matching bounce. Bounce messages will not be signed until you create appropriate signing profile.</i>	
<input type="button" value="Cancel"/> <input type="button" value="Submit"/>	

デフォルトのバウンス プロファイルの編集

バウンス プロファイルを編集するには、バウンス プロファイルのリストで名前をクリックします。デフォルトのバウンス プロファイルを編集することもできます。この例では、デフォルト プロファイルを編集して、到達不可能なホストへの再試行を待機する最大秒数を 3600（1 時間）から 10800（3 時間）に増やします。

図 2-8 デフォルトのバウンス プロファイルの編集
Edit Bounce Profile

Edit Bounce Profile	
Profile Name:	Default
Maximum Number of Retries:	100 <i>(between 0 and 10,000)</i>
Maximum Time in Queue:	259200 seconds <i>(between 0 and 3,000,000)</i>
Initial Time to Wait per Message:	60 seconds <i>(between 60 and 86,400)</i>
Maximum Time to Wait per Message:	10800 seconds <i>(between 60 and 86,400)</i>

minimalist バウンス プロファイルの例

次の例では、`minimalist` という名前のバウンス プロファイルが作成されます。このプロファイルでは、メッセージがバウンスされるときに再試行されず（最大再試行回数が 0）、再試行を待機する最大時間が指定されます。ハードバウンスメッセージはディセーブルであり、ソフトバウンス警告は送信されません。

図 2-9 「minimalist」バウンス プロファイルの作成

Add Bounce Profile	
Profile Name:	minimalist
Maximum Number of Retries:	100 <small>(between 0 and 20000)</small>
Maximum Time in Queue:	259200 seconds <small>(between 0 and 3000000)</small>
Initial Time to Wait per Message:	60 seconds <small>(between 60 and 86400)</small>
Maximum Time to Wait per Message:	10800 seconds <small>(between 60 and 86400)</small>
Hard Bounce and Delay Warning Messages:	Send Hard Bounce Messages:
	<input type="radio"/> Use Default (Yes) <input type="radio"/> Yes <input checked="" type="radio"/> No
	Use DSN format for bounce messages:
	<input type="radio"/> Use Default (Yes) <input type="radio"/> Yes <input type="radio"/> No
	Message Composition
	Message Subject: Delivery Status Notification (Failure)
	Parse DSN "Status" field from bounce responses:
	<input type="radio"/> Use Default (No) <input type="radio"/> Yes <input checked="" type="radio"/> No
	Notification Template: System Generated Preview Message
	Send Delay Warning Messages:
<input type="radio"/> Use Default (No) <input type="radio"/> Yes <input checked="" type="radio"/> No	
Message Composition	
Message Subject: Delivery Status Notification (Delay)	
Notification Template: System Generated Preview Message	
Minimum Interval Between Messages: 5400 seconds	
Maximum Number of Messages to Send: 1	

リスナーへのバウンス プロファイルの適用

バウンス プロファイルを作成したら、[Network] > [Listeners] ページまたは `listenerconfig` コマンドを使用して、そのプロファイルをリスナーに適用できます。

次の例では、`bouncepr1` プロファイルが `OutgoingMail` リスナーに適用されます。

図 2-10 「minimalist」バウンス プロファイルの作成
Edit Listener

Listener Settings	
Name:	OutgoingMail
Type of Listener:	private
Interface:	Data 2 TCP Port: 25
Bounce Profile:	bouncepri
Footer:	None
SMTP Authentication Profile:	None
▶ SMTP Address Parsing Options:	Optional settings for controlling parsing in SMTP "MAIL FROM" and "RCPT TO"
▶ Advanced:	Optional settings for customizing the behavior of the Listener
▶ LDAP Queries:	No LDAP Server Profiles have been created. Profiles can be defined at System Administration > LDAP

Cancel

Submit

この時点で、電子メール ゲートウェイの設定は次のようになります。

図 2-11 プライベート リスナーへのバウンス プロファイルの適用

パブリック リスナー: InboundMail
Host Access Table (HAT) :

```

WHITELIST:      $TRUSTED
BLACKLIST:      $BLOCKED
SUSPECTLIST:   $THROTTLED
UNKNOWNLIST:   $ACCEPTED
spandomain.com REJECT
.spandomain.com REJECT
251.192.1.     TCPREFUSE
169.254.10.10 RELAY
ALL:           $ACCEPTED

```

Recipient Access Table
(RAT) :

```

example.com     ACCEPT
newcompanyname.com ACCEPT
ALL            REJECT

```

ドメイン マップ : 有効

```

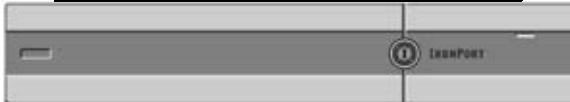
@.oldcompanyname.com
--> @example.com

```

(注) このパブリック リスナーは、
変更されません。

IP インターフェイス: PublicNet(例: 192.168.2.1)

イーサネット インターフェイス: Data 2



**IronPort 電子メール
セキュリティ アプライアンス**

イーサネット インターフェイス: Data 1

IP インターフェイス: PrivateNet(例: 192.168.1.1)

プライベート リスナー: OutboundMail
Host Access Table (HAT) :

```

RELAYLIST:      $RELAYED
ALL:           $BLOCKED

```

デフォルトの送信者ドメイン :
example.com

Received: ヘッダー : **DISABLED**
マスカレード :

```

@example.com   @example.com
joe            joe@example.com

```

このリスナーは、bouncepr1 という
名前のバウンス プロファイルを使用
するように変更されました。ハード
バウンスは、アドレス
bounce-mailbox@example.com に送
信されます。

電子メール配信の管理

大量の電子メールが未管理で配信されると、受信者ドメインで混乱が生じることがあります。AsyncOS では、アプライアンスで開く接続数やアプライアンスで各宛先ドメイン宛に送信されるメッセージ数を定義することにより、メッセージ配信を詳細に管理できます。

宛先制御機能（GUI では [Mail Policies] > [Destination Controls]、CLI では `destconfig` コマンド）を使用すると、次の項目を制御できます。

レート制限

- [Concurrent Connections] : リモート ホストに対してアプライアンスが開こうとする同時接続数。
- [Maximum Messages Per Connection] : アプライアンスが新しい接続を開始する前に、宛先ドメインに送信するメッセージ数。
- [Recipients] : アプライアンスが特定の期間に特定のリモート ホストに対して送信する受信者数。
- [Limits] : 宛先ごと、および MGA ホスト名ごとに、制限を適用する方法。

TLS

- リモート ホストに対する TLS 接続を受入、可能、必須のいずれにするか（「[TLS の管理](#)」(P.2-67) を参照）。
- TLS 接続が必要なリモート ホストに対してメッセージが配信されるときに、TLS ネゴシエーションが失敗した場合にアラートを送信するかどうか。これは、ドメイン単位ではなく、グローバルな設定です。
- リモート ホストに対するすべての発信 TLS 接続で使用する TLS 証明書の割り当て。

バウンス検証

- IronPort バウンス検証を使用して、アドレス タギングを実行するかどうか（「[IronPort バウンス検証](#)」(P.2-75) を参照）。

バウンス プロファイル

- 特定のリモート ホストに対してアプライアンスで使用されるバウンス プロファイル（デフォルトのバウンス プロファイルは、[Network] > [Bounce Profiles] ページで設定します）。

未指定のドメインに対するデフォルト設定を制御することもできます。

メール配信に使用するインターフェイスの決定

出力インターフェイスを `deliveryconfig` コマンド、メッセージフィルタ (`alt-src-host`)、または仮想ゲートウェイを使用して指定しない場合は、出力インターフェイスは AsyncOS ルーティング テーブルによって選択されます。基本的には、「自動」を選択すると AsyncOS によって選択されます。

詳細は次のとおりです。ローカルアドレスは、インターフェイスのネットマスクをインターフェイスの IP アドレスに適用することで識別されます。どちらも、[Network] > [Interfaces] ページまたは `interfaceconfig` コマンドを使用して（あるいはシステムのセットアップ時に）設定されます。アドレス空間が重なる場合は、より具体的なネットマスクが使用されます。宛先がローカルの場合、パケットは適切なローカルインターフェイス経由で送信されます。

宛先がローカルではない場合、パケットはデフォルトのルータ ([Network] > [Routing] ページまたは `setgateway` コマンドを使用して設定) に対して送信されます。デフォルト ルータの IP アドレスはローカルです。出力インターフェイスは、ローカルアドレスの出力インターフェイスの選択ルールに従って決まります。たとえば、AsyncOS では、デフォルト ルータの IP アドレスが含まれている最も具体的な IP アドレスおよびネットマスクが選択されます。

ルーティング テーブルは、[Network] > [Routing] ページ（または `routeconfig` コマンド）を使用して設定されます。ルーティング テーブルで一致するエントリが、デフォルト ルートよりも優先されます。ルートが具体的になるほど、優先度が高くなります。

デフォルトの配信制限

発信宛先ドメインごとに、専用の発信キューがあります。そのため、ドメインごとに別々の同時接続制限 ([Destination Controls] テーブルで指定) があります。さらに、[Destination Controls] テーブルで具体的に示されていない一意のドメインごとに、テーブルで設定した別の「Default」制限を使用します。

[Destination Controls] の使用

GUI で [Mail Policies] > [Destination Controls] ページ、または CLI で `destconfig` コマンドを使用して、宛先制御エントリを作成、編集、および削除します。

ドメインに対する接続、メッセージ、受信者の数の管理

アプライアンスで電子メールを配信する方法を制限することにより、アプライアンスからの電子メールを扱うリモート ホストや独自の社内グループウェア サーバに負荷がかかり過ぎないようにできます。

ドメインごとに、特定の期間にシステムで超過しないようにする接続、発信メッセージ、受信者の最大数を割り当てることができます。この「グッドネイバー」テーブルは、宛先制御機能 ([Mail Policies] > [Destination Controls]、または `destconfig` コマンド (以前の `setgoodtable` コマンド)) を使用して定義します。ドメイン名を指定するには、次の構文を使用します。

```
domain.com
```

または

```
.domain.com
```

この構文を使用すると、AsyncOS で `sample.server.domain.com` のようなサブドメインの宛先制御を指定できるようになります。詳細なサブドメインアドレスを個別に入力する必要はありません。

接続、メッセージ、受信者については、定義する制限が各 Virtual Gateway アドレスとシステム全体のどちらに対して適用されるのかを設定します。(Virtual Gateway アドレス制限では、IP インターフェイスごとの同時接続数を管理します。システム全体の制限では、Cisco IronPort アプライアンスで許可される接続の合計数を管理します)。

また、定義する制限が指定されたドメインの各 MX レコードとドメイン全体のどちらに対して適用されるのかを設定することもできます。(多くのドメインには、電子メールの受け入れに関して複数の MX レコードがあります)。



(注)

現在のシステム デフォルトは、ドメインあたり 500 接続、接続あたり 50 メッセージです。

これらの値については、表 2-8 を参照してください。

表 2-8 [Destination Controls] テーブルの値

フィールド	説明
Concurrent Connections	Cisco IronPort アプライアンスによって特定のホストに対して行われる発信接続の最大数。(ドメインには、社内グループウェアのホストを含めることができます)。
Maximum Messages Per Connection	新しい接続が開始されるまでに、IronPort アプライアンスから特定のホストに対する単一発信接続に対して許可されるメッセージの最大数。
Recipients	<p>特定の期間内に許可される受信者の最大数。「None」は、当該ドメインに対して、受信者の制限がないことを示します。</p> <p>Cisco IronPort アプライアンスが受信者の数を数える最小期間(1 ~ 60 分)。期間に「0」を指定すると、この機能がディセーブルになります。</p> <p>(注) 受信者制限を変更すると、すでにキュー内にあるすべてのメッセージのカウンタがリセットされます。アプライアンスは、新しい受信者制限に基づいてメッセージを配信します。</p>
Apply Limits	<p>制限がドメイン全体とそのドメインに指定された各メール交換 IP アドレスのどちらに適用されるのかを指定します。(多くのドメインで複数の MX レコードがあります)。</p> <p>この設定は、接続、メッセージ、受信者の制限に適用されません。</p> <p>制限がシステム全体と各 Virtual Gateway アドレスのどちらに適用されるのかを指定します。</p> <p>(注) IP アドレスのグループを設定しても、仮想ゲートウェイを設定していない場合は、仮想ゲートウェイごとに適用制限を設定しないでください。この設定は、仮想ゲートウェイを使用するように設定されたシステムのみを対象にしています。仮想ゲートウェイの設定方法については、「Virtual Gateway™ テクノロジー」(P.2-86) を参照してください。</p>



(注) 制限が Virtual Gateway アドレスごとに適用される場合でも、システム全体の制限を仮想ゲートウェイの数で除算した値を Virtual Gateway の制限に設定することによって、システム全体の制限を効果的に実装できます。たとえば、4 つの Virtual Gateway アドレスが設定されていて、ドメイン yahoo.com に対して 100 より多くの同時接続を開かないようにするには、Virtual Gateway の制限を同時接続数 25 に設定します。



(注) delivernow コマンドをすべてのドメインに対して実行すると、destconfig コマンドで追跡されているすべてのカウンタがリセットされます。

TLS の管理

ドメイン単位で Transport Layer Security (TLS; トランスポート層セキュリティ) を設定することもできます。「Required」設定が指定された場合、IronPort アプライアンスのリスナーからドメインの MTA に対して TLS 接続がネゴシエートされます。ネゴシエーションに失敗すると、電子メールはその接続を介して送信されません。詳細については、「[配信時の TLS および証明書検証のイネーブル化](#)」(P.1-44) を参照してください。

TLS 接続が必要なドメインにメッセージを配信する際に TLS ネゴシエーションが失敗した場合、IronPort アプライアンスがアラートを送信するかどうかを指定できます。アラートメッセージには失敗した TLS ネゴシエーションの宛先ドメイン名が含まれます。IronPort アプライアンスは、システムアラートのタイプの警告重大度レベルアラートを受信するよう設定されたすべての受信者にアラートメッセージを送信します。GUI の [System Administration] > [Alerts] ページ (または CLI の alertconfig コマンド) を使用してアラートの受信者を管理できます。

TLS 接続アラートをイネーブルにするには、[Destination Controls] ページの [Edit Global Settings] をクリックまたは destconfig -> setup サブコマンドを使用します。これは、ドメイン単位ではなく、グローバルな設定です。アプライアンスが配信を試行したメッセージの情報については、[Monitor] > [Message Tracking] ページまたはメール ログを使用します。

すべての発信 TLS 接続に使用する証明書を指定する必要があります。[Destination Controls] ページの [Edit Global Settings] または destconfig -> setup サブコマンドを使用して、証明書を指定します。証明書の取得方法については、「[証明書の取得](#)」(P.1-33) を参照してください。

アラートの詳細については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「System Administration」を参照してください。

IronPort バウンス検証タギングの管理

送信されるメールにバウンス検証のタギングが行われるかどうかを指定できます。デフォルトに対して指定することも、特定の宛先に対して指定することもできます。デフォルトに対してバウンス検証をイネーブルにした後で、具体的な除外対象として新しい宛先を作成することを推奨します。詳細については、「[IronPort バウンス検証](#)」(P.2-75)を参照してください。

バウンスの管理

リモート ホストに配信する接続や受信者の数を制御できるだけでなく、そのドメインで使用されるバウンス プロファイルを指定することもできます。指定すると、バウンス プロファイルは `destconfig` コマンドの 5 番目のカラムに表示されます。バウンス プロファイルを指定しない場合は、デフォルトのバウンス プロファイルが使用されます。詳細については、「[新しいバウンス プロファイルの作成](#)」(P.2-57)を参照してください。

新しい宛先制御エントリの追加

新規の宛先制御エントリを追加するには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [Add Destination] をクリックします。
 - ステップ 2** エントリを設定します。
 - ステップ 3** 変更を送信して確定します。

宛先制御エントリの編集

宛先制御エントリを編集するには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [Destination Control] ページの [Domain] カラムでドメイン名をクリックします。
 - ステップ 2** 変更を行います。
 - ステップ 3** 変更を送信して確定します。

宛先制御エントリの削除

1 つ以上の宛先制御エントリを削除するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** 左側のカラムのチェックボックスをオンにして、そのエントリ（複数可）を選択します。
- ステップ 2** [Delete] をクリックします。
- ステップ 3** 削除を確認します。

デフォルトの宛先制御エントリは削除できません。

宛先制御エントリ コンフィギュレーションのインポートおよびエクスポート

複数のドメインを管理している場合は、すべてのドメインの宛先制御エントリを定義する単一のコンフィギュレーション ファイルを作成して、アプライアンスにインポートできます。コンフィギュレーション ファイルの形式は、Windows INI コンフィギュレーション ファイルと似ています。ドメインのパラメータはセクションにまとめられ、セクション名としてドメイン名が使用されます。たとえば、セクション名 [example.com] を使用して、ドメイン **example.com** のパラメータをグループにします。定義されないすべてのパラメータは、デフォルトの宛先制御エントリから継承されます。デフォルトの宛先制御エントリのパラメータを定義するには、コンフィギュレーション ファイルに [DEFAULT] セクションを含めます。

コンフィギュレーション ファイルをインポートすると、アプライアンスの宛先制御エントリがすべて上書きされます。ただし、コンフィギュレーション ファイルに [DEFAULT] セクションが含まれていない場合、デフォルト エントリは上書きされません。その他すべての既存の宛先制御エントリは削除されます。

コンフィギュレーション ファイルでは、ドメインに対して次のパラメータを定義できます。[DEFAULT] セクションには bounce_profile パラメータを除くすべてのパラメータが必要です。

表 2-9 宛先制御コンフィギュレーション ファイルのパラメータ

パラメータ名	説明
max_host_concurrency	<p>Cisco IronPort アプライアンスによって特定のホストに対して行われる発信接続の最大数。</p> <p>ドメインに対してこのパラメータを定義する場合は、limit_type および limit_apply パラメータも定義する必要があります。</p>
max_messages_per_connection	<p>新しい接続が開始されるまでに、IronPort アプライアンスから特定のホストに対する単一発信接続に対して許可されるメッセージの最大数。</p>
recipient_minutes	<p>Cisco IronPort アプライアンスが受信者の数を数える期間 (1 ~ 60 分)。受信者制限を適用しないようにする場合は、未定義のままにします。</p>
recipient_limit	<p>特定の期間内に許可される受信者の最大数。受信者制限を適用しないようにする場合は、未定義のままにします。</p> <p>ドメインに対してこのパラメータを定義する場合は、recipient_minutes、limit_type、および limit_apply パラメータも定義する必要があります。</p>
limit_type	<p>制限がドメイン全体とそのドメインに指定された各メール交換 IP アドレスのどちらに適用されるのかを指定します。</p> <p>次のいずれかの値を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 0 (または host) : ドメインの場合 • 1 (または MXIP) : メール交換 IP アドレスの場合

表 2-9 宛先制御コンフィギュレーション ファイルのパラメータ (続き)

パラメータ名	説明
limit_apply	<p>制限がシステム全体と各 Virtual Gateway アドレスのどちらに適用されるのかを指定します。</p> <p>次のいずれかの値を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0 (または system) : システム全体の場 合 1 (または vg) : Virtual Gateway の場合
bounce_validation	<p>バウンス検証アドレス タギングをオンにするかどうかを指定します。</p> <p>次のいずれかの値を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0 (または off) 1 (または on)
table_tls	<p>ドメインの TLS 設定を指定します。詳細については、「配信時の TLS および証明書検証のイネーブル化」(P.1-44) を参照してください。</p> <p>次のいずれかの値を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0 (または off) 1 (または on) : 「Preferred」の場合 2 (または required) : 「Required」の場合 3 (または on_verify) 「Preferred (Verify)」の場合 4 (または require_verify) : 「Required (Verify)」の場合 <p>文字列には、大文字と小文字の区別はありません。</p>
bounce_profile	<p>使用するバウンス プロファイルの名前。 [DEFAULT] 宛先制御エントリでは使用できません。</p>

表 2-9 宛先制御コンフィギュレーション ファイルのパラメータ (続き)

パラメータ名	説明
send_tls_req_alert	<p>必須の TLS 接続が失敗した場合にアラートを送信するかどうか。</p> <p>次のいずれかの値を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0 (または off) 1 (または on) <p>これはグローバル設定であり、[DEFAULT] 宛先制御エントリでのみ使用できます。</p>
certificate	<p>発信 TLS 接続で使用される証明書。これはグローバル設定であり、[DEFAULT] 宛先制御エントリでのみ使用できます。</p> <p>(注) 証明書を指定しない場合は、デモの証明書が割り当てられますが、デモの証明書を使用することはセキュアではないため、通常の使用には推奨できません。</p>

ドメイン example1.com、example2.com、およびデフォルトの宛先制御エントリの例を次に示します。

[DEFAULT]

```
max_host_concurrency = 500
max_messages_per_connection = 50
recipient_minutes = 60
recipient_limit = 300
limit_type = host
limit_apply = VG
table_tls = off
```



```
bounce_validation = 0

send_tls_req_alert = 0

certificate = example.com

[example1.com]

recipient_minutes = 60

recipient_limit = 100

table_tls = require_verify

limit_apply = VG

bounce_profile = tls_failed

limit_type = host

[example2.com]

table_tls = on

bounce_profile = tls_failed
```

上記の例では、**example1.com** および **example2.com** について次の宛先制御エントリが生成されます。

```
example1.com

    Maximum messages per connection: 50

    Rate Limiting:

        500 concurrent connections
```

```

100 recipients per 60 minutes

Limits applied to entire domain, across all virtual gateways

TLS: Required (Verify)

Bounce Profile: tls_failed

example2.com

Maximum messages per connection: Default

Rate Limiting: Default

TLS: Preferred

Bounce Profile: tls_failed

```

[Destination Controls] ページの [Import Table] ボタン、または `destconfig -> import` コマンドを使用して、コンフィギュレーション ファイルをインポートします。[Destination Controls] ページの [Export Table] ボタン、または `destconfig -> export` コマンドを使用して、宛先制御エントリを INI ファイルにエクスポートすることもできます。エクスポートされた INI ファイルには [Default] ドメイン管理エントリも含まれています。

宛先制御と CLI

CLI で `destconfig` コマンドを使用して、宛先制御エントリを設定できます。このコマンドについては、『*Cisco IronPort AsyncOS CLI Reference Guide*』で説明します。

IronPort バウンス検証

「バウンス」メッセージは、受信側の MTA によって送信される新しいメッセージで、元の電子メールのエンベロープ送信者が新しいエンベロープ受信者として使用されます。このバウンスは、元のメッセージが配信不可能なときに（通常は、受信者アドレスが存在しないため）、通常は空のエンベロープ送信者（MAIL FROM: <>）でエンベロープ受信者に送り返されます。

スパム送信者は、誤った宛先を指定したバウンス攻撃による電子メール インフラストラクチャへの攻撃をますます増やしています。このような攻撃は、未知の正当なメール サーバによって送信される、膨大なバウンス メッセージによって行われます。基本的に、スパム送信者が使用するプロセスでは、オープンリレーおよび「ゾンビ」ネットワークを経由してさまざまなドメインで無効な可能性のあるアドレス（エンベロープ受信者）に電子メールを送信します。このようなメッセージでは、エンベロープ送信者が偽装されるため、スパムは正当なドメインから送信されたように見えます（これは「Joe job（ジョー ジョブ）」とも呼ばれます）。

次に、無効なエンベロープ受信者による着信電子メールごとに、受信側のメールサーバによって新しい電子メール（バウンス メッセージ）が生成され、一緒に無実なドメイン（エンベロープ送信者アドレスが偽装されたドメイン）の電子メール送信者宛に送信されます。その結果、このターゲット ドメインは、「誤った宛先が指定された」膨大なバウンスを受信します。このバウンス メッセージは、数百万にもおよぶことがあります。このような分散 DoS 攻撃により、電子メール インフラストラクチャがダウンして、ターゲットが正当な電子メールの送受信を行えなくなります。

誤った宛先を指定したバウンス攻撃に対処するため、AsyncOS には IronPort バウンス検証が用意されています。イネーブルにすると、IronPort バウンス検証によって、その IronPort アプライアンスから送信されたメッセージのエンベロープ送信者アドレスにタグが付けられます。次に、IronPort アプライアンスで受信したバウンス メッセージで、エンベロープ受信者にこのタグが付いているかどうかチェックされます。正当なバウンス（このタグが付いている）であれば、タグが外されて配信されます。タグが付いていないバウンス メッセージは、別の処理を行えます。

IronPort バウンス検証を使用して、発信メールに基づいて着信バウンス メッセージを管理できます。IronPort アプライアンスで着信メールに基づいて発信バウンスを生成する方法の制御については、「[バウンスした電子メールの処理](#)」(P.2-50) を参照してください。

概要：タギングと IronPort バウンス検証

バウンス検証をイネーブルにして電子メールを送信すると、IronPort アプライアンスにより、メッセージのエンベロープ送信者アドレスが書き換えられます。たとえば、MAIL FROM: joe@example.com が MAIL FROM: prvs=joe=123ABCDEFGH@example.com になるとします。この例の 123... という文字列は、「バウンス検証タグ」であり、IronPort アプライアンスによって送信されるたびに、エンベロープ送信者に追加されました。このタグは、バウンス検証設定で定義されたキーを使用して生成されます（キーの指定については、「IronPort の [Bounce Verification Address Tagging Keys]」(P.2-77) を参照してください)。このメッセージがバウンスすると、バウンス内のエンベロープ受信者アドレスに通常はこのバウンス検証タグが含まれます。

デフォルトではシステム全体でバウンス検証タギングをイネーブルまたはディセーブルにできます。特定のドメインに対してバウンス検証タギングをイネーブルまたはディセーブルにすることもできます。ほとんどの場合、デフォルトでイネーブルにしておき、除外する具体的なドメインを [Destination Controls] テーブルに列挙します（「[Destination Controls] の使用」(P.2-65) を参照）。

メッセージにタグ付きのアドレスがすでに含まれている場合は、別のタグが追加されません（IronPort アプライアンスがバウンス メッセージを DMZ 内の IronPort アプライアンスに配信する場合）。

着信バウンス メッセージの処理

有効なタグが含まれているバウンスは配信されます。タグが削除され、エンベロープ受信者が復元されます。これは、電子メールパイプラインのドメインマップ処理の直後に発生します。IronPort アプライアンスでタグの付いていないバウンスやタグが無効に付いたバウンスの処理方法として、拒否するのか、それともカスタム ヘッダーを追加するのかを定義できます。詳細については、「IronPort バウンス検証設定の設定」(P.2-80) を参照してください。

バウンス検証タグが存在しない場合、タグの生成に使用されたキーが変更された場合、またはメッセージが 7 日より古い場合、そのメッセージは IronPort バウンス検証で定義された設定に従って扱われます。

たとえば、次のメール ログには、IronPort アプライアンスで拒否されたバウンス メッセージが示されています。

```
Fri Jul 21 16:02:19 2006 Info: Start MID 26603 ICID 125192
```

```
Fri Jul 21 16:02:19 2006 Info: MID 26603 ICID 125192 From: <>
```

```
Fri Jul 21 16:02:40 2006 Info: MID 26603 ICID 125192 invalid bounce, rcpt address <bob@example.com> rejected by bounce verification.
```

```
Fri Jul 21 16:03:51 2006 Info: Message aborted MID 26603 Receiving aborted by sender
```

```
Fri Jul 21 16:03:51 2006 Info: Message finished MID 26603 aborted
```



(注)

非バウンス メールを独自の社内メール サーバ (Exchange など) に配信する場合は、その社内ドメインに対して IronPort バウンス検証タギングをディセーブルにしてください。

AsyncOS では、バウンスがヌルの MAIL FROM アドレス (<>) が設定されたメールであると見なされます。タグ付きのエンベロップ受信者が含まれる可能性のある非バウンス メッセージの場合は、より緩やかなポリシーが適用されます。そのような場合、7 日でのキー失効は無視され、古いキーとの一致も調べられません。

IronPort の [Bounce Verification Address Tagging Keys]

タギング キーは、バウンス検証タグを生成するとき IronPort アプライアンスで使用されるテキスト文字列です。ドメインから発信されるすべてのメールには一貫してタグが付けられるため、すべての IronPort アプライアンスで同じキーを使用することが理想的です。そのようにして、ある IronPort アプライアンスで発信メッセージのエンベロップ送信者にタグが付けられる場合、別の IronPort アプライアンスからバウンスを受信しても、その着信バウンスが検証および配信されます。

タグには 7 日間の猶予期間があります。たとえば、7 日間のうちにタギング キーを複数回変更できます。その場合、IronPort アプライアンスは 7 日より新しいこれまでのすべてのキーを使用して、タグの付いたメッセージを検証しようとします。

IronPort バウンス検証と HAT

AsyncOS には、IronPort バウンス検証に関連して、タグの付いていないバウンスを有効とするかどうかを検討する HAT 設定もあります。デフォルト設定は「いいえ」であり、タグの付いていないバウンスは無効であると見なされます。さらに、[Mail Policies] > [Bounce Verification] ページで選択されたアクションに従って、メッセージが拒否されるか、またはカスタム ヘッダーが付加されます。「はい」を選択した場合、タグの付いていないバウンスは有効であると見なされ、受け入れられます。これは、次のようなシナリオで使用できます。

電子メールをメーリングリストに送信することを検討しているユーザがいるとします。しかし、メーリングリストでは、エンベロープ送信者の固定セットからのメッセージのみを受け入れています。そのような場合、ユーザからのタグ付きメッセージは受け入れられません（タグは定期的に変更されるため）。

そのようなユーザを救済するには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** ユーザがメールを送信しようとするドメインを [Destination Controls] テーブルに追加し、そのドメインに対するタグングをディセーブルにします。この時点で、ユーザは問題なくメールを送信できます。
- ステップ 2** しかし、そのドメインからのバウンスにはタグが付いていないため、バウンス受信を適切にサポートするには、そのドメインの送信者グループを作成し、[Accept] メール フロー ポリシーの [Consider Untagged Bounces to be Valid] パラメータをイネーブルにします。

図 2-12 [Consider Untagged Bounces to be Valid] HAT パラメータ

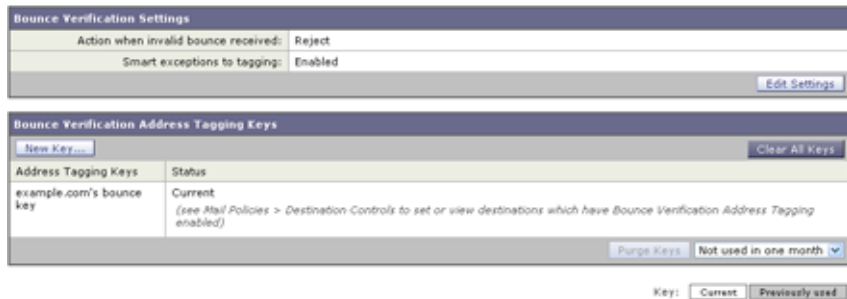
Security Features	
Spam Detection:	<input checked="" type="radio"/> Use Default (On) <input type="radio"/> On <input type="radio"/> Off
Virus Protection:	<input checked="" type="radio"/> Use Default (On) <input type="radio"/> On <input type="radio"/> Off
Encryption and Authentication:	TLS: <input checked="" type="radio"/> Use Default (Off) <input type="radio"/> Off <input type="radio"/> Preferred <input type="radio"/> Required
	SMTP Authentication: <input checked="" type="radio"/> Use Default (Off) <input type="radio"/> Off <input type="radio"/> Preferred <input type="radio"/> Required
	If Both TLS and SMTP Authentication are enabled: <input type="checkbox"/> Require TLS To Offer SMTP Authentication
Domain Key/DKIM Signing:	<input checked="" type="radio"/> Use Default (Off) <input type="radio"/> On <input type="radio"/> Off
DKIM Verification:	<input checked="" type="radio"/> Use Default (Off) <input type="radio"/> On <input type="radio"/> Off
SPF/SIDF Verification:	<input checked="" type="radio"/> Use Default (Off) <input type="radio"/> On <input type="radio"/> Off
Bounce Verification:	Conformance Level: <input type="text" value="SIDF Compatible"/>
	Degrade PRA verification result if "resent-sender:" or "resent-from:" were used: <input type="radio"/> Use Default (No) <input type="radio"/> No <input type="radio"/> Yes
	HELO Test: <input type="radio"/> Use Default (On) <input type="radio"/> Off <input type="radio"/> On
	Consider Untagged Bounces to be Valid: <input checked="" type="radio"/> Use Default (No) <input type="radio"/> Yes <input type="radio"/> No
<small>(Applies only if bounce verification address tagging is in use. See Mail Policies > Bounce Verification.)</small>	

IronPort バウンス検証の使用

IronPort バウンス検証を設定するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** タギング キーを入力します（「[\[Bounce Verification Address Tagging Keys\] の設定](#)」 (P.2-80) を参照）。
- ステップ 2** バウンス検証設定を編集します（「[IronPort バウンス検証設定の設定](#)」 (P.2-80) を参照）。
- ステップ 3** [\[Destination Controls\]](#) を使用して、バウンス検証をイネーブルにします（「[\[Destination Controls\] の使用](#)」 (P.2-65) を参照）。

図 2-13 IronPort の [Bounce Verification] ページ
Bounce Verification



[Bounce Verification Address Tagging Keys] の設定

[Bounce Verification Address Tagging Keys] のリストには、現在のキー、および過去に使用してまだ削除されていないキーが示されます。新規のキーを追加するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1 [Mail Policies] > [Bounce Verification] ページで、[New Key] をクリックします。
- ステップ 2 テキスト文字列を入力し、[New Key] をクリックします。
- ステップ 3 変更を確定します。

キーの削除

古いアドレス タギング キーを削除するには、プルダウン メニューから削除するルールを選択し、[Purge] をクリックします。

IronPort バウンス検証設定の設定

バウンス検証設定では、無効なバウンスを受信したときに実行するアクションを指定します。バウンス検証設定を設定するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1 [Edit Settings] をクリックします。[Edit Bounce Verification Settings] ページが表示されます。
- ステップ 2 無効なバウンスを拒否するのか、カスタム ヘッダーをメッセージに追加するのかを選択します。ヘッダーを追加する場合は、ヘッダーの名前と値を入力します。

- ステップ 3** 必要に応じて、スマート例外機能をイネーブルにします。この設定を使用すると、(着信メールと発信メールの両方で 1 つのリスナーを使用している場合であっても) 着信メール メッセージ、および社内メール サーバで生成されるバウンス メッセージをバウンス検証処理から自動的に除外できるようにします。
- ステップ 4** 変更を送信して確定します。

IronPort バウンス検証と CLI

CLI で `bvconfig` コマンドおよび `destconfig` コマンドを使用して、バウンス検証を設定できます。これらのコマンドについては、『*IronPort AsyncOS CLI Reference Guide*』で説明します。

IronPort バウンス検証とクラスタ設定

バウンス検証は、両方の IronPort アプライアンスで同じ「バウンス キー」を使用している限り、クラスタ コンフィギュレーションで動作します。同じキーを使用する場合は、どちらのシステムでも正当なバウンスを受け入れられる必要があります。変更後のヘッダー タグ/キーは、各 IronPort アプライアンスに固有ではありません。

電子メール配信パラメータの設定

`deliveryconfig` コマンドは、Cisco IronPort アプライアンスから電子メールを配信するときに使用されるパラメータを設定します。

Cisco IronPort アプライアンスは、SMTP と QMQP という複数のメール プロトコルを使用してメールを受信します。ただし、すべての発信電子メールは、SMTP を使用して配信されます。このため、`deliveryconfig` コマンドではプロトコルの指定が不要です。



- (注)** この項で説明する機能やコマンドのいくつかは、ルーティングの優先度に影響をおよぼしたり、ルーティングの優先度から影響を受けたりします。詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の付録 B 「Assigning Network and IP Addresses」を参照してください。

デフォルトの配信 IP インターフェイス

デフォルトで、電子メール配信には IP インターフェイスまたは IP インターフェイス グループが使用されます。現在設定されているどの IP インターフェイスまたは IP インターフェイス グループでも設定できます。特定のインターフェイスが指定されない場合は、受信者ホストと通信するときに SMTP HELO コマンドでデフォルトの配信インターフェイスと関連付けられたホスト名が使用されます。IP インターフェイスを設定するには、`interfaceconfig` コマンドを使用します。

電子メール配信インターフェイスの自動選択を使用するときのルールは次のとおりです。

- リモートの電子メール サーバが設定済みインターフェイスのいずれかと同じサブネット上にある場合、トラフィックは一致するインターフェイス上を流れます。
- `auto-select` に設定した場合、`routeconfig` を使用して設定したスタティック ルートが有効になります。
- そうでない場合、デフォルト ゲートウェイと同じサブネット上にあるインターフェイスが使用されます。すべての IP アドレスで宛先に対するルートが同等の場合、使用可能なうち最も効率的なインターフェイスが使用されます。

Possible Delivery 機能

Possible Delivery 機能がイネーブルになると、AsyncOS では、メッセージ本文が配信されてから受信者ホストがメッセージの受信を確認するまでの間にタイムアウトするすべてのメッセージを「配信可能性あり」として見なして扱います。この機能を使用すると、受信者ホストで連続するエラーにより受信の確認が妨げられる場合に、メッセージのコピーを複数受信しなくて済みます。

AsyncOS では、この受信を配信可能性ありとしてメール ログに記録し、そのメッセージを完了したものとして見なします。Possible Delivery 機能は、イネーブルのままにしておくことを推奨します。

デフォルトの最大同時接続数

アプライアンスが発信メッセージの配信で確立するデフォルトの最大同時接続数も指定できます。(システム全体のデフォルトはドメインごとに 10,000 接続です)。この制限は、リスナーあたりの最大同時発信メッセージ配信数 (リスナーあたりのデフォルトは、プライベートリスナーで 600 接続、パブリックリス

ナーで 1000 接続です)。デフォルトよりも小さい値を設定すると、Cisco IronPort ゲートウェイが弱いネットワークを支配しないようにすることができます。たとえば、特定のファイアウォールが大量の接続をサポートしない場合、そのような環境では Cisco IronPort で Denial of Service (DoS; サービス拒否) 警告が引き起こされることがあります。

deliveryconfig の例

次の例では、deliveryconfig コマンドを使用して、デフォルトのインターフェイスを「Auto」にし、「Possible Delivery」をイネーブルにします。システム全体の最大発信メッセージ配信は、9000 接続です。

```
mail3.example.com> deliveryconfig
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

```
- SETUP - Configure mail delivery.
```

```
[ ]> setup
```

```
Choose the default interface to deliver mail.
```

1. Auto
2. PublicNet2 (192.168.3.1/24: mail4.example.com)
3. Management (192.168.42.42/24: mail3.example.com)
4. PrivateNet (192.168.1.1/24: mail3.example.com)
5. PublicNet (192.168.2.1/24: mail3.example.com)

```
[1]> 1
```

```
Enable "Possible Delivery" (recommended)? [Y]> y
```

```
Please enter the default system wide maximum outbound message  
delivery
```

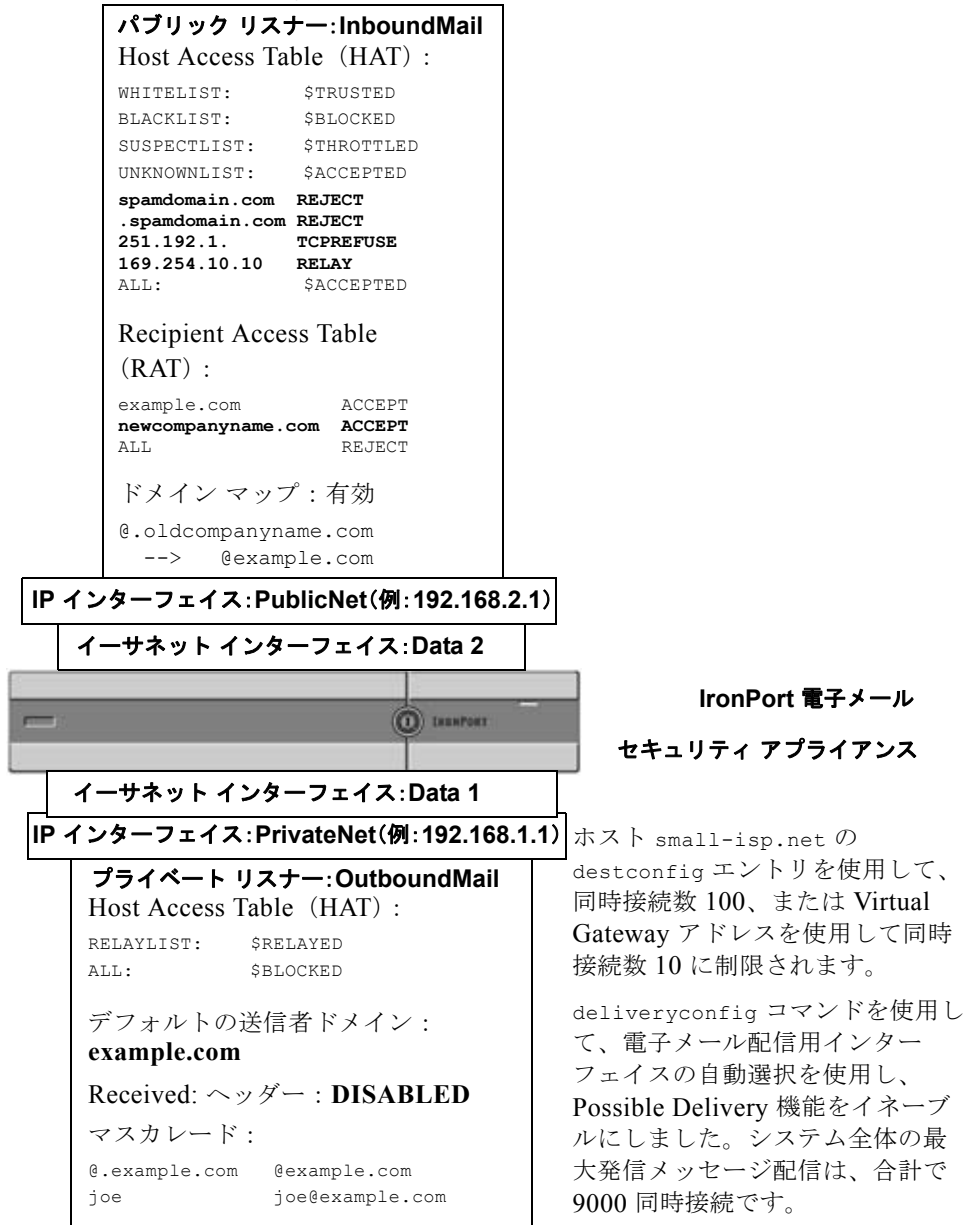
```
concurrency
```

```
[10000]> 9000
```

```
mail3.example.com>
```

これで電子メール ゲートウェイのコンフィギュレーションは次のようになります。

図 2-14 宛先および配信パラメータの設定



**IronPort 電子メール
セキュリティ アプライアンス**

ホスト small-isp.net の destconfig エントリを使用して、同時接続数 100、または Virtual Gateway アドレスを使用して同時接続数 10 に制限されます。

deliveryconfig コマンドを使用して、電子メール配信用インターフェイスの自動選択を使用し、Possible Delivery 機能をイネーブルにしました。システム全体の最大発信メッセージ配信は、合計で 9000 同時接続です。

Virtual Gateway™ テクノロジー

この項では、IronPort Virtual Gateway™ テクノロジーとその利点、Virtual Gateway アドレスの設定方法、および Virtual Gateway アドレスのモニタおよび管理方法について説明します。

IronPort Virtual Gateway テクノロジーでは、ホストするすべてのドメインに対して異なる IP アドレス、ホスト名、およびドメインを使用してエンタープライズメールゲートウェイを設定し、同じ物理アプライアンス内にホストしている場合でも、それらのドメインに対して別々に企業の電子メールポリシー強制およびスパム対策方針を作成できます。



(注)

利用できる Virtual Gateway アドレスの数は、使用する IronPort アプライアンスによって異なります。一部のアプライアンスモデルでは、機能キーを使用して多くの Virtual Gateway アドレスをサポートするようにアップグレードできます。使用するアプライアンスでの Virtual Gateway アドレスの数をアップグレードする詳細については、IronPort 販売代理店にお問い合わせください。

概要

企業がカスタマーと電子メールで信頼性の高いコミュニケーションを実現できるように、独自の Virtual Gateway テクノロジーが開発されました。Virtual Gateway テクノロジーを使用すると、Cisco IronPort アプライアンスを複数の Virtual Gateway アドレスに分割し、そのアドレスを使用して電子メールを送受信できます。各 Virtual Gateway アドレスには、別々の IP アドレス、ホスト名、ドメイン、および電子メールキューが与えられます。

別々の IP アドレスとホスト名を各 Virtual Gateway アドレスに割り当てることにより、ゲートウェイ経由で配信される電子メールが受信者ホストで正しく識別され、重要な電子メールがスパムと見なされてブロックされるのを防ぐことができます。Cisco IronPort アプライアンスには、Virtual Gateway アドレスごとに SMTP HELO コマンドで正しいホスト名を付与できる高度な機能があります。そのため、受信側の Internet Service Provider (ISP; インターネット サービス プロバイダー) が逆 DNS ルックアップを実行すると、Cisco IronPort アプライアンスでは、その Virtual Gateway アドレス経由で送信された電子メールの IP アドレスと一致させることができます。多くの ISP では迷惑電子メールを検出するために逆 DNS ルックアップを使用しているため、この機能は非常に有用です。逆 DNS ルックアップでの IP アドレスが送信側ホストの IP アドレスと一致しない場合、

ISP では、送信者が不正であると見なして、電子メールを破棄する頻度が高くなります。IronPort Virtual Gateway テクノロジーでは、逆 DNS ルックアップが送信側の IP アドレスと常に一致するため、メッセージが意図せずブロックされてしまうのを防げます。

各 Virtual Gateway アドレスでのメッセージも、別々のメッセージ キューに割り当てられます。受信者ホストで特定の Virtual Gateway アドレスからの電子メールをブロックしている場合、そのホスト宛のメッセージはキューに残され、最終的にはタイムアウトします。しかしブロックされていない別の Virtual Gateway キュー内にある同じドメイン宛のメッセージは、正常に配信されます。これらのキューは、配信では別のものとして扱われますが、システム管理、ロギング、レポートの機能では、全体的な観点からすべての Virtual Gateway キューが一体のものとして扱われます。

Virtual Gateway アドレスの設定

IronPort Virtual Gateway アドレスを設定する前に、電子メールの送信元として使用される IP アドレスのセットを割り当てる必要があります。(詳細については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Assigning Network and IP Addresses」を参照してください)。また、IP アドレスが有効なホスト名に解決されるように DNS サーバが正しく設定されている必要があります。DNS サーバが正しく設定されていれば、受信者ホストで逆 DNS ルックアップが実行されると、有効な IP/ホスト名のペアに解決されます。

仮想ゲートウェイで使用する新しい IP インターフェイスの作成

IP アドレスとホスト名が確立したら、Virtual Gateway アドレスを設定するために、まずはその IP/ホスト名のペアで新しい IP インターフェイスを作成します。それには、GUI の [Network] > [IP Interfaces] ページ、または CLI の `interfaceconfig` コマンドを使用します。

IP インターフェイスを設定したら、複数の IP インターフェイスをインターフェイス グループへと結合できます。これらのグループは、電子メールの配信時に「ラウンドロビン」方式で順番に使用される Virtual Gateway アドレスに割り当てることができます。

必要な IP インターフェイスを作成したら、2 つの方法で Virtual Gateway アドレスを設定し、各 IP インターフェイスまたはインターフェイス グループから送信される電子メール キャンペーンを定義します。

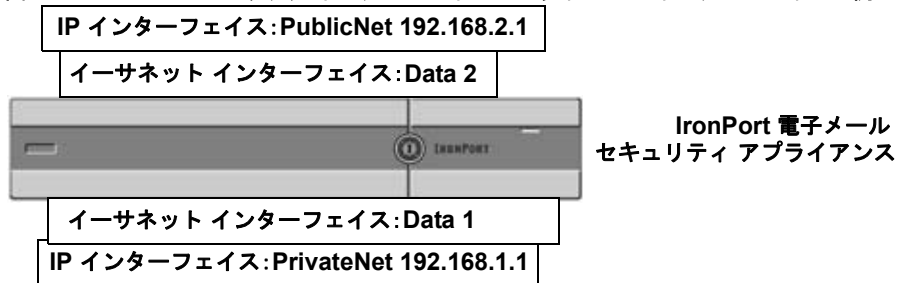
ステップ 1 `altsrchoost` コマンドを使用すると、特定の送信者 IP アドレスまたはエンベロープ送信者アドレスの情報からホストの IP インターフェイス (Virtual Gateway アドレス) またはインターフェイス グループに電子メールをマッピングして配信できます。

ステップ 2 メッセージフィルタを使用して、特定ホストの IP インターフェイス (Virtual Gateway アドレス) またはインターフェイス グループを使用してフラグ付きのメッセージを配信するためのフィルタを設定できます。「送信元ホスト (Virtual Gateway アドレス) 変更アクション」(P.6-90) を参照してください。(この方法は前述の方法よりも柔軟性があり、強力です)。

IP インターフェイスを作成する詳細については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の付録「Accessing the Appliance」を参照してください。

ここまで、[図 2-15](#) に示すように定義された次のインターフェイスを用いて、電子メール ゲートウェイの設定を使用してきました。

図 2-15 パブリック インターフェイスとプライベート インターフェイスの例



次の例では、[IP Interfaces] ページで管理インターフェイスの他に 2 つのインターフェイス (PrivateNet および PublicNet) が設定されていることを確認できます。

図 2-16 [IP Interfaces] ページ
IP Interfaces

Network Interfaces and IP Addresses			
Add IP Interface...			
Name	IP Address	Hostname	Delete
Management	192.168.42.42/24	mail3.example.com	
PrivateNet	192.168.1.1/24	mail3.example.com	
PublicNet	192.168.2.1/24	mail3.example.com	

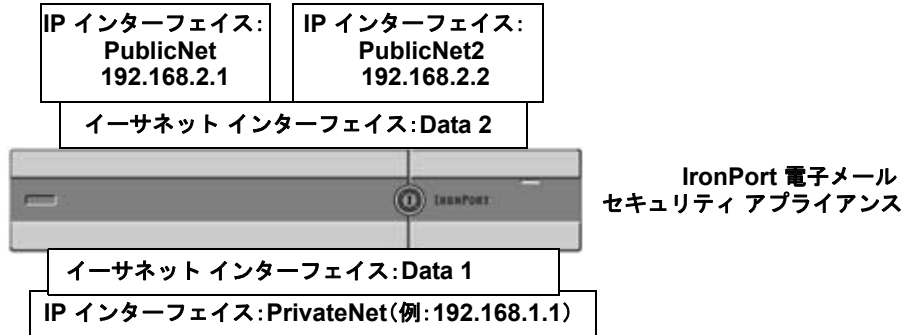
次に、[Add IP Interface] ページを使用して、Data2 イーサネット インターフェイス上に PublicNet2 という名前の新しいインターフェイスを作成します。IP アドレス 192.168.2.2 が使用され、ホスト名 mail4.example.com が指定されています。さらに、FTP (ポート 21)、Telnet (ポート 23)、および SSH (ポート 22) がイネーブルになります。

図 2-17 [Add IP Interface] ページ
Add IP Interface

IP Interface Settings																															
Name:	PublicNet2																														
Ethernet Port:	Data 2																														
IP Address:	192.168.2.2 *																														
Netmask:	255.255.255.0 *																														
Hostname:	mail4.example.com																														
Services:	<table border="1"> <thead> <tr> <th>Service</th> <th>Port</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td><input checked="" type="checkbox"/> FTP</td> <td>21</td> </tr> <tr> <td><input checked="" type="checkbox"/> Telnet</td> <td>23</td> </tr> <tr> <td><input checked="" type="checkbox"/> SSH</td> <td>22 *</td> </tr> <tr> <td colspan="2">Appliance Management</td> </tr> <tr> <td><input type="checkbox"/> HTTP</td> <td>80 *</td> </tr> <tr> <td><input type="checkbox"/> HTTPS</td> <td>443 *</td> </tr> <tr> <td colspan="2"><input type="checkbox"/> Redirect HTTP requests to HTTPS (HTTP and HTTPS Services will be turned on)</td> </tr> <tr> <td colspan="2">IronPort Spam Quarantine</td> </tr> <tr> <td><input type="checkbox"/> IronPort Spam Quarantine HTTP</td> <td>82</td> </tr> <tr> <td><input type="checkbox"/> IronPort Spam Quarantine HTTPS</td> <td>83</td> </tr> <tr> <td colspan="2"><input type="checkbox"/> Redirect HTTP requests to HTTPS (HTTP and HTTPS Services will be turned on)</td> </tr> <tr> <td colspan="2"><input type="checkbox"/> This is the default interface for IronPort Spam Quarantine Quarantine login and notifications will originate on this interface.</td> </tr> <tr> <td colspan="2">URL Displayed in Notifications:</td> </tr> <tr> <td colspan="2"> <input type="radio"/> Hostname (examples: http://spamQ.url/, http://10.1.1.1:82/) </td> </tr> </tbody> </table>	Service	Port	<input checked="" type="checkbox"/> FTP	21	<input checked="" type="checkbox"/> Telnet	23	<input checked="" type="checkbox"/> SSH	22 *	Appliance Management		<input type="checkbox"/> HTTP	80 *	<input type="checkbox"/> HTTPS	443 *	<input type="checkbox"/> Redirect HTTP requests to HTTPS (HTTP and HTTPS Services will be turned on)		IronPort Spam Quarantine		<input type="checkbox"/> IronPort Spam Quarantine HTTP	82	<input type="checkbox"/> IronPort Spam Quarantine HTTPS	83	<input type="checkbox"/> Redirect HTTP requests to HTTPS (HTTP and HTTPS Services will be turned on)		<input type="checkbox"/> This is the default interface for IronPort Spam Quarantine Quarantine login and notifications will originate on this interface.		URL Displayed in Notifications:		<input type="radio"/> Hostname (examples: http://spamQ.url/, http://10.1.1.1:82/)	
Service	Port																														
<input checked="" type="checkbox"/> FTP	21																														
<input checked="" type="checkbox"/> Telnet	23																														
<input checked="" type="checkbox"/> SSH	22 *																														
Appliance Management																															
<input type="checkbox"/> HTTP	80 *																														
<input type="checkbox"/> HTTPS	443 *																														
<input type="checkbox"/> Redirect HTTP requests to HTTPS (HTTP and HTTPS Services will be turned on)																															
IronPort Spam Quarantine																															
<input type="checkbox"/> IronPort Spam Quarantine HTTP	82																														
<input type="checkbox"/> IronPort Spam Quarantine HTTPS	83																														
<input type="checkbox"/> Redirect HTTP requests to HTTPS (HTTP and HTTPS Services will be turned on)																															
<input type="checkbox"/> This is the default interface for IronPort Spam Quarantine Quarantine login and notifications will originate on this interface.																															
URL Displayed in Notifications:																															
<input type="radio"/> Hostname (examples: http://spamQ.url/, http://10.1.1.1:82/)																															
Warnings - * Please exercise care when disabling or changing these items, as this could disrupt active connections to this appliance when changes to these items are committed. ** Hyperlinks and URLs affected by these changes will not be usable until the changes are committed.																															
<input type="button" value="Cancel"/>	<input type="button" value="Submit"/>																														

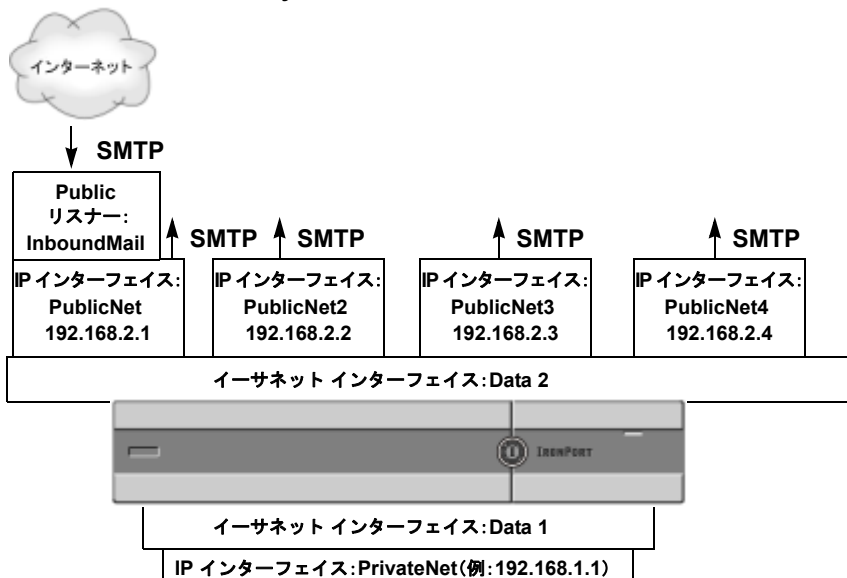
これで電子メール ゲートウェイのコンフィギュレーションは次のようになります。

図 2-18 別のパブリック インターフェイスの追加



Virtual Gateway アドレスを使用すると、図 2-19 に示すようなコンフィギュレーションも可能です。

図 2-19 1つのイーサネット インターフェイス上にある 4 つの Virtual Gateway アドレス



4 つの IP インターフェイスはそれぞれメール配信に使用できますが、インターネットからのメールを受け入れるように設定されるのはパブリック リスナー 1 つだけです。

メッセージから配信用 IP インターフェイスへのマッピング

`altsrchost` コマンドを使用すると、各 Cisco IronPort アプライアンスを、電子メールの配信元となる複数の IP インターフェイス (Virtual Gateway アドレス) にセグメント化することが最も単純で単刀直入な方法です。ただし、メッセージを特定の Virtual Gateway にマッピングする際にさらに強力な柔軟な方法が必要であれば、メッセージフィルタの使用を検討してください。詳細については、[第 6 章「メッセージフィルタを使用した電子メールポリシーの適用」](#)を参照してください。

`altsrchost` コマンドを使用すると、次のいずれかに基づいて、電子メールの配信中に使用する IP インターフェイスまたはインターフェイス グループを管理できます。

- 送信者の IP アドレス
- エンベロープ送信者アドレス

電子メールの配信元にする IP インターフェイスまたはインターフェイス グループを指定するには、送信者の IP アドレスまたはエンベロープ送信者アドレスを IP インターフェイスまたはインターフェイス グループ (インターフェイス名またはグループ名で指定) とペアにするマッピング キーを作成します。

IronPort AsyncOS では、IP アドレスとエンベロープ送信者アドレスの両方をマッピング キーと比較します。IP アドレスまたはエンベロープ送信者アドレスがいずれかのキーと一致する場合、対応する IP インターフェイスが発信配信に使用されます。一致しない場合は、デフォルトの発信インターフェイスが使用されます。

一致する可能性のあるキーを優先順に示します。

送信者の IP アドレス	送信者の IP アドレスは完全一致する必要があります。 例: 192.168.1.5
完全形式のエンベロープ送信者	エンベロープ送信者は、アドレス全体が完全一致する必要があります。 例: username@example.com
ユーザ名	エンベロープ送信者アドレスの @ 記号までの部分に対してユーザ名構文と一致させます。@ 記号を含める必要があります。例: username@
ドメイン	エンベロープ送信者アドレスの @ 記号で始まる部分に対してドメイン名構文と一致させます。@ 記号を含める必要があります。例: @example.com



(注) リスナーは `altsrchoost` テーブルで情報をチェックし、マスカレード情報をチェックした後からメッセージフィルタがチェックされる前までに、電子メールを特定のインターフェイスに転送します。

`altsrchoost` コマンド内のサブコマンドを使用して、CLI で Virtual Gateway にマッピングを作成します。

構文	説明
<code>new</code>	新しいマッピングを手動で作成します。
<code>print</code>	マッピングの現在のリストを表示します。
<code>delete</code>	テーブルからマッピングを 1 つ削除します。

altsrchoost ファイルのインポート

HAT、RAT、`smtproutes`、マスカレードテーブル、エイリアス テーブルと同様に、`altsrchoost` エントリはファイルをエクスポートおよびインポートして変更できます。次の手順を実行します。

- ステップ 1** `altsrchoost` コマンドの `export` サブコマンドを使用して、既存のエントリをファイル（ファイル名は自分で指定）にエクスポートします。
- ステップ 2** CLI の外部で、ファイルを取得します。（詳細については、[付録 B「アプライアンスへのアクセス」](#)を参照してください）。
- ステップ 3** テキスト エディタを使用して、ファイルに新しいエントリを作成します。ルールが `altsrchoost` テーブルに出現する順序が重要です。
- ステップ 4** ファイルを保存してインターフェイスの「`altsrchoost`」ディレクトリに配置し、インポートできるようにします。（詳細については、[付録 B「アプライアンスへのアクセス」](#)を参照してください）。
- ステップ 5** `altsrchoost` の `import` サブコマンドを使用して、編集したファイルをインポートします。

altsrchoost の制限

最大 1,000 個の `altsrchoost` エントリを追加できます。

altsrchoost コマンド用に有効なマッピングが記載されたテキスト ファイルの例

```
# Comments to describe the file

@example.com DemoInterface

paul@ PublicInterface

joe@ PublicInterface

192.168.1.5, DemoInterface

steve@example.com PublicNet
```

import および export サブコマンドは、1 行単位で実行され、送信者 IP アドレスまたはエンベロープ送信者アドレスの行をインターフェイス名にマッピングします。スペース以外の文字からなる 1 番目のブロックがキー、スペース以外の文字からなる 2 番目のブロックがインターフェイス名となり、カンマ (,) またはスペース () で区切ります。コメント行はナンバー記号 (#) で始まり、無視されます。

CLI を使用した altsrchoost マッピングの追加

次の例では、altsrchoost テーブルが出力されて、既存のマッピングがないことが示されます。その後、2 つのエントリが作成されます。

- グループウェア サーバ ホスト @exchange.example.com からのメールは、PublicNet インターフェイスにマッピングされます。
- 送信者 IP アドレス 192.168.35.35 (たとえば、マーケティング キャンペーンメッセージング システム) からのメールは、PublicNet2 インターフェイスにマッピングされます。

最後に、確認のために altsrchoost マッピングが出力されて、変更が確定されます。

```
mail3.example.com> altsrchoost
```

There are currently no mappings configured.

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new mapping.
- IMPORT - Load new mappings from a file.

```
[ ]> new
```

Enter the Envelope From address or client IP address for which you want to set up a Virtual Gateway mapping. Partial addresses such as "@example.com" or "user@" are allowed.

```
[ ]> @exchange.example.com
```

Which interface do you want to send messages for @exchange.example.com from?

1. PublicNet2 (192.168.2.2/24: mail4.example.com)
2. Management (192.168.42.42/24: mail3.example.com)
3. PrivateNet (192.168.1.1/24: mail3.example.com)
4. PublicNet (192.168.2.1/24: mail4.example.com)

```
[1]> 4
```

Mapping for @exchange.example.com on interface PublicNet created.

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new mapping.
- EDIT - Modify a mapping.
- DELETE - Remove a mapping.
- IMPORT - Load new mappings from a file.
- EXPORT - Export all mappings to a file.
- PRINT - Display all mappings.
- CLEAR - Remove all mappings.

```
[> new
```

Enter the Envelope From address or client IP address for which you want to set up a Virtual Gateway mapping. Partial addresses such as "@example.com" or "user@" are allowed.

```
[> 192.168.35.35
```

Which interface do you want to send messages for 192.168.35.35 from?

1. PublicNet2 (192.168.2.2/24: mail4.example.com)
2. Management (192.168.42.42/24: mail3.example.com)
3. PrivateNet (192.168.1.1/24: mail3.example.com)
4. PublicNet (192.168.2.1/24: mail4.example.com)

```
[1]> 1
```

Mapping for 192.168.35.35 on interface PublicNet2 created.

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new mapping.
- EDIT - Modify a mapping.
- DELETE - Remove a mapping.
- IMPORT - Load new mappings from a file.
- EXPORT - Export all mappings to a file.
- PRINT - Display all mappings.
- CLEAR - Remove all mappings.

[>] **print**

1. 192.168.35.35 -> PublicNet2
2. @exchange.example.com -> PublicNet

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new mapping.
- EDIT - Modify a mapping.
- DELETE - Remove a mapping.
- IMPORT - Load new mappings from a file.
- EXPORT - Export all mappings to a file.
- PRINT - Display all mappings.
- CLEAR - Remove all mappings.

[>]


```
mail3.example.com> commit

Please enter some comments describing your changes:

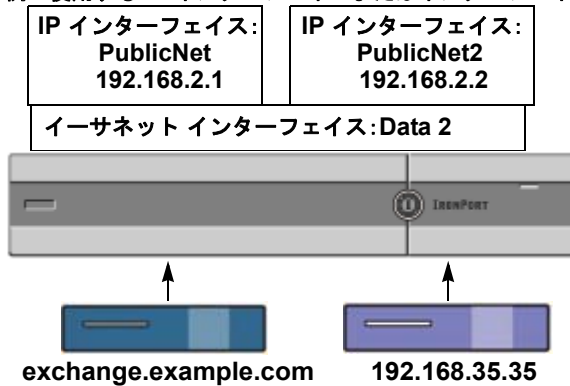
[ ]> Added 2 altsrchoost mappings

Changes committed: Thu Mar 27 14:57:56 2003
```

この例におけるコンフィギュレーションの変更を図 2-20 に示します。

図 2-20

例：使用する IP インターフェイスまたはインターフェイス グループの選択



これらのマッピングを作成するように altsrchoost テーブルが変更されました。
@exchange.example.com からのメッセージはインターフェイス PublicNet を使用し、192.168.35.35 からのメッセージはインターフェイス PublicNet2 を使用します。

Virtual Gateway アドレスのモニタ

Virtual Gateway アドレスごとに独自の配信用電子メール キューがありますが、システム管理、ロギング、レポートの機能では、全体的な観点からすべての Virtual Gateway キューが一体のものとして扱われます。Virtual Gateway キューごとに受信者ホストのステータスをモニタするには、hoststatus および hostrate コマンドを使用します。『Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide』の「Reading the Available Components of Monitoring」を参照してください。

hoststatus コマンドは、特定の受信者ホストに関連する電子メール処理に関するモニタリング情報を返します。

Virtual Gateway テクノロジーを使用している場合は、各 Virtual Gateway アドレスに関する情報も表示されます。このコマンドは、返されるホスト情報のドメインを入力する必要があります。AsyncOS キャッシュに格納されている DNS 情報、および受信者ホストから返された最後のエラーも示されます。返されるデータは、前回の resetcounters コマンドからの累積です。

返される統計情報は、カウンタとゲージという 2 つのカテゴリにグループ化されます。さらに、返される他のデータには、最後のアクティビティ、MX レコード、最後の 5XX エラーがあります。

Virtual Gateway アドレスごとの配信接続の管理

一部のシステム パラメータには、システム レベルと Virtual Gateway アドレス レベルで設定が必要です。

たとえば、一部の受信者 ISP では、各クライアント ホストに許可されている接続数を制限しています。そのため、特に電子メールが複数の Virtual Gateway アドレスで配信されているときに、ISP との関係を管理することが必要です。

destconfig コマンド、および Virtual Gateway アドレスに対する影響については、「[電子メール配信の管理](#)」(P.2-63) を参照してください。

Virtual Gateway アドレスの「グループ」を作成すると、グループが 254 個の IP アドレスで構成されている場合であっても、Virtual Gateway のグッドネイバーテーブル設定がグループに適用されます。

たとえば、254 個の発信 IP アドレスのグループを作成して、「ラウンドロビン」方式で順番に使用するようセットアップされているとします。また、small-isp.com のグッドネイバーテーブルで、同時接続数がシステムの場合は 100、Virtual Gateway アドレスの場合は 10 であるとして、このコンフィギュレーションでは、そのグループ内の 254 個の IP アドレスすべてに対して、合計で 10 よりも多くの接続が開くことはありません。グループは、単一の Virtual Gateway アドレスとして扱われます。

グローバル配信停止機能の使用

特定の受信者、受信者ドメイン、または IP アドレスが Cisco IronPort アプライアンスからメッセージを受信しないようにするには、IronPort AsyncOS のグローバル配信停止機能を使用します。unsubscribe コマンドを使用すると、グローバル配信停止リストにアドレスを追加/削除したり、この機能をイネーブル/ディセーブルにすることができます。「グローバルに配信停止された」ユーザ、ドメイン、電子メールアドレス、および IP アドレスのリストで、すべての受信者アドレスがチェックされます。受信者がリスト内のアドレスと一致する場合、受信者はドロップされるかハードバウンスされ、Global Unsubscribe (GUS; グローバル配信停止) カウンタが増分されます。(ログファイルには、一致する受信者がドロップされたのかハードバウンスされたのかが記録されます)。GUS のチェックは、電子メールを受信者に送信する直前に行われるため、システムで送信されるすべてのメッセージが検査されます。



(注)

グローバル配信停止機能は、メーリングリストからの名前の削除やメーリングリストの全般的な保守に代わるものではありません。この機能は、不適切なエンティティに電子メールが配信されないようにするフェールセーフメカニズムとして動作することを目的としています。

グローバル配信停止機能は、プライベートリスナーおよびパブリックリスナーに適用されます。

グローバル配信停止に含めることのできる最大アドレス数は 10,000 件です。この制限を増やすには、IronPort 販売代理店にお問い合わせください。グローバル配信停止に追加されたアドレスは、次の 4 つのうちいずれかの形式をとります。

表 2-10 グローバル配信停止の構文

<code>username@example.com</code>	完全形式の電子メールアドレス この構文は、特定ドメインの特定受信者をブロックするために使用されます。
<code>username@</code>	ユーザ名 ユーザ名構文は、すべてのドメインで特定ユーザ名を持つすべての受信者をブロックします。構文は、ユーザ名の後にアットマーク (@) を付けます。

表 2-10 グローバル配信停止の構文（続き）

<code>@example.com</code>	ドメイン ドメイン構文は、特定ドメイン宛のすべての受信者をブロックするために使用されます。構文は、具体的なドメインの前にアットマーク (@) を付けます。
<code>@.example.com</code>	部分ドメイン 部分ドメイン構文は、特定ドメイン宛およびそのすべてのサブドメイン宛のすべての受信者をブロックするために使用されます。
<code>10.1.28.12</code>	IP アドレス IP アドレス構文は、特定 IP アドレス宛のすべての受信者をブロックするために使用されます。単一 IP アドレスで複数ドメインをホストしている場合に、この構文が便利です。構文は、一般的なドット区切りのオクテット IP アドレスです。

CLI を使用したグローバル配信停止へのアドレスの追加

この例では、アドレス `user@example.net` がグローバル配信停止リストに追加され、メッセージをハードバウンスするように機能が設定されます。このアドレスに送信されるメッセージはバウンスされます。配信の直前にメッセージがバウンスされます。

```
mail3.example.com> unsubscribe
```

```
Global Unsubscribe is enabled. Action: drop.
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new entry.
- IMPORT - Import entries from a file.
- SETUP - Configure general settings.

```
[ ]> new
```

Enter the unsubscribe key to add. Partial addresses such as

"@example.com" or "user@" are allowed, as are IP addresses. Partial hostnames such as "@.example.com" are allowed.

```
[ ]> user@example.net
```

Email Address 'user@example.net' added.

Global Unsubscribe is enabled.

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new entry.
- DELETE - Remove an entry.
- PRINT - Display all entries.
- IMPORT - Import entries from a file.
- EXPORT - Export all entries to a file.
- SETUP - Configure general settings.
- CLEAR - Remove all entries.

```
[ ]> setup
```

Do you want to enable the Global Unsubscribe feature? [Y]> **y**

```
Would you like matching messages to be dropped or bounced?
```

1. Drop
2. Bounce

```
[1]> 2
```

```
Global Unsubscribe is enabled. Action: bounce.
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new entry.
- DELETE - Remove an entry.
- PRINT - Display all entries.
- IMPORT - Import entries from a file.
- EXPORT - Export all entries to a file.
- SETUP - Configure general settings.
- CLEAR - Remove all entries.

```
[ ]>
```

```
mail3.example.com> commit
```

```
Please enter some comments describing your changes:
```

```
[ ]> Added username "user@example.net" to global unsubscribe
```

Changes committed: Thu Mar 27 14:57:56 2003

グローバル配信停止ファイルのエクスポートおよびインポート

HAT、RAT、smtproutes、スタティック マスカレードテーブル、エイリアステーブル、ドメイン マップ テーブル、altsrchoost エントリと同様に、グローバル配信停止エントリはファイルのエクスポートおよびインポートして変更できます。次の手順を実行します。

- ステップ 1** unsubscribe コマンドの export サブコマンドを使用して、既存のエントリをファイル（ファイル名は自分で指定）にエクスポートします。
- ステップ 2** CLI の外部で、ファイルを取得します。（詳細については、[付録 B「アプライアンスへのアクセス」](#)を参照してください）。
- ステップ 3** テキスト エディタを使用して、ファイルに新しいエントリを作成します。

ファイル内でエントリを区切るには、改行します。あらゆるオペレーティング システムの改行表現を使用できます（<CR>、<LF>、または <CR><LF>）。コメント行はナンバー記号（#）で始まり、無視されます。たとえば、次のファイルでは、単一の受信者電子メール アドレス（test@example.com）、特定ドメインのすべての受信者（@testdomain.com）、複数ドメインで同じ名前を持つすべてのユーザ（testuser@）、および特定 IP アドレスの任意の受信者（11.12.13.14）が除外されます。

```
# this is an example of the global_unsubscribe.txt file

test@example.com

@testdomain.com

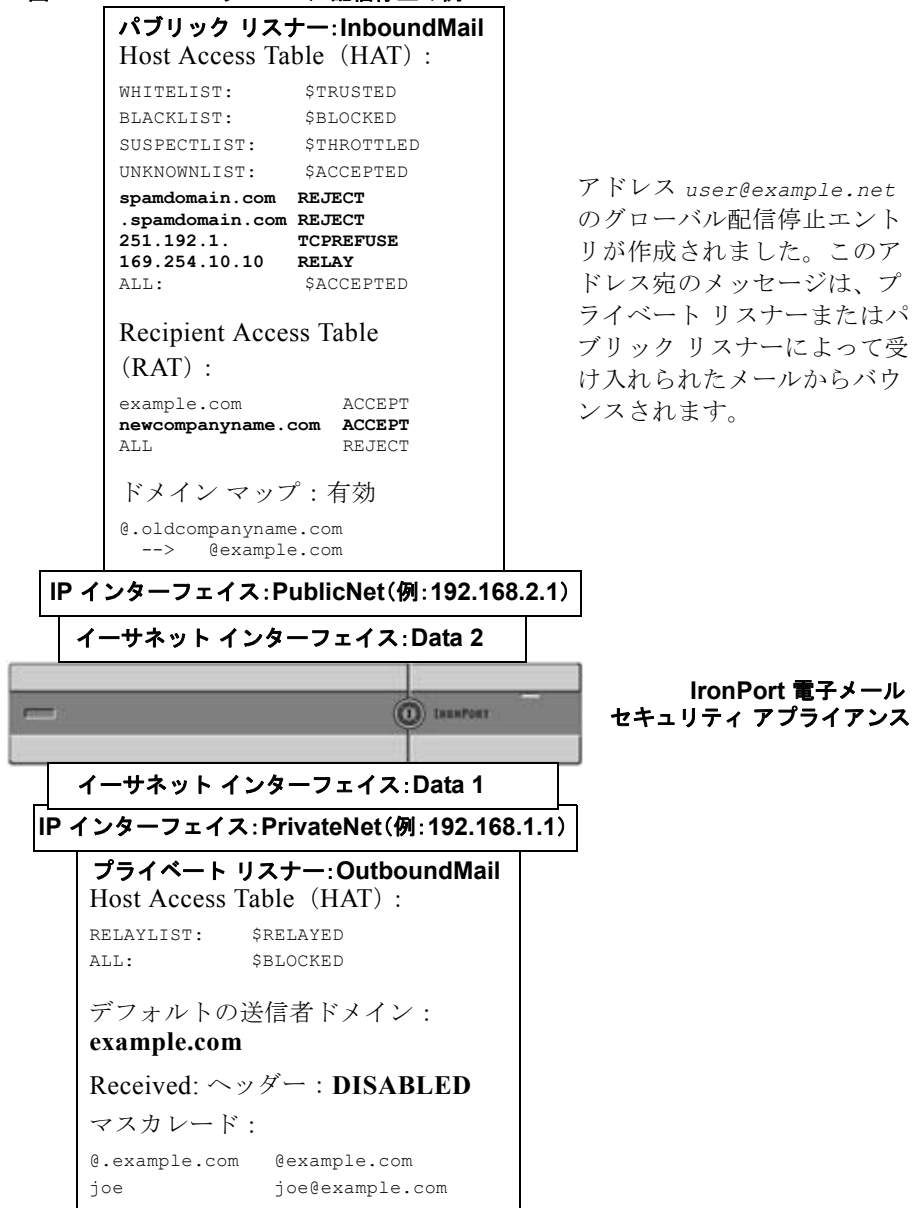
testuser@

11.12.13.14
```

- ステップ 4** ファイルを保存してインターフェイスの `configuration` ディレクトリに配置し、インポートできるようにします。(詳細については、[付録 B「アプライアンスへのアクセス」](#)を参照してください)。
- ステップ 5** `unsubscribe` の `import` サブコマンドを使用して、編集したファイルをインポートします。

これで電子メール ゲートウェイのコンフィギュレーションは次のようになります。

図 2-21 グローバル配信停止の例



確認：電子メール パイプライン

表 2-11 および表 2-12 に、受信から配信へのルーティングまで、電子メールがシステムでルーティングされる様子の概要を示します。各機能は上から順に実行されます。ここでは簡単に説明します。図 2-21 の共有領域は、作業キュー内で発生する処理を表します。

このパイプラインにおける機能のコンフィギュレーションは、`trace` コマンドを使用してほとんどをテストできます。詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide*』の「Debugging Mail Flow Using Test Messages: Trace」を参照してください。



(注)

発信メールの場合は、ウイルス感染フィルタ ステージの後に RSA 電子メールデータ損失防止スキャンが実行されます。

表 2-11 IronPort アプライアンスの電子メール パイプライン：電子メール受信機能

機能	説明
Host Access Table (HAT)	接続の ACCEPT、REJECT、RELAY、または TCPREFUSE
ホスト DNS 送信者検証	
送信者グループ	最大発信接続数
エンベロープ送信者検証	IP アドレスあたりの最大同時着信接続数
送信者検証例外テーブル	最大メッセージサイズ、および接続あたりのメッセージ数
メール フロー ポリシー	メッセージあたり、時間あたりの最大受信者数
	TCP リッスン キュー サイズ
	TLS：なし/優先/必須
	SMTP AUTH：なし/優先/必須
	形式が不正な FROM ヘッダーの電子メールをドロップします。
	送信者検証例外テーブル内のエントリからのメールを常に受け入れまたは拒否します。
	SenderBase オン/オフ (IP プロファイリング/フロー制御)

表 2-11 IronPort アプライアンスの電子メール パイプライン：電子メール受信機能（続き）

Received ヘッダー	Received ヘッダーを受け入れた電子メールに追加します：オン/オフ。
デフォルト ドメイン	「そのままの」ユーザ アドレスの場合のデフォルト ドメインを追加します。
バウンス検証	着信バウンス メッセージが正当なものであるかどうかを検証します。
ドメイン マップ	メッセージでドメイン マップ テーブル内のドメインと一致する各受信者について、エンベロープ受信者を書き換えます。
Recipient Access Table (RAT)	(パブリック リスナーのみ) RCPT TO およびカスタム SMTP 応答で受信者を受け入れまたは拒否します。特殊な受信者がスロットリングをバイパスできるようにします。
エイリアス テーブル	エンベロープ受信者を書き換えます。(システム全体で設定されます。aliasconfig は listenerconfig のサブコマンドではありません)。
LDAP 受信者受け入れ	受信者受け入れの LDAP 検証は、SMTP カンバセーション内で発生します。受信者が LDAP ディレクトリ内で見つからない場合、メッセージはドロップまたはバウンスされます。代わりに、作業キュー内で発生するように LDAP 検証を設定できます。

表 2-12 IronPort アプライアンスの電子メール パイプライン：ルーティングおよび配信機能

作業キュー	LDAP 受信者受け入れ	受信者受け入れの LDAP 検証は、作業キュー内で発生します。受信者が LDAP ディレクトリ内で見つからない場合、メッセージはドロップまたはバウンスされます。代わりに、SMTP カンパセーション内で発生するように LDAP 検証を設定できます。	
	マスカレード または LDAP マスカレード	マスカレードは、作業キュー内で発生します。エンベロープ送信者、To:、From:、CC: ヘッダーをスタティック テーブルまたは LDAP クエリから書き換えます。	
	LDAP ルーティング	メッセージのルーティングまたはアドレスの書き換えに対して、LDAP クエリが実行されます。グループ LDAP クエリは、メッセージ フィルタ ルール mail-from-group および rcpt-to-group とともに使用されます。	
	メッセージ フィルタ *	メッセージ フィルタは、メッセージの「分裂」が行われる前に適用されます。* メッセージを検疫エリアに送信できます。	
	アンチスパム **	受信者単位のスキャン	アンチスパム スキャン エンジンでは、メッセージを調査して、さらに処理できるようにその分析結果を返します。
	アンチウイルス *		アンチウイルス スキャンでは、メッセージにウイルスがあるかどうかを調査します。メッセージはスキャンされ、必要に応じて可能であれば修復されます。* メッセージを検疫エリアに送信できます。
	コンテンツ フィルタ *		コンテンツ フィルタが適用されます。* メッセージを検疫エリアに送信できます。
	ウイルス感染フィルタ *		ウイルス感染フィルタ機能を使用すると、ウイルス感染から保護できます。* メッセージを検疫エリアに送信できます。
仮想ゲートウェイ	特定の IP インターフェイス、または IP インターフェイスのグループを使用して、メールを送信します。		

表 2-12 IronPort アプライアンスの電子メール パイプライン：ルーティングおよび配信機能（続き）

配信制限	<ol style="list-style-type: none"> 1. デフォルトの配信インターフェイスを設定します。 2. 発信接続の合計の最大数を設定します。
ドメインベースの制限	ドメインごとに各仮想ゲートウェイの最大発信接続数、システム全体で使用するバウンスプロファイル、および配信の TLS を定義：なし/優先/必須
ドメインベースのルーティング	エンベロープ受信者を書き換えずに、ドメインに基づいてメールをルーティングします。
グローバル配信停止	具体的なリスト（システム全体で設定）に従って、受信者をドロップします。
バウンス プロファイル	配信不可能なメッセージの処理。メッセージフィルタを使用して、リスナーごと、および宛先制御エン트리ごとに設定できます。

* これらの機能では、「検疫エリア」と呼ばれる特殊なキューにメッセージを送信できます。



CHAPTER 3

LDAP クエリー



Cloud Email Security アプライアンスでは LDAP 設定を変更しないことをお勧めします。

ユーザ情報がネットワーク インフラストラクチャ内の LDAP ディレクトリ (Microsoft Active Directory、SunONE Directory Server、OpenLDAP などのディレクトリ) に格納されている場合は、メッセージの受け入れ、ルーティング、および認証のために LDAP サーバに対してクエリーを実行するように Cisco IronPort を設定できます。IronPort アプライアンスは、1 つまたは複数の LDAP サーバと連携させるように設定できます。

この章は、次の内容で構成されています。

- 「概要」 (P.3-2)
- 「LDAP サーバプロファイルの作成」 (P.3-6)
- 「LDAP クエリーに関する作業」 (P.3-17)
- 「受け入れ (受信者検証) クエリー」 (P.3-28)
- 「ルーティング : エイリアス拡張」 (P.3-30)
- 「マスカレード」 (P.3-31)
- 「グループ LDAP クエリー」 (P.3-33)
- 「ドメインベース クエリー」 (P.3-39)
- 「チェーン クエリー」 (P.3-41)
- 「LDAP によるディレクトリ ハーベスト攻撃防止」 (P.3-43)
- 「SMTP 認証を行うための AsyncOS の設定」 (P.3-48)
- 「ユーザの外部認証の設定」 (P.3-61)

- 「スパム検疫へのエンドユーザ認証のクエリー」(P.3-65)
- 「スパム検疫のエイリアス統合のクエリー」(P.3-67)
- 「AsyncOS を複数の LDAP サーバと連携させるための設定」(P.3-69)

概要

ここでは、実行できる LDAP クエリーのタイプ、LDAP と IronPort アプライアンスとが連携してメッセージの認証、受け入れ、ルーティングを行うしくみ、および LDAP と連携するように IronPort アプライアンスを設定する方法の概要を示します。

LDAP クエリーの概要

ユーザ情報がネットワーク インフラストラクチャ内の LDAP ディレクトリに格納されている場合は、次の目的で LDAP サーバに対してクエリーを実行するように IronPort アプライアンスを設定できます。

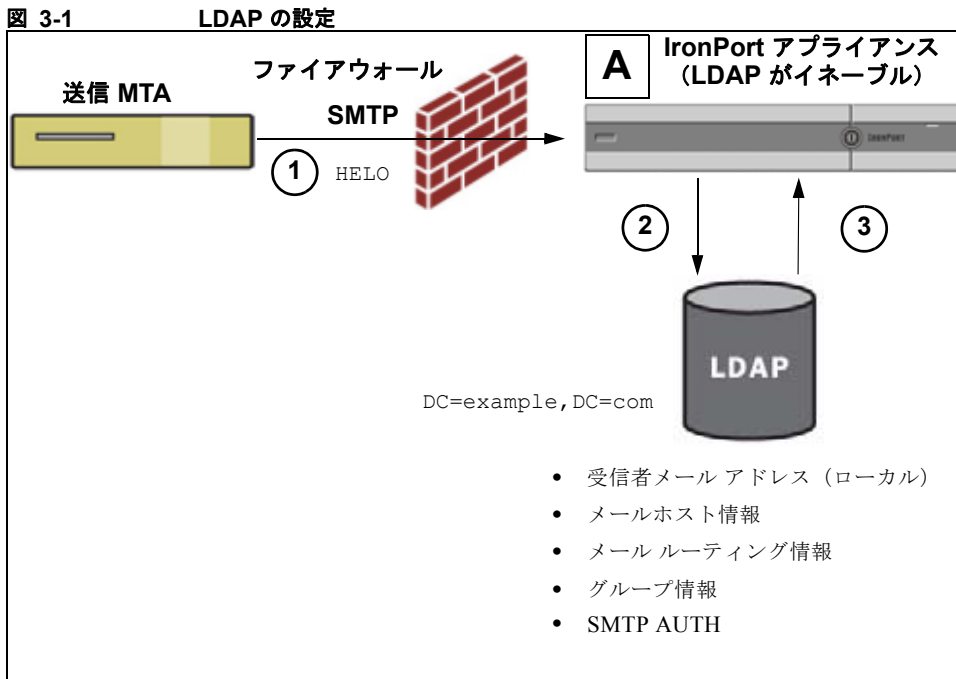
- **受け入れクエリー**。既存の LDAP インフラストラクチャを使用して、着信メッセージ（パブリック リスナーでの）の受信者メールアドレスの扱い方を定義できます。詳細については、「[受け入れ（受信者検証）クエリー](#)」(P.3-28) を参照してください。
- **ルーティング（エイリアシング）**。ネットワーク内の LDAP ディレクトリに格納されている情報に基づいてメッセージを適切なアドレスやメール ホストへルーティングするように、アプライアンスを設定できます。詳細については、「[ルーティング：エイリアス拡張](#)」(P.3-30) を参照してください。
- **マスカレード**。発信メールの場合はエンベロープ送信者、着信メールの場合はメッセージ ヘッダー（To:、Reply To:、From:、CC: など）をマスカレードできます。マスカレードの詳細については、「[マスカレード](#)」(P.3-31) を参照してください。
- **グループクエリー**。LDAP ディレクトリ内のグループに基づいてメッセージに対するアクションを実行するように、IronPort アプライアンスを設定できます。このように設定するには、グループクエリーとメッセージフィルタとを関連付けます。定義済みの LDAP グループに一致するメッセージに対しては、メッセージフィルタに使用できる任意のメッセージアクションを実行できます。詳細については、「[グループ LDAP クエリー](#)」(P.3-33) を参照してください。

- **ドメインベース クエリー**。ドメインベース クエリーを作成すると、同じリスナー上でドメインごとに異なるクエリーを実行できます。電子メールセキュリティ アプライアンスがドメインベース クエリーを実行するときは、どのクエリーを使用するかをドメインに基づいて決定し、そのドメインに関連付けられている LDAP サーバに対してクエリーを実行します。
- **チェーン クエリー**。チェーン クエリーを作成すると、IronPort アプライアンスに一連のクエリーを順番に実行させることができます。チェーン クエリーが設定済みのときは、IronPort アプライアンスはシーケンス内のクエリーを1つずつ実行し、LDAP アプライアンスから肯定的な結果が返されると実行を停止します。
- **ディレクトリ ハーベスト防止**。LDAP ディレクトリを使用したディレクトリ ハーベスト攻撃を防ぐように Cisco IronPort アプライアンスを設定できます。ディレクトリ ハーベスト防止は、SMTP カンパセッション中に行うことも、作業キューの中で行うこともできます。受信者が LDAP ディレクトリ内で見つからない場合に、遅延バウンスを実行するか、そのメッセージ全体をドロップするかを設定できます。その結果、スパム送信者はメールアドレスが有効なものかどうかを区別できなくなります。「[LDAP によるディレクトリ ハーベスト攻撃防止](#)」(P.3-43) を参照してください。
- **SMTP 認証**。AsyncOS では、SMTP 認証がサポートされています。SMTP Auth は、SMTP サーバに接続するクライアントを認証するメカニズムです。この機能を利用すると、ユーザはリモート接続するとき（たとえば自宅や出張先にいる場合）でも、メール サーバを使用してメールを送信できるようになります。詳細については、「[SMTP 認証を行うための AsyncOS の設定](#)」(P.3-48) を参照してください。
- **外部認証**。IronPort アプライアンスにログインするユーザの認証を LDAP ディレクトリを使用して行うように、IronPort アプライアンスを設定できます。詳細については、「[ユーザの外部認証の設定](#)」(P.3-61) を参照してください。
- **スパム検査へのエンドユーザ認証**。エンドユーザ検査画面にログインするユーザを検証するように、アプライアンスを設定できます。詳細については、「[スパム検査へのエンドユーザ認証のクエリー](#)」(P.3-65) を参照してください。
- **スパム検査のエイリアス統合**。スパムに関する電子メール通知を使用する場合、このクエリーを使用してエンドユーザのエイリアスを統合すると、エンドユーザがエイリアスのメールアドレスごとに検査通知を受け取ることはなくなります。詳細については、「[スパム検査のエイリアス統合のクエリー](#)」(P.3-67) を参照してください。

LDAP と AsyncOS との連携の仕組み

LDAP ディレクトリと IronPort アプライアンスとを連携させると、受信者受け入れ、メッセージルーティング、およびヘッダ マスカレードに LDAP ディレクトリ サーバを使用できます。LDAP グループクエリーをメッセージフィルタとともに使用すると、メッセージが IronPort アプライアンスで受信されたときの取り扱いのルールを作成できます。

図 3-1 に、Cisco IronPort アプライアンスと LDAP がどのように連携するかを示します。



ステップ 1 送信 MTA からパブリック リスナー「A」にメッセージが SMTP 経由で送信されます。

ステップ 2 Cisco IronPort アプライアンスは、LDAP サーバに対してクエリーを実行します。この LDAP サーバは [System Administration] > [LDAP] ページ (またはグローバル ldapconfig コマンド) で定義されます。

ステップ 3 データが LDAP ディレクトリから受信されます。リスナーで使用するよう
[System Administration] > [LDAP] ページ (または `ldapconfig` コマンド) で定
義されたクエリーに応じて、次の処理が実行されます。

- メッセージを新しい受信者アドレスにルーティングするか、ドロップま
たはバウンスする
- メッセージを新しい受信者のメールホストにルーティングする
- メッセージヘッダー From:、To:、CC: をクエリーに基づいて書き換え
る
- メッセージフィルタールール `rcpt-to-group` または `mail-from-group` で
定義された、それ以降のアクション (グループクエリーと組み合わせて
使用)。



(注)

IronPort アプライアンスからは、複数の LDAP サーバに接続できます。複数の
LDAP サーバを使用して、ロードバランシングやフェールオーバーを行うよう
に LDAP プロファイルを設定できます。複数の LDAP サーバと連携させる方法
の詳細については、「[AsyncOS を複数の LDAP サーバと連携させるための設定](#)
(P.3-69) を参照してください。

AsyncOS を LDAP と連携させるための設定

受け入れ、ルーティング、エイリアシング、およびマスカレードのために
IronPort アプライアンスを LDAP ディレクトリと連携させるには、以下の手順
に従って AsyncOS アプライアンスを設定する必要があります。

ステップ 1 LDAP サーバ プロファイルを設定します。サーバプロファイルの内容は、
AsyncOS から LDAP サーバに接続するための、次のような情報です。

- クエリー送信先となるサーバの名前とポート
- ベース DN
- サーバへのバインドのための認証に必要な情報

サーバプロファイルの設定方法の詳細については、「[LDAP サーバプロフ
ァイルの作成](#)」(P.3-6) を参照してください。

LDAP サーバプロファイルを設定するときに、AsyncOS からの接続先とな
る LDAP サーバを 1 つまたは複数設定できます。

AsyncOS から複数のサーバに接続するように設定する方法については、「[AsyncOS を複数の LDAP サーバと連携させるための設定](#)」(P.3-69) を参照してください。

ステップ 2 LDAP クエリーを設定します。 LDAP クエリーは、LDAP サーバプロファイルで設定します。ここで設定するクエリーは、実際に使用する LDAP の実装とスキーマに合わせて調整してください。

作成できる LDAP クエリーのタイプについては、「[LDAP クエリーの概要](#)」(P.3-2) を参照してください。

クエリーの記述方法については、「[LDAP クエリーに関する作業](#)」(P.3-17) を参照してください。

ステップ 3 LDAP サーバプロファイルをパブリック リスナーまたはプライベート リスナーに対してイネーブルにします。 LDAP サーバプロファイルをリスナーに対してイネーブルにすると、そのリスナーによって、メッセージの受け入れ、ルーティング、または送信のときに LDAP クエリーが実行されるようになります。

詳細については、「[LDAP、LDAP クエリー、およびリスナーとの連携](#)」(P.3-10) を参照してください。



(注)

グループクエリーを設定するときは、AsyncOS と LDAP サーバとを連携させるためにさらに設定作業が必要です。グループクエリーの設定方法については、「[グループ LDAP クエリー](#)」(P.3-33) を参照してください。エンドユーザ認証またはスパム通知統合のクエリーを設定するときは、IronPort スпам検疫機能への LDAP エンドユーザ アクセスをイネーブルにする必要があります。IronPort スпам検疫の詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide*』の「[Configuring the IronPort Spam Quarantines Feature](#)」を参照してください。

LDAP サーバプロファイルの作成

LDAP ディレクトリを使用するように AsyncOS を設定するには、LDAP サーバプロファイルを作成します。この中に、LDAP サーバに関する情報が格納されます。

LDAP サーバプロファイルを作成するには、次の手順に従います。

- ステップ 1** [System Administration] > [LDAP] ページの [Add LDAP Server Profile] をクリックします。[Add LDAP Server Profile] ページが表示されます。

図 3-2 LDAP サーバ プロファイルの設定
Add LDAP Server Profile

The screenshot shows the 'Add LDAP Server Profile' configuration page. The main section is 'LDAP Server Settings'. Under 'Server Attributes', there are input fields for 'LDAP Server Profile Name', 'Host Name(s)', 'Server Type', 'Port', and 'Base DN'. The 'Authentication Method' section has radio buttons for 'Anonymous' (selected) and 'Use Password', with corresponding 'Username' and 'Password' fields. The 'Advanced' section has a 'Use SSL' checkbox and a note: 'System defaults for these settings are suitable for most users.' Below this is a 'Test Server(s)' button. The bottom section, 'Server Attribute Testing', lists several query types, each with a checkbox and the text 'Not configured': 'Accept Query', 'Routing Query', 'Masquerade Query', 'Group Query', 'SMTP Authentication Query', 'External Authentication Queries', 'Spam Quarantine End-User Authentication Query', and 'Spam Quarantine Alias Consolidation Query'.

- ステップ 2** サーバ プロファイルの名前を入力します。

- ステップ 3** LDAP サーバのホスト名を入力します。

複数のホスト名を入力すると、LDAP サーバのフェールオーバーやロードバランシングができるようになります。複数のエントリを指定する場合は、カンマで区切ります。詳細については、「[AsyncOS を複数の LDAP サーバと連携させるための設定](#)」(P.3-69)を参照してください。

- ステップ 4** 認証方法を選択します。匿名認証を使用することも、ユーザ名とパスワードを指定することもできます。
- ステップ 5** LDAP サーバのタイプを、[Active Directory]、[OpenLDAP]、[Unknown or Other] から選択します。
- ステップ 6** ポート番号を入力します。

デフォルト ポートは 3268 です。これは Active Directory のデフォルト ポートであり、複数サーバ環境のグローバル カタログへのアクセスが可能になります。

- ステップ 7** LDAP サーバのベース DN（識別名）を入力します。

ユーザ名とパスワードを使用して認証する場合は、パスワードが格納されているエン트리への完全 DN がユーザ名に含まれている必要があります。たとえば、マーケティング グループに属しているユーザの電子メールアドレスが `joe@example.com` であるとします。このユーザのエント리는、次のようになります。

```
uid=joe, ou=marketing, dc=example dc=com
```

- ステップ 8** LDAP サーバとの通信に SSL を使用するかどうかを選択します。
- ステップ 9** [Advanced] で、キャッシュの存続可能時間を入力します。この値は、キャッシュを保持する時間の長さです。
- ステップ 10** 保持するキャッシュ エントリの最大数を入力します。
- ステップ 11** 同時接続の最大数を入力します。

ロード バランシングを行うように LDAP サーバ プロファイルを設定した場合は、指定された LDAP サーバにこれらの接続が振り分けられます。たとえば、同時接続数を 10 と設定し、3 台のサーバを使用して接続のロード バランシングを行う場合は、AsyncOS によってサーバへの接続が 10 ずつ作成され、接続の総数は 30 となります。



(注) 同時接続の最大数には、LDAP クエリーに使用される LDAP 接続も含まれます。ただし、IronPort スпам 検疫機能に対して LDAP 認証を使用する場合は、これよりも多くの接続が開かれることがあります。

- ステップ 12** サーバへの接続をテストするために、[Test Server(s)] ボタンをクリックします。複数の LDAP サーバを指定した場合は、すべてのサーバのテストが実行されます。テストの結果が [Connection Status] フィールドに表示されます。詳細については、「LDAP サーバのテスト」(P.3-9) を参照してください。

- ステップ 13** クエリーを作成します。該当するチェックボックスをオンにして、フィールドに入力します。選択できるのは、[Accept]、[Routing]、[Masquerade]、[Group]、[SMTP Authentication]、[External Authentication]、[Spam Quarantine End-User Authentication]、[Spam Quarantine Alias Consolidation] です。



(注) メッセージを受信または送信するときに IronPort アプライアンスが LDAP クエリーを実行できるようにするには、該当するリスナーに対して LDAP クエリーをイネーブルにする必要があります。詳細については、「LDAP、LDAP クエリー、およびリスナーとの連携」(P.3-10) を参照してください。

- ステップ 14** クエリーをテストするために、[Test Query] ボタンをクリックします。

テスト パラメータを入力して [Run Test] をクリックします。テストの結果が [Connection Status] フィールドに表示されます。クエリーの定義や属性に変更を加えた場合は、[Update] をクリックします。詳細については、「LDAP クエリーのテスト」(P.3-25) を参照してください。



(注) 空パスワードでのバインドを許可するように LDAP サーバが設定されている場合は、パスワードフィールドが空でもクエリーのテストは合格となります。

- ステップ 15** 変更を送信して確定します。



(注) サーバ設定の数に制限はありませんが、設定できるクエリーは、サーバ 1 台につき受信者受け入れ 1 つ、ルーティング 1 つ、マスカレード 1 つ、グループクエリー 1 つのみです。

LDAP サーバのテスト

[Add/Edit LDAP Server Profile] ページの [Test Server(s)] ボタン(または CLI の `ldapconfig` コマンドの `test` サブコマンド) を使用して、LDAP サーバへの接続をテストします。サーバポートへの接続に成功したか失敗したかを示すメッセージが表示されます。複数の LDAP サーバが設定されている場合は、各サーバのテストが実行されて、結果が個別に表示されます。

LDAP、LDAP クエリー、およびリスナーとの連携

メッセージを受信または送信するときに IronPort アプライアンスが LDAP クエリーを実行できるようにするには、該当するリスナーに対して LDAP クエリーをイネーブルにする必要があります。

グローバル設定の設定

LDAP グローバル設定では、すべての LDAP トラフィックをアプライアンスがどのように扱うかを定義します。LDAP のグローバル設定を指定するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** [System Administration] > [LDAP] ページの [Edit Settings] をクリックします。
[Edit LDAP Settings] ページが表示されます。

図 3-3 [Edit LDAP Settings] ページ
Edit LDAP Settings



- ステップ 2** LDAP トラフィックに使用する IP インターフェイスを選択します。インターフェイスの 1 つが自動的にデフォルトとして選択されます。
- ステップ 3** LDAP インターフェイスに使用する TLS 証明書を選択します ([Network] > [Certificates] ページまたは CLI の certconfig コマンドを使用して追加された TLS 証明書。「[TLS を使用した SMTP カンバセーションの暗号化](#)」(P.1-33) を参照してください)。
- ステップ 4** 変更を送信して確定します。

LDAP サーバ プロファイル作成の例

次に示す例では、[System Administration] > [LDAP] ページを使用してアプライアンスのバインド先となる LDAP サーバを定義し、受信者受け入れ、ルーティング、およびマスカレードのクエリーを設定します。



(注) LDAP 接続試行のタイムアウトは 60 秒です。この時間には、DNS ルックアップと接続そのものに加えて、アプライアンス自体の認証バインド（該当する場合）も含まれます。初回の失敗後は、同じサーバ内の別のホストに対する試行がただちに行われます（2 つ以上のホストをカンマ区切りリストで指定した場合）。サーバ内にホストが 1 つしかない場合は、そのホストへの接続が繰り返し試行されます。

図 3-4 LDAP サーバ プロファイルの設定 (1/2)

The screenshot shows the 'LDAP Server Settings' configuration page. The 'Server Attributes' section includes the following fields and values:

- LDAP Server Profile Name: PublicLDAP
- Host Name(s): myldapserver.example.com
- Authentication Method: Use Password (selected)
- Username: cn=anonymous
- Password: [masked]
- Server Type: Active Directory
- Port: 3268
- Base DN: dc=example, dc=com
- Connection Protocol: Use SSL (unchecked)
- Advanced settings:
 - Cache TTL (Time-to-live): 900 Seconds
 - Maximum Retained Cache Entries: 10000
 - Maximum number of simultaneous connections for each host: 10
 - Multiple host options: Load-balance connections among all hosts listed (selected)
- Server Attribute Testing: Test Server(s)

最初に、「PublicLDAP」というニックネームを myldapserver.example.com LDAP サーバに与えます。接続数は 10（デフォルト値）に設定されており、複数 LDAP サーバ（ホスト）のロード バランス オプションはデフォルトのままとなっています。ここで複数のホストの名前を、カンマ区切りのリストとして指定できます。クエリーの送信先は、ポート 3268（デフォルト値）です。SSL は、このホストの接続プロトコルとしてはイネーブルになっていません。example.com のベース DN が定義されています（dc=example,dc=com）。キャッシュの存続可能時間は 900 秒、キャッシュ エントリの最大数は 10000 に設定されています。認証方法は、「パスワードを使用」に設定されています。

受信者受け入れ、メールルーティング、およびマスクレドのクエリーが定義されています。クエリー名では、大文字と小文字が区別されます。正しい結果が返されるようにするには、正確に一致している必要があります。

図 3-5 LDAP サーバ プロファイルの設定 (2/2)

<input checked="" type="checkbox"/> Accept Query	
Name:	PublicLDAP.accept
Query String:	[proxyAddresses=smtp:(a)] Test Query
<input checked="" type="checkbox"/> Routing Query	
Name:	PublicLDAP.routing
Query String:	[mailLocalAddress=(a)] Test Query
Recipient Email to Rewrite the Envelope Header:	[mailRoutingAddress]
Alternative Mailhost Attribute:	[mailHost]
SMTP Call-Ahead Server Attribute (optional):	<small>This attribute is used only if an SMTP Call-Ahead server is configured. Go to Network > SMTP Call-Ahead.</small>
<input checked="" type="checkbox"/> Masquerade Query	
Name:	PublicLDAP.masquerade
Query String:	[mailRoutingAddress=(a)] Test Query
Attribute Containing Externally Visible Full Email Address:	[mailLocalAddress]

パブリック リスナー上の LDAP クエリーのイネーブル化

この例では、パブリック リスナー「InboundMail」で受信者受け入れに対して LDAP クエリーを使用するように更新します。さらに、受信者受け入れの判定を SMTP カンバセーション中に行うように設定します（詳細については、「[受け入れ（受信者検証）クエリー](#)」（P.3-28）を参照してください）。

図 3-6 リスナーでの受け入れとルーティングのクエリーのイネーブル化

LDAP Queries: Accept

Accept Query: exampleTest.accept

Work Queue

Non-Matching Recipients: Bounce

SMTP Conversation

If the LDAP server is unreachable:

Allow Mail in

Drop Connection, return error code:

Code: 451

Text: Temporary recipient validation er

When the Directory Harvest Attack Prevention threshold (maximum invalid recipients per hour) is reached:

Code: 550

Text: Too many invalid recipients

Drop Connection if the Directory Harvest Attack Prevention threshold (maximum invalid recipients per hour) is reached within an SMTP conversation.

Routing

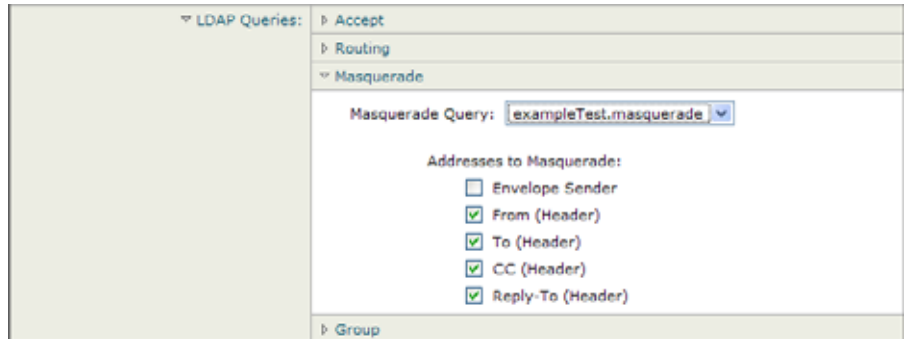
Masquerade

Group

プライベート リスナーでの LDAP クエリーのイネーブル化

この例では、プライベート リスナー「OutboundMail」で LDAP クエリーを使用してマスカレードを行うように更新します。マスカレード対象のフィールドは、From、To、CC、Reply-To があります。

図 3-7 リスナーでのマスカレード クエリーのイネーブル化



Microsoft Exchange 5.5 に対する拡張サポート

AsyncOS には、Microsoft Exchange 5.5 をサポートするための設定オプションがあります。これよりも新しいバージョンの Microsoft Exchange を使用する場合は、このオプションをイネーブルにする必要はありません。LDAP サーバを設定するときに、Microsoft Exchange 5.5 サポートをイネーブルにするかどうかを選択できます。選択するには、CLI を使用する必要があります。次に示すように、`ldapconfig -> edit -> server -> compatibility` サブコマンドを実行して、質問に「y」と答えます。

```
mail3.example.com> ldapconfig
```

```
Current LDAP server configurations:
```

```
1. PublicLDAP: (ldapexample.com:389)
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new server configuration.
- EDIT - Modify a server configuration.
- DELETE - Remove a server configuration.

```
[ ]> edit
```

```
Enter the name or number of the server configuration you wish to edit.
```

```
[ ]> 1
```

```
Name: PublicLDAP
```

```
Hostname: ldapexample.com Port 389
```

```
Authentication Type: anonymous
```

```
Base: dc=ldapexample,dc=com
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- SERVER - Change the server for the query.
- LDAPACCEPT - Configure whether a recipient address should be accepted or bounced/dropped.
- LDAPROUTING - Configure message routing.
- MASQUERADE - Configure domain masquerading.
- LDAPGROUP - Configure whether a sender or recipient is in a specified group.
- SMTPAUTH - Configure SMTP authentication.

```
[ ]> server
```

```
Name: PublicLDAP
```

Hostname: ldapexample.com Port 389

Authentication Type: anonymous

Base: dc=ldapexample,dc=com

Microsoft Exchange 5.5 Compatibility Mode: Disabled

Choose the operation you want to perform:

- NAME - Change the name of this configuration.
- HOSTNAME - Change the hostname used for this query.
- PORT - Configure the port.
- AUTHTYPE - Choose the authentication type.
- BASE - Configure the query base.
- COMPATIBILITY - Set LDAP protocol compatibility options.

[]> compatibility

Would you like to enable Microsoft Exchange 5.5 LDAP compatibility mode? (This is not recommended for versions of Microsoft Exchange later than 5.5, or other LDAP servers.) [N]> y

Do you want to configure advanced LDAP compatibility settings?
(Typically not required) [N]>

Name: PublicLDAP

Hostname: ldapexample.com Port 389

```
Authentication Type: anonymous

Base: dc=ldapexample,dc=com

Microsoft Exchange 5.5 Compatibility Mode: Enabled (attribute
"objectClass")

Choose the operation you want to perform:

- NAME - Change the name of this configuration.

- HOSTNAME - Change the hostname used for this query.

- PORT - Configure the port.

- AUTHTYPE - Choose the authentication type.

- BASE - Configure the query base.

- COMPATIBILITY - Set LDAP protocol compatibility options.

[]>
```

LDAP クエリーに関する作業

LDAP サーバ プロファイル内に、実行したい LDAP クエリーのタイプごとに 1 つのエントリを作成します。LDAP クエリーを作成するときは、実際に使用する LDAP サーバのクエリー構文で入力する必要があります。作成するクエリーは、実際に使用する LDAP ディレクトリ サービスの実装に合わせて調整が必要であることに注意してください。特に、組織固有のニーズを満たすように新しいオブジェクトクラスや属性がディレクトリに追加されている場合です。

LDAP クエリーのタイプ

次の各項で、各タイプのクエリーの例を示し、設定方法を詳しく説明します。

- **受け入れクエリー**。詳細については、「[受け入れ（受信者検証）クエリー](#)」(P.3-28) を参照してください。

- ルーティング クエリー。詳細については、「ルーティング：エイリアス拡張」(P.3-30) を参照してください。
- マスカレード クエリー。詳細については、「マスカレード」(P.3-31) を参照してください。
- グループ クエリー。詳細については、「グループ LDAP クエリー」(P.3-33) を参照してください。
- ドメインベース クエリー。詳細については、「ドメインベース クエリー」(P.3-39) を参照してください。
- チェーン クエリー。詳細については、「チェーン クエリー」(P.3-41) を参照してください。

次の目的のためにクエリーを設定することもできます。

- ディレクトリ ハーベスト防止。詳細については、「LDAP クエリーの概要」(P.3-2) を参照してください。
- SMTP 認証。詳細については、「SMTP 認証を行うための AsyncOS の設定」(P.3-48) を参照してください。
- 外部認証。詳細については、「ユーザの外部認証の設定」(P.3-61) を参照してください。
- スпам検疫へのエンドユーザ認証のクエリー。詳細については、「スパム検疫へのエンドユーザ認証のクエリー」(P.3-65) を参照してください。
- スпам検疫のエイリアス統合のクエリー。詳細については、「スパム検疫のエイリアス統合のクエリー」(P.3-67) を参照してください。

指定した検索クエリーは、システム上で設定済みのすべてのリスナーに使用できます。

ベース識別名 (DN)

ディレクトリのルート レベルを「ベース」と呼びます。ベースの名前は DN (distinguishing name) です。Active Directory (および RFC 2247 に基づく標準) のベース DN のフォーマットでは、DNS ドメインがドメイン コンポーネント (dc=) に変換されます。たとえば、example.com のベース DN は「dc=example, dc=com」です。DNS 名の各部分が順番に表現されることに注意してください。これには、実際の LDAP 設定が反映されることも、されないこともあります。

実際に使用するディレクトリに複数のドメインが含まれている場合は、クエリーの対象のベースを1つだけ入力するのでは不都合であることもあります。そのような場合は、LDAP サーバ設定を指定するときに、ベースを「NONE」に設定します。ただし、このように設定すると検索の効率が低下します。

LDAP クエリーの構文

LDAP パス内でスペースを使用できます。引用符で囲む必要はありません。CN と DC の構文では、大文字と小文字は区別されません。

```
Cn=First Last,oU=user,dc=domain,DC=COM
```

クエリーに入力する変数名では大文字と小文字が区別されるので、正しく動作させるには、使用する LDAP 実装に一致させる必要があります。たとえば、プロンプトで `mailLocalAddress` と入力したときに実行されるクエリーは、`maillocaladdress` と入力したときとは異なります。

トークン

次のトークンを LDAP クエリー内で使用できます。

- {a} ユーザ名 @ ドメイン名
- {d} ドメイン名
- {dn} 識別名
- {g} グループ名
- {u} ユーザ名
- {f} MAIL FROM: アドレス



(注) {f} トークンを使用できるのは、受け入れクエリーのみです。

たとえば、メールを受け入れるための Active Directory LDAP サーバに対するクエリーは、次のようになります。

```
((!(mail={a})(proxyAddresses=sntp:{a})))
```



(注) 作成したクエリーは、[LDAP] ページの [Test] 機能（または `ldapconfig` コマンドの `test` サブコマンド）を使用してテストすることを強く推奨します。期待したとおりの結果が返されることを確認してから、リスナーに対して LDAP 機能をイネーブルにしてください。詳細については、「LDAP クエリーのテスト」(P.3-25) を参照してください。

セキュア LDAP (SSL)

AsyncOS と LDAP サーバとの通信に SSL を使用するように設定できます。SSL を使用するように LDAP サーバプロファイルを設定した場合の動作は次のようになります。

- AsyncOS は、CLI の `certconfig` で設定された LDAPS 証明書を使用します（「自己署名証明書の作成」(P.1-35) を参照）。
LDAP サーバによっては、LDAPS 証明書の使用をサポートするように設定する作業が必要になります。
- 設定済みの LDAPS 証明書がない場合は、デモ証明書が使用されます。

ルーティング クエリー

LDAP ルーティング クエリーの再帰の制限はありません。ルーティングは完全にデータ ドリブンで行われます。ただし、AsyncOS には、ルーティングの永久ループを防止するために循環参照の有無を調べる機能があります。

匿名クエリー

組織によっては、匿名クエリーを許可するように LDAP ディレクトリ サーバを設定することが必要になります。（匿名クエリーを許可すると、クライアントが匿名でサーバにバインドしてクエリーを実行できるようになります）。匿名クエリーを許可するように Active Directory を設定する具体的な手順については、Microsoft サポート技術情報 320528 を参照してください。URL は次のとおりです。

<http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb%3Ben-us%3B320528>

または、認証とクエリー実行専用のユーザを 1 つ用意します。このようにすれば、任意のクライアントから匿名クエリーを受け付けるように LDAP ディレクトリ サーバを開放する必要はありません。

ここでは、次の手順について説明します。

- 「匿名」認証を許可するように Microsoft Exchange 2000 サーバをセットアップする方法。
- 「匿名バインド」を許可するように Microsoft Exchange 2000 サーバをセットアップする方法。
- IronPort AsyncOS が LDAP データを Microsoft Exchange 2000 サーバから「匿名バインド」と「匿名」認証の両方を使用して取得するようにセットアップする方法。

ユーザ電子メールアドレスを問い合わせるという目的で「匿名」または「匿名バインド」認証を許可するには、Microsoft Exchange 2000 サーバに対して特定のアクセス許可を設定する必要があります。このような設定が非常に役立つのは、SMTP ゲートウェイに対する着信メール メッセージの有効性を検証するために LDAP クエリーを使用する場合です。

匿名認証のセットアップ

ここで説明するセットアップ手順を実行すると、Microsoft Windows Active Directory 内の Active Directory サーバおよび Exchange 2000 サーバに対する未認証のクエリーで特定のデータを使用できるようになります。Active Directory への「匿名バインド」を許可する手順については、「[Active Directory の匿名バインドのセットアップ](#)」(P.3-23) を参照してください。

ステップ 1 どのような Active Directory アクセス許可が必要であることを確認する。

ADSI Edit スナップインまたは LDP ユーティリティを使用して、以下の Active Directory オブジェクトの属性に対するアクセス許可を修正する必要があります。

- クエリーの対象であるドメインの、ドメイン名前付けコンテキストのルート。
- 電子メール情報クエリーの対象であるユーザが属している OU および CN オブジェクトすべて。

次の表に、必要なコンテナすべてに適用されている必要のあるアクセス許可を示します。

ユーザオブジェクト	権限	継承	アクセス許可のタイプ
Everyone	内容の一覧表示	コンテナ オブジェクト	オブジェクト
Everyone	内容の一覧表示	組織単位オブジェクト	オブジェクト
Everyone	パブリック インフォメーション読み取り	ユーザ オブジェクト	プロパティ
Everyone	電話とメールのオプションの読み取り	ユーザ オブジェクト	プロパティ

ステップ 2 Active Directory のアクセス許可を設定する。

- Windows 2000 Support Tools から ADSIEdit を開きます。
- [Domain Naming Context] フォルダを見つけます。このフォルダに、ドメインの LDAP パスがあります。
- [Domain Naming Context] フォルダを右クリックして [Properties] をクリックします。
- [Security] をクリックします。
- [Advanced] をクリックします。
- [Add] をクリックします。
- ユーザ オブジェクト [Everyone] をクリックして [OK] をクリックします。
- [Permission Type] タブをクリックします。
- [Apply onto] ボックスの [Inheritance] をクリックします。
- [Permission] アクセス許可の [Allow] チェックボックスをオンにします。

ステップ 3 IronPort メッセージング ゲートウェイを設定する

Command Line Interface (CLI; コマンドライン インターフェイス) の `ldapconfig` を使用して、LDAP サーバ エントリを作成します。次の情報を指定してください。

- Active Directory または Exchange サーバのホスト名
- ポート 3268

- ドメインのルート名前付けコンテキストに一致するベース DN
- 認証タイプ：匿名

Active Directory の匿名バインドのセットアップ

ここで説明するセットアップ手順を実行すると、Microsoft Windows Active Directory 内の Active Directory サーバおよび Exchange 2000 サーバに対する匿名バインドクエリーで特定のデータを使用できるようになります。Active Directory サーバの匿名バインドを使用するときは、ユーザ名 anonymous とブランクのパスワードが送信されます。



(注)

匿名バインドを試行するときに何らかのパスワードが Active Directory サーバに送信されると、認証に失敗することがあります。

ステップ 1

どのような Active Directory アクセス許可が必要であるかを確認する。

ADSI Edit スナップインまたは LDP ユーティリティを使用して、以下の Active Directory オブジェクトの属性に対するアクセス許可を修正する必要があります。

- クエリーの対象であるドメインの、ドメイン名前付けコンテキストのルート。
- 電子メール情報クエリーの対象であるユーザが属している OU および CN オブジェクトすべて。

次の表に、必要なコンテナすべてに適用されている必要のあるアクセス許可を示します。

ユーザ オブジェクト	権限	継承	アクセス許可のタイプ
ANONYMOUS LOGON	内容の一覧表示	コンテナ オブジェクト	オブジェクト
ANONYMOUS LOGON	内容の一覧表示	組織単位オブジェクト	オブジェクト
ANONYMOUS LOGON	パブリック インフォメーション読み取り	ユーザ オブジェクト	プロパティ
ANONYMOUS LOGON	電話とメールのオプションの読み取り	ユーザ オブジェクト	プロパティ

ステップ 2 Active Directory のアクセス許可を設定する。

- Windows 2000 Support Tools から ADSIEdit を開きます。
- [Domain Naming Context] フォルダを見つけます。このフォルダに、ドメインの LDAP パスがあります。
- [Domain Naming Context] フォルダを右クリックして [Properties] をクリックします。
- [Security] をクリックします。
- [Advanced] をクリックします。
- [Add] をクリックします。
- ユーザ オブジェクト [ANONYMOUS LOGON] をクリックして [OK] をクリックします。
- [Permission Type] タブをクリックします。
- [Apply onto] ボックスの [Inheritance] をクリックします。
- [Permission] アクセス許可の [Allow] チェックボックスをオンにします。

ステップ 3 IronPort メッセージング ゲートウェイを設定する

[System Administration] > [LDAP] ページ (または CLI の `ldapconfig`) を使用して LDAP サーバ エントリを作成します。次の情報を指定してください。

- Active Directory または Exchange サーバのホスト名
- ポート 3268
- ドメインのルート名前付けコンテキストに一致するベース DN
- 認証タイプ: パスワード ベース (`cn=anonymous` をユーザとして使用し、パスワードはブランク)

Active Directory の実装に関する注意

- Active Directory サーバが LDAP 接続を受け付けるポートは、3268 と 389 です。グローバル カタログへのアクセス用のデフォルト ポートは 3268 です。

- Active Directory サーバが LDAPS 接続を受け付けるポートは、636 と 3269 です。Microsoft 製品で LDAPS がサポートされるのは、Windows Server 2003 以上です。
- Cisco IronPort アプライアンスは、グローバル カタログでもあるドメイン コントローラに接続してください。これは、複数のベースに対するクエリーを同じサーバを使用して実行できるようにするためです。
- クエリーを正常に実行するには、Active Directory の中で、ディレクトリ オブジェクトに対する読み取り許可をグループ Everyone に付与する必要があります。これには、ドメイン名前付けコンテキストのルートも含まれます。
- 一般的に、多くの Active Directory 実装では、mail 属性エントリに一致する値の「ProxyAddresses」属性エントリが存在します。
- Microsoft Exchange 環境が同じインフラストラクチャ内に複数あり、互いを認識している場合は、Exchange 環境の間でメールをルーティングするときに、送信元 MTA に戻る方向のルートは通常は必要ありません。

LDAP クエリーのテスト

[Add/Edit LDAP Server Profile] ページの [Test Query] ボタン（または CLI の test サブコマンド）を使用して、クエリー タイプごとに、設定した LDAP サーバに対するクエリーをテストします。結果が表示されるだけでなく、クエリー接続テストの各ステージの詳細も表示されます。テストは、クエリー タイプのそれぞれに対して行うことができます。

ldaptest コマンドを、次の例のようにバッチ コマンドとして使用できます。

```
ldaptest LDAP.ldapaccept foo@ironport.com
```

LDAP サーバ属性の Host Name フィールドに複数のホストを入力した場合は、各 LDAP サーバに対してクエリーのテストが行われます。

表 3-1 は、テスト結果の要約です。(ldaptest コマンドを使用することもできます)。

表 3-1 LDAP クエリーのテスト

クエリーのタイプ	受信者が一致する場合 (PASS)	受信者が一致しない場合 (FAIL)
受信者受け入れ ([Accept]、ldapaccept)	メッセージを受け入れます。	受信者が無効：カンパセーションまたは遅延バウンスまたはメッセージをドロップ (リスナー設定による)。DHAP：ドロップ。
ルーティング ([Routing]、ldaprouting)	クエリーの設定に基づいてルーティングします。	このメッセージの処理を続行します。
マスカレード ([Masquerade]、masquerade)	クエリー内で定義された変数マッピングに従ってヘッダーを変更します。	このメッセージの処理を続行します。
グループメンバーシップ ([Group]、ldapgroup)	メッセージ フィルタ ルールに対して「true」を返します。	メッセージ フィルタ ルールに対して「false」を返します。
SMTP Auth ([SMTP Authentication]、smtpauth)	LDAP サーバから返されたパスワードを使用して認証を行います。つまり、SMTP 認証が行われます。	一致するパスワードを見つけることはできません。SMTP 認証の試行は失敗します。
外部認証 (externalauth)	バインド、ユーザ レコード、およびユーザのグループ メンバーシップに対して個別に「match positive」が返されます。	バインド、ユーザ レコード、およびユーザのグループ メンバーシップに対して個別に「match negative」が返されません。
スパム検査へのエンドユーザ認証 (isqauth)	エンドユーザ アカウントに対して「match positive」が返されます。	一致するパスワードを見つけることはできません。エンドユーザ認証の試行は失敗します。
スパム検査のエイリアス統合 (isqalias)	統合されたスパム通知の送信先である電子メールアドレスが返されます。	スパム通知の統合はできません。



(注) クエリーに入力する変数名では大文字と小文字が区別されるので、正しく動作させるには、使用する LDAP 実装に一致させる必要があります。たとえば、プロンプトで `mailLocalAddress` と入力したときに実行されるクエリーは、`maillocaladdress` と入力したときとは異なります。作成したすべてのクエリーについて、`ldapconfig` コマンドの `test` サブコマンドを使用してテストし、正しい結果が返されることを確認することを強く推奨します。

LDAP サーバへの接続のトラブルシューティング

LDAP サーバがアプライアンスから到達不能である場合は、次のエラーのいずれかが表示されます。

- Error: LDAP authentication failed: <LDAP Error "invalidCredentials" [0x31]>
- Error: Server unreachable: unable to connect
- Error: Server unreachable: DNS lookup failure

サーバが到達不能になる原因としては、サーバ設定で入力されたポートの誤りや、ファイアウォールでポートが開いていないことが考えられます。LDAP サーバの通信には一般に、ポート 3268 または 389 が使用されます。Active Directory では、複数サーバ環境でのグローバルカタログへのアクセスにはポート 3268 が使用されます（詳細については『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「Firewall Information」を参照してください）。AsyncOS 4.0 で、LDAP サーバと SSL 経由で通信する（通常はポート 636 を使用）機能が追加されました。詳細については、「[セキュア LDAP \(SSL\)](#) (P.3-20) を参照してください。

サーバが到達不能になる原因としてはその他に、入力されたホスト名が解決不可能であることが考えられます。

[Add/Edit LDAP Server Profile] ページの [Test Server(s)]（または CLI の `ldapconfig` コマンドの `test` サブコマンド）を使用すると、LDAP サーバへの接続をテストできます。詳細については、「[LDAP サーバのテスト](#)」(P.3-9) を参照してください。

LDAP サーバが到達不能である場合：

- LDAP 受け入れまたはマスカレードまたはルーティングが作業キューに対してイネーブルになっている場合は、メールは作業キュー内に留まります。

- LDAP 受け入れはイネーブルになっておらず、他のクエリー（グローバルポリシー チェックなど）がフィルタ内で使用されている場合は、そのフィルタの評価結果が `false` になります。

受け入れ（受信者検証）クエリー

既存の LDAP インフラストラクチャを使用して、着信メッセージ（パブリックリスナーでの）の受信者メールアドレスの扱い方を定義できます。ディレクトリ内のユーザ データに対する変更は、次回 Cisco IronPort アプライアンスがディレクトリ サーバに対してクエリーを実行したときに更新されます。キャッシュのサイズと、Cisco IronPort が取得したデータを保持する時間の長さは設定可能です。



(注)

特別な受信者（たとえば `administrator@example.com`）に対して LDAP 受け入れクエリーをバイパスすることもできます。このように設定するには、受信者アクセス テーブル（RAT）を使用します。この設定の方法については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「Configuring the Gateway to Receive Email」を参照してください。

受け入れクエリーの例

表 3-2 に、受け入れクエリーの例を示します。

表 3-2 一般的な LDAP 実装での LDAP クエリー文字列の例：受け入れ

クエリーの対象	受信者検証
OpenLDAP	<pre>(mailLocalAddress={a}) (mail={a}) (mailAlternateAddress={a})</pre>
Microsoft Active Directory アドレス帳 Microsoft Exchange	<pre>((mail={a})(proxyAddresses=smtpp:{a}))</pre>

表 3-2 一般的な LDAP 実装での LDAP クエリー文字列の例：受け入れ（続き）

クエリーの対象	受信者検証
Sun ONE Directory Server	(mail={a}) (mailAlternateAddress={a}) (mailEquivalentAddress={a}) (mailForwardingAddress={a}) (mailRoutingAddress={a})
Lotus Notes Lotus Domino	(((mail={a})(uid={u}))(cn={u})) ((ShortName={u})(InternetAddress={a})(FullName={u}))

ユーザ名（左側）の検証を行うこともできます。このことが役に立つのは、ディレクトリに格納されていないドメインのメールも受け入れるようにしたい場合です。受け入れクエリーを (uid={u}) に設定してください。

Lotus Notes の場合の受け入れクエリーの設定

LDAPACCEPT と Lotus Notes とを組み合わせる場合は、注意が必要です。Notes LDAP に格納されているユーザの属性が次のように設定されているとします。

```
mail=juser@example.com
```

```
cn=Joe User
```

```
uid=juser
```

```
cn=123456
```

```
location=New Jersey
```

Lotus はこのユーザへの電子メールを、指定されたアドレス以外の形式（たとえば Joe_User@example.com）であっても、LDAP ディレクトリに存在しないにもかかわらず受け入れます。したがって、AsyncOS は、このユーザの有効なユーザ メール アドレスをすべて見つけることはできません。

この解決策の1つは、他の形式のアドレスのプブリッシュを試みるというものです。詳細については、Lotus Notes 管理者に問い合わせてください。

ルーティング：エイリアス拡張

AsyncOS では、エイリアス拡張（複数ターゲット アドレスへの LDAP ルーティング）がサポートされます。AsyncOS によって、元のメール メッセージはエイリアス ターゲットごとに別の新しいメッセージで置き換えられます（たとえば、recipient@yoursite.com へのメッセージは、newrecipient1@hotmail.com や recipient2@internal.yourcompany.com などへの、それぞれ独立したメッセージで置き換えられます）。ルーティング クエリーは、他の電子メール処理システムではエイリアシング クエリーと呼ばれることもあります。

ルーティング クエリーの例

表 3-3 一般的な LDAP 実装での LDAP クエリー文字列の例：ルーティング

クエリーの対象	別のメールホストへのルーティング
OpenLDAP	(mailLocalAddress={a})
Microsoft Active Directory アドレス帳 Microsoft Exchange	該当しない可能性あり ^a
Sun ONE Directory Server	(mail={a}) (mailForwardingAddress={a}) (mailEquivalentAddress={a}) (mailRoutingAddress={a}) (otherMailbox={a}) (rfc822Mailbox={a})

- a. Active Directory の実装によっては、proxyAddresses 属性のエントリが複数存在することがありますが、この属性の値は Active Directory によって smtp:user@domain.com という形式で格納されるため、このデータは LDAP ルーティング/エイリアス拡張には使用できません。ターゲット アドレスはそれぞれ別の attribute:value ペアに存在する必要があります。Microsoft Exchange 環境が同じインフラストラクチャ内に複数あり、互いを認識している場合は、Exchange 環境の間でメールをルーティングするときに、送信元 MTA に戻る方向のルートは通常は必要ありません。

ルーティング：MAILHOST と MAILROUTINGADDRESS

ルーティング クエリーの場合は、MAILHOST の値は IP アドレスではなく、解決可能なホスト名であることが必要です。これには、内部的な DNSconfig が必要になるのが一般的です。

MAILHOST は、ルーティング クエリーでは省略可能です。
MAILROUTINGADDRESS は、MAILHOST が設定されていない場合は必須です。

マスカレード

マスカレードとは、電子メールのエンベロープ送信者（「送信者」または「MAIL FROM」と呼ばれることもあります）および To:、From:、CC: の各ヘッダーを、定義済みのクエリーに基づいて書き換える機能です。この機能の一般的な実装例の1つが「仮想ドメイン」であり、これによって複数のドメインを1つのサイトからホスティングできるようになります。他の一般的な実装としては、ネットワーク インフラストラクチャを「隠す」ために、電子メールヘッダーの文字列からサブドメインを取り除く（「ストリッピング」）というものがあります。

マスカレード クエリーの例

表 3-4 一般的な LDAP 実装での LDAP クエリー文字列の例：マスカレード

クエリーの対象	マスカレード
OpenLDAP	(mailRoutingAddress={a})
Microsoft Active Directory アドレス帳	(proxyaddresses=smtp:{a})
Sun ONE Directory Server	(mail={a}) (mailAlternateAddress={a}) (mailEquivalentAddress={a}) (mailForwardingAddress={a}) (mailRoutingAddress={a})

「フレンドリ名」のマスカレード

ユーザ環境によっては、LDAP ディレクトリ サーバスキーマの中に、メールルーティングアドレスやローカル メール アドレス以外に「フレンドリ名」が含まれていることがあります。AsyncOS では、エンベロープ送信者（発信メールの場合）やメッセージヘッダー（受信メールの場合、To:、Reply To:、From:、

CC: など) を、この「フレンドリ名」でマスカレードできます。フレンドリアドレスには、有効な電子メールアドレスでは通常は許可されない特殊文字（引用符、スペース、カンマなど）が含まれていてもかまいません。

LDAP クエリー経由でヘッダーをマスカレードするときに、フレンドリ メール文字列全体を LDAP サーバからの結果で置き換えるかどうかを設定時に選択できます。この動作がイネーブルになっていても、エンベロープ送信者には `user@domain` 部分のみが使用されることに注意してください（フレンドリ名はルールに反するため）。

標準的な LDAP マスカレードのときと同様に、LDAP クエリーの結果が空（長さが 0 またはすべてホワイトスペース）の場合は、マスカレードは行われません。

この機能をイネーブルにするには、LDAP ベースのマスカレード クエリーをリスナーに対して設定するときに（[LDAP] ページまたは `ldapconfig` コマンド）、次の質問に対して「y」と回答します。

```
Do you want the results of the returned attribute to replace the entire friendly portion of the original recipient? [N]
```

たとえば、次のような LDAP エントリがあるとします。

属性	値
mailRoutingAddress	admin¥@example.com
mailLocalAddress	joe.smith¥@example.com
mailFriendlyAddress	"Administrator for example.com," <joe.smith¥@example.com>

この機能がイネーブルになっている場合に、LDAP クエリーが (`mailRoutingAddress={a}`) で、マスカレード属性が (`mailLocalAddress`) ならば、次のように置き換えられます。

元のアドレス (From、To、CC、Reply-to)	マスカレードされたヘッダー	マスカレードされたエンベロープ送信者
admin@example.com	From: "Administrator for example.com," <joe.smith@example.com>	MAIL FROM: <joe.smith@example.com>

グループ LDAP クエリー

LDAP ディレクトリ内で定義されたグループに受信者が属しているかどうかを、LDAP サーバに対するクエリーを使用して判定できます。

LDAP グループ クエリーの設定は、次の 3 つのステップで行います。

- ステップ 1** メッセージフィルタを作成します。この中で、メッセージに作用するルールとして、`rcpt-to-group` または `mail-from-group` を使用します。
- ステップ 2** 次に、[System Administration] > [LDAP] ページ (または `ldapconfig` コマンド) を使用して、アプライアンスのバインド先となる LDAP サーバを定義し、グループメンバシップを調べるクエリーを設定します。
- ステップ 3** [Network] > [Listeners] ページ (または `listenerconfig -> edit -> ldapgroup` サブコマンド) を使用して、このグループクエリーをリスナーに対してイネーブルにします。

グループ クエリーの例

表 3-5 一般的な LDAP 実装での LDAP クエリー文字列の例：グループ

クエリーの対象	グループ
OpenLDAP	OpenLDAP では、 <code>memberOf</code> 属性はデフォルトではサポートされません。LDAP 管理者によって、この属性または類似の属性がスキーマに追加されていることがあります。
Microsoft Active Directory	<code>(&(memberOf={g})(proxyAddresses=smtp:{a}))</code>
Sun ONE Directory Server	<code>(&(memberOf={g})(mailLocalAddress={a}))</code>

たとえば、LDAP ディレクトリで「マーケティング」グループのメンバーが `ou=Marketing` と分類されているとします。この分類を使用して、このグループが送受信するメールを特別な方法で取り扱うことができます。ステップ 1 で、メッセージに作用するメッセージフィルタを作成し、ステップ 2 と 3 で LDAP ルックアップメカニズムをイネーブルにします。

グループ クエリーの設定

次に示す例では、マーケティング グループ (LDAP グループ「Marketing」として定義) のメンバーからのメールを代替メール配信ホスト `marketingfolks.example.com` に配信します。

ステップ 1 初めに、グループ メンバーシップに関して肯定的に一致するメッセージに作用する、メッセージフィルタを作成します。この例では、作成するフィルタの中で `mail-from-group` ルールを使用します。メッセージのうち、エンベロープ送信者が LDAP グループ「`marketing-group1`」に属していることが判明したものはすべて、代替配信ホストに送信されます (フィルタの `alt-mailhost` アクション)。

グループ メンバーシップ フィールド変数 (`groupName`) は、ステップ 2 で定義します。グループ属性「`groupName`」の値は、`marketing-group1` と定義されます。

```
mail3.example.com> filters
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.

```
[> new
```

```
Enter filter script. Enter '.' on its own line to end.
```

```
MarketingGroupfilter:
```

```
    if (mail-from-group == "marketing-group1") {
        alt-mailhost ('marketingfolks.example.com');
    }
.
1 filters added.
```


Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new filter.
- DELETE - Remove a filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.
- EXPORT - Export filters to a file
- MOVE - Move a filter to a different position.
- SET - Set a filter attribute.
- LIST - List the filters.
- DETAIL - Get detailed information on the filters.
- LOGCONFIG - Configure log subscriptions used by filters.
- ROLLOVERNOW - Roll over a filter log file.

[]>

メッセージフィルタ ルール `mail-from-group` と `rcpt-to-group` の詳細については、「メッセージフィルタ ルール」(P.6-3) を参照してください。

ステップ 2 次に、[Add LDAP Server Profile] ページを使用して、アプライアンスのバインド先となる LDAP サーバを定義し、グループ メンバーシップを調べる最初のクエリーを定義します。

図 3-8 新しい LDAP プロファイルとグループ クエリーの追加

LDAP Server Settings

Server Attributes

LDAP Server Profile Name: PublicLDAP2

Host Name(s): server2.example.com
Fully qualified hostname or IP, separate multiple entries with a comma

Authentication Method:
 Anonymous
 Use Password
 Username:
 Password:

Server Type: Active Directory

Port: 3268

Base DN: dc=example, dc=com

Advanced: System defaults for these settings are suitable for most users.

Server Attribute Testing: [Test Server\(s\)](#)

Accept Query
Not configured

Routing Query
Not configured

Masquerade Query
Not configured

Group Query

Name: PublicLDAP2.group

Query String: [(memberOf={a}):(proxyAddresses=smtp:{a})] [Test Query](#)

ステップ 3 次に、パブリック リスナー「InboundMail」で LDAP クエリーを使用してグループルーティングを行うように更新します。[Edit Listener] ページを使用して、前のステップで指定した LDAP クエリーをイネーブルにします。

このクエリーが実行されると、リスナーが受け入れたメッセージによって LDAP サーバに対するクエリーがトリガーされて、グループ メンバーシップが特定されます。PublicLDAP2.group クエリーはすでに、[System Administration] > [LDAP] ページで定義されています。

図 3-9 リスナーでのグループクエリーの指定
Edit Listener

Listener Settings	
Name:	IncomingMail
Type of Listener:	Public
Interface:	Data 1 TCP Port: 25
Bounce Profile:	Default
Disclaimer Above:	None <i>Disclaimer text will be applied above the message body.</i>
Disclaimer Below:	None <i>Disclaimer text will be applied below the message body.</i>
SMTP Authentication Profile:	None
Certificate:	test
▶ SMTP Address Parsing Options:	Optional settings for controlling parsing in SMTP "MAIL FROM" and "RCPT TO" fields.
▶ Advanced:	Optional settings for customizing the behavior of the Listener
▼ LDAP Queries:	<ul style="list-style-type: none"> ▶ Accept ▶ Routing ▶ Masquerade ▼ Group

この例では、変更を有効にするには commit が必要であることに注意してください。

例：グループクエリーを使用してスパムとウイルスのチェックをスキップする

メッセージフィルタはパイプラインの初めの方で実行されるので、グループクエリーを使用すると、特定のグループについてウイルスとスパムのチェックをスキップできます。たとえば、社内の IT グループへのメッセージについては、スパムとウイルスのチェックをスキップしてすべて受信したいという要望があるとします。LDAP レコードの中に、DN をグループ名として使用するグループエントリを作成します。このグループ名は、次の DN エントリで構成されます。

```
cn=IT, ou=groups, o=sample.com
```

LDAP サーバプロファイルを作成し、次のグループクエリーを指定します。

```
(&(memberOf={g})(proxyAddresses=smtp:{a}))
```

次に、このクエリーをリスナーに対してイネーブルにします。これで、メッセージがそのリスナーで受信されたときに、このグループクエリーがトリガーされます。

IT グループのメンバーについてはウイルスとスパムのチェックをスキップするために、次のメッセージフィルタを作成して、着信メッセージを LDAP グループと比較して検査します。

```
[ ]> - NEW - Create a new filter.

- IMPORT - Import a filter script from a file.

[ ]> new

Enter filter script. Enter '.' on its own line to end.

IT_Group_Filter:

if (rcpt-to-group == "cn=IT, ou=groups, o=sample.com"){

skip-spamcheck();

skip-viruscheck();

deliver();

}

.

1 filters added.
```



(注)

このメッセージフィルタ内の `rcpt-to-group` には、グループ名として入力された DN (`cn=IT, ou=groups, o=sample.com`) が反映されています。メッセージフィルタ内で使用しているグループ名が正しいことを確認してください。フィルタの実行時に、LDAP ディレクトリ内でその名前との比較が確実に行われるようにするためです。

リスナーが受け入れたメッセージによって LDAP サーバに対するクエリーがトリガーされて、グループメンバーシップが特定されます。メッセージ受信者が IT グループのメンバーの場合は、メッセージフィルタの定義に従ってウイルスとスパムのチェックがいずれもスキップされて、メッセージが受信者に配信され

ます。フィルタで LDAP クエリーの結果をチェックするには、LDAP サーバに対する LDAP クエリーを作成し、その LDAP クエリーをリスナーに対してイネーブルにする必要があります。

ドメインベース クエリー

ドメインベース クエリーとは、LDAP クエリーをタイプ別にグループ化し、特定のドメインに関連付けたうえで、特定のリスナーに割り当てたものです。ドメインベース クエリーが使用されるのは、複数の LDAP サーバがそれぞれ異なるドメインに関連付けられているが、すべての LDAP サーバに対するクエリーを同じリスナー上で実行する場合です。たとえば、「Bigfish」という会社が「Redfish」と「Bluefish」の2社を買収するとします。Bigfish は自社のドメイン Bigfish.com に加えて Redfish.com および Bluefish.com のドメインを運用するとともに、ドメインごとに別の LDAP サーバを運用して、各ドメインに関連付けられた従業員の情報を格納しています。この3つのドメインのメールをすべて受け入れるために、Bigfish はドメインベース クエリーを作成します。これで、Bigfish は Bigfish.com、Redfish.com、および Bluefish.com のメールを同じリスナー上で受け入れることができます。

ドメインベース クエリーを設定するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** ドメインベース クエリーで使用するドメインごとに1つずつ、サーバプロファイルを作成します。このサーバプロファイルのそれぞれに対して、ドメインベース クエリーに使用するクエリーを設定します（受け入れ、ルーティングなど）。詳細については、「[LDAP サーバ プロファイルの作成](#)」(P.3-6)を参照してください。
- ステップ 2** ドメインベース クエリーを作成します。ドメインベース クエリーを作成するときは、各サーバプロファイルからクエリーを選択します。また、どのクエリーを実行するかを Envelope To フィールドに基づいて決定するように、IronPort アプライアンスを設定します。クエリーの作成方法の詳細については、「[ドメインベース クエリーの作成](#)」(P.3-40)を参照してください。
- ステップ 3** ドメインベース クエリーをパブリックまたはプライベートのリスナーに対してイネーブルにします。リスナーの設定方法の詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「Configuring the Gateway to Receive Mail」を参照してください。



(注) ドメインベース クエリーは他にも、IronPort スпам検疫機能の LDAP エンドユーザ アクセスやスパム通知のために使用できます。詳細については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide』の「Configuring the IronPort Spam Quarantines Feature」を参照してください。

ドメインベース クエリーの作成

ドメインベース クエリーは、[System Administration] > [LDAP] > [LDAP Server Profiles] ページで作成します。

図 3-10 ドメインベース クエリーの設定

Domain Assignments		Query	
Domain or Partial Domain			Add Row
bluefish.com		Bluefish.accept	
redfish.com		Redfish.accept	

- ステップ 1 [LDAP Server Profiles] ページの [Advanced] をクリックします。
- ステップ 2 [Add Domain Assignments] をクリックします。
- ステップ 3 [Domain Assignments] ページが表示されます。
- ステップ 4 ドメインベース クエリーの名前を入力します。
- ステップ 5 クエリーのタイプを選択します。



(注) ドメインベース クエリーを作成するときに、選択するクエリーのタイプはすべて同じでなければなりません。クエリー タイプを選択すると、そのタイプのクエリーが自動的に、サーバ プロファイルから取得されてクエリー フィールドの一覧に表示されます。

- ステップ 6 [Domain Assignments] フィールドに、ドメインを入力します。
- ステップ 7 このドメインに関連付けるクエリーを選択します。
- ステップ 8 クエリーのドメインがすべて追加されるまで、行を追加します。

- ステップ 9** どのクエリーにも一致しないときに実行する、デフォルトのクエリーを入力できます。デフォルトのクエリーを入力しない場合は、[None] を選択します。
- ステップ 10** クエリーをテストします。[Test Query] ボタンをクリックし、テストするユーザログインとパスワードまたはメールアドレスを [Test Parameters] のフィールドに入力します。結果が [Connection Status] フィールドに表示されます。
- ステップ 11** (省略可能) {f} トークンを受け入れクエリー内で使用する場合は、エンベロープ送信者アドレスをテスト クエリーに追加できます。



(注) ドメインベース クエリーの作成が終了したら、このクエリーをパブリックまたはプライベートのリスナーに関連付ける必要があります。

- ステップ 12** 変更を送信して確定します。

チェーンクエリー

チェーンクエリーは、IronPort アプライアンスによって順番に実行が試行される一連の LDAP クエリーで構成されます。IronPort アプライアンスは、この「チェーン」の中の各クエリーの実行を試行し、LDAP サーバから肯定的なレスポンスが返されると（または「チェーン」の最後のクエリーで否定的なレスポンスが返されるか失敗すると）実行を停止します。チェーンクエリーが役立つのは、LDAP ディレクトリ内のエントリにおいて、さまざまな属性に類似の（または同一の）値が格納されている場合です。たとえば、属性 maillocaladdress と mail がユーザ電子メールアドレスの格納に使用されているとします。この両方の属性に対して確実にクエリーを実行するには、チェーンクエリーを使用します。

チェーンクエリーを設定するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** チェーンクエリー内で使用するクエリーごとに、サーバプロファイルを作成します。このサーバプロファイルのそれぞれについて、チェーンクエリーに使用するクエリーを設定します。詳細については、「LDAP サーバプロファイルの作成」(P.3-6) を参照してください。
- ステップ 2** チェーンクエリーを作成します。詳細については、「チェーンクエリーの作成」(P.3-42) を参照してください。

- ステップ 3** チェーン クエリーをパブリックまたはプライベートのリスナーに対してイネーブルにします。リスナーの設定方法の詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「Configuring the Gateway to Receive Mail」を参照してください。



- (注)** ドメインベース クエリーは他にも、IronPort スпам検疫機能の LDAP エンドユーザ アクセスやスパム通知のために使用できます。詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide*』の「Configuring the IronPort Spam Quarantines Feature」を参照してください。

チェーン クエリーの作成

チェーン クエリーは、[System Administration] > [LDAP] > [LDAP Server Profiles] ページで作成します。

図 3-11 チェーン クエリーの設定

Chained Query											
Name:	Chain_Query										
Query Type:	Accept										
Order of Queries:	<table border="1"> <thead> <tr> <th>Order</th> <th>Query</th> <th></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>Bluefish.accept</td> <td>🗑</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>Redfish.accept</td> <td>🗑</td> </tr> </tbody> </table>		Order	Query		1	Bluefish.accept	🗑	2	Redfish.accept	🗑
Order	Query										
1	Bluefish.accept	🗑									
2	Redfish.accept	🗑									
Test:	Test Query										

- ステップ 1** [LDAP Server Profiles] ページの [Advanced] をクリックします。
- ステップ 2** [Add Chain Query] をクリックします。
[Chain query] ページが表示されます。
- ステップ 3** チェーン クエリーの名前を入力します。
- ステップ 4** クエリーのタイプを選択します。
チェーン クエリーを作成するとき、選択するクエリーのタイプはすべて同じでなければなりません。クエリー タイプを選択すると、そのタイプのクエリーが自動的に、サーバ プロファイルから取得されてクエリー フィールドの一覧に表示されます。
- ステップ 5** チェーン クエリーに追加するクエリーを選択します。

IronPort アプライアンスによって、ここで設定した順にクエリーが実行されます。したがって、複数のクエリーをチェーンクエリーに追加する場合は、より限定的なクエリーの後でより広範なクエリーが実行されるような順序にすることを推奨します。

ステップ 6 クエリーをテストします。[Test Query] ボタンをクリックし、テストするユーザログインとパスワードまたはメールアドレスを [Test Parameters] のフィールドに入力します。結果が [Connection Status] フィールドに表示されます。

ステップ 7 (省略可能) {f} トークンを受け入れクエリー内で使用する場合は、エンベロープ送信者アドレスをテストクエリーに追加できます。



(注) チェーンクエリーの作成が終了したら、このクエリーをパブリックまたはプライベートのリスナーに関連付ける必要があります。

ステップ 8 変更を送信して確定します。

LDAP によるディレクトリ ハーベスト攻撃防止

ディレクトリ ハーベスト攻撃は、悪意のある送信者が、よくある名前を持つ受信者宛にメッセージを送信することによって開始します。電子メールゲートウェイは、受信者がその場所に有効なメールボックスを持っているかどうかを調べて応答を返します。これを大量に実行すると、悪意のある送信者は、どのアドレスにスパムを送信すればよいかを、有効なアドレスの「収穫 (ハーベスト)」によって特定できるようになります。

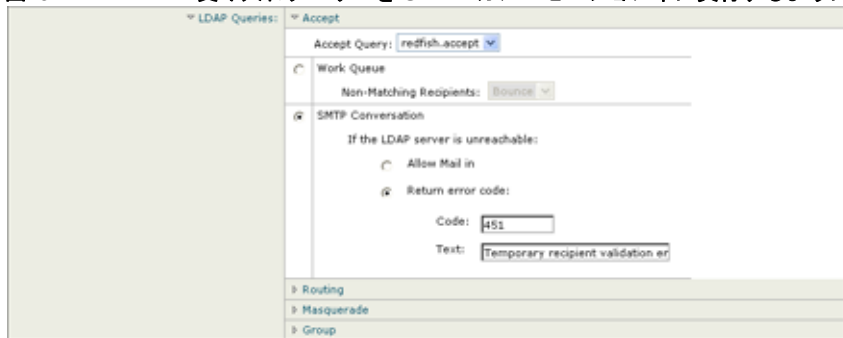
IronPort 電子メールセキュリティ アプライアンスでは、LDAP 受け入れ検証クエリーを使用すると、Directory Harvest Attack (DHA; ディレクトリ ハーベスト攻撃) を検出して防止できます。LDAP 受け入れを設定するときに、ディレクトリ ハーベスト攻撃防止を SMTP カンパセーション中に行うか、作業キューの中で行うかを選択できます。

SMTP カンバセーション中のディレクトリ ハーベスト攻撃防 止

DHA を防止するには、ドメインだけを Recipient Access Table (RAT; 受信者アクセス テーブル) に入力しておき、LDAP 受け入れ検証を SMTP カンバセーション内で実行します。

SMTP カンバセーション中にメッセージをドロップするには、LDAP 受け入れのための LDAP サーバ プロファイルを設定します。次に、LDAP 受け入れクエリーを SMTP カンバセーション中に実行するようにリスナーを設定します。

図 3-12 受け入れクエリーを SMTP カンバセーション中に実行するように設定



リスナーで実行する LDAP 受け入れクエリーを設定したら、そのリスナーに関連付けられたメール フロー ポリシーの中の DHAP (ディレクトリ ハーベスト攻撃防止) 設定を指定する必要があります。

図 3-13 SMTP カンパセーション中に接続をドロップするようにメール フローポリシーを設定する

Mail Flow Limits		
Rate Limiting:	Max. Recipients Per Hour:	<input checked="" type="radio"/> Unlimited <input type="radio"/> <input type="text"/>
	Max. Recipients Per Hour Code:	<input type="text" value="452"/>
	Max. Recipients Per Hour Text:	<input type="text" value="Too many recipients received this hour"/>
Flow Control:	Use SenderBase for Flow Control:	<input checked="" type="radio"/> On <input type="radio"/> Off
	Group by Similarity of IP Addresses:	<i>This Feature can only be used if Senderbase Flow Control is off.</i> <input type="radio"/> Off <input type="text"/> <small>(significant bits 0-32)</small>
Directory Harvest Attack Prevention (DHAP):	Max. Invalid Recipients Per Hour:	<input type="radio"/> Unlimited <input checked="" type="radio"/> <input type="text" value="5"/>
	Drop Connection if DHAP threshold is Reached within an SMTP Conversation:	<input checked="" type="radio"/> On <input type="radio"/> Off
	Max. Invalid Recipients Per Hour Code:	<input type="text" value="550"/>
	Max. Invalid Recipients Per Hour Text:	<input type="text" value="Too many invalid recip"/>

リスナーに関連付けられたメール フロー ポリシーの中で、ディレクトリ ハーベスト攻撃防止のための次の項目を設定します。

- [Max. Invalid Recipients Per hour]。このリスナーがリモート ホストから受け取る無効な受信者の 1 時間あたりの最大数です。このしきい値は、RAT 拒否の総数を表します。これは、無効な LDAP 受信者宛てのため SMTP カンパセーション中にドロップされたメッセージの総数と、作業キュー内でバウンスされたメッセージの合計です。たとえば、しきい値を 5 と設定した場合に、検出された RAT 拒否が 2 件で、無効な LDAP 受信者宛てのためドロップされたメッセージが 3 件であるとしみます。この時点で、IronPort アプライアンスはしきい値に到達したと判断して、接続をドロップさせます。デフォルトでは、パブリック リスナーでの 1 時間あたりの受信者の最大数は 25 です。プライベート リスナーの場合は、1 時間あたりの受信者の最大数はデフォルトでは無制限です。この最大数を「Unlimited」に設定すると、そのメール フロー ポリシーに対して DHAP はイネーブルになりません。
- [Drop Connection if DHAP Threshold is reached within an SMTP conversation]。ディレクトリ ハーベスト攻撃防止のしきい値に達したときに IronPort アプライアンスによって接続をドロップさせる設定をします。
- [Max. Recipients Per Hour Code]。接続をドロップさせるときに使用するコードを指定します。デフォルトのコードは 550 です。
- [Max. Recipients Per Hour Text]。ドロップした接続に対して使用するテキストを指定します。デフォルトのテキストは「Too many invalid recipients」です。

しきい値に達した場合は、受信者が無効であってもメッセージのエンベロープ送信者にバウンス メッセージが送信されることはありません。

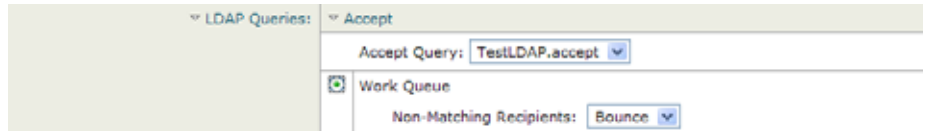
作業キュー内でのディレクトリ ハーベスト攻撃防止

ディレクトリ ハーベスト攻撃 (DHA) のほとんどは、ドメインだけを Recipient Access Table (RAT; 受信者アクセス テーブル) に入力しておき、LDAP 受け入れ検証を作業キュー内で実行することによって防止できます。この方法を使用すると、悪意のある送信者が、受信者が有効かどうかを SMTP カンバセーション中に知ることはできなくなります。(受け入れクエリーが設定されているときは、システムはメッセージを受け入れて、LDAP 受け入れ検証を作業キュー内で実行します)。ただし、メッセージのエンベロープ送信者には、受信者が無効である場合にバウンス メッセージが送信されます。

作業キュー内でディレクトリ ハーベスト攻撃防止するための設定

ディレクトリ ハーベスト攻撃を防止するには、初めに LDAP サーバ プロファイルを設定して LDAP 受け入れをイネーブルにします。LDAP 受け入れクエリーをイネーブルにしたら、次のように、その受け入れクエリーを使用するようにリスナーを設定するとともに、受信者が一致しない場合はメールをバウンスするように指定します。

図 3-14 受信者が一致しない場合は受け入れクエリーをメッセージをバウンスする設定



次に、メールフローポリシーを設定します。このポリシーでは、所定の時間内に送信 IP アドレスあたりどれだけの無効な受信者アドレスをシステムが受け入れるかを定義します。この数を超えると、システムはこの状態が DHA（ディレクトリハーベスト攻撃）であると判断してアラートメッセージを送信します。このアラートメッセージに含まれる情報は次のとおりです。

```
LDAP: Potential Directory Harvest Attack from host=('IP-address',
'domain_name'), dhap_limit=n, sender_group=sender_group,

listener=listener_name, reverse_dns=(reverse_IP_address,
'domain_name', 1), sender=envelope_sender, rcpt=envelope_recipients
```

メールフローポリシーで指定されたしきい値に達するまでは、システムによってメッセージがバウンスされますが、それ以降は応答を返すことなく受け入れられてドロップされます。したがって、正当な送信者にはアドレスの誤りが通知されますが、悪意のある送信者は、どの受信者が受け入れられたかを判断できません。

この無効受信者カウンタの働きは、現在 AsyncOS に実装されているレート制限機能に似ています。つまり、管理者がこの機能をイネーブルにして、上限値をパブリックリスナーの HAT 内のメールフローポリシーの中で設定します（HAT のデフォルトのメールフローポリシーを含む）。

たとえば、パブリックリスナーの HAT 内のメールフローポリシーを CLI で作成または編集するときは、次のような質問が表示されます（`listenerconfig -> edit -> hostaccess -> default | new` コマンドを実行）。

```
Do you want to enable Directory Harvest Attack Prevention per host?
[Y]> y
```

```
Enter the maximum number of invalid recipients per hour from a remote
host.
```

```
[25]>
```

この機能は、メールフローポリシーを GUI で編集するときにも表示されます (対応するリスナーに対して LDAP クエリーが作成済みの場合)。

図 3-15 GUI の DHAP 機能



1 時間当たりの無効受信者数を入力すると、そのメールフローポリシーに対して DHAP (ディレクトリハーベスト攻撃防止) がイネーブルになります。デフォルトで、パブリックリスナーでは 1 時間あたり最大 25 件の無効受信者が受け入れられます。プライベートリスナーの場合は、1 時間当たりの無効受信者数はデフォルトでは無制限です。この最大数を「Unlimited」に設定すると、そのメールフローポリシーに対して DHAP はイネーブルになりません。

SMTP 認証を行うための AsyncOS の設定

AsyncOS では、SMTP 認証がサポートされています。SMTP Auth は、SMTP サーバに接続するクライアントを認証するメカニズムです。

このメカニズムを利用すると、特定の組織に所属するユーザが、その組織のメールサーバにリモートで接続している (自宅や出張先などから) ときもメールサーバを使用してメールを送信できるようになります。Mail User Agent (MUA; メールユーザエージェント) は、メールの送信を試行するときに認証要求 (チャレンジ/レスポンス) を発行できます。

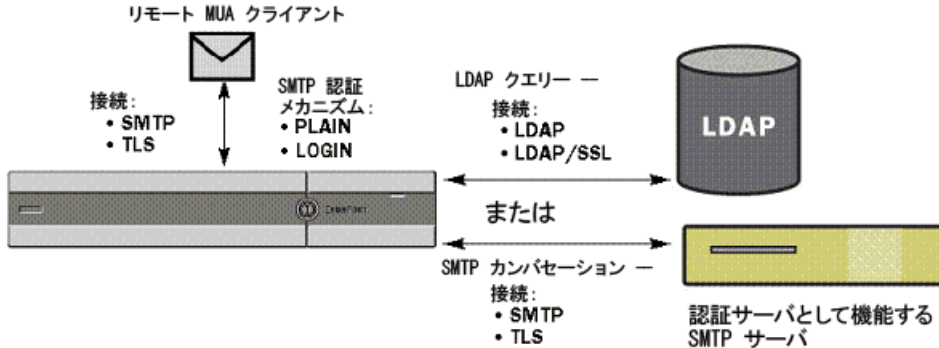
SMTP 認証は、発信メールリレーに対しても使用できます。これを利用すると、IronPort アプライアンスがネットワークのエッジではない場合に、アプライアンスからリレーサーバへのセキュア接続を確立できます。

AsyncOS は RFC 2554 に準拠しており、この中で SMTP カンパセッション内で認証コマンドを実行する方法、ネゴシエーションへのレスポンス、および生成するエラーコードが規定されています。

AsyncOS では、ユーザクレデンシャルの認証方式として次の 2 つがサポートされています。

- LDAP ディレクトリを使用する。
- 別の SMTP サーバを使用する (SMTP Auth 転送と SMTP Auth 発信)。

図 3-16 SMTP Auth のサポート : LDAP ディレクトリストアまたは SMTP サーバ



SMTP 認証方式を設定したら、HAT メールフローポリシー内で使用される SMTP Auth プロファイルを、`smtpauthconfig` コマンドを使用して作成します（「リスナーでの SMTP 認証のイネーブル化」(P.3-55) を参照）。

SMTP 認証の設定

LDAP サーバを使用して認証を行う場合は、[Add LDAP Server Profile] または [Edit LDAP Server Profile] ページ（または `ldapconfig` コマンド）でクエリータイプとして `SMTPAUTH` を選択して SMTP 認証クエリーを作成します。設定する LDAP サーバのそれぞれについて、SMTP 認証プロファイルとして使用する `SMTPAUTH` クエリーを 1 つ設定できます。

SMTP 認証クエリーには、「LDAP バインド」と「パスワードを属性として取得」の 2 種類があります。「パスワードを属性として取得」を使用するときは、Cisco IronPort アプライアンスによって LDAP ディレクトリ内のパスワードフィールドが取り出されます。このパスワードは、プレーンテキストでも、暗号化またはハッシュ化済みで格納されていてもかまいません。LDAP バインドを使用するときは、IronPort アプライアンスはクライアントが指定したクレデンシャルを使用して LDAP サーバへのログインを試行します。

パスワードを属性として指定

OpenLDAP の規定 (RFC 2307 に基づく) では、コーディングのタイプを中カッコで囲み、その後にエンコードされたパスワードを続けることになっています (たとえば「{SHA}5en6G6MezRroT3XKqkdPOmY/BfQ=」)。この例では、パスワード部分はプレーンテキストのパスワードに SHA を適用してから base64 エンコーディングしたものです。

Cisco IronPort アプライアンスがパスワードを取得する前に、SASL メカニズムのネゴシエートが MUA との間で行われ、アプライアンスと MUA はどの方法を使用するかを決定します (サポートされているメカニズムは LOGIN、PLAIN、MD5、SHA、SSHA、CRYPT SASL です)。その後で、アプライアンスは LDAP データベースに対するクエリーを実行してパスワードを取得します。LDAP 内では、中カッコで囲まれたプレフィクスがパスワードに付いていることがあります。

- プレフィクスが付いていない場合は、LDAP 内に格納されているパスワードがプレーンテキストであると見なされます。
- プレフィクスが付いている場合は、アプライアンスはそのハッシュ化パスワードを取得し、MUA によって指定されたユーザ名とパスワードの両方あるいはどちらかのハッシュを実行して、ハッシュ後のパスワードと比較します。Cisco IronPort アプライアンスでサポートされるハッシュタイプは SHA1 と MD5 であり、RFC 2307 の規定に基づいて、パスワードフィールド内ではハッシュ化パスワードの前にハッシュメカニズムのタイプが付加されます。
- LDAP サーバの中には、OpenWave LDAP サーバのように、暗号化されたパスワードの前に暗号化タイプを付加しないものもあり、代わりに暗号化タイプが別の LDAP 属性として格納されています。このような場合は、管理者が指定したデフォルトの SMTP AUTH 暗号化方式であると見なされて、そのパスワードと SMTP カンバセーションで取得されたパスワードとが比較されます。

Cisco IronPort アプライアンスは、SMTP Auth 交換から任意ユーザ名を受け取って LDAP クエリーに変換し、このクエリーを使用してクリアテキストまたはハッシュ化されたパスワードフィールドを取得します。次に、SMTP Auth クレデンシャルで指定されたパスワードに対してハッシュが必要な場合は実行し、その結果を LDAP からのパスワードと比較します (ハッシュタイプのタグがある場合は取り除く)。一致した場合は、SMTP Auth カンバセーションが続行されます。一致しない場合は、エラーコードが返されます。

SMTP 認証クエリーの設定

SMTP 認証クエリーを設定するときは、次の情報を指定します。

表 3-6 SMTP Auth LDAP クエリーのフィールド

Name	クエリーの名前。
Query String	<p>認証を LDAP バインド経由で行うか、パスワードを属性として取得して行うかを選択できます。</p> <p>[Bind] : LDAP サーバへのログイン試行には、クライアントによって指定されたクレデンシャルを使用します (これを「LDAP バインド」と呼びます)。</p> <p>SMTP Auth クエリーで使用される同時接続の最大数を指定します。この数は、上の LDAP サーバ属性で指定した数を超えてはなりません。バインド認証時に大量のセッションタイムアウトが発生するのを防ぐには、ここで指定する同時接続の最大数を大きくします (一般的には、接続のほぼすべてを SMTP Auth に割り当てることができます)。バインド認証ごとに、新しい接続が 1 つ使用されます。残りの接続は、他のタイプの LDAP クエリーで共有されます。</p> <p>[Password as Attribute] : パスワードを取得して認証を行うには、下の [SMTP Auth password attribute] フィールドでパスワードを指定します。</p> <p>選択した種類の認証に使用する LDAP クエリーを指定します。</p> <p>Active Directory のクエリーの例 :</p> <pre>(&(samaccountname={u})(objectCategory=person) (objectClass=user))</pre>
SMTP Auth Password Attribute	[Authenticate by fetching the password as an attribute] を選択した場合は、パスワード属性をここで指定します。

次の例では、[System Administration] > [LDAP] ページを使用して LDAP 設定「PublicLDAP」を編集し、SMTPAUTH クエリーを追加しています。クエリー文字列 (uid={u}) は、userPassword 属性と比較するように作成されています。

図 3-17 SMTP 認証クエリー

SMTPAUTH プロファイルの設定が完了すると、そのクエリーを SMTP 認証に使用するようにリスナーを設定できます。

第 2 の SMTP サーバ経由での SMTP 認証（転送を使用する SMTP Auth）

SMTP 認証カンパセーションのために指定されたユーザ名とパスワードを、別の SMTP サーバを使用して検証するようにアプライアンスを設定できます。

認証を行うサーバは、メールを転送するサーバとは別のものであり、SMTP 認証要求への応答だけを行います。認証に成功したときは、専用メールサーバによるメールの SMTP 転送を続行できます。この機能は、「転送を使用する SMTP Auth」と呼ばれることもあります。クレデンシャルのみが別の SMTP サーバに転送（プロキシ）されて認証が行われるからです。

SMTP 認証転送プロファイルを作成するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** [Network] > [SMTP Authentication] リンクをクリックします。[SMTP Authentication] ページが表示されます。
- ステップ 2** [Add Profile] リンクをクリックします。[Add SMTP Authentication Profile: SMTP Authentication Profile Settings] ページが表示されます。SMTP 認証プロファイルの一意の名前を入力します。[Profile Type] で [Forwarding] を選択します。

図 3-18 転送 SMTP 認証プロファイルの選択
Add SMTP Authentication Profile

SMTP Authentication Profile Settings	
Profile Name:	<input type="text"/>
Profile Type:	<input checked="" type="radio"/> Forward <input type="radio"/> Outgoing

ステップ 3 [Next] ボタンをクリックします。[Add SMTP Authentication Profile: Forwarding Server Settings] ページが表示されます。

図 3-19 転送サーバ設定の追加
Add SMTP Authentication Profile

Forwarding Server Settings	
Hostname / IP:	<input type="text"/> Port: <input type="text" value="25"/>
Interface:	Auto select <input type="button" value="v"/>
Maximum Simultaneous Connections:	<input type="text" value="10"/>
Authentication & Security:	<input checked="" type="checkbox"/> Require TLS (issue STARTTLS) <input checked="" type="checkbox"/> Use SASL LOGIN mechanism when contacting forwarding server <input checked="" type="checkbox"/> Use SASL PLAIN mechanism when contacting forwarding server

Cancel Finish

転送サーバのホスト名/IP アドレスとポートを入力します。認証要求の転送に使用する転送インターフェイスを選択します。同時接続の最大数を指定します。次に、アプライアンスから転送サーバへの接続に対して TLS を必須とするかどうかを設定します。使用する SASL メカニズムも、[PLAIN] と [LOGIN] から選択できます（使用できる場合）。この選択は、転送サーバごとに設定されます。

ステップ 4 変更を送信して確定します。

認証プロファイルの作成が完了すると、そのプロファイルをリスナーに対してイネーブルにできます。詳細については、「リスナーでの SMTP 認証のイネーブル化」(P.3-55) を参照してください。

LDAP を使用する SMTP 認証

LDAP ベースの SMTP 認証プロファイルを作成するには、SMTP 認証クエリーを LDAP サーバプロファイルとともに [System Administration] > [LDAP] ページであらかじめ作成しておく必要があります。このプロファイルを使用して SMTP 認証プロファイルを作成します。LDAP プロファイルの作成方法の詳細については、「LDAP クエリーの概要」(P.3-2) を参照してください。

LDAP を使用する SMTP 認証プロファイルを設定するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** [Network] > [SMTP Authentication] リンクをクリックします。[SMTP Authentication] ページが表示されます。
- ステップ 2** [Add Profile] リンクをクリックします。[Add SMTP Authentication Profile: SMTP Authentication Profile Settings] ページが表示されます。SMTP 認証プロファイルの一意の名前を入力します。[Profile Type] で [LDAP] を選択します。

図 3-20 LDAP SMTP 認証プロファイルの選択

Add SMTP Authentication Profile

SMTP Authentication Profile Settings	
Profile Name:	<input type="text" value="ldap_smtp_auth_test"/>
Profile Type:	<input checked="" type="radio"/> LDAP <input type="radio"/> Forward <input type="radio"/> Outgoing
<input type="button" value="Cancel"/> <input type="button" value="Next >"/>	

- ステップ 3** [Next] ボタンをクリックします。[Add SMTP Authentication Profile: LDAP Query Settings] ページが表示されます。

図 3-21 LDAP SMTP 認証プロファイルの LDAP クエリー設定の指定

Add SMTP Authentication Profile

ステップ 4 この認証プロファイルに使用する LDAP クエリーを選択します。デフォルトの暗号化方式をドロップダウンメニューから選択します。選択肢には、[SHA]、[Salted SHA]、[Crypt]、[Plain]、[MD5] があります。LDAP サーバによって暗号化後のパスワードの前に暗号化タイプが付加される場合は、[None] を選択してください。LDAP サーバによって暗号化タイプが別エンティティとして保存される場合は（たとえば OpenWave LDAP サーバ）、暗号化方式をメニューから選択してください。デフォルトの暗号化設定は、LDAP クエリーにバインドが使用される場合は使用されません。

ステップ 5 [Finish] ボタンをクリックします。

ステップ 6 [Commit Changes] ボタンをクリックし、必要に応じてコメントを追加してから、[Commit Changes] をクリックすると、LDAP SMTP 認証プロファイルの追加が完了します。

認証プロファイルの作成が完了すると、そのプロファイルをリスナーに対してイネーブルにできます。詳細については、「[リスナーでの SMTP 認証のイネーブル化](#)」(P.3-55) を参照してください。

リスナーでの SMTP 認証のイネーブル化

[Network] > [SMTP Authentication] ページで、実行する認証のタイプ (LDAP ベースまたは SMTP 転送ベース) を指定して SMTP 認証「プロファイル」を作成したら、[Network] > [Listeners] ページ (または `listenerconfig` コマンド) を使用して、このプロファイルをリスナーに関連付ける必要があります。



(注) 認証済みのユーザには、ユーザのその時点のメール フロー ポリシーの中で RELAY 接続動作が許可されます。



(注) 1つのプロフィール内で複数の転送サーバを指定することもできます。SASL メカニズム CRAM-MD5 と DIGEST-MD5 は、IronPort アプライアンスと転送サーバの間ではサポートされません。

次の例では、リスナー「InboundMail」で SMTPAUTH プロファイルが使用されるように、[Edit Listener] ページで設定しています。

図 3-22 SMTP 認証プロファイルを [Edit Listener] ページで選択する
Edit Listener

Listener Settings	
Name:	IncomingMail
Type of Listener:	Public
Interface:	Data 1 TCP Port: 25
Bounce Profile:	Default
Disclaimer Above:	None <i>Disclaimer text will be applied above the message body.</i>
Disclaimer Below:	None <i>Disclaimer text will be applied below the message body.</i>
SMTP Authentication Profile:	forwarding_based
Certificate:	test
▶ SMTP Address Parsing Options:	Optional settings for controlling parsing in SMTP "MAIL FROM" and "RCPT TO" headers.
▶ Advanced:	Optional settings for customizing the behavior of the Listener

プロフィールを使用するようにリスナーを設定したら、そのリスナーでの SMTP 認証を許可、禁止、または必須とするようにホスト アクセス テーブルのデフォルト設定を変更できます。

図 3-23 メールフローポリシーでの SMTP 認証のイネーブル化

Encryption and Authentication:	TLS:	<input type="radio"/> Use Default (Off) <input checked="" type="radio"/> Off <input type="radio"/> Preferred <input type="radio"/> Required
①	SMTP Authentication:	<input checked="" type="radio"/> Use Default (Off) <input type="radio"/> Off <input type="radio"/> Preferred <input type="radio"/> Required
②	If Both TLS and SMTP Authentication are enabled:	<input type="checkbox"/> Require TLS To Offer SMTP Authentication

番号	説明
1.	[SMTP Authentication] フィールドでは、リスナー レベルで SMTP 認証を制御します。[No] を選択した場合は、SMTP 認証に関する他の設定にかかわらず、このリスナーでは認証はイネーブルになりません。
2.	2 番目のプロンプト ([SMTP Authentication]) で [Required] を選択した場合は、AUTH キーワードが発行されるのは TLS がネゴシエートされた (クライアントが別の EHLO コマンドを発行した) 後となります。

SMTP 認証と HAT ポリシーの設定

送信者は送信者グループとしてまとめられ、その後で SMTP 認証ネゴシエーションが開始するので、ホスト アクセス テーブル (HAT) の設定には影響は及びません。リモート メール ホストが接続するときに、アプライアンスは初めにどの送信者グループが該当するかを特定して、その送信者グループのメール ポリシーを適用します。たとえば、リモート MTA 「suspicious.com」が SUSPECTLIST という送信者グループに属している場合は、「suspicious.com」の SMTPAUTH ネゴシエーションの結果とは無関係に THROTTLE ポリシーが適用されます。

ただし、SMTPAUTH を使用して認証を受ける送信者の扱いは、「通常の」送信者とは異なります。SMTPAUTH セッションに成功した場合の接続動作は「RELAY」に変更されるので、実質的に Recipient Access Table (RAT; 受信者アクセス テーブル) と LDAPACCEPT はバイパスされます。その結果、送信者はメッセージを IronPort アプライアンス経由でリレーできます。したがって、適用されるレート制限やスロットリングがある場合は、引き続き有効になります。

HAT 遅延拒否

HAT 遅延拒否が設定済みのときは、HAT 送信者グループとメールフローポリシーの設定に基づいて本来ならばドロップされる接続も、認証に成功し、RELAY メールフローポリシーが許可されます。

遅延拒否を設定するには、CLI の `listenerconfig --> setup` コマンドを使用します。この動作は、デフォルトではディセーブルになっています。

次の表に、HAT の遅延拒否を設定する方法を説明します。

```
example.com> listenerconfig
```

```
Currently configured listeners:
```

1. listener1 (on main, 172.22.138.17) QMQP TCP Port 628 Private
2. listener2 (on main, 172.22.138.17) SMTP TCP Port 25 Private

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new listener.
- EDIT - Modify a listener.
- DELETE - Remove a listener.
- SETUP - Change global settings.

```
[> setup
```

```
Enter the global limit for concurrent connections to be allowed  
across all listeners.
```

```
[300]>
```

```
[...]
```


By default HAT rejected connections will be closed with a banner

message at the start of the SMTP conversation. Would you like to do the rejection at the message recipient level instead for more detailed logging of rejected mail?

[N]> **y**

Do you want to modify the SMTP RCPT TO reject response in this case?

[N]> **y**

Enter the SMTP code to use in the response. 550 is the standard code.

[550]> **551**

Enter your custom SMTP response. Press Enter on a blank line to finish.

Sender rejected due to local mail policy.

Contact your mail admin for assistance.

発信 SMTP 認証

SMTP 認証は、発信メール リレーをユーザ名とパスワードを使用して検証するときにも使用できます。「発信」SMTP 認証プロファイルを作成してから、このプロファイルを全ドメインの SMTP ルートに関連付けます。メール配信試行のたびに、IronPort アプライアンスは必要なクレデンシャルを使用してアップストリーム メール リレーにログインします。PLAIN SASL フォーマットのログインのみがサポートされます。

SMTP 認証をすべての発信メールに使用するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** [Network] > [SMTP Authentication] リンクをクリックします。[SMTP Authentication] ページが表示されます。
- ステップ 2** [Add Profile] リンクをクリックします。[Add SMTP Authentication Profile: SMTP Authentication Profile Settings] ページが表示されます。SMTP 認証プロファイルの一意の名前を入力します。[Profile Type] で [Outgoing] を選択します。[Next] ボタンをクリックします。

図 3-24 発信 SMTP 認証プロファイルの追加
Add SMTP Authentication Profile

SMTP Authentication Profile Settings	
Profile Name:	<input type="text"/>
Profile Type:	<input type="radio"/> Forward <input checked="" type="radio"/> Outgoing
<input type="button" value="Cancel"/> <input type="button" value="Next >"/>	

認証プロファイルの認証用ユーザ名とパスワードを入力します。[Finish] ボタンをクリックします。[SMTP Authentication Profiles] ページに新しい発信プロファイルが表示されます。

- ステップ 3** [Network] > [SMTP Routes] リンクをクリックします。[SMTP Routes] ページが表示されます。

図 3-25 発信 SMTP ルートの追加
Add SMTP Route

SMTP Route Settings					
Receiving Domain: ?	<input type="text"/>				
Destination Hosts: ?	<table border="1"> <thead> <tr> <th>Destination Host</th> <th></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td><input type="text"/></td> <td> <input type="button" value="Add Row"/> <input type="button" value="Delete"/> </td> </tr> </tbody> </table>	Destination Host		<input type="text"/>	<input type="button" value="Add Row"/> <input type="button" value="Delete"/>
Destination Host					
<input type="text"/>	<input type="button" value="Add Row"/> <input type="button" value="Delete"/>				
Outgoing SMTP Authentication: ?	None ▼				
<input type="button" value="Cancel"/> <input type="button" value="Submit"/>					

- ステップ 4** [All Other Domains] リンクをクリックします。[Edit SMTP Route] ページが表示されます。SMTP ルートの宛先ホストの名前を [Destination Host] に入力します。これは、発信メールの配信に使用される外部メールリレーのホスト名です。
- ステップ 5** 発信 SMTP 認証プロファイルをドロップダウンメニューから選択します。[Submit] ボタンをクリックします。

ステップ 6 変更を確定します。

ロギングと SMTP 認証

SMTP 認証メカニズム（LDAP ベース、SMTP 転送サーバ ベース、または SMTP 発信）がアプライアンス上で設定されている場合は、以下のイベントが IronPort メール ログに記録されます。

- （情報）SMTP 認証成功：認証されたユーザと、使用されたメカニズムも記録されます。（プレーン テキストのパスワードが記録されることはありません）。
- （情報）SMTP 認証失敗：認証されたユーザと、使用されたメカニズムも記録されます。
- （警告）認証サーバに接続不可能：サーバ名とメカニズムも記録されます。
- （警告）タイムアウト イベント：転送サーバ（アップストリームの、インジェクションを行う IronPort アプライアンスと通信）が認証要求を待つ間にタイムアウトしたとき。

ユーザの外部認証の設定

ネットワーク上の LDAP ディレクトリを使用してユーザを認証するように IronPort アプライアンスを設定できます。このように設定すると、ユーザが各自の LDAP ユーザ名とパスワードを使用してログインできるようになります。LDAP サーバに対する認証クエリーを設定したら、アプライアンスによる外部認証の使用をイネーブルにします（GUI の [System Administration] > [Users] ページまたは CLI の `userconfig` コマンドを使用します）。

ユーザの外部認証を設定するには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** ユーザ アカウントを見つけるためのクエリーを作成します。LDAP サーバ プロファイルで、LDAP ディレクトリ内のユーザ アカウントを検索するためのクエリーを作成します。
- ステップ 2** グループ メンバーシップ クエリーを作成します。ユーザが特定のディレクトリ グループのメンバーかどうかを判断するためのクエリーを作成します。

ステップ 3 LDAP サーバを使用するように外部認証をセットアップします。この LDAP サーバをユーザ認証に使用するようにアプライアンスを設定し、ユーザ ロールを LDAP ディレクトリ内のグループに割り当てます。詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide*』の「Adding Users」を参照してください。



(注) [LDAP] ページの [Test Query] ボタン (または `ldaptest` コマンド) を使用して、クエリーから返される結果が期待したとおりであることを確認します。詳細については、「LDAP クエリーのテスト」(P.3-25) を参照してください。

ユーザ アカウント クエリー

外部ユーザを認証するために、AsyncOS はクエリーを使用してそのユーザのレコードを LDAP ディレクトリ内で検出し、ユーザのフル ネームが格納されている属性を見つけます。管理者が選択したサーバタイプに応じて、AsyncOS によってデフォルトのクエリーとデフォルトの属性が入力されます。アカウントが失効しているユーザは拒否するようにアプライアンスを設定することもできます。それには、RFC 2307 で規定されている属性が LDAP ユーザ レコード内で定義されている必要があります (`shadowLastChange`、`shadowMax`、および `shadowExpire`)。ユーザ レコードが存在するドメイン レベルのベース DN が必須です。

表 3-7 に、AsyncOS がユーザ アカウントを Active Directory サーバ上で検索するときを使用されるデフォルトのクエリー文字列とユーザのフル ネーム属性を示します。

表 3-7 デフォルトのユーザ アカウント クエリー文字列と属性 : Active Directory

サーバタイプ	Active Directory
ベース DN	(ブランク) (ユーザ レコードを見つけるには具体的なベース DN を使用する必要があります)
クエリー文字列	<code>(&(objectClass=user)(sAMAccountName={u}))</code>
ユーザのフル ネームが格納されている属性	<code>displayName</code>

表 3-8 に、AsyncOS がユーザ アカウントを OpenLDAP サーバ上で検索するときを使用されるデフォルトのクエリー文字列とユーザのフル ネーム属性を示します。

表 3-8 デフォルトのユーザ アカウント クエリー文字列と属性 : OpenLDAP

サーバタイプ	OpenLDAP
ベース DN	(ブランク) (ユーザ レコードを見つけるには具体的なベース DN を使用する必要があります)
クエリー文字列	(&(objectClass=posixAccount)(uid={u}))
ユーザのフル ネームが格納されている属性	gecos

グループ メンバーシップ クエリー

AsyncOS は、ユーザが特定のディレクトリ グループのメンバーかどうかを判断するという目的でもクエリーを使用します。ディレクトリ グループ メンバーシップ内のメンバーシップによって、そのユーザのシステム内のアクセス許可が決まります。GUI の [System Administration] > [Users] ページ (または CLI の userconfig) で外部認証をイネーブルにするときに、ユーザ ロールを LDAP ディレクトリ内のグループに割り当てます。ユーザ ロールによって、そのユーザがシステム内で持つアクセス許可が決まります。外部認証されたユーザの場合は、ロールは個々のユーザではなくディレクトリ グループに割り当てられます。たとえば、IT というディレクトリ グループ内のユーザに「Administrator」というロールを割り当て、「Support」というディレクトリ グループのユーザに「Help Desk User」というロールを割り当てます。

1 人のユーザが複数の LDAP グループに属しており、それぞれユーザ ロールが異なる場合は、最も限定的なロールのアクセス許可が AsyncOS によってそのユーザに付与されます。たとえば、あるユーザが属しているグループの 1 つに「Operator」のアクセス許可が付与され、別のグループには「Help Desk User」のアクセス許可が付与されている場合は、そのユーザには「Help Desk User」ロールのアクセス許可が付与されます。

グループ メンバーシップを問い合わせるための LDAP プロファイルを設定するときに、グループ レコードが格納されているディレクトリ レベルのベース DN を入力し、グループ メンバーのユーザ名が格納されている属性と、グループ名が格納されている属性を入力します。LDAP サーバ プロファイルに対して選択されたサーバタイプに基づいて、ユーザ名とグループ名の属性のデフォルト値とデフォルトクエリー文字列が AsyncOS によって入力されます。



(注)

Active Directory サーバの場合は、ユーザが特定のグループのメンバーかどうかを判断するためのデフォルトのクエリー文字列は (&(objectClass=group)(member={u})) です。ただし、使用する LDAP スキーマにおいて、「memberof」のリストでユーザ名ではなく識別名が使用されている場合は、{dn} を {u} の代わりに使用できます。

表 3-9 に、AsyncOS が Active Directory サーバ上でグループ メンバーシップ情報を検索するときに使用されるデフォルトのクエリー文字列と属性を示します。

表 3-9 デフォルトのグループ メンバーシップ クエリー文字列と属性 : Active Directory

サーバタイプ	Active Directory
ベース DN	(ブランク) (グループ レコードを見つけるには具体的なベース DN を使用する必要があります)
ユーザが特定のグループのメンバーかどうかを判断するためのクエリー文字列	(&(objectClass=group)(member={u})) (注) 使用する LDAP スキーマにおいて memberOf リストの中でユーザ名ではなく識別名が使用されている場合は、{u} の代わりに {dn} を使用できます。
各メンバーのユーザ名 (またはそのユーザのレコードの DN) が格納されている属性	member
グループ名が格納されている属性	cn

表 3-10 に、AsyncOS が OpenLDAP サーバ上でグループ メンバーシップ情報を検索するときに使用されるデフォルトのクエリー文字列と属性を示します。

表 3-10 デフォルトのグループ メンバーシップ クエリー文字列と属性 : OpenLDAP

サーバタイプ	OpenLDAP
ベース DN	(ブランク) (グループ レコードを見つけるには具体的なベース DN を使用する必要があります)
ユーザが特定のグループのメンバーかどうかを判断するためのクエリー文字列	(&(objectClass=posixGroup)(memberUid={u}))

表 3-10 デフォルトのグループメンバーシップクエリー文字列と属性：
OpenLDAP (続き)

各メンバーのユーザ名（またはそのユーザのレコードの DN）が格納されている属性	memberUid
グループ名が格納されている属性	cn

スパム検疫へのエンドユーザ認証のクエリー

スパム検疫へのエンドユーザ認証のクエリーとは、ユーザが IronPort スпам検疫機能にログインするときにユーザを検証するためのクエリーです。トークン {u} は、ユーザを示します（ユーザのログイン名を表します）。トークン {a} は、ユーザの電子メール アドレスを示します。LDAP クエリーによって「SMTP:」が電子メール アドレスから除去されることはありません。ただし、AsyncOS はこの部分をアドレスから除去します。

IronPort スпам検疫機能のエンドユーザ アクセス検証に LDAP クエリーを使用するには、[Designate as the active query] チェックボックスをオンにしてください。すでにアクティブなクエリーがある場合、そのクエリーはディセーブルになります。[System Administration] > [LDAP] ページを開いたときに、アクティブなクエリーの横にアスタリスク (*) が表示されます。

サーバタイプに基づいて、次のデフォルト クエリー文字列がエンドユーザ認証クエリーに使用されます。

- **Active Directory** : (sAMAccountName={u})
- **OpenLDAP** : (uid={u})
- **Unknown or Other** : (ブランク)

デフォルトでは、プライマリ メール属性は Active Directory サーバの場合は proxyAddresses、OpenLDAP サーバの場合は mail です。独自のクエリーとメール属性を入力できます。クエリーを CLI で作成するには、ldapconfig コマンドの isqauth サブコマンドを使用します。



(注)

ユーザのログイン時に各自のメール アドレス全体を入力させる場合は、(mail=smtp:{a}) というクエリー文字列を使用します。

スパム検疫機能に対するエンドユーザ認証をイネーブルにする方法については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide』の「Configuring the IronPort Spam Quarantines Feature」を参照してください。

Active Directory エンドユーザ認証の設定の例

ここでは、Active Directory サーバとエンドユーザ認証クエリーの設定の例を示します。この例では、Active Directory サーバに対してパスワード認証を使用し、メール属性は mail と proxyAddresses を使用し、Active Directory サーバに対するエンドユーザ認証にはデフォルトのクエリー文字列を使用します。

表 3-11 LDAP サーバとスパム検疫へのエンドユーザ認証の設定例：Active Directory

認証方式	パスワードを使用（検索用にバインドするための低特権のユーザを作成するか、匿名検索を設定する必要があります）
サーバタイプ	Active Directory
ポート	3268
ベース DN	(ブランク)
接続プロトコル	(ブランク)
クエリー文字列	(sAMAccountName={u})
メール属性	mail,proxyAddresses

OpenLDAP エンドユーザ認証の設定の例

ここでは、OpenLDAP サーバとエンドユーザ認証クエリーの設定の例を示します。この例では、OpenLDAP サーバに対して匿名認証を使用し、メール属性は mail と mailLocalAddress を使用し、OpenLDAP サーバに対するエンドユーザ認証にはデフォルトのクエリー文字列を使用します。

表 3-12 LDAP サーバとスパム検疫へのエンドユーザ認証の設定例：OpenLDAP

認証方式	匿名
サーバタイプ	OpenLDAP
ポート	389

表 3-12 LDAP サーバとスパム検疫へのエンドユーザ認証の設定例：
OpenLDAP（続き）

ベース DN	(ブランク) (古いスキーマでは具体的なベース DN の使用が要求されることがあります)
接続プロトコル	(ブランク)
クエリー文字列	(uid={u})
メール属性	mail,mailLocalAddress

スパム検疫のエイリアス統合のクエリー

スパム通知を使用する場合は、スパム検疫のエイリアス統合クエリーを使用して電子メール エイリアスを 1 つにまとめると、受信者がエイリアスごとに検疫通知を受け取ることはなくなります。たとえば、ある受信者がメールアドレス `john@example.com`、`jsmith@example.com`、および `john.smith@example.com` のメールを受け取るとします。エイリアス統合を使用すると、受信者が受け取るスパム通知は 1 通だけとなります。送信先は、このユーザのエイリアスすべてに送信されるメッセージのプライマリ メール アドレスとして選択されたアドレスです。

メッセージを統合してプライマリ メール アドレスに送信するには、受信者の代替メールアドレスを検索するためのクエリーを作成してから、受信者のプライマリ メール アドレスを [Email Attribute] フィールドに入力します。

IronPort スпам検疫機能のスパム通知に LDAP クエリーを使用するには、[Designate as the active query] チェックボックスをオンにしてください。すでにアクティブなクエリーがある場合、そのクエリーはディセーブルになります。[System Administration] > [LDAP] ページを開いたときに、アクティブなクエリーの横にアスタリスク (*) が表示されます。

Active Directory サーバの場合は、デフォルトのクエリー文字列は `(|(proxyAddresses={a})(proxyAddresses=smtp:{a}))` で、デフォルトのメール属性は `mail` です。OpenLDAP サーバの場合は、デフォルトのクエリー文字列は `(mail={a})` で、デフォルトのメール属性は `mail` です。独自のクエリーとメール属性を定義することもできます。属性が複数の場合は、カンマで区切ります。入力するメール属性が複数ある場合は、最初のメール属性として、変動する可能性のある値を複数持つ属性（たとえば `proxyAddresses`）ではなく、値を 1 つだけ使用する一意の属性（たとえば `mail`）を入力することを推奨します。

クエリーを CLI で作成するには、`ldapconfig` コマンドの `isqalias` サブコマンドを使用します。

Active Directory エイリアス統合の設定の例

ここでは、Active Directory サーバとエイリアス統合クエリーの設定の例を示します。この例では、Active Directory サーバに対して匿名認証を使用し、Active Directory サーバに対するエイリアス統合用のクエリー文字列を指定し、メール属性は `mail` を使用します。

表 3-13 LDAP サーバとスパム検疫のエイリアス統合の設定例：Active Directory

認証方式	匿名
サーバタイプ	Active Directory
ポート	3268
ベース DN	(ブランク)
接続プロトコル	Use SSL
クエリー文字列	((mail={a})(mail=smtp:{a}))
メール属性	mail

OpenLDAP エイリアス統合の設定の例

ここでは、OpenLDAP サーバとエイリアス統合クエリーの設定の例を示します。この例では、OpenLDAP サーバに対して匿名認証を使用し、OpenLDAP サーバに対するエイリアス統合用のクエリー文字列を指定し、メール属性は `mail` を使用します。

表 3-14 LDAP サーバとスパム検疫のエイリアス統合の設定例：OpenLDAP

認証方式	匿名
サーバタイプ	OpenLDAP
ポート	389
ベース DN	(ブランク) (古いスキーマでは具体的なベース DN の使用が要求されることがあります)
接続プロトコル	Use SSL

表 3-14 LDAP サーバとスパム検疫のエイリアス統合の設定例：OpenLDAP（続き）

クエリー文字列	(mail={a})
メール属性	mail

AsyncOS を複数の LDAP サーバと連携させるための設定

LDAP プロファイルを設定するときに、IronPort アプライアンスからの接続先となる複数の LDAP サーバをリストとして設定できます。複数の LDAP サーバを使用するには、LDAP サーバに格納されている情報が同一になるように設定する必要があります。また、構造も同一で、使用する認証情報も同一でなければなりません（レコードを統合できる製品がサードパーティから提供されています）。

冗長化した複数の LDAP サーバに接続するように IronPort アプライアンスを設定すると、LDAP のフェールオーバーまたはロード バランシングを設定できます。

複数の LDAP サーバを使用すると、次のことが可能になります。

- **フェールオーバー。** フェールオーバーのための LDAP プロファイルを設定しておくことで、IronPort アプライアンスが最初の LDAP サーバに接続できなくなったときに、リスト内の次の LDAP サーバへのフェールオーバーが行われます。
- **ロード バランシング。** ロード バランシングのための LDAP プロファイルを設定しておくことで、IronPort アプライアンスが LDAP クエリーを実行するときに、アプライアンスからの接続はリスト内の LDAP サーバに分散されます。

冗長 LDAP サーバを設定するには、[System Administration] > [LDAP] ページまたは CLI の `ldapconfig` コマンドを使用します。

サーバとクエリーのテスト

[Add (または Edit) LDAP Server Profile] ページの [Test Server(s)] ボタン (または CLI の `test` サブコマンド) を使用して、LDAP サーバへの接続をテストします。複数の LDAP サーバを使用する場合は、各サーバのテストが実行されて、各サーバの結果が個別に表示されます。各 LDAP サーバでのクエリーのテストも実行されて、結果が個別に表示されます。

フェールオーバー

LDAP クエリーが確実に解決されるようにするには、フェールオーバーのための LDAP プロファイルを設定します。

アプライアンスは、LDAP サーバリスト内の最初のサーバへの接続を、所定の時間が経過するまで試行します。IronPort アプライアンスがリスト内の最初の LDAP サーバに接続できない場合は、リスト内の次の LDAP サーバへの接続が試行されます。デフォルトでは、アプライアンスは常にリスト内の最初のサーバへの接続を試行し、それ以降の各サーバへの接続を、リスト内で指定されている順に試行します。IronPort アプライアンスが確実にプライマリの LDAP サーバにデフォルトで接続するようにするには、そのサーバが LDAP サーバリストの先頭に入力されていることを確認してください。

IronPort アプライアンスが 2 番め以降の LDAP サーバに接続した場合は、タイムアウトの時間に達するまで、そのサーバに接続したままになります。タイムアウトの時間に達すると、リスト内の最初のサーバへの再接続が試行されます。

LDAP フェールオーバーのための IronPort アプライアンスの設定

LDAP フェールオーバーを行うように IronPort アプライアンスを設定するには、GUI で以下の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [System Administration] > [LDAP] ページで、編集する LDAP サーバ プロファイルを選択します。

ステップ 2 LDAP サーバ プロファイルから、次の項目を設定します。

番号	説明
1	LDAP サーバのリストです。
2	最大接続数を設定します。
3	フェールオーバー モードを選択します。

ステップ 3 他の LDAP 設定を指定して変更を確定します。

ロード バランシング

LDAP 接続をグループ内の LDAP サーバ間に分散させるには、ロード バランシングのための LDAP プロファイルを設定します。

ロード バランシングのための LDAP プロファイルを設定しておくと、IronPort アプライアンスからの接続はリスト内の LDAP サーバに分散されます。接続に失敗したときやタイムアウトしたときは、IronPort アプライアンスは使用可能な LDAP サーバを判断して、使用可能なサーバに再接続します。IronPort アプライアンスは、管理者が設定した最大同時接続数に基づいて、同時に確立する接続の数を決定します。

リストで指定された LDAP サーバの 1 つが応答しなくなった場合は、IronPort アプライアンスからの接続の負荷は残りの LDAP サーバに分散されます。

ロード バランシングのための IronPort アプライアンスの設定

LDAP ロード バランシングを行うように IronPort アプライアンスを設定するには、GUI で以下の手順を実行します。

ステップ 1 [System Administration] > [LDAP] ページで、編集する LDAP サーバ プロファイルを選択します。

ステップ 2 LDAP サーバ プロファイルから、次の項目を設定します。

Server Attributes

LDAP Server Configuration Name:

① Host Name(s):
Separate multiple entries with commas.

Maximum number of simultaneous connections for all hosts: ②

③ Multiple host options:
 Load-balance connections among all hosts listed
 Failover connections in the order listed

番号	説明
1	LDAP サーバのリストです。
2	最大接続数を設定します。
3	ロード バランシング モードを選択します。

ステップ 3 他の LDAP 設定を指定して変更を確定します。



CHAPTER 4

SMTP サーバを使用した受信者の検証

この章では、SMTP サーバを使用した受信者の検証方法について説明します。
この章は、次の内容で構成されています。

- 「SMTP Call-Ahead 受信者検証：概要」 (P.4-1)
- 「SMTP Call-Ahead 受信者検証の設定」 (P.4-4)
- 「パブリック リスナーでの SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルのイネーブル化」 (P.4-11)
- 「LDAP ルーティング クエリーの設定」 (P.4-12)
- 「SMTP Call-Ahead クエリーのルーティング」 (P.4-13)
- 「SMTP Call-Ahead 検証のバイパス」 (P.4-15)

SMTP Call-Ahead 受信者検証：概要

SMTP Call-Ahead 受信者検証では、受信者宛ての着信メールを受け入れる前に、外部 SMTP サーバにクエリーを実行して、受信者を検証できます。SMTP Call-Ahead 受信者検証は、ユーザを検証する必要があるけれども、受信者の検証に LDAP 承認や受信者アクセス テーブル (RAT) を使用できない場合に便利です。たとえば、顧客が大量の異なるメールボックス宛てのメールのホストとなっていて、それぞれが個別のドメインを使用しているとします。LDAP インフラストラクチャであるため、インフラストラクチャにクエリーを実行して、個々のドメインで各顧客を検証する方法はありません。この場合、顧客は

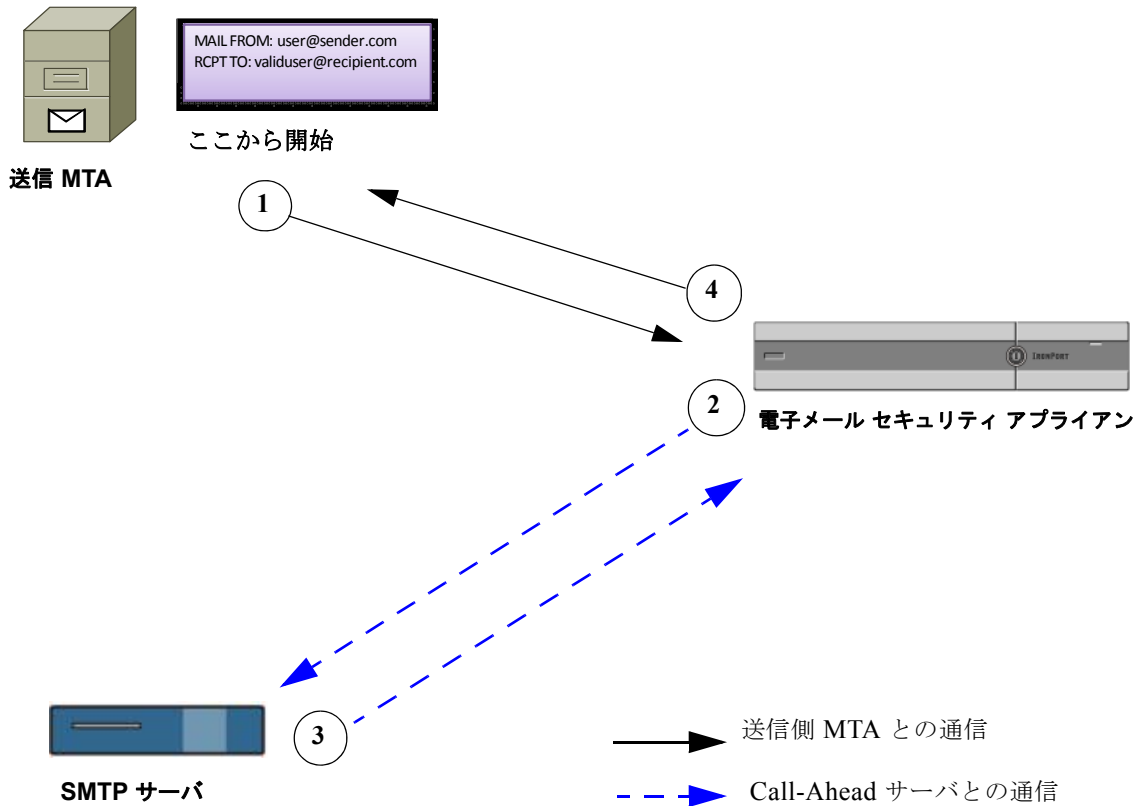
SMTP Call-Ahead 受信者検証を設定して、電子メールセキュリティ アプライアンスが SMTP サーバにクエリーを実行して、SMTP 通信を続ける前に受信者を検証できます。

SMTP Call-Ahead 受信者検証では、電子メールセキュリティ アプライアンスは無効な受信者宛てのメッセージに対する大量の処理を保存できます。通常の処理では、無効な受信者宛てのメッセージは、ドロップする前に電子メールパイプラインの作業キュー フェーズを通して処理する必要があります。SMTP Call-Ahead 受信者検証機能を使用すると、電子メールパイプラインの着信および受信部分で追加処理を行わずに無効なメッセージをドロップまたはバウンスできます。

電子メールセキュリティ アプライアンスで SMTP Call-Ahead 受信者検証を設定すると、電子メールセキュリティ アプライアンスは、SMTP サーバに「事前に電話して」受信者を検証する間、送信側の MTA との SMTP 通信を中断します。IronPort アプライアンスは、SMTP サーバにクエリーを実行するとき、SMTP サーバの応答を電子メールセキュリティ アプライアンスに返し、ユーザの設定に基づいて、メールを受け入れるか、コードとカスタム応答で接続をドロップすることができます。

図 4-1 に、SMTP Call-Ahead 検証通信の基本的なワークフローを示します。

図 4-1 SMTP Call Ahead サーバ通信のワークフロー



1. 送信側の MTA が SMTP 通信を開始します。
2. 電子メール セキュリティ アプライアンスは、SMTP サーバにクエリーを送信して受信者 `validuser@recipient.com` を検証する間、SMTP 通信を中断します。



(注) SMTP ルートまたは LDAP ルーティング クエリーが設定されている場合、SMTP サーバへのクエリーにはこれらのルートが使用されません。

3. SMTP サーバは、電子メール セキュリティ アプライアンスにクエリーの応答を返します。
4. 電子メール セキュリティ アプライアンスは SMTP 通信を再開し、送信側の MTA に応答を送信し、SMTP サーバの応答（および SMTP Call-Ahead プロファイルの設定）に基づいて接続を続行するかドロップします。

電子メール パイプラインでの処理の順序が決まっているため、特定の受信者宛でのメッセージが RAT によって拒否された場合、SMTP Call-Ahead 受信者検証は発生しません。たとえば、RAT で *example.com* 宛でのメールのみを受け入れるように指定した場合、SMTP Call-Ahead 受信者検証が発生する前に、*recipient@domain2.com* 宛でのメールは拒否されます。



(注)

HAT でディレクトリ ハーベスト攻撃防止 (DHAP) を設定した場合、SMTP Call-Ahead サーバの拒否は、指定した 1 時間あたりの最大無効受信者数の中の拒否数に含まれるので注意してください。SMTP サーバによって拒否が増える場合を考慮してこの数を調整する必要があります。DHAP の詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「Configuring the Gateway to Receive Mail」を参照してください。

SMTP Call-Ahead 受信者検証の設定

SMTP Call-Ahead 受信者検証は、SMTP Call-Ahead プロファイルを作成し、そのプロファイルをパブリック リスナーでイネーブルにして設定します。プロファイルでは、SMTP Call-Ahead 受信者検証機能について、SMTP サーバとの接続方法、SMTP サーバの応答に基づいて実行するアクションなどの動作を定義します。このプロファイルのパブリック リスナーに割り当て、指定されたリスナーが受信したメッセージを SMTP Call-Ahead 受信者検証を使用して処理できるようにします。

SMTP Call-Ahead 受信者検証を設定するには、次の手順を実行します。

1. **Call-Ahead サーバ プロファイルを設定します。** Call-Ahead サーバ プロファイルで、Call-Ahead サーバとの接続方法と Call-Ahead サーバの応答の処理方法を指定します。詳細については、「[Call-Ahead サーバ プロファイルの設定](#)」(P.4-5) を参照してください。
2. **パブリック リスナーで Call-Ahead サーバ プロファイルをイネーブルにします。** パブリック リスナーで Call-Ahead サーバ プロファイルをイネーブルにすると、電子メール セキュリティ アプライアンスは、SMTP Call-Ahead

受信者検証を使用して、そのリスナーで着信メールを処理できます。詳細については、「[パブリック リスナーでの SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルのイネーブル化](#)」(P.4-11) を参照してください。

3. **LDAP ルーティング クエリーを設定します。** LDAP ルーティング クエリーを使用して、メールを異なるホストに転送する場合、SMTP Call-Ahead クエリーに対する SMTP Call-Ahead サーバの値を返すようにクエリーを設定できます。「[LDAP ルーティング クエリーの設定](#)」(P.4-12) を参照してください。

Call-Ahead サーバ プロファイルの設定

SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルの設定では、電子メール セキュリティ アプライアンスと SMTP サーバの接続方法と SMTP サーバから返される応答の解釈方法を設定します。

SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルを設定するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1 [Network] > [SMTP Call-Ahead] をクリックします。
[SMTP Call-Ahead Server Profile] ページが開きます。
- ステップ 2 [Add Profile] をクリックします。
[Add SMTP Call-Ahead Server Profile] ページが開きます。

図 4-2 [Add SMTP Call-Ahead Server Profile] ページ

Add SMTP Call-Ahead Server Profile

SMTP Call-Ahead Server Profile	
Profile Name:	<input type="text" value="SMTP_Call_Ahead"/>
Call-Ahead Server Type:	<input type="text" value="Static Call-Ahead Server"/>
Static Call-Ahead Servers:	<input type="text" value="ironport.com:25"/> <small>(Separate multiple entries with a comma. Example: ironport.com:25)</small>
Advanced:	Optional server settings

- ステップ 3 プロファイルの設定値を入力します。詳細については、「[SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルの設定](#)」(P.4-7) を参照してください。

- ステップ 4** プロファイルの高度な設定を指定します。詳細については、「[SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルの高度な設定](#)」(P.4-9) を参照してください。
- ステップ 5** 変更を送信して確定します。
-

SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルの設定

SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルの設定時に、電子メールセキュリティアライアンスと SMTP サーバの接続方法を設定する必要があります。

表 4-1 に、SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルの基本設定を説明します。

表 4-1 SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルの設定

設定	説明
Profile Name	Call-Ahead サーバ プロファイルの名前。

表 4-1 SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルの設定 (続き)


設定	説明
Call-Ahead Server Type	<p>Call-Ahead サーバへの接続方法を次から 1 つ選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> [Use Delivery Host]。SMTP Call-Ahead クエリーに配信電子メールアドレスのホストを使用するように指定する場合は、このオプションを選択します。たとえば、メールの受信アドレスが <i>recipient@example.com</i> の場合、SMTP クエリーは <i>example.com</i> に関連付けられた SMTP サーバに対して実行されます。SMTP ルートまたは LDAP ルーティング クエリーを設定した場合、クエリー先の SMTP サーバの決定には、これらのルートが使用されます。LDAP ルーティング クエリーの設定についての詳細は、「LDAP ルーティング クエリーの設定 (P.4-12)」を参照してください。 [Static Call-Ahead Server]。クエリー先の Call-Ahead サーバのスタティック リストを作成する場合は、このオプションを使用します。Call-Ahead サーバの名前や場所が頻繁に変わらないと思われる場合は、このオプションを使用できます。このオプションを使用すると、電子メール セキュリティ アプライアンスは、リストの最初のスタティック Call-Ahead サーバからラウンドロビン方式でホストにクエリーを送信します。 <p> (注) スタティック Call-Ahead サーバタイプを選択すると、クエリーに SMTP ルートは適用されないので注意してください。その代わりに MX ルックアップが実行され、その後、ホストでスタティック サーバの Call-Ahead IP アドレスを取得するためのルックアップが実行されます。</p>

表 4-1 SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルの設定 (続き)

設定	説明
Static Call-Ahead Servers	<p>スタティック Call-Ahead サーバ タイプを使用する場合は、このフィールドにホストとポートの組み合わせのリストを入力します。次の構文を使用して、サーバとポートのリストを作成します。</p> <pre>ironport.com:25</pre> <p>複数のエントリがある場合は、カンマで区切ります。</p>

表 4-2 に、SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルの高度な設定を説明します。

表 4-2 SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルの高度な設定

設定	説明
Interface	<p>SMTP サーバと SMTP 通信を開始するときに使用されるインターフェイス。</p> <p>[Management interface] または [Auto] のどちらを使用するかを選択します。[Auto] を選択すると、電子メールセキュリティ アプライアンスは、使用するインターフェイスを自動的に検出しようとします。Cisco IronPort インターフェイスは、次の方法で SMTP サーバとの接続を試みます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Call-Ahead サーバが設定済みインターフェイスの 1 つと同じサブネット上にある場合、接続は一致するインターフェイスによって開始されます。 • 設定済みの任意の SMTP ルートが、クエリーのルートに使用されます。 • それ以外の場合、デフォルト ゲートウェイと同じサブネット上にあるインターフェイスが使用されます。
MAIL FROM Address	SMTP サーバとの SMTP 通信に使用される MAIL FROM: アドレス。
Validation Request Timeout	SMTP サーバからの結果を待機する秒数。このタイムアウト値は、複数の Call-Ahead サーバにアクセスする可能性のある 1 つの受信者検証要求に対する値です。「 Call Ahead Server Responses 」(P.4-10) を参照してください。

表 4-2 SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルの高度な設定 (続き)

設定	説明
Validation Failure Action	受信者検証要求が失敗した場合 (タイムアウト、サーバの障害、ネットワークの問題、または不明な応答により) に実行するアクション。電子メール セキュリティ アプリケーションでのさまざまな応答の処理方法を設定できます。 「 Call Ahead Server Responses 」 (P.4-10) を参照してください。
Temporary Failure Action	受信者検証要求が一時的に失敗した場合 (リモート SMTP サーバから 4xx 応答が返された) に実行するアクション。メールボックスが一杯の場合、メールボックスを利用できない場合、またはサービスを利用できない場合に発生することがあります。 「 Call Ahead Server Responses 」 (P.4-10) を参照してください。
Max.Recipients per Session	1 つの SMTP セッションで検証する最大受信者数。 1 ~ 25,000 セッションの間で指定します。
Max.Connections per Server	1 台の Call-ahead SMTP サーバへの最大接続数。 1 ~ 100 接続の間で指定します。
Cache	SMTP 応答のキャッシュのサイズ。100 ~ 1,000,000 エントリの間で指定します。
Cache TTL	キャッシュ内でのエントリの存続可能時間値。このフィールドのデフォルト値は 900 秒です。60 ~ 86400 秒の間で指定します。

Call Ahead Server Responses

SMTP サーバからは、次の応答が返されます。

- **2xx** : Call Ahead サーバから 2 で始まる SMTP コードを受け取った場合、受信者は受け入れられます。たとえば、応答が 250 の場合、メーリングアクションを続行できます。
- **4xx** : 4 で始まる SMTP コードは、SMTP 要求の処理中に一時的な障害が発生したことを示します。後で再試行すると正常に処理されることがあります。たとえば、応答 451 は、要求されたアクションが中止されたか、処理中にローカル エラーが発生したことを示します。

- **5xx** : 5 で始まる SMTP コードは、SMTP 要求の処理中に永続的な障害が発生したことを示します。たとえば、応答 550 は、要求されたアクションが実行されなかったか、メールボックスを使用できなかったことを示します。
- **Timeout**。Call-Ahead サーバから応答が戻されない場合、タイムアウトが発生する前に再試行する時間を設定できます。
- **Connection error**。Call-Ahead サーバへの接続に失敗した場合、受信者アドレスへの接続を受け入れるか拒否するかを設定できます。

パブリック リスナーでの SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルのイネーブル化

SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルを作成したら、そのプロファイルをリスナーでイネーブルにして、リスナーが SMTP サーバ経由の着信メールを検証できるようにする必要があります。プライベート リスナーでは受信者の検証は必要ないので、SMTP Call-Ahead 機能はパブリック リスナーでのみ使用できません。

リスナーで SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルをイネーブルにするには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [Network] > [Listeners] に移動します。
 - ステップ 2** SMTP Call-Ahead 機能をイネーブルにするリスナーの名前をクリックします。
[Edit Listener] ページが開きます。
 - ステップ 3** [SMTP Call Ahead Profile] フィールドで、イネーブルにする SMTP Call-Ahead プロファイルを選択します。

図 4-3 SMTP Call-Ahead サーバ プロファイルがイネーブルに設定された [Edit Listener] ページ
Edit Listener

Listener Settings	
Name:	IncomingMail
Type of Listener:	Public
Interface:	Management TCP Port: 25
Bounce Profile:	Default
Disclaimer Above:	None <i>Disclaimer text will be applied above the message body.</i>
Disclaimer Below:	None <i>Disclaimer text will be applied below the message body.</i>
SMTP Authentication Profile:	None
Certificate:	test
▶ SMTP Address Parsing Options:	Optional settings for controlling parsing in SMTP "MAIL FROM" and "RCPT TO"
▶ Advanced:	Optional settings for customizing the behavior of the Listener
▶ LDAP Queries:	No LDAP Server Profiles have been created. Profiles can be defined at System Administration > LDAP
SMTP Call-Ahead Profile:	SMTP_Call_Ahead

Cancel Submit

ステップ 4 変更を送信して確定します。

LDAP ルーティング クエリーの設定

LDAP ルーティング クエリーを使用して、メールを異なるメール ホストにルーティングする場合、AsyncOS は、代替メールホスト属性を使用して、クエリー先の SMTP サーバを決定します。ただし、この処理が不適切な場合があります。たとえば、次のスキーマでは、メール ホスト属性 (mailHost) には、Call-Ahead SMTP サーバの属性 (callAhead) で指定されているサーバとは異なる SMTP アドレスがあります。

```
dn: mail=cisco.com, ou=domains
mail: cisco.com
mailHost: smtp.mydomain.com
policy: ASAV
callAhead: smtp2.mydomain.com,smtp3.mydomain.com:9025
```

この場合、[SMTP Call-Ahead] フィールドを使用して、SMTP Call-Ahead クエリーを callAhead 属性で指定されているサーバに転送するルーティングクエリーを作成できます。たとえば、次の属性でルーティングクエリーを作成できます。

図 4-4 SMTP Call-Ahead 用に設定された LDAP ルーティングクエリー :

Routing Query	
Name:	LDAP1.routing
Query String:	{mail={d}} Test Query
Recipient Email to Rewrite the Envelope Recipient:	
Alternative Mailhost Attribute:	mailHost
SMTP Call-Ahead Server Attribute (optional):	callAhead

このクエリーでは、{d} は受信者アドレスのドメイン部分を表し、SMTP Call-Ahead サーバ属性は、クエリーに使用する Call-Ahead サーバとポートの値として、ポート 9025 の smtp2.mydomain.com、smtp3.mydomain.com を返します。



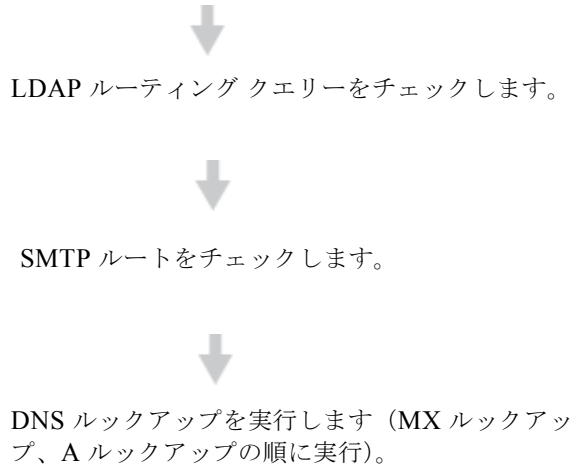
(注)

この例は、LDAP ルーティングクエリーを使用して SMTP Call-Ahead クエリーを正しい SMTP サーバに転送できるクエリーの設定例の 1 つです。この例で説明したクエリー文字列や特定の LDAP 属性を使用する必要はありません。

SMTP Call-Ahead クエリーのルーティング

SMTP Call-Ahead クエリーのルーティング時、AsyncOS は次の順序で情報をチェックします。

図 4-5 SMTP Call-Ahead クエリー ルーティングのワークフロー
ドメイン名をチェックします。



ドメインに LDAP ルーティング クエリーまたは SMTP ルートが設定されていない場合、前の状態の結果は次のステージに渡されます。SMTP ルートが存在しない場合は、DNS ルックアップが実行されます。

SMTP Call-Ahead クエリーの代わりに LDAP ルーティング クエリーを使用するときに、SMTP ルートも設定されている場合、ルーティング動作は、ルーティング クエリーから返される値によって異なります。

- LDAP ルーティング クエリーからポートなしで 1 つのホスト名が返された場合、SMTP Call-Ahead クエリーは SMTP ルートを適用し、その後、DNS ルックアップを実行して、SMTP サーバの IP アドレスを特定します。
- LDAP ルーティング クエリーからポートとともに 1 つのホスト名が返された場合、その SMTP ルートが使用されますが、SMTP ルートでポートが指定されていても、LDAP クエリーによって返されたポートが使用されます。次に、DNS ルックアップが実行され、SMTP サーバの IP アドレスが特定されます。

- LDAP ルーティング クエリーからポートとともに、またはポートなしで複数のホストが返された場合、SMTP ルートが適用されますが、SMTP ルートでポートが指定されていても、LDAP ルーティング クエリーによって返されたポートが使用されます。次に、DNS ルックアップが実行され、SMTP サーバの IP アドレスが特定されます。

SMTP Call-Ahead 検証のバイパス

リスナーで SMTP Call-Ahead 検証をイネーブルにしたまま、特定のユーザまたはユーザグループに対して SMTP Call-Ahead 検証を省略する必要がある場合があります。

SMTP Call-Ahead クエリー中にメールを遅延させてはならない受信者に対する SMTP Call-Ahead 検証を省略する場合があります。たとえば、有効であることが明確であり、迅速な対応を必要とするカスタマー サービスのエイリアスに RAT エントリを追加できます。

GUI から SMTP Call-Ahead 検証をバイパスするように設定するには、RAT エントリの追加または編集時に、[Bypass SMTP Call-Ahead] を選択します。

図 4-6 SMTP Call-Ahead のバイパス :
Edit Recipient Access Table

The screenshot shows the 'Recipient Details' configuration page. The 'Recipient Address' is 'example.com'. Under the 'Actions' section, the 'Bypass SMTP Call-Ahead' checkbox is checked and highlighted with a red box. Other options include 'Bypass LDAP Accept Queries for this Recipient' (unchecked), 'Custom SMTP Response' (set to 'No'), and 'Bypass Receiving Control' (set to 'No').



CHAPTER 5

電子メール認証

IronPort AsyncOS は SPF (Sender Policy Framework)、SIDF (Sender ID Framework)、DKIM (DomainKeys and DomainKeys Identified Mail) などのいくつかの形式の電子メール認証をサポートしています。

DomainKeys と DKIM は送信側で使われた署名キーに基づいて電子メールの信頼性を確認します。SPF と SIDF は DNS TXT レコードに基づいて電子メールの信頼性を検証する方法です。SPF と SIDF により、インターネットドメインの所有者は、特別な形式の DNS レコードを使用して、そのドメインに電子メールを送信する権限のあるマシンを指定することができます。

この章は、次の内容で構成されています。

- 「電子メール認証の概要」 (P.5-2)
- 「DomainKeys および DKIM 認証：概要」 (P.5-2)
- 「DomainKeys および DKIM 署名の設定」 (P.5-5)
- 「DKIM 検証の設定」 (P.5-22)
- 「SPF および SIDF 検証の概要」 (P.5-26)
- 「IronPort 電子メールセキュリティアプライアンスでの SPF の操作」 (P.5-28)
- 「SPF と SIDF のイネーブル化」 (P.5-29)
- 「SPF/SIDF 検証済みメールに対して実行するアクションの決定」 (P.5-40)
- 「SPF/SIDF 結果のテスト」 (P.5-45)

電子メール認証の概要

IronPort AsyncOS は、電子メールの偽造を防止するために、いくつかの電子メール認証の形式をサポートしています。着信メールを検証するために、AsyncOS は SPF (Sender Policy Framework)、SIDF (Sender ID Framework)、DKIM (DomainKeys Identified Mail) をサポートしています。送信メールに署名するために、AsyncOS は DomainKeys と DKIM をサポートしています。

DomainKeys または DKIM 電子メール認証では、送信側が公開キー暗号化を使用して、電子メールに署名します。これにより、検証済みのドメインを使用して、電子メールの From: (または Sender:) ヘッダーのドメインと比較して、偽造を検出できます。AsyncOS の現在のバージョンでは、DomainKeys の電子メール署名をサポートし、DKIM の電子メール署名と検証の両方をサポートしています。DomainKeys と DKIM の詳細については、「[DomainKeys および DKIM 認証：概要](#)」(P.5-2) を参照してください。

SPF および SIDF 電子メール認証により、インターネット ドメインの所有者は、特別な形式の DNS TXT レコードを使用して、それらのドメインに電子メールを送信する権限のあるマシンを指定することができます。準拠したメール受信側は、パブリッシュされた SPF レコードを使用して、メール トランザクション中に、送信側のメール転送エージェントの ID の権限をテストします。SPF および SIDF の詳細については、「[SPF および SIDF 検証の概要](#)」(P.5-26) を参照してください。

DomainKeys および DKIM 認証：概要

AsyncOS は電子メールの偽造を防止するために DomainKeys および DKIM 認証をサポートしています。DomainKeys と DKIM は、電子メールの送信元とメッセージの内容が、転送中に変更されていないことを確認するために使われるメカニズムです。DKIM は、DomainKeys 仕様に、DKIM (DomainKeys Identified Mail) と呼ばれる拡張プロトコルを作成するための IIM (Identified Internet Mail) の側面を組み合わせた拡張プロトコルです。DomainKeys と DKIM は、署名と検証の 2 つの主要部分から構成されます。AsyncOS の現在のバージョンでは、DomainKeys の「署名」部分のプロセスをサポートし、DKIM の署名と検証の両方をサポートします。バウンスおよび遅延メッセージで DomainKeys および DKIM 署名を使用することもできます。

DomainKeys または DKIM 認証を使用すると、送信側は公開キー暗号化を使用して電子メールに署名します。これにより、検証済みのドメインを使用して、電子メールの From: (または Sender:) ヘッダーのドメインと比較して、偽造を検出できます。

図 5-1 認証ワークフロー



- ステップ 1** 管理者（ドメイン所有者）が公開キーを DNS 名前空間にパブリッシュします。
- ステップ 2** 管理者は発信メール転送エージェント（MTA）に秘密キーをロードします。
- ステップ 3** そのドメインの権限のあるユーザによって送信される電子メールが、各秘密キーによってデジタル署名されます。署名は DomainKey または DKIM 署名ヘッダーとして電子メールに挿入され、電子メールが送信されます。
- ステップ 4** 受信側 MTA は、電子メールのヘッダーから DomainKeys または DKIM 署名と、要求された送信側ドメイン（Sender: または From: ヘッダーによって）を抽出します。DomainKeys または DKIM 署名ヘッダー フィールドから抽出された要求された署名ドメインから、公開キーが取得されます。
- ステップ 5** 公開キーは、DomainKeys または DKIM 署名が適切な秘密キーによって生成されているかどうかを確認するために使われます。

発信 DomainKeys 署名をテストするには、Yahoo! または Gmail アドレスを使用できます。これらのサービスは無料で提供され、DomainKeys 署名されている着信メッセージを検証します。

AsyncOS の DomainKeys および DKIM 署名

AsyncOS の DomainKeys および DKIM 署名は、ドメイン プロファイルによって実装され、メール フロー ポリシー（一般に、発信「リレー」ポリシー）によってイネーブルにされます。詳細については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Configuring the Gateway to Receive Mail」の章を参照してください。メッセージの署名は、メッセージ送信前にアプライアンスによって実行される最後の操作です。

ドメイン プロファイルはドメインとドメイン キー情報（署名キーと関連情報）を関連付けます。電子メールは、Cisco IronPort アプライアンスで、メール フロー ポリシーによって送信され、いずれかのドメイン プロファイルに一致する送信側電子メール アドレスが、ドメイン プロファイルに指定されている署名キーを使用して DomainKeys 署名されます。DKIM と DomainKeys の両方の署名をイネーブルにすると、DKIM 署名が使われます。DomainKeys および DKIM プロファイルは、domainkeysconfig CLI コマンドまたは GUI の [Mail Policies] > [Domain Profiles and the Mail Policies] > [Signing Keys] ページから実装します。

DomainKeys および DKIM 署名は次のように機能します。ドメイン所有者はパブリック DNS（そのドメインに関連付けられた DNS TXT レコード）に格納される公開キーと、アプライアンスに格納され、そのドメインから送信されるメール（発信されるメール）の署名に使われる秘密キーの 2 つのキーを生成します。

メッセージがメッセージの送信（発信）に使われるリスナーで受信されると、Cisco IronPort アプライアンスは、ドメイン プロファイルが存在するかどうかを調べます。アプライアンスに作成された（およびメール フロー ポリシー用に実装された）ドメイン プロファイルが存在する場合、メッセージの有効な Sender: または From: アドレスがスキャンされます。どちらも存在する場合、DomainKeys には Sender: が使われます。DKIM 署名には、From: アドレスが常に使われます。それ以外の場合は、最初の From: アドレスが使われます。有効なアドレスが見つからない場合、メッセージは署名されず、イベントが mail_logs に記録されます。



(注) DomainKey および DKIM プロファイルの両方を作成した（およびメール フロー ポリシーで署名をイネーブルにしている）場合、AsyncOS は DomainKeys と DKIM の両方の署名で送信メッセージを署名します。

有効な送信側アドレスが見つかった場合、送信側アドレスが既存のドメイン プロファイルに対して照合されます。一致しているものが見つかった場合、メッセージは署名されます。見つからない場合、メッセージは署名なしで送信されます。

す。メッセージに既存の DomainKeys (「DomainKey-Signature:」ヘッダー) がある場合、メッセージは、元の署名の後に新しい送信側アドレスが追加されている場合にのみ、署名されます。メッセージに既存の DKIM 署名がある場合、新しい DKIM 署名がメッセージに追加されます。

AsyncOS はドメインに基づいて電子メールに署名するメカニズムに加えて、署名キーを管理する (新しいキーの作成または既存のキーの入力) 方法を提供します。

このマニュアルのコンフィギュレーションの説明は、署名と検証の最も一般的な使用方法を示しています。着信メールのメールフローポリシーで DomainKeys および DKIM 署名をイネーブルにすることも、発信メールのメールフローポリシーで DKIM 検証をイネーブルにすることもできます。



(注)

クラスタ環境にドメインプロファイルと署名キーを設定する場合、[Domain Key Profile] 設定と [Signing Key] 設定がリンクしていることに注意します。そのため、署名キーをコピー、移動、または削除した場合、同じ操作が関連プロファイルに対して行われます。

DomainKeys および DKIM 署名の設定

署名キー

署名キーは Cisco IronPort アプライアンスに格納されている秘密キーです。署名キーの作成時に、キーサイズを指定します。キーサイズが大きいほどセキュリティが向上しますが、パフォーマンスに影響する可能性があります。IronPort では 512 ~ 2048 ビットのキーをサポートしています。768 ~ 1024 ビットのキーサイズは安全であると見なされ、現在ほとんどの送信側で使われています。大きなキーサイズに基づいたキーはパフォーマンスに影響する可能性があるため、2048 ビットを超えるキーはサポートされていません。署名キーの作成方法については、「[新しい署名キーの作成](#)」(P.5-16) を参照してください。

既存のキーを入力する場合、それをフォームに貼り付けるだけです。既存の署名キーの別の使用法は、キーをテキストファイルとしてインポートすることです。既存の署名キーの追加の詳細については、「[既存の署名キーのインポートまたは入力](#)」(P.5-17) を参照してください。

キーを入力すると、ドメイン プロファイルで使用できるようになり、ドメイン プロファイルの [Signing Key] リストに表示されます。

図 5-2 [Add Domain Profile] ページ (DomainKeys) : 署名キー
Add Domain Profile

署名キーのエクスポートとインポート

署名キーを Cisco IronPort アプライアンス上のテキスト ファイルにエクスポートできます。キーをエクスポートすると、アプライアンスに現在存在するすべてのキーがテキスト ファイルに挿入されます。キーのエクスポートの詳細については、「署名キーのエクスポート」(P.5-16) を参照してください。

エクスポートされたキーをインポートすることもできます。



(注)

キーをインポートすると、アプライアンス上のすべての現在のキーが置き換えられます。

詳細については、「既存の署名キーのインポートまたは入力」(P.5-17) を参照してください。

公開キー

署名キーをドメインプロファイルに関連付けると、公開キーが含まれる DNS テキストレコードを作成できます。これは、ドメインプロファイルのリストの [DNS Text Record] カラムの [Generate] リンクから（または CLI の `domainkeysconfig -> profiles -> dnstxt` から）実行します。

図 5-3 [Domain Profiles] ページの DNS テキスト レコードの生成リンク

Profile Name	Domain	Selector	Users	Signing Key	DNS Text Record	Test Profile	Delete
ExampleProfile	example.com	test	.example.com	myTestKey	Generate	Test	<input type="checkbox"/>

DNS テキスト レコードの生成の詳細については、「DNS テキスト レコードの生成」(P.5-18) を参照してください。

[Signing Keys] ページの [View] リンクから、公開キーを表示することもできます。

図 5-4 [Signing Keys] ページの公開キーの表示リンク
Signing Keys

Name	Key Size (Bits)	Public Key	Domain Profiles	Delete
TestKey	768	View	ExampleProfile	<input type="checkbox"/>

ドメイン プロファイル

ドメイン プロファイルは送信側ドメインを署名に必要なその他の情報と共に署名キーに関連付けます。ドメイン プロファイルは次の情報から構成されます。

- ドメイン プロファイルの名前。
- ドメイン名（「d=」ヘッダーに含まれるドメイン）。

- セレクタ（セレクタは公開キーのクエリーを形成するために使用されます。DNS クエリー タイプでは、この値が送信側ドメインの「_domainkey」名前空間の前に付けられます）。
- 正規化方法（署名アルゴリズムに提示するためにヘッダーと内容が準備される方法）。AsyncOS は DomainKeys に対して「simple」と「nofws」、DKIM に対して「relaxed」と「simple」をサポートしています。
- 署名キー（詳細については、「署名キー」(P.5-5) を参照してください）。
- 署名するヘッダーのリストと本文の長さ（DKIM のみ）。
- 署名の有効期限（DKIM のみ）。署名の有効期限が切れるまでの時間（秒単位）を設定します。
- プロファイル ユーザのリスト（署名用にドメイン プロファイルの使用を許可されたアドレス）。



(注) プロファイル ユーザに指定されたアドレスのドメインは [Domain] フィールドに指定されたドメインに一致する必要があります。

既存のすべてのドメイン プロファイルで、特定の用語を検索できます。詳細については、「ドメイン プロファイルの検索」(P.5-21) を参照してください。

ドメイン プロファイルのエクスポートとインポート

既存のドメイン プロファイルを Cisco IronPort アプライアンス上のテキスト ファイルにエクスポートできます。ドメイン プロファイルのエクスポートすると、アプライアンスに存在するすべてのプロファイルが 1 つのテキスト ファイルに挿入されます。「ドメイン プロファイルのエクスポート」(P.5-20) を参照してください。

以前にエクスポートしたドメイン プロファイルをインポートできます。ドメイン プロファイルをインポートすると、マシン上のすべての現在のドメイン プロファイルが置き換えられます。「ドメイン プロファイルのインポート」(P.5-20) を参照してください。

送信メールの署名のイネーブル化

DomainKeys および DKIM 署名は発信メールのメール フロー ポリシーでイネーブルにします。詳細については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Configuring the Gateway to Receive Mail」の章を参照してください。

発信メール フロー ポリシーで署名をイネーブルにするには、次の手順を実行します。

- ステップ 1 [Mail Flow Policies] ページ ([Mail Policies] メニューから) で、[RELAYED] メール フロー ポリシー (送信) をクリックします。
- ステップ 2 [Security Features] セクションから、[On] を選択して、[DomainKeys/DKIM Signing] をイネーブルにします。

図 5-5 DomainKeys/DKIM 署名のイネーブル化



- ステップ 3 変更を送信して確定します。

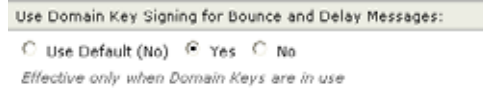
バウンスおよび遅延メッセージの署名のイネーブル化

発信メッセージに署名するだけでなく、バウンスおよび遅延メッセージに署名したい場合があります。これにより、会社から受信するバウンスおよび遅延メッセージが正当なものであることを受信者に警告したい場合があります。バウンスおよび遅延メッセージの DomainKeys および DKIM 署名をイネーブルにするには、公開リスナーに関連付けられたバウンス プロファイルの DomainKeys/DKIM 署名をイネーブルにします。

バウンスおよび遅延メッセージの署名をイネーブルにするには、次の手順を実行します。

- ステップ 1 署名された発信メッセージを送信する公開リスナーに関連付けられているバウンス プロファイルで、[Hard Bounce and Delay Warning Messages] に移動します。
- ステップ 2 [Use Domain Key Signing for Bounce and Delay Messages] をイネーブルにします。

図 5-6 バウンスおよび警告メッセージの署名のイネーブル化



(注) バウンスおよび遅延メッセージに署名するには、「[DomainKeys/DKIM 署名の設定 \(GUI\)](#)」(P.5-10) に示されたすべての手順を完了している必要があります。



(注) ドメイン プロファイルの [From:] アドレスは、バウンス返信アドレスに使用されているアドレスと一致している必要があります。これらのアドレスを一致させるには、バウンス プロファイルの返信アドレスを設定し ([System Administration] > [Return Addresses])、ドメイン プロファイルの [Profile Users] リストで同じ名前を使用します。たとえば、バウンス返信アドレスに MAILER-DAEMON@example.com の返信アドレスを設定し、ドメイン プロファイルにプロファイル ユーザとして MAILER-DAEMON@example.com を追加します。



クラウド電子メール セキュリティ アプライアンスで返信アドレスを変更しないことをお勧めします。

DomainKeys/DKIM 署名の設定 (GUI)

AsyncOS の DomainKeys/DKIM 署名の基本ワークフロー

- ステップ 1** 新規の秘密キーを作成するか、既存の秘密キーをインポートします。署名キーの作成またはインポートについては、「[署名キー](#)」(P.5-5) を参照してください。
- ステップ 2** ドメイン プロファイルを作成し、キーをドメイン プロファイルに関連付けます。ドメイン プロファイルの作成については、「[ドメイン プロファイル](#)」(P.5-7) を参照してください。
- ステップ 3** DNS テキスト レコードを作成します。DNS テキスト レコードの作成については、「[DNS テキスト レコードの生成](#)」(P.5-18) を参照してください。
- ステップ 4** 発信メールのメール フロー ポリシーで、DomainKeys/DKIM 署名をまだイネーブルにしていない場合は、イネーブルにします（「[送信メールの署名のイネーブル化](#)」(P.5-9) を参照してください）。

- ステップ 5** 任意で、バウンスおよび遅延メッセージの DomainKeys/DKIM 署名をイネーブルにします。バウンスおよび遅延メッセージの署名のイネーブル化については、「バウンスおよび遅延メッセージの署名のイネーブル化」(P.5-9) を参照してください。
- ステップ 6** 電子メールを送信します。ドメイン プロファイルに一致するドメインから送信されたメールは DomainKeys/DKIM 署名されます。さらに、バウンスおよび遅延メッセージの署名を設定した場合は、バウンスまたは遅延メッセージに署名されます。



(注) DomainKey および DKIM プロファイルの両方を作成した（およびメールフロー ポリシーで署名をイネーブルにしている）場合、AsyncOS は DomainKeys と DKIM の両方の署名で送信メッセージを署名します。

DomainKeys 署名のドメイン プロファイルの作成

DomainKeys 署名の新しいドメイン プロファイルを作成するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** [Domain Profiles] ページの [Add Profile] をクリックします。
- ステップ 2** プロファイルの名前とドメイン キー タイプ (DomainKeys) を入力します。ドメイン キー タイプを選択すると、[Add Domain Profile] ページが表示されます。

図 5-7 [Add Domain Profile] ページ (DomainKeys)
Add Domain Profile

The screenshot shows the 'Add Domain Profile' page for DomainKeys. The form is titled 'Outbound Domain Key Signing'. It includes the following fields and options:

- Profile Name:** Text input field.
- Domain Key Type:** Dropdown menu set to 'Domain Keys'.
- Domain Name:** Text input field.
- Selector:** Text input field.
- Canonicalization:** Radio buttons for 'no fws (no forwarding whitespaces)' (selected) and 'Simple'.
- Signing Key:** Dropdown menu set to 'No Key (profile disabled)'. Below it, a note says 'Select a key to enable this profile.'

Below the form, there are two sections for user management:

- Add Users:** A list box with an empty list and a note '(e.g. user@example.com, example.com, .example.com)'. An 'Add' button is next to it.
- Current Users:** A list box with an empty list and a note '(Leave blank to match all domain users)'. A 'Remove' button is next to it.

At the bottom of the form, there are 'Cancel' and 'Submit' buttons.

- ステップ 3** ドメイン名を入力します。
- ステップ 4** セクタを入力します。セクタは、「_domainkey」名前空間の前に付けられる任意の名前で、送信側ドメインあたり複数の同時公開キーをサポートするために使われます。セクタ値と長さは、DNS 名前空間と電子メール ヘッダーで有効である必要があり、それらにセミコロンを含めることができないという規定が追加されます。
- ステップ 5** 正規化 ([no forwarding whitespaces] または [simple]) を選択します。
- ステップ 6** 署名キーを選択します (すでに署名キーを作成している場合。作成していない場合は、次の手順までスキップします)。署名キーをリストから選択させるために、少なくとも 1 つの署名キーを作成する (またはインポートする) 必要があります。「新しい署名キーの作成」(P.5-16) を参照してください。
- ステップ 7** 署名のドメイン プロファイルを使用するユーザ (電子メール アドレス、ホストなど) を入力します。
- ステップ 8** [Submit] をクリックします。
- ステップ 9** [Commit Changes] ボタンをクリックし、必要に応じて任意のコメントを追加して、[Commit Changes] をクリックし、新しいドメイン プロファイルの追加を完了します。
- ステップ 10** この時点で、送信メール フロー ポリシーで DomainKeys/DKIM 署名をイネーブルにしていない場合はイネーブルにする必要があります (「送信メールの署名のイネーブル化」(P.5-9) を参照してください)。

DKIM 署名の新しいドメイン プロファイルの作成

DKIM 署名の新しいドメイン プロファイルを作成するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** [Domain Profiles] ページの [Add Profile] をクリックします。
- ステップ 2** プロファイルの名前とドメイン キー タイプ (DKIM) を入力します。ドメイン キー タイプを選択すると、[Add Domain Profile] ページが表示されます。

図 5-8 [Add Domain Profile] ページ (DKIM)
Add Domain Profile

The screenshot shows the 'Add Domain Profile' configuration page for DKIM. The page is titled 'Outbound Domain Key Signing' and contains several sections for configuration. The 'Domain Key Type' is set to 'DKIM'. The 'Signing Key' is set to 'No Key (profile disabled)'. The 'Headers to Sign' section has 'Standard' selected. The 'Body Length to Sign' section has 'Whole Body Auto-determine' selected. The 'Expiration Time of Signature' is set to 31536000 seconds. At the bottom, there are 'Add Users' and 'Current Users' lists with 'Add' and 'Remove' buttons.

- ステップ 3** ドメイン名を入力します。

- ステップ 4** セレクタを入力します。セレクタは、「_domainkey」名前空間の前に付けられる任意の名前で、送信側ドメインあたり複数の同時公開キーをサポートするために使われます。セレクタ値と長さは、DNS 名前空間と電子メール ヘッダーで有効である必要があり、それらにセミコロンを含めることができないという規定が追加されます。
- ステップ 5** ヘッダーの正規化を選択します。次のオプションから選択します。
- [Relaxed]。「relaxed」ヘッダー正規化アルゴリズムは、次を実行します。ヘッダー名を小文字に変更し、ヘッダーを展開して、連続した空白を 1 つの空白に短縮し、先頭と末尾の空白を取り除きます。
 - [Simple]。ヘッダーは変更されません。
- ステップ 6** 本文の正規化を選択します。次のオプションから選択します。
- [Relaxed]。「relaxed」ヘッダー正規化アルゴリズムは、次を実行します。本文末尾の空の行を取り除き、行中の空白を 1 つの空白に短縮し、行の末尾の空白を取り除きます。
 - [Simple]。本文末尾の空の行を取り除きます。
- ステップ 7** 署名キーを選択します（すでに署名キーを作成している場合は、作成していない場合は、次の手順までスキップします）。署名キーをリストから選択させるために、少なくとも 1 つの署名キーを作成する（またはインポートする）必要があります。「[新しい署名キーの作成](#)」(P.5-16) を参照してください。
- ステップ 8** 署名するヘッダーのリストを選択します。次のヘッダーから選択できます。
- [All]。AsyncOS は署名時に存在するすべてのヘッダーに署名します。送信中にヘッダーの追加や削除が予想されない場合は、すべてのヘッダーに署名することが考えられます。
 - [Standard]。送信中にヘッダーの追加や削除が予想される場合は、標準ヘッダーを選択することが考えられます。AsyncOS は次の標準ヘッダーにのみ署名します（メッセージにそのヘッダーが存在しない場合、DKIM 署名は、そのヘッダーにヌル値を示します）。
 - From
 - Sender、Reply To-
 - Subject
 - Date、Message-ID
 - To、Cc
 - MIME-Version

- Content-Type、Content-Transfer-Encoding、Content-ID、Content-Description
- Resent-Date、Resent-From、Resent-Sender、Resent-To、Resent-cc、Resent-Message-ID
- In-Reply-To、References
- List-Id、List-Help、List-Unsubscribe、List-Subscribe、List-Post、List-Owner、List-Archive



(注) [Standard] を選択した場合、署名するヘッダーを追加できます。

- ステップ 9** メッセージ本文に署名する方法を指定します。メッセージ本文に署名するか、署名するバイト数を選択できます。次のオプションのいずれかを選択します。
- [Whole Body Implied]。本文の長さを判断するために「=」タグを使用しないでください。メッセージ全体に署名し、変更を許可しません。
 - [Whole Body Auto-determined]。メッセージ本文全体に署名し、送信中に本文の末尾へのデータの追加を許可します。
 - [Sign first _ bytes]。指定したバイト数まで、メッセージ本文に署名します。
- ステップ 10** 署名の有効期限（秒単位）を指定します。
- ステップ 11** 署名のドメイン プロファイルを使用するユーザ（電子メールアドレス、ホストなど）を入力します。



(注) ドメイン プロファイルを作成する場合、特定のユーザに関連付けるプロファイルの決定において、階層を使用することに注意してください。たとえば、example.com のプロファイルと joe@example.com の別のプロファイルを作成するとします。joe@example.com からメールが送信される場合、joe@example.com のプロファイルが使われます。しかし、メールが adam@example.com から送信される場合は、example.com のプロファイルが使われます。

- ステップ 12** 変更を送信して確定します。
- ステップ 13** この時点で、送信メール フロー ポリシーで DomainKeys/DKIM 署名をイネーブルにしていない場合はイネーブルにする必要があります（「[送信メールの署名のイネーブル化](#)」(P.5-9) を参照してください）。



(注) DomainKeys と DKIM の両方のプロファイルを作成している場合、AsyncOS は送信メールに DomainKeys と DKIM の両方の署名を実行します。

新しい署名キーの作成

新しい署名キーを作成するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** [Mail Policie] > [Signing Keys] ページで [Add Key] をクリックします。[Add Key] ページが表示されます。
- ステップ 2** キーの名前を入力します。
- ステップ 3** [Generate] をクリックし、キー サイズを選択します。
キー サイズが大きいほどセキュリティが向上しますが、パフォーマンスに影響する可能性があります。IronPort では、セキュリティとパフォーマンスのバランスが良い 768 ビットのキー サイズが推奨されます。
- ステップ 4** [Submit] をクリックします。キーが生成されます。
- ステップ 5** [Commit Changes] ボタンをクリックし、必要に応じて任意のコメントを追加して、[Commit Changes] をクリックし、新しい署名キーの追加を完了します。



(注) キーを割り当てるドメイン プロファイルを編集していない場合は、編集する必要がある場合があります。

署名キーのエクスポート

署名キーをエクスポートすると、Cisco IronPort アプライアンスに現在存在するすべてのキーがまとめて 1 つのテキスト ファイルにエクスポートされます。署名キーをエクスポートするには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** [Signing Keys] ページの [Export Keys] をクリックします。[Export Signing Keys] ページが表示されます。

図 5-9 [Export Signing Keys] ページ
Export Signing Keys



ステップ 2 ファイルの名前を入力し、[Submit] をクリックします。

既存の署名キーのインポートまたは入力

既存のキーを入力するには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [Mail Policie] > [Signing Keys] ページで [Add Key] をクリックします。[Add Key] ページが表示されます。
 - ステップ 2** [Paste Key] フィールドにキーを貼り付けます (PEM フォーマットされ、RSA キーのみである必要があります)。
 - ステップ 3** 変更を送信して確定します。

既存のエクスポート ファイルからキーをインポートするには、次の手順を実行します ([署名キーのエクスポート] (P.5-16) を参照)。

-
- ステップ 1** [Mail Policie] > [Signing Keys] ページで [Import Key] をクリックします。[Import Key] ページが表示されます。
 - ステップ 2** エクスポートされた署名キーを含むファイルを選択します。
 - ステップ 3** [Submit] をクリックします。インポートによってすべての既存の署名キーが置き換えられることが警告されます。テキスト ファイルのすべてのキーがインポートされます。
 - ステップ 4** [Import] をクリックします。

署名キーの削除

-
- ステップ 1** 署名キーのリストから特定のキーを削除するには、次の手順を実行します。
 - ステップ 2** [Signing Keys] ページで、削除する各署名キーの右のチェックボックスをオンにします。

ステップ 3 [Delete] をクリックします。

ステップ 4 削除を確認します。

現在構成されているすべての署名キーを削除するには、次の手順を実行します。

ステップ 1 [Signing Keys] ページの [Clear All Keys] をクリックします。

ステップ 2 削除の確認が求められます。

DNS テキスト レコードの生成

DNS テキスト レコードを生成するには、次の手順を実行します。

ステップ 1 対応するドメイン プロファイルの [DNS Text Record] カラムの [Generate] リンクをクリックします。[Generate DNS Text Record] ページが表示されます。

図 5-10 [DNS Text Record] ページ
DNS Text Record: test

Generate DNS Text Record

Use this form to generate a sample DNS Text Record for this domain profile.

"G" Tag (Constrain Local Part of Signing Identities) ⓘ
Local Part: @example.com
(i.e. user*)

"N" Tag (Notes): ⓘ

"T" Tag (Testing Mode) ⓘ

Disable signing by subdomains of this domain

DNS Text Record:

```
label_domainkey.example.com. IN TXT "v=DkIM1;
p=MIGfMA0GCsGQSIb3DQEBAQUAA4GNADCBiQKBgQDVRHEte/Qc2qD4yN2nBfsO9sKYV62
0D0nBik3ybsCy+X+WsfazuqE9uUWUt6BjIH5pT6vzVYUWYkBe9QZ1iVdJcJQ9BF9zQO3wLC+
6r3aM08TjWABVcqApByIANCNaHf61nJTKes0uhG6jzBE7kwTp0ns/AZz0eq52QEo
/8XwIDAQAB;"
```

ステップ 2 DNS テキスト レコードに含める属性のチェックボックスをオンにします。

ステップ 3 [Generate Again] をクリックして、変更を含めてキーを再生成します。

ステップ 4 DNS テキスト レコードがテキスト フィールドに表示されます（ここでそれをコピーできます）。

ステップ 5 [Done] をクリックします。

ドメイン プロファイルのテスト

署名キーを作成し、それをドメイン プロファイルに関連付け、DNS テキストを生成して、権限のある DNS に挿入したら、ドメイン プロファイルをテストできます。そのためには、次の手順を実行します。

ステップ 1 [Domain Profiles] ページの [Test] をクリックします。

図 5-11 ドメイン プロファイルのテスト
Domain Profiles



Key: Active Disabled

ステップ 2 成功または失敗を示すメッセージがページの上部に表示されます。テストが失敗した場合、エラー テキストを含む警告メッセージが表示されます。

図 5-12 失敗したドメイン プロファイル テスト
Domain Profiles

Warning — DNS lookup failure for san.mateo._domainkey.example.com: DNS Hard Error looking up san.mateo._domainkey.example.com (TXT): NXDomain

ドメイン プロファイルのエクスポート

ドメイン プロファイルをエクスポートすると、Cisco IronPort アプライアンスに現在存在するすべてのドメイン プロファイルがまとめて 1 つのテキスト ファイルにエクスポートされます。ドメイン プロファイルをエクスポートするには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [Domain Profiles] ページの [Export Domain Profiles] をクリックします。[Export Domain profiles] ページが表示されます。
 - ステップ 2** ファイルの名前を入力し、[Submit] をクリックします。

ドメイン プロファイルのインポート

既存のエクスポート ファイルからドメイン プロファイルをインポートするには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [Mail Policies] > [Domain Profiles] ページの [Import Domain Profiles] をクリックします。[Import Domain Profiles] ページが表示されます。
 - ステップ 2** エクスポートされたドメイン プロファイルを含むファイルを選択します。
 - ステップ 3** [Submit] をクリックします。インポートによってすべての既存のドメイン プロファイルが置き換えられることが警告されます。テキスト ファイルのすべてのドメイン プロファイルがインポートされます。
 - ステップ 4** [Import] をクリックします。

ドメイン プロファイルの削除

ドメイン プロファイルのリストから特定のドメイン プロファイルを削除するには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [Domain Profiles] ページで、削除する各ドメイン プロファイルの右のチェックボックスにマークをオンにします。

ステップ 2 [Delete] をクリックします。

ステップ 3 削除を確認します。

現在構成されているすべてのドメイン プロファイルを削除するには、次の手順を実行します。

ステップ 1 [Domain Profiles] ページの [Clear All Profiles] をクリックします。

ステップ 2 削除の確認が求められます。

ドメイン プロファイルの検索

すべてのドメイン プロファイルで特定の用語（一般にユーザ名やホスト名）を検索するには、次の手順を実行します。

ステップ 1 [Domain Profiles] ページの [Find Domain Profiles] フィールドに検索語を指定します。

ステップ 2 [Find Profiles] をクリックします。

ステップ 3 検索では、各ドメイン プロファイルの email、domain、selector、signing key name のフィールドがスキャンされます。



(注) 検索語を入力しない場合、検索エンジンはすべてのドメイン プロファイルを返します。

ドメイン キーとロギング

DomainKeys 署名時には、次のような行がメール ログに追加されます。

```
Tue Aug 28 15:29:30 2007 Info: MID 371 DomainKeys: signing with
dk-profile - matches user123@example.com
Tue Aug 28 15:34:15 2007 Info: MID 373 DomainKeys: cannot sign - no
profile matches user12@example.com
```

DKIM 署名時には、次のような行がメール ログに追加されます。

```
Tue Aug 28 15:29:54 2007 Info: MID 372 DKIM: signing with
dkim-profile - matches user@example.com
Tue Aug 28 15:34:15 2007 Info: MID 373 DKIM: cannot sign - no profile
matches user2@example.com
```

DKIM 検証の設定

送信メールの署名に加えて、DKIM を使用して受信メールを検証できます。

DKIM 検証を設定するには、次を実行する必要があります。

- 受信メールのメール フロー ポリシーで、DKIM 検証をイネーブルにします。
- 任意で、DKIM 認証条件を使用して、DKIM 検証済み電子メールに対するアクションを実行するためのコンテンツ フィルタを設定します。

DKIM 検証用に AsyncOS アプライアンスを設定すると、次のチェックが実行されます。

-
- ステップ 1** AsyncOS は受信メールの [DKIM-Signature] フィールド、署名ヘッダーの構文、有効なタグ値、必須タグを調べます。署名がこれらのいずれかのチェックで失敗すると、AsyncOS は *permfail* を返します。
- ステップ 2** 署名チェックの実行後、公開 DNS レコードから公開キーが取得され、TXT レコードが検証されます。このプロセス中にエラーが検出されると、AsyncOS は *permfail* を返します。公開キーの DNS クエリーで応答を取得できない場合、*tempfail* が発生します。
- ステップ 3** 公開キーの取得後、AsyncOS はハッシュ値をチェックし、署名を検証します。この手順中にエラーが発生すると、AsyncOS は *permfail* を返します。
- ステップ 4** チェックにすべて合格すると、AsyncOS は *pass* を返します。



(注) メッセージ本文が指定された長さより長い場合、AsyncOS は次の判定を返します。

```
dkim = pass (partially verified [x bytes])
```

ここで *X* は検証されたバイト数を表します。

最終検証結果は、*Authentication-Results* ヘッダーとして入力されます。たとえば、次のいずれかのようなヘッダーを受け取ることがあります。

```
Authentication-Results: example1.com
```

```
header.from=From:user123@example.com; dkim=pass (signature
verified)
```

```
Authentication-Results: example1.com
```

```
header.from=From:user123@example.com; dkim=pass (partially
verified [1000 bytes])
```

```
Authentication-Results: example1.com
```

```
header.from=From:user123@example.com; dkim=permfail (body hash
did not verify)
```



(注)

現在の DKIM 検証は最初の有効な署名で停止します。最後に検出された署名を使用して、検証できません。この機能は、後のリリースで使用できるようになる可能性があります。

メール フロー ポリシーでの DKIM 検証の設定

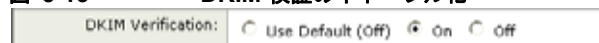
DKIM 検証は、受信メールのメール フロー ポリシーでイネーブルにします。

受信メール フロー ポリシーで検証をイネーブルにするには、次の手順を実行します。

ステップ 1 [Mail Flow Policies] ページ ([Mail Policies] メニューから) で、検証を実行するリスナーの受信メール ポリシーをクリックします。

ステップ 2 メール フロー ポリシーの [Security Features] セクションで、[On] を選択して、[DKIM Verification] をイネーブルにします。

図 5-13 DKIM 検証のイネーブル化



ステップ 3 変更を確定します。

DKIM 検証とロギング

DKIM 検証時には、次のような行がメール ログに追加されます。

```
mail.current:Mon Aug 6 13:35:38 2007 Info: MID 17 DKIM: no signature
```

```
mail.current:Mon Aug 6 15:00:37 2007 Info: MID 18 DKIM: verified  
pass
```

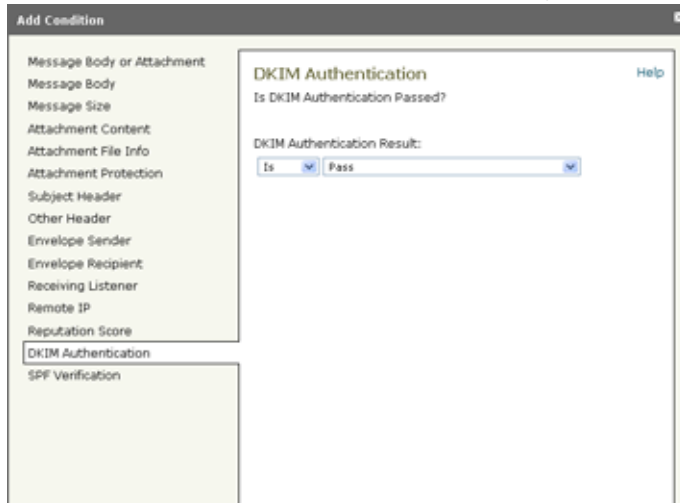
DKIM 検証済みメールのアクションの設定

DKIM メールを検証すると、メールに *Authentication-Results* ヘッダーが追加されますが、認証結果に関係なく、メールは受け入れられます。これらの認証結果に基づいてアクションを設定するには、コンテンツ フィルタを作成して、DKIM 検証済みメールに対するアクションを実行します。たとえば、DKIM 検証が失敗した場合、メールを配信、バウンス、ドロップ、または検疫エリアに送るように設定することができます。これを実行するには、コンテンツ フィルタを使用して、アクションを設定する必要があります。

GUI からアクションを追加するには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1 [Mail Policies] > [Incoming Filters] から、[Add Filter] をクリックします。
 - ステップ 2 [Conditions] セクションで [Add Condition] をクリックします。
 - ステップ 3 [DKIM Authentication] 認証を選択します。

図 5-14 DKIM 認証コンテンツ フィルタの条件



ステップ 4 DKIM 条件を選択します。次のオプションのいずれかを選択します。

- [Pass]。メッセージは認証テストに合格しました。
- [Neutral]。メッセージは署名されていません。
- [Temperror]。修復可能なエラーが発生しました。
- [Permerror]。修復不可能なエラーが発生しました。
- [Hardfail]。認証テストが失敗しました。
- [None]。認証が実行されませんでした。

ステップ 5 条件に関連付けるアクションを選択します。たとえば、DKIM 検証が失敗した場合、受信者に通知し、メッセージをバウンスさせることができます。または DKIM 検証に合格した場合、それ以上処理せずに、メッセージをすぐに配信することができます。

ステップ 6 新しいコンテンツ フィルタを送信します。

ステップ 7 適切な受信メール ポリシーでコンテンツ フィルタをイネーブルにします。

ステップ 8 変更を確定します。

SPF および SIDF 検証の概要

IronPort AsyncOS は、SPF (Sender Policy Framework) および SIDF (Sender ID Framework) 検証をサポートしています。SPF と SIDF は DNS レコードに基づいて電子メールの信頼性を検証する方法です。SPF と SIDF により、インターネット ドメインの所有者は、特別な形式の DNS TXT レコードを使用して、そのドメインに電子メールを送信する権限のあるマシンを指定することができます。

SPF/SIDF 認証を使用すると、送信側はそれらの名前の使用が許可されるホストを指定する SPF レコードをパブリッシュし、準拠するメール受信側はパブリッシュされた SPF レコードを使用して、メール トランザクション中に送信側のメール転送エージェントの ID の権限をテストします。



(注)

SPF チェックでは、解析と評価が必要であるため、AsyncOS のパフォーマンスに影響する場合があります。さらに、SPF チェックによって、DNS インフラストラクチャの負荷が増えることに注意してください。

SPF と SIDF を操作する場合、SIDF は SPF に似ていますが、いくつかの違いがあります。SIDF と SPF のすべての違いの説明については、RFC 4406 を参照してください。このマニュアルの目的のため、この 2 つの用語は、1 つのタイプの検証のみを適用する場合を除いて、まとめて説明しています。



(注)

AsyncOS では、受信リレーに対して SPF をサポートしておらず、IPv6 に対して SPF をサポートしていません。

有効な SPF レコードに関する注意

IronPort アプライアンスで SPF および SIDF を使用するには、RFC 4406 および 4408 に従って、SPF レコードをパブリッシュします。PRA ID の決定方法の定義については、RFC 4407 を確認してください。さらに、SPF レコードと SIDF レコードを作成する場合に犯しやすい誤りについては、次の Web サイトを参照してください。

http://www.openspf.org/FAQ/Common_mistakes

有効な SPF レコード

SPF HELO チェックに合格するには、各送信側 MTA に（ドメインとは別に）「v=spf1 a -all」 SPF レコードを含めます。このレコードを含めないと、HELO チェックは HELO ID に None 判定を下す可能性があります。ドメインへの SPF 送信側が大量の None 判定を返した場合、これらの送信側は各送信側 MTA に「v=spf1 a -all」 SPF レコードを含めていない可能性があります。

有効な SIDF レコード

SIDF フレームワークをサポートするには、「v=spf1」レコードと「spf2.0」レコードの両方をパブリッシュする必要があります。たとえば、DNS レコードは次の例のようになります。

```
example.com. TXT "v=spf1 +mx a:colo.example.com/28 -all"
```

```
smtp-out.example.com TXT "v=spf1 a -all"
```

```
example.com. TXT "spf2.0/mfrom,pra +mx a:colo.example.com/28 -all"
```

SIDF は HELO ID を検証しないため、この場合、各送信側 MTA に SPF v2.0 レコードをパブリッシュする必要はありません。



(注) SIDF をサポートしない場合は、「spf2.0/pra ~all」レコードをパブリッシュします。

SPF レコードのテスト

RFC の確認に加えて、IronPort アプライアンスに SPF 検証を実装する前に、SPF レコードをテストすることを推奨します。openspf.org Web サイトでは、いくつかのテスト ツールが提供されています。

<http://www.openspf.org/Tools>

次のツールを使用して、電子メールが SPF レコード チェックに失敗した理由を判断できます。

<http://www.openspf.org/Why>

さらに、テストリスナーで SPF をイネーブルにし、IronPort の trace CLI コマンドを使用して（または GUI からトレースを実行して）、SPF 結果を表示できます。トレースを使用すると、さまざまな送信側 IP を簡単にテストできます。

IronPort 電子メール セキュリティ アプライアンスでの SPF の操作

IronPort アプライアンスで SPF/SIDF を使用するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** **SPF/SIDF をイネーブルにします。** デフォルトのメール フロー ポリシーから、受信リスナーの SPF/SIDF をイネーブルにするか、さまざまな受信メール ポリシーでそれをイネーブルにできます。詳細については、「[SPF と SIDF のイネーブル化](#)」(P.5-29) を参照してください。
- ステップ 2** **SPF/SIDF 検証済みメールに対して実行するアクションを設定します。** メッセージまたはコンテンツ フィルタを使用して、SPF 検証済みメールに対して実行するアクションを判断することができます。詳細については、「[SPF/SIDF 検証済みメールに対して実行するアクションの決定](#)」(P.5-40) を参照してください。
- ステップ 3** **SPF/SIDF 結果をテストします。** 組織では、さまざまな電子メール認証方法が使われており、各組織で SPF/SIDF の使用方法が異なることがある (たとえば、SPF または SIDF ポリシーの準拠する規格が異なる) ため、SPF/SIDF 結果をテストして、権限のある送信者からの電子メールをバウンスしたり、ドロップしたりしないようにする必要があります。コンテンツ フィルタ、メッセージ フィルタ、Content Filters レポートを組み合わせて使用し、SPF/SIDF 結果をテストできます。SPF/SIDF 結果のテストの詳細については、「[SPF/SIDF 結果のテスト](#)」(P.5-45) を参照してください。



警告

IronPort では、電子メール認証をグローバルに強く奨励していますが、業界での採用途上にある現時点では、SPF/SIDF 認証の失敗に対して慎重な処理を行うよう提案しています。さらに多くの組織で社内公認のメール送信インフラストラクチャの制御能力が向上するまでは、IronPort を使うことで電子メールのバウンスを回避し、代わりに SPF/SIDF 検証に失敗した電子メールを検疫できます。

AysncOS Command Line Interface (CLI; コマンドライン インターフェイス) では、Web インターフェイスよりも詳細な SPF レベルの制御設定を提供しています。SPF 判定に基づいて、アプライアンスは、リスナー単位で SMTP 会話においてメッセージを許可または拒否できます。listenerconfig コマンドを使用して、リスナーのホスト アクセス テーブルのデフォルトの設定を編集する場合、SPF 設定を変更できます。設定の詳細については、「[CLI を使用した SPF および SIDF のイネーブル化](#)」(P.5-32) を参照してください。

SPF と SIDF のイネーブル化

SPF/SIDF を使用するには、受信リスナーでメールフローポリシーの SPF/SIDF をイネーブルにする必要があります。デフォルトのメールフローポリシーから、リスナーで SPF/SIDF をイネーブルにするか、特定の受信メールポリシーについて SPF/SIDF をイネーブルにすることができます。

GUI によって、デフォルトのメールフローポリシーで SPF/SIDF をイネーブルにするには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [Mail Policies] > [Mail Flow Policy] をクリックします。
 - ステップ 2** [Default Policy Parameters] をクリックします。
 - ステップ 3** デフォルトのポリシーパラメータで、[Security Features] セクションを表示します。
 - ステップ 4** [SPF/SIDF Verification] セクションで、[Yes] をクリックします。

図 5-15 メール フロー ポリシーの SPF/SIDF のイネーブル化

Security Features	
Spam Detection:	<input checked="" type="radio"/> On <input type="radio"/> Off
Virus Protection:	<input checked="" type="radio"/> On <input type="radio"/> Off
Encryption and Authentication:	TLS: <input type="radio"/> Off <input type="radio"/> Preferred <input type="radio"/> Required
	SMTP Authentication: <input checked="" type="radio"/> Off <input type="radio"/> Preferred <input type="radio"/> Required
	If Both TLS and SMTP Authentication are enabled: <input type="checkbox"/> Require TLS To Offer SMTP Authentication
Domain Key/DKIM Signing:	<input type="radio"/> On <input checked="" type="radio"/> Off
DKIM Verification:	<input type="radio"/> On <input checked="" type="radio"/> Off
SPF/SIDF Verification:	<input checked="" type="radio"/> On <input type="radio"/> Off
Bounce Verification:	Conformance Level: <input type="text" value="SPF"/>
	HELO Test: <input type="radio"/> Off <input checked="" type="radio"/> On
	Consider Untagged Bounces to be Valid: <input type="radio"/> Yes <input checked="" type="radio"/> No
<small>(Applies only if bounce verification address tagging is in use. See Mail Policies > Bounce Verification.)</small>	

ステップ 5 準拠のレベルを設定します（デフォルトは SIDF 互換）。このオプションを使用して、使用する SPF または SIDF 検証の規格を判断できます。SIDF 準拠に加えて、SPF と SIDF を組み合わせた SIDF 互換を選択できます。

表 5-1 SPF/SIDF 準拠レベル

準拠レベル	説明
SPF	<p>SPF/SIDF 検証は RFC4408 に従って動作します。</p> <p>- PRA (Purported Responsible Address) ID 検証は行われません。</p> <p>注： HELO ID に対してテストするには、この準拠オプションを選択します。</p>

表 5-1 SPF/SIDF 準拠レベル (続き)

準拠レベル	説明
SIDF	<p>SPF/SIDF 検証は RFC4406 に従って動作します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - PRA ID は規格への完全準拠によって判断されます。 - SPF v1.0 レコードは spf2.0/mfrom,pra として扱われます。 - 存在しないドメインや形式が誤った ID については、Fail の判定が返されます。
SIDF Compatible	<p>SPF/SIDF 検証は、次の違いを除き、RFC4406 に従って動作します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - SPF v1.0 レコードは spf2.0/mfrom として扱われます。 - 存在しないドメインや形式が誤った ID については、None の判定が返されます。 <p>注： この準拠オプションは、OpenSPF コミュニティ (www.openspf.org) の要求に応じて導入されました。</p>



(注) CLI からはさらに多くの設定を使用できます。詳細については、「[CLI を使用した SPF および SIDF のイネーブル化](#)」(P.5-32) を参照してください。

- ステップ 6** SIDF 互換の準拠レベルを選択した場合、メッセージに Resent-Sender: または Resent-From: ヘッダーが存在する場合に、検証で PRA ID の Pass 結果を None にダウングレードするかどうかを設定します。このオプションをセキュリティ目的で選択できます。
- ステップ 7** SPF の準拠レベルを選択した場合、HELO ID に対してテストを実行するかどうかを設定します。このオプションを使用して、HELO チェックをディセーブルにすることによって、パフォーマンスが向上することがあります。これは、spf-passed フィルタールールで、PRA または MAIL FROM ID が最初にチェックされるため、便利な場合があります。アプライアンスは SPF 準拠レベルに対してのみ HELO チェックを実行します。

CLI を使用した SPF および SIDF のイネーブル化

AsyncOS CLI では各 SPF/SIDF 準拠レベルのより詳細な制御設定をサポートしています。リスナーのホスト アクセス テーブルのデフォルトの設定をする場合、リスナーの SPF/SIDF 準拠レベルと、アプライアンスが SPF/SIDF 検証結果に基づいて実行する SMTP アクション (ACCEPT または REJECT) を選択できません。アプライアンスがメッセージを拒否する場合に送信する SMTP 応答を定義することもできます。

準拠レベルに応じて、アプライアンスは HELO ID、MAIL FROM ID、または PRA ID に対してチェックを実行します。アプライアンスが、次の各 ID チェックの各 SPF/SIDF 検証結果に対し、セッションを続行する (ACCEPT) か、セッションを終了する (REJECT) かを指定できます。

- **[None]**。情報の不足のため、検証を実行できません。
- **[Neutral]**。ドメイン所有者は、クライアントに指定された ID を使用する権限があるかどうかをアサートしません。
- **[SoftFail]**。ドメイン所有者は、ホストが指定された ID を使用する権限がないと思うが、断言を避けたいと考えています。
- **[Fail]**。クライアントは、指定された ID でメールを送信する権限がありません。
- **[TempError]**。検証中に一時的なエラーが発生しました。
- **[Permerror]**。検証中に永続的なエラーが発生しました。

アプライアンスは、メッセージに Resent-Sender: または Resent-From: ヘッダーが存在する場合に、PRA ID の Pass 結果を None にダウングレードするように SIDF 互換準拠レベルを設定していない限り、Pass 結果のメッセージを受け入れます。アプライアンスは PRA チェックで None が返された場合に指定された SMTP アクションを実行します。

ID チェックに対して SMTP アクションを定義していない場合、アプライアンスは Fail を含むすべての検証結果を自動的に受け入れます。

イネーブルにされたいずれかの ID チェックの ID 検証結果が REJECT アクションに一致する場合、アプライアンスはセッションを終了します。たとえば、管理者は、すべての HELO ID チェック結果に基づいてメッセージを受け入れるようにリスナーを設定しますが、MAIL FROM ID チェックからの Fail 結果に対してはメッセージを拒否するようにリスナーを設定するとします。メッセージが HELO ID チェックに失敗しても、アプライアンスはその結果を受け入れるため、

セッションが続行します。次に、メッセージが MAIL FROM ID チェックで失敗した場合、リスナーはセッションを終了し、REJECT アクションの SMTP 応答を返します。

SMTP 応答は、アプライアンスが SPF/SIDF 検証結果に基づいてメッセージを拒否する場合に返すコード番号とメッセージです。TempError 結果は、他の検証結果と異なる SMTP 応答を返します。TempError の場合、デフォルトの応答コードは 451 で、デフォルトのメッセージテキストは「#4.4.3 Temporary error occurred during SPF verification」です。他のすべての検証結果の場合のデフォルトの応答コードは 550 で、デフォルトのメッセージテキストは「#5.7.1 SPF unauthorized mail is prohibited」です。TempError や他の検証結果に独自の応答コードとメッセージテキストを指定できます。

任意で、Neutral、SoftFail、または Fail 検証結果に対して REJECT アクションが実行された場合に、SPF パブリッシュドメインから、サードパーティの応答を返すように、アプライアンスを設定することができます。デフォルトで、アプライアンスは次の応答を返します。

```
550-#5.7.1 SPF unauthorized mail is prohibited.
```

```
550-The domain example.com explains:
```

```
550 <Response text from SPF domain publisher>
```

これらの SPF/SIDF 設定をイネーブルにするには、listenerconfig -> edit サブコマンドを使用し、リスナーを選択します。次に、hostaccess -> default サブコマンドを使用して、ホスト アクセス テーブルのデフォルトの設定を編集します。次のプロンプトに yes と答えて、SPF 制御を設定します。

```
Would you like to change SPF/SIDF settings? [N]> yes
```

```
Would you like to perform SPF/SIDF Verification? [Y]> yes
```

ホスト アクセス テーブルでは、次の SPF 制御設定を使用できます。

表 5-2 CLI を使用した SPF 制御設定

準拠レベル	使用可能な SPF 制御設定
SPF Only	<ul style="list-style-type: none"> • HELO ID チェックを実行するかどうか • 次の ID チェックの結果に基づいて実行される SMTP アクション <ul style="list-style-type: none"> – HELO ID (イネーブルの場合) – MAIL FROM ID • REJECT アクションに対して返される SMTP 応答コードとテキスト • 秒単位の検証タイムアウト
SIDF Compatible	<ul style="list-style-type: none"> • HELO ID チェックを実行するかどうか • メッセージに Resent-Sender: または Resent-From: ヘッダーが存在する場合に、検証で PRA ID の Pass 結果を None にダウングレードするかどうか • 次の ID チェックの結果に基づいて実行される SMTP アクション <ul style="list-style-type: none"> – HELO ID (イネーブルの場合) – MAIL FROM ID – PRA Identity • REJECT アクションに対して返される SMTP 応答コードとテキスト • 秒単位の検証タイムアウト
SIDF Strict	<ul style="list-style-type: none"> • 次の ID チェックの結果に基づいて実行される SMTP アクション <ul style="list-style-type: none"> – MAIL FROM ID – PRA Identity • SPF REJECT アクションの場合に返される SMTP 応答コードとテキスト • 秒単位の検証タイムアウト

次に、ユーザが **SPF Only** 準拠レベルを使用して、**SPF/SIDF** 検証を設定する例を示します。アプライアンスは **HELO ID** チェックを実行し、**None** および **Neutral** 検証結果を受け入れ、その他の結果を拒否します。SMTP アクションの CLI プロンプトはすべての ID タイプで同じです。ユーザは **MAIL FROM ID** の SMTP アクションを定義しません。アプライアンスは、その ID のすべての検証結果を自動的に受け入れます。アプライアンスはすべての **REJECT** 結果に対して、デフォルトの拒否コードとテキストを使用します。

```
Would you like to change SPF/SIDF settings? [N]> yes
```

```
Would you like to perform SPF/SIDF Verification? [N]> yes
```

```
What Conformance Level would you like to use?
```

1. SPF only
2. SIDF compatible
3. SIDF strict

```
[2]> 1
```

```
Would you like to have the HELO check performed? [Y]> y
```

```
Would you like to change SMTP actions taken as result of the SPF verification? [N]> y
```

```
Would you like to change SMTP actions taken for the HELO identity? [N]> y
```

```
What SMTP action should be taken if HELO check returns None?
```

1. Accept

2. Reject

[1]> 1

What SMTP action should be taken if HELO check returns Neutral?

1. Accept

2. Reject

[1]> 1

What SMTP action should be taken if HELO check returns SoftFail?

1. Accept

2. Reject

[1]> 2

What SMTP action should be taken if HELO check returns Fail?

1. Accept

2. Reject

[1]> 2

What SMTP action should be taken if HELO check returns TempError?

1. Accept

2. Reject

```
[1]> 2
```

```
What SMTP action should be taken if HELO check returns PermError?
```

1. Accept
2. Reject

```
[1]> 2
```

```
Would you like to change SMTP actions taken for the MAIL FROM  
identity? [N]> n
```

```
Would you like to change SMTP response settings for the REJECT  
action? [N]> n
```

```
Verification timeout (seconds)
```

```
[40]>
```

次に、リスナーのデフォルトのポリシー パラメータに SPF/SIDF 設定がどのように表示されるかを示します。

```
SPF/SIDF Verification Enabled: Yes
```

```
Conformance Level: SPF only
```

```
Do HELO test: Yes
```

```
SMTP actions:
```

```
For HELO Identity:
```

```
None, Neutral: Accept
```

```
SoftFail, Fail, TempError, PermError: Reject

For MAIL FROM Identity: Accept

SMTP Response Settings:

Reject code: 550

Reject text: #5.7.1 SPF unauthorized mail is prohibited.

Get reject response text from publisher: Yes

Defer code: 451

Defer text: #4.4.3 Temporary error occurred during SPF
verification.

Verification timeout: 40
```

listenerconfig コマンドの詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS CLI Reference Guide*』を参照してください。

Received-SPF ヘッダー

AsyncOS で SPF/SIDF 検証を設定すると、電子メールに SPF/SIDF 検証ヘッダー (Received-SPF) が配置されます。さらに、Received-SPF ヘッダーには、次の情報が含まれます。

- **検証結果** : SPF 検証結果 (「[検証結果](#)」(P.5-40) を参照してください)。
- **ID** : SPF 検証でチェックされた ID : HELO、MAIL FROM、PRA。
- **レシーバ** : 検証するホスト名 (チェックを実行する)。
- **クライアント IP アドレス** : SMTP クライアントの IP アドレス。
- **ENVELOPE FROM** : エンベロープ送信者メールボックス。(MAIL FROM ID は空にすることができないため、これは、MAIL FROM ID と異なることがあります)。
- **x-sender** : HELO、MAIL FROM、または PRA ID の値。
- **x-conformance** : 準拠のレベル (「[SPF/SIDF 準拠レベル](#)」(P.5-30) を参照) と PRA チェックのダウングレードが実行されたかどうか。

次の例に、SPF/SIDF チェックに合格したメッセージに追加されるヘッダーを示します。

```
Received-SPF: Pass identity=pra; receiver=box.example.com;

client-ip=1.2.3.4; envelope-from="alice@foo.com";

x-sender="alice@company.com"; x-conformance=sidf_compatible
```



(注)

spf-status および spf-passed フィルタ ルールでは、received-SPF ヘッダーを使用して、SPF/SIDF 検証の状態が判断されます。

SPF/SIDF 検証済みメールに対して実行するアクションの決定

SPF/SIDF 検証されたメールを受信する場合、SPF/SIDF 検証の結果によって異なるアクションを実行することが必要になる場合があります。次のメッセージおよびコンテンツ フィルタ ルールを使用して、SPF/SIDF 検証済みメールの状態を判断し、検証結果に基づいてメッセージへのアクションを実行できます。

- `spf-status`。このフィルタ ルールは SPF/SIDF 状態に基づいてアクションを決定します。有効な SPF/SIDF 戻り値ごとに異なるアクションを入力できます。
- `spf-passed`。このフィルタ ルールは SPF/SIDF 結果をブール値として一般化します。



(注) `spf-passed` フィルタ ルールはメッセージフィルタでのみ使用できます。

より詳細な結果に対処する必要がある場合は、`spf-status` ルールを使用し、簡単なブール値を作成する必要がある場合は `spf-passed` ルールを使用できます。

検証結果

`spf-status` フィルタ ルールを使用する場合、次の構文を使用して、SPF/SIDF 検証結果に対してチェックできます。

```
if (spf-status == "Pass")
```

1 つの条件で複数の状態判定に対してチェックする場合、次の構文を使用できません。

```
if (spf-status == "PermError, TempError")
```

さらに、次の構文を使用して、HELO、MAIL FROM、PRA ID に対して検証結果をチェックすることもできます。

```
if (spf-status("pra") == "Fail")
```



(注)

spf-status メッセージ フィルタ ルールは、HELO、MAIL FROM、PRA ID に対して結果をチェックする場合にのみ使用できます。spf-status コンテンツ フィルタ ルールは、ID に対してチェックする場合に使用できません。

次のいずれかの検証結果を受け取る可能性があります。

- **None** : 情報の不足のため、検証を実行できません。
- **Pass** : クライアントは、指定された ID でメールを送信する権限がありません。
- **Neutral** : ドメイン所有者は、クライアントに指定された ID を使用する権限があるかどうかをアサートしません。
- **SoftFail** : ドメイン所有者は、指定された ID を使用する権限がホストにないと思うが、断言を避けたいと考えています。
- **Fail** : クライアントは、指定された ID でメールを送信する権限がありません。
- **TempError** : 検証中に一時的なエラーが発生しました。
- **PermError** : 検証中に永続的なエラーが発生しました。

CLI での spf-status フィルタ ルールの使用

次の例に、spf-status メッセージ フィルタ の使用例を示します。

```
skip-spam-check-for-verified-senders:
```

```
    if (sendergroup == "TRUSTED" and spf-status == "Pass"){
        skip-spamcheck();
    }
```

```
quarantine-spf-failed-mail:
```

```
    if (spf-status("pra") == "Fail") {
```

```
if (spf-status("mailfrom") == "Fail"){
    # completely malicious mail
    quarantine("Policy");
} else {
    if(spf-status("mailfrom") == "SoftFail") {
        # malicious mail, but tempting
        quarantine("Policy");
    }
}
} else {
    if(spf-status("pra") == "SoftFail"){
        if (spf-status("mailfrom") == "Fail"
            or spf-status("mailfrom") == "SoftFail"){
            # malicious mail, but tempting
            quarantine("Policy");
        }
    }
}

stamp-mail-with-spf-verification-error:
    if (spf-status("pra") == "PermError, TempError"
        or spf-status("mailfrom") == "PermError, TempError"
```



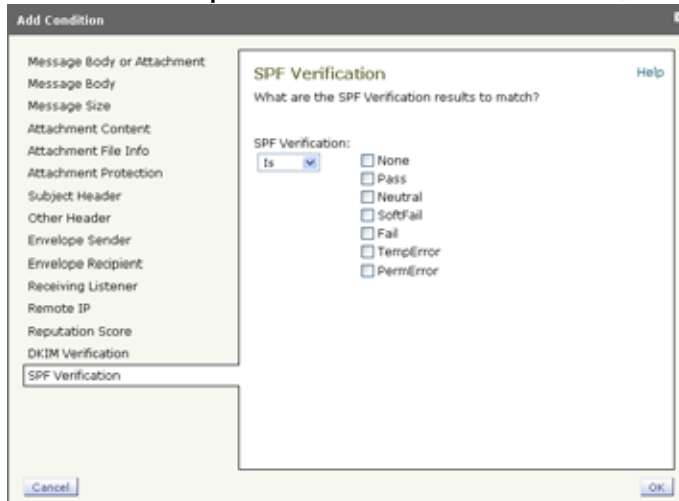
```
or spf-status("helo") == "PermError, TempError"){  
  
# permanent error - stamp message subject  
  
strip-header("Subject");  
  
insert-header("Subject", "[POTENTIAL PHISHING] $Subject"); }  
  
.
```

GUI での spf-status コンテンツ フィルタ ルール

GUI でコンテンツ フィルタから spf-status ルールをイネーブルにすることもできます。ただし、spf-status コンテンツ フィルタ ルールを使用した場合、HELO、MAIL FROM、PRA ID に対して結果をチェックできません。

GUI から spf-status コンテンツ フィルタ ルールを追加するには、[Mail Policies] > [Incoming Content Filters] をクリックします。次に [Add Condition] ダイアログボックスから、[SPF Verification] フィルタ ルールを追加します。条件に、1 つ以上の検証結果を指定します。

図 5-16 spf-status コンテンツ フィルタ ルールの使用



SPF 検証条件を追加したら、SPF 状態に基づいて実行するアクションを指定します。たとえば、SPF 状態が `SoftFail` の場合、メッセージを検疫します。

spf-passed フィルタ ルールの使用

`spf-passed` ルールは SPF 検証の結果をブール値として表示します。次の例に、`spf-passed` とマークされていない電子メールを検疫するために使用する `spf-passed` ルールを示します。

```
quarantine-spf-unauthorized-mail:

    if (not spf-passed) {

        quarantine("Policy");

    }
```



(注)

spf-status ルールと異なり spf-passed ルールは SPF/SIDF 検証値を簡単なブール値に単純化します。次の検証結果は、spf-passed ルールに合格していないものとして扱われます。None、Neutral、Softfail、TempError、PermError、Fail。より詳細な結果に基づいて、メッセージへのアクションを実行するには、spf-status ルールを使用します。

SPF/SIDF 結果のテスト

組織によって SPF/SIDF の実装方法が異なるため、SPF/SIDF 検証の結果をテストし、これらの結果を使用して、SPF/SIDF の失敗の処理方法を決定します。コンテンツ フィルタ、メッセージ フィルタ、Email Security Monitor - Content Filters レポートを組み合わせて使用し、SPF/SIDF 検証の結果をテストします。

SPF/SIDF 検証の依存度によって、SPF/SIDF 結果をテストする詳細レベルが決まります。

SPF/SIDF 結果の基本の詳細度のテスト

受信メールの SPF/SIDF 検証結果の基本評価基準を取得するため、コンテンツ フィルタと [Email Security Monitor - Content Filters] ページを使用できます。このテストでは、SPF/SIDF 検証結果のタイプごとに受信されたメッセージ数が表示されます。

基本 SPF/SIDF 検証テストを実行するには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** 受信リスナーで、メール フロー ポリシーの SPF/SIDF 検証をイネーブルにし、コンテンツ フィルタを使用して、実行するアクションを設定します。SPF/SIDF をイネーブルにする方法については、「[SPF と SIDF のイネーブル化](#)」(P.5-29)を参照してください。
- ステップ 2** SPF/SIDF 検証のタイプごとに spf-status コンテンツ フィルタを作成します。命名規則を使用して、検証のタイプを示します。たとえば、SPF/SIDF 検証に合格したメッセージには「SPF-Passed」を使用し、検証中の一時的エラーのために合格しなかったメッセージには、「SPF-TempErr」を使用します。spf-status コンテンツ フィルタの作成については、「[GUI での spf-status コンテンツ フィルタ ルール](#)」(P.5-43)を参照してください。

- ステップ 3** 多数の SPF/SIDF 検証済みメッセージの処理後、[Monitor] > [Content Filters] をクリックして、各 SPF/SIDF 検証済みコンテンツ フィルタをトリガーしたメッセージ数を確認します。

SPF/SIDF 結果の高い詳細度のテスト

SPF/SIDF 検証結果のより包括的な情報を得るには、送信者の特定のグループの SPF/SIDF 検証をイネーブルにし、それらの特定の送信者の結果を確認するだけです。次に、その特定のグループのメール ポリシーを作成し、メール ポリシーで SPF/SIDF 検証をイネーブルにします。「[SPF/SIDF 結果の基本の詳細度のテスト](#)」(P.5-45) で説明するように、コンテンツ フィルタを作成し、Content Filters レポートを確認します。検証が有効であることがわかったら、この指定した送信者のグループの電子メールをドロップするかバウンスするかの決断の基準として、SPF/SIDF 検証を使用できます。

詳細な SPF/SIDF 検証テストを実行するには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** SPF/SIDF 検証のメール フロー ポリシーを作成します。受信リスナーで、メール フロー ポリシーの SPF/SIDF 検証をイネーブルにします。SPF/SIDF をイネーブルにする方法については、「[SPF と SIDF のイネーブル化](#)」(P.5-29) を参照してください。
- ステップ 2** SPF/SIDF 検証の送信者グループを作成し、命名規則を使用して、SPF/SIDF 検証を示します。送信者グループの作成については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「Configuring the Gateway to Receive Mail」の章を参照してください。
- ステップ 3** SPF/SIDF 検証のタイプごとに spf-status コンテンツ フィルタを作成します。命名規則を使用して、検証のタイプを示します。たとえば、SPF/SIDF 検証に合格したメッセージには「SPF-Passed」を使用し、検証中の一時的エラーのために合格しなかったメッセージには、「SPF-TempErr」を使用します。spf-status コンテンツ フィルタの作成については、「[GUI での spf-status コンテンツ フィルタ ルール](#)」(P.5-43) を参照してください。
- ステップ 4** 多数の SPF/SIDF 検証済みメッセージの処理後、[Monitor] > [Content Filters] をクリックして、各 SPF/SIDF 検証済みコンテンツ フィルタをトリガーしたメッセージ数を確認します。



CHAPTER 6

メッセージフィルタを使用した電子メールポリシーの適用

Cisco IronPort アプライアンスは、詳細なコンテンツ スキャンおよびメッセージフィルタリング テクノロジーを備えているため、会社のネットワークに参加または退出するときに、会社のポリシーを適用して、特定のメッセージを処理することができます。

この章では、ポリシーの適用のために使用可能な機能（コンテンツ スキャン エンジン、メッセージフィルタ、添付ファイルフィルタ、コンテンツ ディクショナリ）の強力な組み合わせについて説明します。

この章は、次の内容で構成されています。

- 「概要」 (P.6-2)
- 「メッセージフィルタのコンポーネント」 (P.6-3)
- 「メッセージフィルタ処理」 (P.6-5)
- 「メッセージフィルタ ルール」 (P.6-14)
- 「メッセージフィルタ アクション」 (P.6-64)
- 「添付ファイルのスキャン」 (P.6-100)
- 「CLI を使用したメッセージフィルタの管理」 (P.6-115)
- 「メッセージフィルタの例」 (P.6-145)

概要

メッセージフィルタにより、Cisco IronPort アプライアンスでメッセージを受信したときに、それらを処理する方法を記述した特別なルールを作成できます。メッセージフィルタは、特定の種類の電子メールメッセージに指定の特別な処理を施す必要があることを指定します。IronPort メッセージフィルタにより、メッセージの内容の指定した単語をスキャンして、会社の電子メールポリシーを適用することもできます。この章は、次の内容で構成されています。

- **メッセージフィルタのコンポーネント。**メッセージフィルタにより、メッセージの受信時にそれらを処理する方法を記述した特別なルールを作成できます。フィルタルールは、メッセージまたは添付ファイルの内容、ネットワークに関する情報、メッセージエンベロープ、メッセージヘッダー、メッセージ本文に基づいてメッセージを識別します。フィルタアクションにより、通知を生成したり、メッセージのドロップ、バウンス、アーカイブ、ブラインドカーボンコピー、変更を行ったりすることができます。詳細については、「[メッセージフィルタのコンポーネント](#)」(P.6-3)を参照してください。
- **メッセージフィルタの処理。**AsyncOS がメッセージフィルタを処理する場合、AsyncOS がスキャンする内容、処理の順番、実行されるアクションは、メッセージフィルタの順番、メッセージの内容を変更した可能性のある事前の処理、メッセージの MIME 構造、コンテンツ マッチング用に設定されたしきい値スコア、クエリーの構造などのいくつかの要因に基づきます。詳細については、「[メッセージフィルタ処理](#)」(P.6-5)を参照してください。
- **メッセージフィルタルール。**各フィルタには、フィルタで処理できる一連のメッセージを定義するルールがあります。メッセージフィルタを作成する場合、それらのルールを定義します。詳細については、「[メッセージフィルタルール](#)」(P.6-14)を参照してください。
- **メッセージフィルタのアクション。**各フィルタには、ルールで true に評価された場合に、メッセージに対して実行するアクションがあります。実行できるアクションには、最終アクション（メッセージの配信、ドロップ、バウンスなど）、またはメッセージをさらに処理できる非最終アクション（ヘッダーの除去や挿入など）の 2 つのタイプのアクションがあります。詳細については、「[メッセージフィルタアクション](#)」(P.6-64)を参照してください。
- **添付ファイル スキャン メッセージフィルタ。**添付ファイル スキャンメッセージフィルタを使用して、会社のポリシーと整合しないメッセージから添付ファイルを除去できます。元のメッセージはそのまま配信することができます。添付ファイルは、それらの特定のタイプ、フィンガープリント、内容に基づいてフィルタできます。イメージアナライザを使用して、イメー

ジ添付ファイルをスキャンすることもできます。イメージアナライザは、肌の色、本文サイズ、曲率を測定して、グラフィックに不適切な内容が含まれている可能性を判断するアルゴリズムを作成します。詳細については、「添付ファイルのスキャン」(P.6-100)を参照してください。

- **CLI を使用したメッセージフィルタの管理。** CLI は、メッセージフィルタを操作するためのコマンドを受け入れます。たとえば、メッセージフィルタのリストを表示、並び替え、インポート、エクスポートする必要がある場合があります。詳細については、「CLI を使用したメッセージフィルタの管理」(P.6-115)を参照してください。
- **メッセージフィルタの例。** このセクションでは、実際のフィルタの例を示し、各フィルタについて簡単に説明します。詳細については、「メッセージフィルタの例」(P.6-145)を参照してください。

メッセージフィルタのコンポーネント

メッセージフィルタにより、メッセージの受信時にそれら进行处理する方法を記述した特別なルールを作成できます。メッセージフィルタは、メッセージフィルタルールとメッセージフィルタアクションから構成されます。

メッセージフィルタルール

メッセージフィルタルールによって、フィルタで処理するメッセージを判断します。ルールは、論理結合子 AND、OR、NOT を使用して組み合わせることで、複雑なテストを作成できます。ルール式は、かっこを使用してグループ化することもできます。

メッセージフィルタアクション

メッセージフィルタの目的は、選択されたメッセージに対してアクションを実行することです。

アクションには、次の 2 つのタイプがあります。

- **最終アクション** (deliver、drop、bounce など) はメッセージの処理を終了し、後続のフィルタによるさらなる処理を許可しません。

- 非最終アクションは、メッセージをさらに処理することを許可するアクションを実行します。



(注) 非最終メッセージフィルタアクションは、累積的です。各フィルタが異なるアクションを指定する複数のフィルタにメッセージが一致する場合、すべてのアクションが累積され、適用されます。ただし、同じアクションを指定する複数のフィルタにメッセージが一致する場合、前のアクションが上書きされ、最後のフィルタアクションが適用されます。

メッセージフィルタの構文例

フィルタ仕様の直観的な意味は次のようになります。

メッセージがルールに一致する場合、順番にアクションが適用されます。else 句が存在する場合、メッセージがルールに一致しない場合に else 句内のアクションが実行されます。

指定したフィルタ名によって、フィルタをアクティブ、非アクティブ、削除する場合に、フィルタが管理しやすくなります。

メッセージフィルタでは次の構文を使用します。

構文例	目的
<code>expedite:</code>	フィルタ名
<code>if (recv-listener == 'InboundMail' or recv-int == 'notmain')</code>	ルールの指定
<code>{ alt-src-host('outbound1'); skip_filters(); }</code>	アクションの指定
<code>else { alt-src-host('outbound2'); }</code>	任意の代替アクションの指定

代替アクションは省略できることに注意してください。

構文例	目的
<code>expedite2:</code>	フィルタ名
<code>if ((not (recv-listener == 'InboundMail')) and (not (recv-int == 'notmain')))</code>	ルールの指定
<code>{ alt-src-host('outbound2'); skip_filters(); }</code>	アクションの指定

複数のフィルタを順番に 1 つずつ並べて 1 つのテキスト ファイルにまとめることができます。

単一引用符または二重引用符で、フィルタの値を囲む必要があります。単一引用符または二重引用符は、値の両側に等しく組み合わせる必要があります。たとえば、式 `notify('customercare@example.com')` と `notify("customercare@example.com")` はどちらも有効ですが、式 `notify("customercare@example.com')` は構文エラーが発生します。

「#」文字で始まる行はコメントと見なされ、無視されます。ただし、それらは `filters -> detail` によってフィルタを表示して確認できるように、AsyncOS で保持されません。

メッセージ フィルタ処理

AsyncOS はメッセージ フィルタを処理する場合、AsyncOS がスキャンする内容、処理の順番、実行するアクションは、次のいくつかの要因に基づきます。

- メッセージ フィルタの順番。**メッセージ フィルタは、順序付けられたリストで維持されます。メッセージの処理時に、AsyncOS は各メッセージ フィルタをそれらがリストに表示されている順番で適用します。最終アクションが行われた場合、そのメッセージに対して、それ以上のアクションは実行されません。詳細については、「[メッセージ フィルタの順番](#)」(P.6-6) を参照してください。

- **事前処理**。メッセージフィルタが評価される前に、AsyncOS メッセージに対して実行されるアクションによって、ヘッダーが追加または削除されることがあります。AsyncOS は、処理時にメッセージに存在するヘッダーに対してメッセージフィルタプロセスを実行します。詳細については、「[メッセージヘッダー ルールおよび評価](#)」(P.6-7) を参照してください。
- **メッセージの MIME 峻造**。メッセージの MIME 構造によって、「本文」として扱われるメッセージの部分と「添付ファイル」として扱われるメッセージの部分判断されます。多くのメッセージフィルタは、メッセージの本文部分のみに、または添付ファイル部分のみに作用するように設定されます。詳細については、「[メッセージ本文とメッセージ添付ファイル](#)」(P.6-7) を参照してください。
- **正規表現に設定されるしきい値スコア**。正規表現に一致させる場合、フィルタアクションが実行されるまでに、一致が発生しなければならない回数を集計する「スコア」を設定します。これにより、さまざまな用語に対する応答の重み付けをすることができます。詳細については、「[コンテンツ スキャンの一致のしきい値](#)」(P.6-9) を参照してください。
- **クエリーの峻造**。メッセージフィルタ内で、AND または OR テストを評価する場合、AsyncOS は不要なテストを評価しません。さらに、システムは左から右にテストを評価しないことに注意することが重要です。代わりに、AND および OR テストが評価される場合、最も価値の低いテストが最初に評価されます。詳細については、「[メッセージフィルタ内の AND テストと OR テスト](#)」(P.6-12) を参照してください。

メッセージフィルタの順番

メッセージフィルタは順序付けられたリストに維持され、リスト内のそれらの位置によって番号付けされます。メッセージの処理時に、メッセージフィルタが割り振られた番号順で適用されます。そのため、9 番のフィルタがメッセージに対してすでに最終アクション（バウンスなど）を実行した場合、30 番のフィルタは、メッセージの送信元ホストを変更する機会がありません。リストのフィルタの位置は、システム ユーザ インターフェイスによって変更できます。ファイルからインポートされたフィルタは、インポートされたファイル内のそれらの相対的順序に基づきます。

最終アクション後、そのメッセージに対して、それ以上のアクションは実行されません。

メッセージがフィルタ ルールに一致していても、次のいずれかの理由で、フィルタがそのメッセージに対して作用しないことがあります。

- フィルタが非アクティブである。
- フィルタが無効である。
- フィルタが、メッセージの最終アクションを実行した前のフィルタに取って代わられた。

メッセージ ヘッダー ルールおよび評価

フィルタは、ヘッダー ルールを適用する場合に、元のメッセージのヘッダーではなく、「処理済み」ヘッダーを評価します。つまり、

- 前に実行されたアクションによって、ヘッダーが追加された場合、後続のすべてのヘッダー ルールによって、それを照合できるようになります。
- 前に実行されたアクションによって、ヘッダーが取り除かれた場合、後続のすべてのヘッダー ルールで、それを照合できなくなります。
- 前に実行されたアクションによって、ヘッダーが変更された場合、後続のすべてのヘッダー ルールで、元のメッセージ ヘッダーではなく、変更済みのヘッダーが評価されます。

この動作は、メッセージ フィルタとコンテンツ フィルタの両方に共通です。

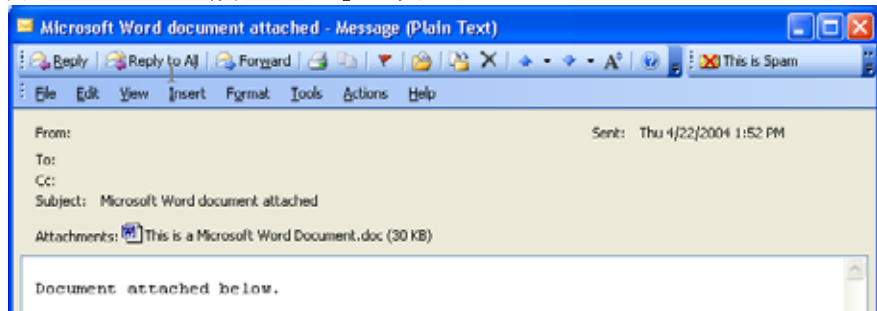
メッセージ本文と メッセージ添付ファイル

電子メール メッセージは、複数の部分から構成されます。RFC では、メッセージのヘッダーの後に続くすべてのものをマルチパート「メッセージ本文」として規定していますが、多くのユーザはまだメッセージの「本文」と「添付ファイル」を別々のものと捉えています。body-*variable* または attachment-*variable* という IronPort メッセージ フィルタを使用する場合、Cisco IronPort アプライアンスは、ほとんどのユーザが「本文」と「添付ファイル」として考える部分を、多くの MUA がそれらを別々にレンダリングしようと試みるのと同じように区別しようとします。

body-*variable* または attachment-*variable* メッセージ フィルタ ルールを書く目的では、メッセージ ヘッダーの後のすべてのものがメッセージ本文と見なされ、その内容は本文内にある MIME 部分の最初のテキスト部分と見なされます。そのコンテンツの後のすべてのもの（つまり、追加の MIME 部分）は添付ファイルと見なされます。AsyncOS はメッセージのさまざまな MIME 部分の評価し、添付ファイルとして処理されるファイルの部分を識別します。

たとえば、図 6-1 に、Microsoft Outlook MUA のメッセージを示します。ここでは「Document attached below.」という言葉がプレーンテキストのメッセージ本文として表示され、ドキュメント「This is a Microsoft Word document.doc」が添付ファイルとして表示されています。多くのユーザが電子メールをこのように捉えている（最初の部分がプレーンテキストで 2 番目の部分がバイナリファイルであるマルチパートメッセージとしてではなく）ため、Cisco IronPort は、メッセージの「本文」（最初のプレーンテキスト部分）と対照的に、.doc ファイル部分（実質的に 2 番目の MIME 部分）を区別して処理するルールを作成するために、メッセージフィルタで「添付ファイル」という用語を使用しています。ただし、RFC 1521 および 1522 で使われている用語によると、メッセージの本文はすべての MIME 部分から構成されます。

図 6-1 「添付ファイル」のあるメッセージ



Cisco IronPort アプライアンスは、マルチパートメッセージの本文と添付ファイルを区別しているため、*body-variable* または *attachment-variable* メッセージフィルタルールを使用して、期待する動作を達成するために、注意する必要があります。いくつかの状況があります。

- テキスト部分が 1 つのメッセージ（つまり、「Content-Type: text/plain」または「Content-Type: text/html」のヘッダーを含むメッセージ）がある場合、Cisco IronPort アプライアンスはメッセージ全体を本文と見なします。コンテンツタイプが異なる場合、Cisco IronPort アプライアンスは、それを単一の添付ファイルと見なします。
- エンコードされたファイル（*uuencoded* など）は電子メールメッセージの本文に含まれます。これが発生した場合、エンコードされたファイルは添付ファイルとして扱われ、抽出およびスキャンされ、残りのテキストがテキスト本文として見なされます。
- 単一のテキスト以外の部分は常に添付ファイルと見なされます。たとえば、.zip ファイルのみで構成されるメッセージは、添付ファイルと見なされません。

コンテンツ スキャンの一致のしきい値

メッセージ本文または添付ファイル内のパターンを検索するフィルタ ルールを追加する場合、パターンが見つかる必要がある回数の最初のしきい値を指定できます。AsyncOS はメッセージをスキャンすると、メッセージおよび添付ファイルに見つかった一致の数の「スコア」を集計します。最小しきい値に満たない場合、正規表現は `true` と評価されません。このしきい値は次のフィルタ ルールに指定できます。

- `body-contains`
- `only-body-contains`
- `attachment-contains`
- `every-attachment-contains`
- `dictionary-match`
- `attachment-dictionary-match`

`drop-attachments-where-contains` アクションにしきい値を指定することもできます。



(注)

ヘッダーまたはエンベロープの受信者と送信者をスキャンするフィルタ ルールにしきい値を指定できません。

しきい値の構文

出現最小回数のしきい値を指定するには、パターンと、`true` と評価するために必要な一致の最小数を指定します。

```
if(<filter rule>(<pattern>,<minimum threshold>){
```

たとえば、`body-contains` フィルタ ルールで、値「`Company Confidential`」が少なくとも 2 回見つかる必要があることを指定するには、次の構文を使用します。

```
if(body-contains('Company Confidential',2)){
```

デフォルトで、AsyncOS がコンテンツ スキャン フィルタを保存する場合、フィルタをコンパイルし、しきい値が割り当てられていない場合、1 のしきい値を割り当てます。

コンテンツ ディクショナリの値に対して、パターン マッチの最小数を指定することもできます。コンテンツ ディクショナリの詳細については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Text Resources」の章を参照してください。

メッセージ本文と添付ファイルのしきい値スコア

電子メール メッセージは、複数の部分から構成されることがあります。メッセージ本文または添付ファイル内のパターンを検索するフィルタ ルールのしきい値を指定すると、AsyncOS は、メッセージ部分と添付ファイルの一致の数をカウントして、しきい値「スコア」を判断します。メッセージフィルタで特定の MIME 部分を指定しない限り (attachment-contains フィルタ ルールなど)、AsyncOS はメッセージのすべての部分で見つかった一致を合計し、一致の合計がしきい値に達しているかどうかを判断します。たとえば、しきい値が 2 の body-contains メッセージフィルタがあるとします。本文に 1 つの一致があり、添付ファイルに 1 つの一致があるメッセージを受信します。AsyncOS がこのメッセージを採点した場合、合計が 2 つの一致になり、しきい値スコアを満たしていると判断します。

同様に、複数の添付ファイルがある場合、AsyncOS は添付ファイルごとにスコアを合計して、一致のスコアを判断します。たとえば、しきい値が 3 の attachment-contains フィルタ ルールがあるとします。2 つの添付ファイルがあるメッセージを受信し、各添付ファイルに 2 つの一致が含まれます。AsyncOS はこのメッセージを 4 つの一致と採点し、しきい値スコアを満たされると判断します。

しきい値スコア マルチパート/代替 MIME 部分

カウントの重複を避けるため、同じコンテンツの 2 つの表現 (プレーン テキストと HTML) がある場合、AsyncOS は重複した部分からの一致を合計しません。代わりに、各部分の一致を比較して、最高値を選択します。AsyncOS はこの値をマルチパート メッセージの他の部分からのスコアに追加して、合計スコアを作成します。

たとえば、`body-contains` フィルタ ルールを設定し、しきい値を 4 に設定します。プレーン テキスト、HTML、および 2 つの添付ファイルを含むメッセージを受信します。メッセージは次のような構造を使用します。

```
multipart/mixed

    multipart/alternative

        text/plain

        text/html

    application/octet-stream

    application/octet-stream
```

`body-contains` フィルタ ルールは、メッセージの `text/plain` および `text/html` 部分を最初に採点して、このメッセージのスコアを判断します。次に、これらのスコアの結果を比較し、結果から最高のスコアを選択します。さらに、この結果を各添付ファイルからのスコアに追加して、最終スコアを判断します。メッセージに次の数の一致があるとします。

```
multipart/mixed

    multipart/alternative

        text/plain (2 matches)

        text/html (2 matches)

    application/octet-stream (1 match)

    application/octet-stream
```

AsyncOS は `text/plain` と `text/html` 部分の一致を比較するため、スコア 3 を返します。これは、フィルタ ルールをトリガする最小しきい値を満たしていません。

コンテンツディクショナリを使用したしきい値のスコアリング

コンテンツディクショナリを使用すると、用語の「重み」を設定して、より簡単に特定の用語でフィルタアクションをトリガできます。たとえば、「bank」という用語ではメッセージフィルタをトリガせず、「bank」の後に「account」という用語があり、さらに ABA ルーティング番号が含まれていれば、フィルタアクションをトリガする必要があるとします。これを実現するには、重みを設定したディクショナリを使用して、特定の用語または用語の組み合わせの重要度を高めます。コンテンツディクショナリを使うメッセージフィルタがフィルタルールの一致を評価する場合、コンテンツディクショナリの重みを使用して最終的なスコアを決定します。たとえば、次のコンテンツと重みを指定してコンテンツディクショナリを作成したとします。

表 6-1 **コンテンツディクショナリの例**

用語/スマート ID	重み
ABA Routing Number	3
Account	2
Bank	1

このコンテンツディクショナリを `dictionary-match` または `attachment-dictionary-match` メッセージフィルタルールに関連付けると、AsyncOS はメッセージ内で検出された一致する用語の各インスタンスの合計「スコア」に、この用語の重みを追加します。たとえば、メッセージ本文に用語「account」のインスタンスが 3 つ含まれているメッセージの合計スコアに、値 6 が追加されます。メッセージフィルタのしきい値が 6 に設定されている場合、AsyncOS はこのしきい値スコアが満たされたと判断します。または、各用語のインスタンスが 1 つずつ含まれている場合も合計値は 6 になり、このスコアによってフィルタアクションがトリガされます。

メッセージフィルタ内の AND テストと OR テスト

メッセージフィルタ内で、AND または OR テストを評価する場合、AsyncOS は不要なテストを評価しません。したがって、たとえば、一方の AND テストが `false` の場合、もう一方のテストは評価されません。テストは左から右に評価されるわけではないため、注意してください。代わりに、AND および OR テストが評価される場合、最も価値の低いテストが最初に評価されます。たとえば、次

のフィルタでは、remote-ip テストが必ず最初に評価されます。その理由は、rcpt-to-group テストよりもコストが低いからです（一般に、LDAP テストのほうがコストが高くなります）。

```
andTestFilter:
```

```
if (remote-ip == "192.168.100.100" AND rcpt-to-group == "GROUP")  
  
    { ... }
```

最もコストの低いテストが最初に実行されるため、項目の順序を入れ替えても影響はありません。テストの実行順序を保証する必要がある場合は、if 文をネストさせてください。この方法は、できる限りコストの高いテストを避けるためにも推奨します。

```
expensiveAvoid:
```

```
if (<simple tests>  
  
    { if (<expensive test>  
  
        { <action> }  
  
    }  
  
}
```

次に、もう少し複雑な例で説明します。

```
if (test1 AND test2 AND test3) { ... }
```

システムは左から右に式をグループ化するため、次のようになります。

```
if ((test1 AND test2) AND test3) { ... }
```

この場合、最初に (test1 AND test2) のコストと test3 のコストを比較してから、最初に 2 番目の AND を評価します。3 つのテストすべてで同じコストがかかる場合、test3 が最初に実行されます。これは、(test1 AND test2) のコストが 2 倍になるためです。

メッセージフィルタ ルール

各メッセージフィルタには、フィルタを適用できるメッセージのコレクションを定義するルールが含まれています。フィルタルールを定義して、true を返すメッセージへのフィルタアクションを定義します。

フィルタ ルールの概要の表

表 6-2 に、メッセージフィルタで使用できるルールをまとめます。

表 6-2 メッセージフィルタ ルール

ルール	構文	説明
Subject Header	subject	件名ヘッダーが特定のパターンと一致しているか。「 件名ルール 」(P.6-32) を参照してください。
Body Size	body-size	本文のサイズは一定の範囲内か。「 本文サイズルール 」(P.6-36) を参照してください。
Envelope Sender	mail-from	エンベロープ送信者（例：Envelope From、<MAIL FROM> など）が指定したパターンと一致しているか。「 エンベロープ送信者ルール 」(P.6-35) を参照してください。
Envelope Sender in Group	mail-from-group	エンベロープ送信者（Envelope From、<MAIL FROM> など）が、指定した LDAP グループ内に存在するか。「 グループ内エンベロープ送信者ルール 」(P.6-35) を参照してください。
Sender Group	sendergroup	どの送信者グループが、リスナーの Host Access Table (HAT; ホストアクセステーブル) に一致するか。「 送信者グループルール 」(P.6-36) を参照してください。

表 6-2 メッセージフィルタ ルール (続き)

ルール	構文	説明
Envelope Recipient	rcpt-to	エンベロープ受信者 (例: Envelope To, <RCPT TO>) が指定したパターンと一致しているか。「 エンベロープ受信者ルール 」 (P.6-33) を参照してください。 注: rcpt-to ルールはメッセージベースです。メッセージに複数の受信者が設定されている場合、いずれか 1 人の受信者がルールと一致していれば、指定した処理がすべての受信者に対するメッセージに適用されます。
Envelope Recipient in Group	rcpt-to-group	エンベロープ受信者 (Envelope To, <RCPT TO> など) が、指定した LDAP グループ内に存在するか。「 グループ内エンベロープ受信者ルール 」 (P.6-34) を参照してください。 注: rcpt-to-group ルールはメッセージベースです。メッセージに複数の受信者が存在する場合、指定したアクションのグループに 1 人の受信者が含まれているだけで、すべての受信者へのメッセージに影響します。
Remote IP	remote-ip	リモート ホストから送信されたメッセージは、指定した IP アドレスまたは IP ブロックに一致しているか。「 リモート IP ルール 」 (P.6-37) を参照してください。
Receiving Interface	recv-int	メッセージは、指定された受信インターフェイス経由で届いたか。「 受信 IP インターフェイスルール 」 (P.6-38) を参照してください。
Receiving Listener	recv-listener	メッセージは、指定されたリスナー経由で届いたか。「 受信リスナー ルール 」 (P.6-38) を参照してください。
Date	date	現在時刻は特定の日時の前か後か。「 日付ルール 」 (P.6-39) を参照してください。

表 6-2 メッセージ フィルタ ルール (続き)

ルール	構文	説明
Header	<code>header(<string>)</code>	メッセージに特定のヘッダーが含まれているか。ヘッダーの値が特定のパターンと一致しているか。「ヘッダー ルール」(P.6-39)を参照してください。
Random	<code>random(<integer>)</code>	ランダム番号は一定の範囲内か。「乱数ルール」(P.6-40)を参照してください。
Recipient Count	<code>rcpt-count</code>	この電子メールの受信者の人数。「受信者数ルール」(P.6-41)を参照してください。
Address Count	<code>addr-count()</code>	受信者の累積数。 このフィルタは、エンベロープの受信者ではなくメッセージ本文のヘッダーに対して機能する点が <code>rcpt-count</code> フィルタ ルールと異なります。「アドレス数ルール」(P.6-42)を参照してください。
SPF Status	<code>spf-status</code>	SPF 検証ステータスの値。このフィルタ ルールを使用して、さまざまな SPF 検証結果について問い合わせることができます。有効な SPF/SIDF 戻り値ごとに異なるアクションを入力できます。「SPF-Status ルール」(P.6-52)を参照してください。
SPF Passed	<code>spf-passed</code>	SPF/SIDF 検証に合格したか。このフィルタ ルールは SPF/SIDF 結果をブール値として一般化します。「SPF-Passed ルール」(P.6-54)を参照してください。
Image verdict	<code>image-verdict</code>	イメージ スキャンの評価の結果。このフィルタ ルールを使用して、さまざまなイメージ分析の評価について問い合わせることができます。「イメージの分析」(P.6-103)を参照してください。
Workqueue count	<code>workqueue-count</code>	作業キュー数と指定した値の比較結果 (等しい、多い、少ない)。「workqueue-count ルール」(P.6-55)を参照してください。

表 6-2 メッセージフィルタ ルール (続き)

ルール	構文	説明
Body Scanning	<code>body-contains(<regular expression>)</code>	<p>指定したパターンと一致するテキストまたは添付ファイルがメッセージに含まれているか。パターンの発生回数が、しきい値で指定した最小回数以上である必要があります。</p> <p>エンジンは、配信ステータス部分と関連する添付ファイルをスキャンします。</p> <p>「本文スキャンルール」(P.6-42) を参照してください。</p>
Body Scanning	<code>only-body-contains(<regular expression>)</code>	<p>指定したパターンと一致するテキストがメッセージ本文に含まれているか。パターンの発生回数が、しきい値で指定した最小回数以上である必要があります。添付ファイルはスキャンされません。「本文スキャン」(P.6-43) を参照してください。</p>
Encryption Detection	<code>encrypted</code>	<p>メッセージは暗号化されているか。「暗号化検出ルール」(P.6-44) を参照してください。</p>
Attachment Filename^a	<code>attachment-filename</code>	<p>指定したパターンと一致するファイル名の添付ファイルがメッセージに含まれているか。「添付ファイル名ルール」(P.6-46) を参照してください。</p>
Attachment Type^a	<code>attachment-type</code>	<p>特定の MIME タイプの添付ファイルがメッセージに含まれているか。「添付ファイルタイプルール」(P.6-45) を参照してください。</p>

表 6-2 メッセージフィルタルール (続き)

ルール	構文	説明
Attachment File^a Type	attachment-filetype	<p>フィンガープリントに基づく特定のパターンと一致するファイルタイプの添付ファイルがメッセージに含まれているか (UNIX の file コマンドと同様)。添付ファイルが Excel または Word ドキュメントである場合、埋め込みファイルタイプの .exe、.dll、.bmp、.tiff、.pcx、.gif、.jpeg、png、および Photoshop イメージを検索することもできます。</p> <p>有効なフィルタを作成するには、ファイルタイプを引用符で囲む必要があります。一重引用符または二重引用符を使用できます。たとえば、.exe 添付ファイルを検索するには、次の構文を使用します。</p> <pre>if (attachment-filetype == "exe")</pre> <p>詳細については、「添付ファイルのスキャンメッセージフィルタの例」(P.6-111) を参照してください。</p>
Attachment MIME Type^a	attachment-mimetype	<p>特定の MIME タイプの添付ファイルがメッセージに含まれているか。このルールは attachment-type ルールに似ていますが、MIME 添付ファイルで指定された MIME タイプのみが評価される点が異なります。(明示的にファイルタイプが指定されていない場合、アプライアンスはファイルの拡張子からファイルのタイプを推測しようとしません)。「添付ファイルのスキャンメッセージフィルタの例」(P.6-111) を参照してください。</p>
Attachment Protected	attachment-protected	<p>パスワード保護された添付ファイルがメッセージに含まれているか。「保護された添付ファイルの検疫」(P.6-114) を参照してください。</p>

表 6-2 メッセージ フィルタ ルール (続き)

ルール	構文	説明
Attachment Unprotected	attachment-unprotected	<p>attachment-unprotected フィルタ条件は、保護されていない添付ファイルをスキャン エンジンが検出した場合に true を返します。スキャン エンジンが添付ファイルを読み取ることができた場合、そのファイルは保護されていないと見なされます。zip ファイルに保護されていないメンバが含まれている場合、その zip ファイルは保護されていないと見なされます。</p> <p>注： attachment-unprotected フィルタ条件と attachment-protected フィルタ条件は、相互に排他的ではありません。同じ添付ファイルのスキャンすると、両方のフィルタ条件で true が返される場合があります。これは、たとえば、zip ファイルに保護されたメンバと保護されていないメンバの両方が含まれている場合に発生します。</p> <p>「保護されていない添付ファイルの検出」(P.6-114) を参照してください。</p>
Attachment Scanning^a	attachment-contains (<regular expression>)	<p>指定したパターンと一致するテキストまたは別の添付ファイルが、メッセージの添付ファイルに含まれているか。パターンの発生回数が、しきい値で指定した最小回数以上である必要があります。</p> <p>このルールは body-contains () ルールに似ていますが、メッセージの「本文」全体のスキャンを避けるよう試みます。つまり、ユーザに添付ファイルとして表示される内容のみをスキャンしようとしています。「添付ファイルのスキャンメッセージ フィルタの例」(P.6-111) を参照してください。</p>

表 6-2 メッセージフィルタルール (続き)

ルール	構文	説明
Attachment Scanning	<code>attachment-binary-contains (<regular expression>)</code>	<p>指定したパターンと一致するバイナリ データが存在する添付ファイルがメッセージに含まれているか。</p> <p>このルールは <code>attachment-contains ()</code> ルールに似ていますが、バイナリ データ内のパターンのみを検索します。</p>
Attachment Scanning	<code>every-attachment-contains (<regular expression>)</code>	<p>このメッセージのすべての添付ファイルに、特定のパターンと一致するテキストが含まれているか。対象のテキストがすべての添付ファイル内に存在する必要があります。つまり実際に実行されるアクションは、各添付ファイルに対する「<code>attachment-contains ()</code>」の論理 AND 演算です。本文はスキャンされません。パターンの発生回数が、しきい値で指定した最小回数以上である必要があります。</p> <p>「添付ファイルのスキャン メッセージフィルタの例」(P.6-111) を参照してください。</p>
Attachment Size^a	<code>attachment-size</code>	<p>メッセージに含まれている添付ファイルのサイズが特定の範囲内に収まっているか。このルールは <code>body-size</code> ルールに似ていますが、メッセージの「本文」全体のスキャンを避けるよう試みます。つまり、ユーザに添付ファイルとして表示される内容のみをスキャンしようとしません。このサイズは、デコードする前に評価されます。「添付ファイルのスキャン メッセージフィルタの例」(P.6-111) を参照してください。</p>
Public Blacklists	<code>dnslist (<query server>)</code>	<p>送信者の IP アドレスがパブリック ブラックリスト サーバ (RBL) 内に存在するか。「DNS リストルール」(P.6-47) を参照してください。</p>
SenderBase Reputation	<code>reputation</code>	<p>送信者の SenderBase 評価スコアの値。「SenderBase 評価ルール」(P.6-48) を参照してください。</p>

表 6-2 メッセージ フィルタ ルール (続き)

ルール	構文	説明
No SenderBase Reputation	no-reputation	SenderBase レピュテーションが「None」の場合に使用します。「SenderBase 評価ルール」(P.6-48) を参照してください。
Dictionary^b	dictionary-match(<dictionary_name>)	メッセージ本文に、 <i>dictionary_name</i> で指定した名前のコンテンツ ディクショナリの正規表現または用語が含まれているかどうかを判別します。パターンの発生回数が、しきい値で指定した最小回数以上である必要があります。「辞書ルール」(P.6-49) を参照してください。
Attachment Dictionary Match	attachment-dictionary-match(<dictionary_name>)	添付ファイルに、 <i>dictionary_name</i> で指定した名前のコンテンツ ディクショナリの正規表現が含まれているかどうかを判別します。パターンの発生回数が、しきい値で指定した最小回数以上である必要があります。「辞書ルール」(P.6-49) を参照してください。
Subject Dictionary Match	subject-dictionary-match(<dictionary_name>)	件名ヘッダーに、 <i>dictionary_name</i> で指定した名前のコンテンツ ディクショナリの正規表現または用語が含まれているかどうかを判別します。「辞書ルール」(P.6-49) を参照してください。
Header Dictionary Match	header-dictionary-match(<dictionary_name>, <header>)	指定したヘッダー (大文字と小文字を区別) に、 <i>dictionary_name</i> で指定した名前のコンテンツ ディクショナリの正規表現または用語が含まれているかどうかを判別します。「辞書ルール」(P.6-49) を参照してください。
Body Dictionary Match	body-dictionary-match(<dictionary_name>)	このフィルタ条件は、辞書の用語がメッセージ本文に含まれていれば true を返します。このフィルタの検索対象となるのは、添付ファイルと見なされていない MIME 部分内の用語です。また、ユーザが定義したしきい値が満たされた場合も true を返します (デフォルトのしきい値は 1 です)。「辞書ルール」(P.6-49) を参照してください。

表 6-2 メッセージフィルタルール (続き)

ルール	構文	説明
Envelope Recipient Dictionary Match	<code>rcpt-to-dictionary-match(<dictionary_name>)</code>	エンベロープ受信者に、 <i>dictionary_name</i> で指定した名前のコンテンツディクショナリの正規表現または用語が含まれているかどうかを判別します。「辞書ルール」(P.6-49) を参照してください。
Envelope Sender Dictionary Match	<code>mail-from-dictionary-match(<dictionary_name>)</code>	エンベロープ送信者に、 <i>dictionary_name</i> で指定した名前のコンテンツディクショナリの正規表現または用語が含まれているかどうかを判別します。「辞書ルール」(P.6-49) を参照してください。
SMTP Authenticated User Match	<code>smtp-auth-id-matches(<target> [, <sieve-char>])</code>	エンベロープ送信者のアドレスとメッセージヘッダーのアドレスが、送信者の認証済み SMTP ユーザ ID と一致するかどうかを判別します。「SMTP Authenticated User Match ルール」(P.6-55) を参照してください。
True	<code>true</code>	すべてのメッセージと一致します。「true ルール」(P.6-31) を参照してください。
Valid	<code>valid</code>	メッセージに解析不能または無効な MIME 部分がある場合に <code>false</code> を返し、それ以外の場合は <code>true</code> を返します。「valid ルール」(P.6-32) を参照してください。
Signed	<code>signed</code>	メッセージが署名済みであるかどうかを判別します。「Signed ルール」(P.6-58) を参照してください。
Signed Certificate	<code>signed-certificate(<field> [<operator> <regular expression>])</code>	メッセージ署名者または X.509 証明書発行者が特定のパターンと一致するかどうかを判別します。「Signed Certificate ルール」(P.6-59) を参照してください。

- 添付ファイルのフィルタリングについては、「添付ファイルのスキャン」(P.6-100) を参照してください。
- コンテンツディクショナリの詳細については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Text Resources」の章で説明しています。

IronPort アプライアンスに送信されるメッセージはいずれも、すべてのメッセージフィルタで順番に処理されますが、最終アクションを指定した場合はそのアクションによりメッセージに対する以降の処理が停止されます。(「メッセージ

「[フィルタ アクション](#)」(P.6-3) を参照してください。フィルタはすべてのメッセージに適用することもでき、ルールは論理接続子 (AND、OR、NOT) を使用して結合することもできます。

ルールで使用する正規表現

ルールの定義に使用するアトミック テストの一部では、*正規表現照合*を行います。正規表現は複雑になる場合があります。次の表は、メッセージ フィルタルールで正規表現を適用する場合の目安として使用してください。

表 6-3 **ルールで使用する正規表現**

正規表現 (abc)	<p>フィルタ ルールの正規表現が文字列と一致すると判断されるのは、正規表現の一連の指示が文字列のいずれかの部分と一致する場合です。</p> <p>たとえば、正規表現「Georg」は「George Of The Jungle」、「Georgy Porgy」、「La Meson Georgette」、「Georg」の各文字列と一致します。</p>
キャラット (^) ドル記号 (\$)	<p>ドル記号 (\$) を含むルールは文字列の末尾のみと一致し、キャラット (^) を含むルールは文字列の先頭のみと一致します。</p> <p>たとえば、正規表現「^Georg\$」は文字列「Georg」のみと一致します。</p> <p>空のヘッダーを検索するには、「^\$」と指定します。</p>
文字、空白、アットマーク (@)	<p>文字、空白、アットマーク (@) を含むルールは、当該の文字自体と完全に一致します。</p> <p>たとえば、正規表現「^George@admin\$」は文字列「George@admin」のみと一致します。</p>
ピリオド (.)	<p>ピリオド (.) を含むルールは任意の 1 文字 (改行を除く) と一致します。</p> <p>たとえば、「^...admin\$」という正規表現は「macadmin」および「sunadmin」の各文字列とは一致しますが、「win32admin」とは一致しません。</p>

表 6-3 ルールで使用する正規表現（続き）

アスタリスク (*)	<p>アスタリスク (*) を含むルールは、「直前に指定されている文字が 0 回を含む任意の回数繰り返されている文字」と一致します。ピリオドとアスタリスクが続く場合 (.*)、任意の文字（改行を除く）と一致します。</p> <p>たとえば、「^P.*Piper\$」という正規表現は、「PPiper」、「Peter Piper」、「P.Piper」、「Penelope Penny Piper」のどの文字列とも一致します。</p>
円記号 (\y)	<p>円記号は特殊文字のエスケープに使用します。そのため、「\y.» は文字としてのピリオドのみ、「\y\$」は文字としてのドル記号のみ、「\y^」は文字としてのキャラット記号のみとそれぞれ一致します。たとえば、「^ik\y.ac\y.uk\$」は「ik.ac.uk」という文字列のみと一致します。</p> <p>重要：円記号はパーサーでも特殊なエスケープ文字として使用します。そのため、正規表現で円記号を使用する場合、2 つの円記号が必要です。解析後には「実際に」使用される円記号 1 つのみが残り、正規表現システムに渡されます。上記の例を照合する場合は「^ik\y\y.ac\y\y.uk\$」と入力することになります。</p>
大文字と小文字を区別しない (?i)	<p>トークン (?i) は、正規表現の残りの部分で大文字と小文字が区別されないことを表します。このトークンを、大文字と小文字を区別する正規表現の先頭に配置すると、大文字と小文字が一切区別されない照合が行われます。</p> <p>たとえば、「(?i)viagra」という正規表現は、「Viagra」、「vIaGrA」、「VIAGRA」と一致します。</p>

表 6-3 ルールで使用する正規表現（続き）

繰り返し回数 <code>{min,max}</code>	<p>この正規表現の表記は、直前のトークンを繰り返す回数を表します。</p> <p>たとえば、「fo{2,3}」は「foo」および「fooo」とは一致しますが、「fo」や「fofo」とは一致しません。</p> <p><code>if(header('To') == "^.{500,}")</code> というステートメントは、500 文字以上が使用されている「To」ヘッダーを検索します。</p>
または ()	<p>代替、つまり「or」演算子に相当します。A と B が正規表現の場合、「A B」は A と B のいずれかに一致する文字列と一致します。</p> <p>たとえば、「foo bar」という表現は「foo」や「bar」とは一致しますが、「foobar」とは一致しません。</p>

メッセージのフィルタリングでの正規表現の使用

フィルタを使用して、ASCII 以外の形式でエンコードされているメッセージの内容（ヘッダーと本文）の文字列とパターンを検索できます。具体的には、本システムでは次の場所にある非 ASCII 文字を検索する正規表現（regex）を使用できます。

- メッセージヘッダー
- MIME 添付ファイル名の文字列
- メッセージ本文
 - MIME ヘッダーがない本文（従来の形式の電子メール）
 - エンコードを示す MIME ヘッダーがあり、MIME 部分がない本文
 - エンコードが指定されているマルチパート MIME メッセージ
 - 上記の本文のうち、MIME ヘッダーでエンコードが指定されていないもの

メッセージまたは本文の任意の部分（添付ファイルを含む）の照合に正規表現を使用できます。添付ファイルのタイプとして HTML、MS Word、Excel など多数のタイプを対象にできます。対象となる文字セットとして、gb2312、HZ、EUC、JIS、Shift-JIS、Big5、Unicode などがあります。正規表現を使用するメッセージフィルタルールを作成するには、コンテンツフィルタ GUI を使用するか（『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Email

Security Manager」を参照)、またはテキストエディタでファイルを作成してからシステムにインポートします。詳細については、「[CLI を使用したメッセージフィルタの管理](#)」(P.6-115) および「[スキャンパラメータの変更](#)」(P.6-127) を参照してください。

正規表現の使用に関するガイドライン

プレフィクスではなく文字列全体を照合する場合は、正規表現の先頭にキャレット (^)、末尾にドル記号 (\$) をそれぞれ配置する必要があります。



(注)

空の文字列を照合する場合に「」を使用すると、実際にはすべての文字列が一致します。かわりに「^\$」を使用します。たとえば、「[件名ルール](#)」(P.6-32) の 2 番目の例がこれに該当します。

また、文字としてのピリオドを照合するには、正規表現でピリオドをエスケープする必要があります。たとえば、sun.com という正規表現は「thegodsunocommando」という文字列と一致しますが、^sun¥.com\$ という正規表現は「sun.com」という文字列のみと一致します。

技術的には、ここで使用する正規表現のスタイルは **Python re モジュール** スタイルの正規表現です。Python スタイルの正規表現の詳細については、「[Python Regular Expression HOWTO](#)」(<http://www.python.org/doc/howto/>) を参照してください。

正規表現と非 ASCII 文字セット

一部の言語では、「単語」や「単語境界」、「大文字と小文字」という概念が存在しません。

単語を構成する文字（正規表現で「¥w」と表される文字）の識別などが必要になる複雑な正規表現では、ロケールが不明な場合、またはエンコードが不明な場合、問題が発生します。

n テスト

正規表現の照合テストは、シーケンス `==` とシーケンス `!=` を使用して行うことができます。次の例を参考にしてください。

```
rcpt-to == "^goober@dev¥¥.null¥¥....$" (matching)
```

```
rcpt-to != "^goober@dev¥¥.null¥¥....$" (non-matching)
```

大文字と小文字の区別

特に明記されている場合を除き、正規表現では大文字と小文字が区別されます。正規表現で「foo」を検索する場合、「FOO」や「Foo」は一致しません。

効率的なフィルタの作成

次の例は、同じ処理を行う 2 つのフィルタですが、最初の例の方が CPU の使用率が高くなります。2 番目のフィルタの方が効率的な正規表現を使用しています。

```
attachment-filter: if ((recv-listener == "Inbound") AND
(((attachment-filename ==

"¥¥.386$") OR (attachment-filename == "¥¥.exe$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.ad$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.ade$")) OR (attachment-filename == "¥¥.adp$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.asp$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.bas$")) OR (attachment-filename == "¥¥.bat$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.chm$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.cmd$")) OR (attachment-filename == "¥¥.com$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.cpl$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.crt$")) OR (attachment-filename == "¥¥.exe$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.hlp$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.hta$")) OR (attachment-filename == "¥¥.inf$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.ins$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.isp$")) OR (attachment-filename == "¥¥.jsp$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.jse$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.lnk$")) OR (attachment-filename == "¥¥.mdb$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.mde$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.msc$")) OR (attachment-filename == "¥¥.msi$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.msp$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.mst$")) OR (attachment-filename == "¥¥.pcd$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.pif$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.reg$")) OR (attachment-filename == "¥¥.scr$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.sct$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.shb$")) OR (attachment-filename == "¥¥.shs$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.url$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.vb$")) OR (attachment-filename == "¥¥.vbe$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.vbs$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.vss$")) OR (attachment-filename == "¥¥.vst$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.vsw$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.ws$")) OR (attachment-filename == "¥¥.wsc$")) OR
(attachment-filename == "¥¥.wsf$")) OR (attachment-filename ==
"¥¥.wsh$")) { bounce(); }
```

この例では、AsyncOS は正規表現エンジンを 30 回（添付ファイルタイプと recv-listener のそれぞれに 1 回ずつ）起動する必要があります。

かわりに、次のようなフィルタを作成します。

```
attachment-filter: if (recv-listener == "Inbound") AND
(attachment-filename ==
"¥¥.(386|exe|ad|ade|adp|asp|bas|bat|chm|cmd|com|cpl|crt|exe|hlp|hta|i
nf|ins|isp|js|jse|lnk|mdb|mde|msc|msi|msp|mst|pcd|pif|reg|scr|sct|shb
|shs|url|vbl|vbe|vbs|vss|vst|vsw|ws|wsc|wsf|wsh)$") {

    bounce ();

}
```

正規表現エンジンの起動回数は 2 回だけで、「()」の追加やスペルの誤りについて心配する必要がなくなるためフィルタの管理も大幅に簡単になります。また、最初の例に比べて CPU オーバーヘッドが低下します。

PDF と正規表現

PDF の生成方法によっては、スペースや改行がないことがあります。このような場合、スキャンエンジンは、ページ内の単語の位置に基づき、論理的なスペースと改行の挿入を試みます。たとえば、1 つの単語の中に複数のフォントやフォントサイズが混在する場合、生成される PDF コードからスキャンエンジンが単語と改行を判別するのが難しくなります。このように生成された PDF ファイルで正規表現による照合を行うと、スキャンエンジンは予期しない結果を返す場合があります。

たとえば、PowerPoint 文書に挿入した単語の中に、単語内の文字ごとに異なるフォントやフォントサイズが設定されているものがあるとします。このアプリケーションから生成された PDF をスキャンエンジンが読み取ると、論理的なスペースと改行が挿入されます。PDF の構造が原因で、「callout」という単語が「call out」や「c a l lout」と解釈される場合があります。このレンダリング結果を正規表現「callout」で照合しようとする、一致なしと判断されます。

スマート ID

メッセージの内容をスキャンするメッセージルールを使用する場合、スマート ID を使用するとデータ内の特定のパターンを検出できます。

スマート ID で、データ内の次のパターンを検出できます。

- クレジットカード番号
- 米国 社会保障番号
- CUSIP ナンバー
- ABA ナンバー

フィルタでスマート ID を使用するには、本文または添付ファイルのコンテンツをスキャンするフィルタ ルールで次のキーワードを使用します。

表 6-4 **メッセージフィルタのスマート ID**

キーワード	スマート ID	説明
*credit	クレジットカード番号	14、15、および 16 桁のクレジットカード番号を識別します。 (注) スマート ID では enRoute および JCB カードは識別されません。
*aba	ABA 送金番号	ABA 送金番号を識別します。
*ssn	社会保障番号	米国 社会保障番号を識別します。*ssn スマート ID はダッシュ、ピリオド、スペースがある社会保障番号を識別します。
*cusip	CUSIP 番号	CUSIP 番号を識別します。

スマート ID の構文

フィルタ ルールでスマート ID を使用する場合、次の例のように、本文または添付ファイルのスキャンするフィルタ ルールの中でスマート ID キーワードを引用符で囲みます。

```
ID_Credit_Cards:

if(body-contains("*credit")){
```

```
notify("legaldept@example.com");
}
.
```

また、コンテンツ ディクショナリの一部としてコンテンツ フィルタ内でスマート ID を使用することもできます。



(注)

スマート ID キーワードは通常の正規表現や他のキーワードと組み合わせて使用できません。たとえば、「*credit|*ssn」というパターンは有効ではありません。



(注)

*ssn スマート ID による誤判定を防ぐため、*ssn スマート ID は他のフィルタ条件とあわせて使用すると有用な場合があります。たとえば、「only-body-contains」フィルタ条件を使用することができます。この場合、検索文字列がメッセージ本文のすべての MIME 部分に存在する場合のみ式が true であると判定されます。たとえば、次のようなフィルタを作成できます。

```
SSN-nohtml: if only-body-contains("*ssn") {
  duplicate-quarantine("Policy");}
```

メッセージ フィルタ ルールの例

次のセクションでは、メッセージ フィルタの使用例を照会します。

true ルール

true ルールはすべてのメッセージと一致します。たとえば、次のルールはテスト対象となるすべてのメッセージについて、IP インターフェイスを external に変更します。

```
externalFilter:
  if (true)
```

```
{  
  
    alt-src-host('external');  
  
}
```

valid ルール

valid ルールは、メッセージに解析不能または無効な MIME 部分が含まれている場合に **false** を返し、それ以外の場合は **true** を返します。たとえば、次のルールはテスト対象のメッセージのうち解析不能なメッセージをすべてドロップします。

```
not-valid-mime:  
  
    if not valid  
  
    {  
  
        drop();  
  
    }
```

件名ルール

subject ルールは、件名ヘッダーの値が指定した正規表現と一致するメッセージを選択します。

たとえば、次のフィルタは、件名が「Make Money」という語句で始まるすべてのメッセージを廃棄します。

```
scamFilter:  
  
    if (subject == '^Make Money')  
  
    {  
  
        drop();  
  
    }
```

ヘッダーの値で検索する非 ASCII 文字を指定することができます。

ヘッダーに関する操作を行う場合、ヘッダーの現在の値には処理中に行われた変更（メッセージのヘッダーの追加、削除、変更を行うフィルタ処理など）が含まれている点に注意してください。詳細については、「[メッセージヘッダールールおよび評価](#)」(P.6-7) を参照してください。

次のフィルタは、ヘッダーが空の場合、またはメッセージにヘッダーがない場合に `true` を返します。

```
EmptySubject_To_filter:

if (header('Subject') != ".") OR

    (header('To') != ".") {

    drop();

}
```



(注) このフィルタは Subject ヘッダーと To ヘッダーが空の場合に `true` を返しますが、ヘッダーがない場合も `true` を返します。指定したヘッダーがメッセージ内にない場合でも、このフィルタは `true` を返します。

エンベロープ受信者ルール

`rcpt-to` ルールは、いずれかのエンベロープ受信者が指定した正規表現と一致するメッセージを選択します。たとえば、次のフィルタは「`scarface`」という文字列を含む電子メールアドレス宛てに送信されたすべてのメッセージをドロップします。



(注) `rcpt-to` ルールで使用する正規表現では、大文字と小文字は区別されません。

```
scarfaceFilter:

if (rcpt-to == 'scarface')
```

```
{
    drop();
}
```



(注) rcpt-to ルールはメッセージに基づいています。メッセージに複数の受信者が設定されている場合、いずれか 1 人の受信者がルールと一致していれば、指定した処理がすべての受信者に対するメッセージに適用されます。

グループ内エンベロープ受信者ルール

rcpt-to-group ルールは、いずれかのエンベロープ受信者が指定した LDAP グループのメンバであるメッセージを選択します。たとえば、次のフィルタは「ExpiredAccounts」という LDAP グループ内の電子メールアドレス宛てに送信されたすべてのメッセージをドロップします。

```
expiredFilter:
    if (rcpt-to-group == 'ExpiredAccounts')
    {
        drop();
    }
```



(注) rcpt-to-group ルールはメッセージに基づいています。メッセージに複数の受信者が設定されている場合、いずれか 1 人の受信者がルールと一致していれば、指定した処理がすべての受信者に対するメッセージに適用されます。

エンベロープ送信者ルール

mail-from ルールは、エンベロープ送信者が指定した正規表現と一致するメッセージを選択します。たとえば、次のフィルタを実行すると admin@yourdomain.com により送信されたすべてのメッセージがただちに出力されます。



(注)

mail-from ルールで使用する正規表現では、大文字と小文字は区別されません。次の例では、ピリオドがエスケープ処理されています。

```
kremFilter:

    if (mail-from == '^admin@yourdomain¥¥.com$')

    {

        skip_filters();

    }
```

グループ内エンベロープ送信者ルール

mail-from-group ルールは、エンベロープ送信者が演算子の右辺で指定した LDAP グループに属している（不一致を検索する場合は、送信者の電子メールアドレスが指定した LDAP グループに属していない）メッセージを選択します。たとえば、次のフィルタを実行すると、「KnownSenders」という LDAP グループの電子メールアドレスにより送信されたすべてのメッセージがただちに出力されます。

```
SenderLDAPGroupFilter:

    if (mail-from-group == 'KnownSenders')

    {

        skip_filters();

    }
```

送信者グループ ルール

sendergroup メッセージフィルタは、リスナーの Host Access Table (HAT; ホスト アクセス テーブル) でどの送信者グループが一致するかに基づいて、メッセージを選択します。このルールは「==」(一致を検索する場合) または「!=」(不一致を検索する場合) を使用して、指定した正規表現 (式の右辺) との一致をテストします。たとえば、次のメッセージフィルタ ルールは、メッセージの送信者グループが正規表現「Internal」と一致する場合に true を返し、その場合はメッセージを代替メール ホストに送信します。

```
senderGroupFilter:

    if (sendergroup == "Internal")

    {

        alt-mailhost("[172.17.0.1]");

    }
```

本文サイズ ルール

本文サイズとはメッセージのサイズのこと、ヘッダーと添付ファイルも含まれます。body-size ルールは、指定に従い本文のサイズを特定の数値を比較します。たとえば、次のフィルタは本文サイズが 5 メガバイトを超えるすべてのメッセージをバウンスします。

```
BigFilter:

    if (body-size > 5M)

    {

        bounce();

    }
```


body-size を使用すると次のような比較ができます。

例	比較の種類
body-size < 10M	より小さい
body-size <= 10M	以下
body-size > 10M	より大きい
body-size >= 10M	以上
body-size == 10M	等しい
body-size != 10M	等しくない

サイズ指定にはサフィクスを使用すると便利です。

数量	説明
10b	10 バイト（「10」に同じ）
13k	13 キロバイト
5M	5 メガバイト
40G	40 ギガバイト（注：Cisco IronPort では 100 メガバイトを超えるメッセージを処理できません）

リモート IP ルール

remote-ip ルールは、メッセージを送信したホストの IP アドレスが特定のパターンと一致するかどうかを確認するためのテストを実行します。IP アドレスのパターンは、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Sender Group Syntax」で説明している **allowed hosts** 表記（SBO、SBRs、dnslist の各表記と特殊キーワード ALL を除く）を使用して指定されます。

allowed hosts 表記では、IP アドレス（ホスト名ではない）の順序と数値での範囲のみを指定できます。たとえば、次のフィルタは 10.1.1.x（x は 50、51、52、53、54、55 のいずれか）の形式の IP アドレスから送信されていないすべてのメッセージをバウンスします。

```
notMineFilter:
```

```
    if (remote-ip != '10.1.1.50-55')
```

```
    {
```

```
        bounce();  
    }  
}
```

受信リスナー ルール

recv-listener ルールは、名前付きリスナーで受信したメッセージを選択します。リスナー名は、現在システム上で設定されているリスナーのいずれかのニックネームである必要があります。たとえば、次のフィルタを実行すると、expedite という名前のリスナーから受信したすべてのメッセージがただちに出力されます。

```
expediteFilter:  
  
    if (recv-listener == 'expedite')  
  
    {  
  
        skip_filters();  
  
    }  
}
```

受信 IP インターフェイス ルール

recv-int ルールは、名前付きインターフェイス経由で受信したメッセージを選択します。インターフェイス名は、現在システムに設定されているインターフェイスのいずれかのニックネームである必要があります。たとえば、次のフィルタは、outside という名前のインターフェイスから受信したすべてのメッセージをバウンスします。

```
outsideFilter:  
  
    if (recv-int == 'outside')  
  
    {  
  
        bounce();  
  
    }  
}
```

日付ルール

date ルールは、現在の日時と指定した時刻を照合します。date ルールは *MM/DD/YYYY HH:MM:SS* という形式のタイムスタンプがある文字列との比較を行います。このルールは、特定の日時（米国形式）の前または後に実行する処理を指定する場合に便利です。（米国形式以外の形式を使用しているメッセージを検索する場合は問題が発生することがあります）。次のフィルタは、2003 年 7 月 28 日の午後 1 時より後に `campaign1@yourdomain.com` から送信されたすべてのメッセージをバウンスします。

TimeOutFilter:

```
if ((date > '07/28/2003 13:00:00') and (mail-from ==
    'campaign1@yourdomain¥¥.com'))
{
    bounce();
}
```



(注)

date ルールを \$Date メッセージ フィルタ処理変数と混同しないようにしてください。

ヘッダー ルール

header() ルールは、メッセージヘッダーがかっこ内で引用されている特定のヘッダー（"ヘッダー名"）と一致するかどうかを確認します。このルールは subject ルールと同様に正規表現と比較することもできますが、比較を行わずに使用することもできます。この場合、メッセージにそのヘッダーがあれば「true」、なければ「false」となります。たとえば、次の例ではヘッダー

X-Sample の有無、およびこのヘッダーの値に「sample text」という文字列が含まれているかどうかを確認しています。一致する場合は、メッセージがバウンスされます。

FooHeaderFilter:

```
if (header('X-Sample') == 'sample text')
{
    bounce();
}
```

ヘッダーの値で検索する非 ASCII 文字を指定することができます。

次の例では、比較を行わずにヘッダー ルールを適用しています。この場合、ヘッダー X-DeleteMe が見つかり、そのヘッダーがメッセージから削除されます。

DeleteMeHeaderFilter:

```
if header('X-DeleteMe')
{
    strip-header('X-DeleteMe');
}
```

ヘッダーに関する操作を行う場合、ヘッダーの現在の値には処理中に行われた変更（メッセージのヘッダーの追加、削除、変更を行うフィルタ処理など）が含まれている点に注意してください。詳細については、「[メッセージヘッダールールおよび評価](#)」(P.6-7) を参照してください。

乱数ルール

random ルールは、0 から N-1 (N はルール名の後のかっこで指定される整数値) までの乱数を生成します。このルールでは header() ルールと同様に比較を行うこともできますが、「単項」形式で単独使用することもできます。単項形式では、

生成された乱数が 0 でない場合に true と評価されます。たとえば、次のフィルタはいずれも内容としては同じもので、2 分の 1 の確率で Virtual Gateway アドレス A が選択され、残り 2 分の 1 の確率で Virtual Gateway アドレス B が選択されます。

```
load_balance_a:

    if (random(10) < 5) {

        alt-src-host('interface_a');

    } else {

        alt-src-host('interface_b');

    }

load_balance_b:

    if (random(2)) {

        alt-src-host('interface_a');

    } else {

        alt-src-host('interface_b');

    }
```

受信者数ルール

rcpt-count ルールは、body-size ルールと同様に、メッセージの受信者の数を整数値と比較します。このルールを使用すると、ユーザが一度に多数のユーザに電子メールを送信することを防止でき、また大規模なメール送信キャンペーンが

特定の Virtual Gateway アドレス経由で行われるようにすることができます。次の例では、受信者数が 100 件を超える電子メールが特定の Virtual Gateway アドレスを経由して送信されます。

```
large_list_filter:

    if (rcpt-count > 100) {

        alt-src-host('mass_mailing_interface');

    }
```

アドレス数ルール

`addr-count()` メッセージフィルタルールは、1 つ以上のヘッダー文字列を対象に、各行の受信者数を計算し、受信者の累積数をレポートします。このフィルタは、エンベロープの受信者ではなくメッセージ本文のヘッダーに対して機能する点が `rcpt-count` フィルタルールと異なります。次の例では、このフィルタルールにより長い受信者リストが「`undisclosed-recipients`」というエイリアスに置き換えられています。

```
count: if (addr-count("To", "Cc") > 30) {

    strip-header("To");

    strip-header("Cc");

    insert-header("To", "undisclosed-recipients");

}
```

本文スキャンルール

`body-contains()` ルールは、受信する電子メールとその添付ファイルをスキャンし、パラメータで定義された特定のパターンの有無を確認します。これには配信状態部分や関連する添付ファイルも含まれます。`body-contains()` ルールでは複数行を対象とした照合は行われません。スキャンのロジックを CLI の `scanconfig` コマンドで変更することにより、スキャンの対象となる、またはス

キャンの対象から除外する MIM タイプを定義できます。また、スキャン結果を true と評価するために検出する必要がある一致の最小数を指定することもできます。

デフォルトでは、MIME タイプが video/*、audio/*、image/* 以外であるすべての添付ファイルがスキャンされます。複数のファイルが含まれている .zip、.bzip、.compress、.tar、.gzip の各アーカイブ添付ファイルがスキャンされます。スキャン対象となる、「ネストされた」アーカイブ添付ファイル (.zip に格納されている .zip など) の数を設定できます。

scanconfig コマンドを使用して添付ファイルのスキャン処理を設定する方法の例などの詳細については、「[スキャンパラメータの変更](#)」(P.6-127) を参照してください。

本文スキャン

AsyncOS が本文スキャンを実行する場合、正規表現を使用して本文のテキストと添付ファイルをスキャンします。式には最小しきい値を指定することができ、スキャンエンジンがこの最小回数だけ正規表現との一致を検出すると、この式は true と評価されます。

AsyncOS はメッセージの各種の MIME 部分を評価し、テキスト形式になっているすべての MIME 部分をスキャンします。最初の部分で MIME タイプがテキストに指定されている場合、AsyncOS はテキスト部分を識別します。AsyncOS はメッセージで指定されたエンコードに基づいてエンコードを決定し、テキストを Unicode に変換します。その後、Unicode 領域で正規表現を検索します。メッセージでエンコードが指定されていない場合は、scanconfig コマンドで指定されたエンコードが使用されます。

メッセージのスキャン時に AsyncOS が MIME 部分を評価する方法の詳細については、「[メッセージ本文とメッセージ添付ファイル](#)」(P.6-7) を参照してください。

MIME 部分がテキストでない場合、AsyncOS は .zip または .tar からファイルを抽出するか、圧縮されたファイルを抽出します。データを抽出した後、スキャンエンジンはファイルのエンコードを識別し、ファイルのデータを Unicode 形式で返します。その後、AsyncOS は Unicode 領域で正規表現を検索します。

次の例では、本文のテキストと添付ファイルで「Company Confidential」という文字列を検索しています。この例では、最小しきい値が 2 件に設定されているため、スキャンエンジンがこの文字列を 2 件以上検出すると、該当するメッセージをすべてバウンスし、法務部門に通知します。

ConfidentialFilter:

```
if (body-contains('Company Confidential',2)) {
    notify ('legaldept@example.domain');
    bounce();
}
```

メッセージの本文のみをスキャンする場合は、`only-body-contains` を使用します。

disclaimer:

```
if (not only-body-contains('[dD]disclaimer',1) ) {
    notify('hresource@example.com');
}
```

暗号化検出ルール

`encrypted` ルールは、メッセージの内容に暗号化データが存在するかどうかを調査します。このルールは暗号化データのデコードは行わず、メッセージの内容に暗号化データが存在するかどうかのみを調査します。このルールは、ユーザが暗号化された電子メールを送信できないようにする場合に便利です。



(注) 暗号化されたルールは、メッセージの内容の暗号化されたデータのみを検出できます。暗号化された添付ファイルは検出しません。

`encrypted` は `true` ルールと同様に、パラメータを使用せず、比較も行いません。暗号化されたデータが検出された場合に `true`、検出されなかった場合に `false` を返します。この機能を実行するにはメッセージのスキャンが必要になるため、

scanconfig コマンドで定義されたスキャン設定が使用されます。オプションの設定の詳細については、「[スキャンパラメータの変更](#)」(P.6-127) を参照してください。

次のフィルタは、リスナー経由で送信されたすべての電子メールを確認し、メッセージに暗号化されたデータが含まれる場合は、該当するメッセージが BCC で法務部門宛てに送信され、バウンスされます。

```
prevent_encrypted_data:

    if (encrypted) {

        bcc ('legaldept@example.domain');

        bounce ();

    }
```

添付ファイルタイプルール

attachment-type ルールはメッセージ内の各添付ファイルの MIME タイプを確認し、指定されたパターンと一致するかどうかを判別します。このパターンは scanconfig コマンドで使用する形式（「[スキャンパラメータの変更](#)」(P.6-127) を参照）と同じ形式である必要があり、スラッシュ (/) の左右の一方でアスタリスクをワイルドカードとして使用できます。メッセージの添付ファイルがここで指定した MIME タイプと一致する場合、このルールは「true」を返します。

この機能を実行するにはメッセージのスキャンが必要となるため、scanconfig コマンドで指定されたすべてのオプション（「[スキャンパラメータの変更](#)」(P.6-127) を参照）が適用されます。

メッセージの添付ファイルを操作するために使用できるメッセージフィルタールールの詳細については、「[添付ファイルのスキャン](#)」(P.6-100) を参照してください。

次のフィルタは、リスナー経由で送信されたすべての電子メールを確認し、MIME タイプが video/* である添付ファイルがメッセージに含まれる場合は、該当するメッセージがバウンスされます。

```
bounce_video_clips:

    if (attachment-type == 'video/*') {
```

```
    bounce ();  
}
```

添付ファイル名ルール

attachment-filename ルールはメッセージ内の各添付ファイルの名前を確認し、指定されたパターンと一致するかどうかを判別します。この比較では大文字と小文字は区別されます。この比較ではスペースの有無も区別されるため、ファイル名の末尾にスペースがある状態でエンコードされていると、フィルタはその添付ファイルをスキップします。メッセージの添付ファイルのいずれかが指定したファイル名と一致すると、このルールは **true** を返します。

次の点に注意してください。

- 各添付ファイルの名前は MIME ヘッダーからキャプチャされます。MIME ヘッダーにあるファイル名の末尾にはスペースがある場合があります。
- 添付ファイルがアーカイブの場合、Cisco IronPort はアーカイブの内部からファイル名を取得し、scanconfig ルール（「[スキャンパラメータの変更](#)」(P.6-127) を参照）を適用します。
 - 添付ファイルが 1 個の圧縮ファイル（拡張子を問わず）である場合、アーカイブであるとは見なされず、この圧縮ファイルの名前は取得されません。つまり、このファイルは attachment-filename ルールでは処理されません。このようなファイルの例としては、gzip で圧縮された実行可能ファイル (.exe) などがあります。
 - 添付ファイルが単独の圧縮ファイルである場合 (foo.exe.gz など)、正規表現を使用して圧縮ファイル内の特定のファイルタイプを検索します。「[添付ファイル名とアーカイブファイル内の単独の圧縮ファイル](#)」(P.6-47) を参照してください。

メッセージの添付ファイルを操作するために使用できるメッセージフィルタルールの詳細については、「[添付ファイルのスキャン](#)」(P.6-100) を参照してください。

次のフィルタは、リスナー経由で送信されたすべての電子メールを確認し、ファイル名が *.mp3 である添付ファイルがメッセージに含まれる場合は、該当するメッセージがバウンスされます。

```
block_mp3s:

    if (attachment-filename == '(?i)¥¥.mp3$') {

        bounce();

    }
```

添付ファイル名とアーカイブファイル内の単独の圧縮ファイル

次に、アーカイブ (gzip で作成したものなど) にある単独の圧縮ファイルの照合する例を示します。

```
quarantine_gzipped_exe_or_pif:

if (attachment-filename == '(?i)¥¥.(exe|pif)($|.gz$)') {

    quarantine("Policy");

}
```

DNS リスト ルール

dnslist() ルールは、クエリに DNSBL 方式 (「ip4r ルックアップ」とも呼ばれます) を使用するパブリック DNS リスト サーバを照会します。着信接続の IP アドレスは反転され (IP が 1.2.3.4 の場合は 4.3.2.1 になり)、かっこ内のサーバ名にプレフィクスとして追加されます (サーバ名の先頭がピリオドでない場合は、サーバ名とプレフィクスを区切るためのピリオドが追加されます)。DNS クエリが生成され、システムには DNS 失敗応答 (接続の IP アドレスがサーバのリストにないことを示す) または IP アドレス (アドレスが見つかったことを示す) が返されます。返される IP アドレスは通常、127.0.0.x (x は 0 ~ 255 のうちほぼすべての数) の形式になります (IP アドレス範囲は許可されていません)。一部のサーバは、リスト生成の理由に基づいてそれぞれ異なる数字を返しますが、それ以外のサーバはすべての一致に対して同じ結果を返します。

`dnslist()` は、`header()` ルールと同様に、単項または二項比較で使用できます。単独では、応答を受信すると `true` を返し、応答がない場合（DNS サーバが到達不能の場合など）は `false` を返します。

次のフィルタを実行すると、送信者が **IronPort Bonded Sender** 情報サービスプログラムにボンドされている場合、そのメッセージがただちに出力されます。

```
whitelist_bondedsender:

    if (dnslist('query.bondedsender.org')) {

        skip_filters();

    }
```

オプションで、等式 (`==`) または不等式 (`!=`) を使用して結果を文字列と比較することもできます。

次のフィルタは、サーバから「127.0.0.2」が返されるメッセージをドロップします。応答がそれ以外の内容であれば、このルールは `false` を返し、フィルタは無視されます。

```
blacklist:

    if (dnslist('dnsbl.example.domain') == '127.0.0.2') {

        drop();

    }
```

SenderBase 評価ルール

`reputation` ルールは、**SenderBase** 評価スコアを他の値と比較して確認します。`>`、`==`、`<=` などのすべての比較演算子を使用できます。メッセージに **SenderBase** 評価スコアがない場合（これまでスコアがまったく確認されていないか、**SenderBase** 評価サービスクエリーサーバから応答を取得できなかった場合）、評価スコアとの比較はすべて失敗します（数値がいずれかの値より大きいまたは小さい、いずれかの値と等しいまたは等しくないという判別ができません）。次に説明する `no-reputation` ルールを使用すると、**SBR**S スコアが「none」であるかどうかを確認できます。次の例では、**SenderBase** レピュテーター

ション サービスから返されるレピュテーション スコアがしきい値の -7.5 を下回る場合に、メッセージの「Subject:」行の先頭に「*** BadRep ***」が付加されます。

```
note_bad_reps:

    if (reputation < -7.5) {

        strip-header ('Subject');

        insert-header ('Subject', '*** BadRep $Reputation ***
$Subject');

    }
```

詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「Reputation Filtering」と「SenderBase Reputation Score (SBRS)」を参照してください。「アンチスパム システムのバイパス アクション」(P.6-97) も参照してください。

SenderBase レピュテーション ルールによる値は -10 ~ 10 ですが、NONE という値が返される場合もあります。NONE について特に確認が必要な場合は、no-reputation ルールを使用します。

```
none_rep:

    if (no-reputation) {

        strip-header ('Subject');

        insert-header ('Subject', '*** Reputation = NONE *** $Subject');

    }
```

辞書ルール

dictionary-match(<dictionary_name>) ルールは、dictionary_name で指定した名前の辞書にある正規表現または用語がメッセージ本文にあれば true と評価します。辞書が存在しない場合は、このルールは false と評価します。辞書の定

義（大文字と小文字の区別や単語境界の設定など）の詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「Text Resources」の章を参照してください。

次のフィルタは、Cisco IronPort が「secret_words」という辞書にある単語を含むメッセージをスキャンすると、管理者にブラインドカーボンコピーを送信します。

```
copy_codenames:

    if (dictionary-match ('secret_words')) {

        bcc('administrator@example.com');

    }
```

次の例では、メッセージ本文に「secret_words」という辞書の単語がある場合、**Policy** という名の検疫エリアにメッセージが送信されます。

only-body-contains 条件とは異なり、body-dictionary-match 条件ではすべてのコンテンツ部分がそれぞれ辞書と一致している必要はありません。各コンテンツ部分のスコア（マルチパート/代替部分も考慮されます）は合計されます。

```
quarantine_data_loss_prevention:

    if (body-dictionary-match ('secret_words'))

    {

        quarantine('Policy');

    }
```

次のフィルタでは、件名が指定した辞書にある単語と一致すると検疫されます。

```
quarantine_policy_subject:

    if (subject-dictionary-match ('gTest'))

    {
```

```
quarantine('Policy');  
  
}
```

次の例では、「To」ヘッダーの電子メールアドレスを照合し、管理者にブラインドコピーを送信しています。

headerTest:

```
if (header-dictionary-match ('competitorsList', 'to'))  
  
{  
  
  bcc('administrator@example.com');  
  
}
```

attachment-dictionary-match(<dictionary_name>) ルールは上記の dictionary-match ルールと同様に機能しますが、検索対象は添付ファイルです。

次のフィルタでは、メッセージの添付ファイルに「secret_words」という辞書にあるいずれかの単語が含まれていると、そのメッセージが Policy という検疫エリアに送信されます。

quarantine_codenames_attachment:

```
if (attachment-dictionary-match ('secret_words'))  
  
{  
  
  quarantine('Policy');  
  
}
```

header-dictionary-match(<dictionary_name>, <header>) ルールは上記の dictionary-match ルールと同様に機能しますが、検索対象は <header> で指定したヘッダーです。ヘッダー名の大文字と小文字は区別されないため、たとえば「subject」でも「Subject」でも機能します。

次のフィルタでは、メッセージの「cc」ヘッダーに「ex_employees」という辞書にあるいずれかの単語が含まれていると、そのメッセージが Policy という検疫エリアに送信されます。

```
quarantine_codenames_attachment:

    if (header-dictionary-match ('ex_employees', 'cc'))

        {

            quarantine('Policy');

        }
```

辞書用語内でワイルドカードを使用することができます。電子メールアドレスのピリオドをエスケープする必要はありません。

SPF-Status ルール

SPF/SIDF 検証されたメールを受信する場合、SPF/SIDF 検証の結果によって異なるアクションを実行することが必要になる場合があります。spf-status ルールを使用すると、複数の SPF 検証結果との照合が可能になります。詳細については、「[検証結果](#)」(P.5-40) を参照してください。

SPF/SIDF 検証結果との照合を行うには、次の構文を使用します。

```
if (spf-status == "Pass")
```

1 つの条件で複数の状態判定に対してチェックする場合、次の構文を使用できません。

```
if (spf-status == "PermError, TempError")
```

さらに、次の構文を使用して、HELO、MAIL FROM、PRA ID に対して検証結果をチェックすることもできます。

```
if (spf-status("pra") == "Fail")
```


次の、spf-status フィルタの使用例を示します。

```
skip-spam-check-for-verified-senders:

    if (sendergroup == "TRUSTED" and spf-status == "Pass"){

        skip-spamcheck();

    }

quarantine-spf-failed-mail:

    if (spf-status("pra") == "Fail") {

        if (spf-status("mailfrom") == "Fail"){

            # completely malicious mail

            quarantine("Policy");

        } else {

            if(spf-status("mailfrom") == "SoftFail") {

                # malicious mail, but tempting

                quarantine("Policy");

            }

        }

    } else {

        if(spf-status("pra") == "SoftFail"){

            if (spf-status("mailfrom") == "Fail"

                or spf-status("mailfrom") == "SoftFail"){

                # malicious mail, but tempting
```

```
        quarantine("Policy");
    }
}

stamp-mail-with-spf-verification-error:

    if (spf-status("pra") == "PermError, TempError"
        or spf-status("mailfrom") == "PermError, TempError"
        or spf-status("helo") == "PermError, TempError"){
        # permanent error - stamp message subject

        strip-header("Subject");

        insert-header("Subject", "[POTENTIAL PHISHING] $Subject"); }
.
```

SPF-Passed ルール

次の例に、spf-passed とマークされていない電子メールを検疫するために使用する spf-passed ルールを示します。

```
quarantine-spf-unauthorized-mail:

    if (not spf-passed) {

        quarantine("Policy");

    }
```



(注)

spf-status ルールと異なり spf-passed ルールは SPF/SIDF 検証値を簡単なブール値に単純化します。次の検証結果は、spf-passed ルールに合格していないものとして扱われます。None、Neutral、Softfail、TempError、PermError、Fail。より詳細な結果に基づいて、メッセージへのアクションを実行するには、spf-status ルールを使用します。

workqueue-count ルール

workqueue-count ルールは、作業キュー数を特定の値と照合します。>、==、<= などのすべての比較演算子を使用できます。

次のフィルタは、作業キュー数を確認し、指定した値より多ければスパムの確認を省略します。

```
wqfull:

if (workqueue-count > 1000) {

    skip-spamcheck();

}
```

SPF/SIDF の詳細については、「[SPF および SIDF 検証の概要](#)」(P.5-26) を参照してください。

SMTP Authenticated User Match ルール

IronPort アプライアンスがメッセージの送信に SMTP 認証を使用している場合、smtp-auth-id-matches (<target> [, <sieve-char>]) ルールはメッセージのヘッダーとエンベロープ送信者を送信者の SMTP 認証ユーザ ID と照合し、スプーフィングされたヘッダーを含む送信メッセージを識別します。このフィルタを使用すると、なりすましの可能性のあるメッセージを検疫またはブロックできます。

`smtp-auth-id-matches` ルールは、SMTP 認証 ID を次の比較対象と比較します。

比較対象	説明
*EnvelopeFrom	SMTP 対話のエンベロープ送信者のアドレス (MAIL FROM) を比較します。
*FromAddress	From ヘッダーから解析されたアドレスを比較します。From ヘッダーには複数のアドレスを使用できるため、そのうち 1 つが一致すれば一致と見なされません。
*Sender	Sender ヘッダーで指定されているアドレスを比較します。
*Any	ID にかかわらず、認証済み SMTP セッション中に作成されたメッセージと一致します。
*None	認証済み SMTP セッション中に作成されなかったメッセージと一致します。認証がオプションの場合に便利です (推奨)。

フィルタによる照合は厳密ではありません。大文字と小文字は区別されません。オプションで *sieve-char* パラメータが指定されている場合、特定の文字の後に続くアドレスの最後の部分は比較時に無視されます。たとえば、パラメータに「+」が含まれている場合、アドレス `joe+folder@example.com` のうち「+」より後の部分がフィルタでは無視されます。アドレスが `joe+smith+folder@example.com` の場合は、「+folder」のみが無視されます。SMTP 認証ユーザ ID 文字列が単純なユーザ名で、完全修飾電子メールアドレスでない場合は、比較対象のユーザ名部分のみが照合されます。ドメイン部分は別のルールで検証する必要があります。

また、`SMTPAuthID` 変数を使用して SMTP 認証ユーザ ID をヘッダーに挿入することができます。

次の表は、SMTP 認証 ID と電子メールの比較の例で、smtp-auth-id-matches フィルタ ルールによる比較で一致するかどうかを示しています。

SMTP 認証 ID	ふり文字	比較するアドレス	一致の可否
someuser		otheruser@example.com	No
someuser		someuser@example.com	Yes
someuser		someuser@another.com	Yes
SomeUser		someuser@example.com	Yes
someuser		someuser+folder@example.com	No
someuser	+	someuser+folder@example.com	Yes
someuser@example.com		someuser@forged.com	No
someuser@example.com		someuser@example.com	Yes
SomeUser@example.com		someuser@example.com	Yes

次のフィルタは、認証済み SMTP セッション中に作成されたすべてのメッセージを確認し、From ヘッダーのアドレスとエンベロープ送信者が SMTP 認証ユーザ ID と一致するか検証します。アドレスと ID が一致すると、フィルタはドメインを許可します。一致しない場合、アプライアンスはメッセージを検疫します。

```
Msg_Authentication:
```

```
if (smtp-auth-id-matches("*Any"))
{
    # Always include the original authentication credentials in a
    # special header.
    insert-header("X-Auth-ID", "$SMTPAuthID");

    if (smtp-auth-id-matches("*FromAddress", "+") and
        smtp-auth-id-matches("*EnvelopeFrom", "+"))
```

```

{
    # Username matches.  Verify the domain
    if header('from') != "(?i)@(?:example¥¥.com|alternate¥¥.com)"
or
    mail-from != "(?i)@(?:example¥¥.com|alternate¥¥.com)"
    {
        # User has specified a domain which cannot be
authenticated
        quarantine("forged");
    }
} else {
    # User claims to be an completely different user
    quarantine("forged");
}
}

```

Signed ルール

signed ルールはメッセージの署名を確認します。このルールは、メッセージの署名の有無を示すブール値を返します。このルールは、署名が ASN.1 DER エンコーディング ルールに従っているか、および CMS 署名データ型構造 (RFC 3852、セクション 5.1) に準拠しているかを評価します。署名がコンテンツと一致するかどうかは検証されず、証明書の有効性も確認されません。

次の例では、signed ルールを使用してヘッダーを署名済みメッセージに挿入します。

```
signedcheck: if signed { insert-header("X-Signed", "True"); }
```

次の例では、signed ルールを使用して、特定の送信者グループから受信した未署名のメッセージの添付ファイルをドロップします。

```
Signed: if ((sendergroup == "NOTTRUSTED") AND NOT signed) {  
  
    html-convert();  
  
    if (attachment_size > 0)  
  
    {  
  
        drop_attachments("");  
  
    }  
  
}
```

Signed Certificate ルール

signed-certificate ルールは、X.509 証明書発行者またはメッセージ署名者が、指定した正規表現と一致している S/MIME メッセージを選択します。このルールが対応しているのは X.509 証明書のみです。

このルールの構文は signed-certificate (<field> [<operator> <regular expression>]) です。各項目の内容は次のとおりです。

- <field> : 引用符で囲まれた文字列 "issuer" (発行者) または "signer" (署名者)。
- <operator> : == または !=。
- <regular expression> : 発行者または署名者を照合するための値。

メッセージに複数の署名が使用されている場合、いずれかの発行者または署名者が正規表現と一致すると true が返されます。このルールを一番短い形で signed-certificate("issuer") および signed-certificate("signer") のように指定すると、S/MIME メッセージに発行者または署名者が設定されている場合に true が返されます。

署名者

メッセージ署名者に関して、このルールは X.509 証明書の `subjectAltName` 拡張から `rfc822Name` 名のシーケンスを抽出します。署名証明書に `subjectAltName` フィールドがない場合、またはこのフィールドに `rfc822Name` 名がない場合、`signed-certificate("signer")` ルールは `false` を返します。まれではありますが、`rfc822Name` 名が複数使用されている場合、このルールはすべての名前を正規表現と照合しようと試み、最初に一致した時点で `true` を返します。

発行者

発行者は X.509 証明書の空でない識別名です。AsyncOS は証明書から発行者を取得し、LDAP-UTF8 Unicode 文字列に変換します。次の例を参考にしてください。

- `C=US,S=CA,O=IronPort`
- `C=US,CN=Bob Smith`

X.509 証明書では発行者フィールドが必要なため、`signed-certificate("issuer")` は S/MIME メッセージに X.509 証明書があるかどうかを評価します。

正規表現でのエスケープ処理

LDAP-UTF8 では、正規表現で使用できるエスケープ方式が定義されています。LDAP-UTF8 での文字のエスケープ処理の詳細については、『*Lightweight Directory Access Protocol (LDAP): String Representation of Distinguished Names*』（<http://www.ietf.org/rfc/rfc4514.txt>）を参照してください。

`signed-certificate` ルールでのエスケープルールは、LDAP-UTF8 で定義されたエスケープルールとは異なり、エスケープ処理が必要な文字のみをエスケープします。LDAP-UTF8 では、エスケープ処理なしで表示できる文字をオプションでエスケープすることができます。たとえば、次の 2 つの文字列は、LDAP-UTF8 のエスケープルールではいずれも「Example, Inc.」を正しく表すものとされます。

- `Example\$, Inc.`
- `Example\$, \$ Inc\$.`

一方で、signed-certificate ルールでは「Example¥, Inc.」のみが一致します。スペースやピリオドのエスケープ処理は LDAP-UTF8 では許可されていますが、必要ではないため、正規表現では許可されません。signed-certificate ルールで使用する正規表現を作成する場合は、エスケープ処理がなくても表示できる文字はエスケープしないでください。

\$CertificateSigners アクション変数

アクション変数 \$CertificateSigners は、署名証明書の subjectAltName 要素から取得した、カンマ区切り形式の署名者のリストです。1 人の署名者に複数の電子メールアドレスがある場合、重複を除去した上でリストに収録されます。

たとえば、Alice が自分の 2 つの証明書でメッセージに署名したとします。Bob は自分の 1 つの証明書でメッセージに署名しています。すべての証明書は 1 件の社内機関により発行されています。メッセージが S/MIME スキャンを通過すると、抽出されるデータには 3 つの項目が含まれます。

```
[
  {
    'issuer': 'CN=Auth,O=Example¥, Inc.',
    'signer': ['alice@example.com', 'al@private.example.com']
  },
  {
    'issuer': 'CN=Auth,O=Example¥, Inc.',
    'signer': ['alice@example.com', 'al@private.example.com']
  },
  {
    'issuer': 'CN=Auth,O=Example¥, Inc.',
    'signer': ['bob@example.com', 'bob@private.example.com']
  }
]
```

```

    }
]

```

\$CertificateSigners 変数は次のように拡張されます。

```

"alice@example.com, al@private.example.com, bob@example.com,
bob@private.example.com"

```

例

次の例では、証明書発行者が米国にいる場合、新しいヘッダーが挿入されます。

```

Issuer: if signed-certificate("issuer") == "(?i)C=US" {
    insert-header("X-Test", "US issuer");
}

```

次の例では、署名者のドメインが example.com でない場合、管理者に通知されます。

```

NotOurSigners: if signed-certificate("signer") AND
    signed-certificate("signer") != "example¥¥.com$" {
    notify("admin@example.com");
}

```

次の例では、メッセージに X.509 証明書がある場合、ヘッダーが追加されます。

```

AnyX509: if signed-certificate ("issuer") {
    insert-header("X-Test", "X.509 present");
}

```

次の例では、メッセージの証明書に署名者がいない場合、ヘッダーが追加されま
す。

```
NoSigner: if not signed-certificate ("signer") {  
    insert-header("X-Test", "Old X.509?");  
}
```

メッセージフィルタ アクション

メッセージフィルタの目的は、選択されたメッセージに対してアクションを実行することです。

アクションには、次の 2 つのタイプがあります。

- **最終アクション** (deliver、drop、bounce など) はメッセージの処理を終了し、後続のフィルタによるさらなる処理を許可しません。
- **非最終アクション**は、メッセージをさらに処理することを許可するアクションを実行します。

非最終メッセージフィルタアクションは、累積的です。各フィルタが異なるアクションを指定する複数のフィルタにメッセージが一致する場合、すべてのアクションが累積され、適用されます。ただし、同じアクションを指定する複数のフィルタにメッセージが一致する場合、前のアクションが上書きされ、最後のフィルタアクションが適用されます。

フィルタ アクション一覧表

メッセージフィルタでは次の表 6-5 に示すアクションを電子メールメッセージに適用できます。

表 6-5 メッセージフィルタ アクション

アクション	構文	説明
送信元ホストの変更	alt-src-host	メッセージの送信に使用する送信元ホスト名と IP インターフェイス (Virtual Gateway アドレス) を変更します。「 送信元ホスト (Virtual Gateway アドレス) 変更アクション 」(P.6-90) を参照してください。
受信者の変更	alt-rcpt-to	メッセージの受信者を変更します。「 受信者変更アクション 」(P.6-88) を参照してください。
メールホストの変更	alt-mailhost	メッセージの送信先メールホストを変更します。「 配信ホスト変更アクション 」(P.6-89) を参照してください。

表 6-5 メッセージフィルタ アクション (続き)

アクション	構文	説明
通知	notify	メッセージに関する報告を別の受信者に送信します。「通知およびコピー通知アクション」(P.6-80) を参照してください。
コピーの通知	notify-copy	notify アクションと同様ですが、bcc-scan のようにコピーを送信します。「通知およびコピー通知アクション」(P.6-80) を参照してください。
BCC	bcc	メッセージをコピーし (メッセージレプリケーション)、このコピーを匿名で別の受信者に送信します。「ブラインドカーボンコピーアクション」(P.6-84) を参照してください。
BCC (スキャン処理あり)	bcc-scan	メッセージを秘密で他の受信者に送信し、そのメッセージを新しいメッセージであるかのように作業キューで処理します。「ブラインドカーボンコピーアクション」(P.6-84) を参照してください。
アーカイブ	archive	メッセージを mbox 形式のファイルにアーカイブします。「アーカイブアクション」(P.6-91) を参照してください。
検疫	quarantine (<i>quarantine_name</i>)	<i>quarantine_name</i> で指定した検疫エリアにメッセージを送信するようフラグを設定します。「検疫および複製アクション」(P.6-86) を参照してください。
複製 (検疫)	duplicate-quarantine(<i>quarantine_name</i>)	指定された検疫エリアにメッセージのコピーを送信します。「検疫および複製アクション」(P.6-86) を参照してください。
ヘッダーの削除	strip-header	メッセージの配信前に、指定したヘッダーをメッセージから削除します。「ヘッダー削除アクション」(P.6-92) を参照してください。

表 6-5 メッセージフィルタ アクション (続き)

アクション	構文	説明
ヘッダーの挿入	insert-header	メッセージの配信前に、ヘッダーと値の対をメッセージに挿入します。「 ヘッダー挿入アクション 」(P.6-93)を参照してください。
ヘッダーテキストの編集	edit-header-text	指定したヘッダーテキストを、フィルタ条件として指定した文字列に置き換えます。「 ヘッダーテキスト編集アクション 」(P.6-94)を参照してください。
本文の編集	edit-body-text()	メッセージ本文から正規表現に一致する部分を削除し、指定したテキストに置き換えます。このフィルタは、メッセージ本文内の URL などの特定のコンテンツを削除および置換する場合に使用できます。「 本文編集アクション 」(P.6-94)を参照してください。
HTML の変換	html-convert()	メッセージ本文から HTML タグを削除し、メッセージのプレーンテキスト部分を残します。このフィルタは、メッセージ内のすべての HTML テキストをプレーンテキストに変換する場合に使用します。「 HTML 変換アクション 」(P.6-96)。
バウンス プロファイルの割り当て	bounce-profile	特定のバウンス プロファイルをメッセージに割り当てます。「 バウンス プロファイルアクション 」(P.6-97)を参照してください。
アンチスパムシステムのバイパス	skip-spamcheck	IronPort システムのアンチスパム システムがメッセージに適用されないようにします。「 アンチスパム システムのバイパスアクション 」(P.6-97)を参照してください。
アンチウイルスシステムのバイパス	skip-viruscheck	IronPort システムのアンチウイルス システムがメッセージに適用されないようにします。「 アンチウイルス システムのバイパスアクション 」(P.6-98)を参照してください。

表 6-5 メッセージフィルタ アクション (続き)

アクション	構文	説明
ウイルス感染フィルタのスキッピング処理のスキップ	skip-vofcheck	このメッセージがウイルス感染フィルタでスキッピング処理されないようにします。 「アンチウイルス システムのバイパス アクション」(P.6-98) を参照してください。
添付ファイルのドロップ (名前別)	drop-attachments -by-name	メッセージの添付ファイルのうち、指定した正規表現と一致する名前のファイルをすべてドロップします。アーカイブ形式の添付ファイル (zip、tar) 内に該当するファイルがある場合、この添付ファイルはドロップされます。「添付ファイルのスキキャンメッセージフィルタの例」(P.6-111) を参照してください。
添付ファイルのドロップ (タイプ別)	drop-attachments -by-type	メッセージの添付ファイルのうち、指定した MIME タイプまたはファイル拡張子に該当する MIME タイプのファイルをすべてドロップします。アーカイブ形式の添付ファイル (zip、tar) 内に該当するファイルがある場合、この添付ファイルはドロップされます。「添付ファイルのスキキャンメッセージフィルタの例」(P.6-111) を参照してください。
添付ファイルのドロップ (ファイルタイプ別)	drop-attachments -by-filetype	メッセージの添付ファイルのうち、指定したファイルの「フィンガープリント」と一致するファイルをすべてドロップします。アーカイブ形式の添付ファイル (zip、tar) 内に該当するファイルがある場合、この添付ファイルはドロップされます。詳細については、「添付ファイルのスキキャン」(P.6-100) を参照してください。
添付ファイルのドロップ (MIME タイプ別)	drop-attachments -by-mimetype	メッセージの添付ファイルのうち、特定の MIME タイプのファイルをすべてドロップします。このアクションではファイル拡張子による MIME タイプの判別は行われず、アーカイブの内容の確認もされません。「添付ファイルのスキキャンメッセージフィルタの例」(P.6-111) を参照してください。

表 6-5 メッセージフィルタ アクション (続き)

アクション	構文	説明
添付ファイルのドロップ (サイズ別)	drop-attachments -by-size	メッセージの添付ファイルのうち、ロー エンコード形式で指定したサイズ (バイト単位) 以上のサイズであるファイルをすべてドロップします。アーカイブや圧縮ファイルの場合、このアクションでは非圧縮状態でのサイズは計測されず、デコードを行う前の実際の添付ファイルのサイズが計測されます。「添付ファイルのスキャンメッセージフィルタの例」(P.6-111) を参照してください。
添付ファイルのドロップ (内容別)	drop-attachments -where-contains	<p>メッセージの添付ファイルのうち、指定した正規表現を含むファイルをすべてドロップします。パターンの発生回数が、しきい値で指定した最小回数以上である必要があります。アーカイブファイル (zip、tar) は、中に含まれているファイルのいずれかが正規表現と一致する場合にドロップされます。「添付ファイルのスキャンメッセージフィルタの例」(P.6-111) を参照してください。</p> <p>オプションで入力できるコメントは、ドロップされた添付ファイルを置き換えるテキストの変更に使用できます。添付ファイルのフッターは、単純にメッセージに追加されるだけです。</p>
添付ファイルのドロップ (辞書との一致別)	drop-attachments -where-dictionary-match	辞書の用語との一致に基づいて添付ファイルを削除します。添付ファイルであると判断される MIME 部分の用語が辞書の用語と一致する場合 (かつ、ユーザ定義のしきい値に達している場合)、添付ファイルが電子メールから削除されます。「添付ファイルのスキャンメッセージフィルタの例」(P.6-111) を参照してください。

表 6-5 メッセージ フィルタ アクション (続き)

アクション	構文	説明
フッターの追加	add-footer (<i>footer-name</i>)	フッターをメッセージに追加します。詳細については、『 <i>Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide</i> 』の「Message Disclaimer Stamping」および「Text Resources」の各章を参照してください。
配信時の暗号化	encrypt-deferred	配信時にメッセージを暗号化します。メッセージはそのまま次の処理に進み、すべての処理が完了した時点で暗号化され、配信されます。
メッセージ タグの追加	tag-message (<i>tag-name</i>)	RSA Email DLP ポリシー フィルタリングで使用するカスタム用語をメッセージに追加します。RSA Email DLP ポリシーを設定して、スキャン対象をメッセージタグがあるメッセージに限定することができます。メッセージタグは受信者側では表示されません。「メッセージ タグ追加アクション」(P.6-99) および『 <i>Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide</i> 』の「Data Loss Prevention」の章を参照してください。
ログ エントリの追加	log-entry	カスタマイズしたテキストを、IronPort テキスト メール ログに INFO レベルで追加します。このテキストにはアクション変数を使用することができます。ログ エントリはメッセージ トラッキングに表示されます。「ログ エントリ追加アクション」(P.6-99) を参照してください。
*残りのメッセージ フィルタをスキップ	skip-filters	メッセージに対して他のメッセージ フィルタによる処理は行われず、メッセージは電子メール パイプラインをそのまま通過します。「残りのメッセージ フィルタをスキップ」アクション (P.6-78) を参照してください。
*メッセージ のドロップ	drop	メッセージをドロップし、廃棄します。「ドロップアクション」(P.6-79) を参照してください。

表 6-5 メッセージフィルタ アクション (続き)

アクション	構文	説明
*メッセージのバウンス	bounce	メッセージを送信者に戻します。「バウンスアクション」(P.6-79)を参照してください。
*すぐに暗号化して配信	encrypt	IronPort Email Encryption を使用して、送信メッセージを暗号化します。「暗号化アクション」(P.6-80)を参照してください。

* 最終アクション

添付ファイルグループ

特定のファイルタイプ（「exe」など）や一般的な添付ファイルのグループを attachment-filetype ルールや drop-attachments-by-filetype ルールで指定できます。AsyncOS は添付ファイルを 表 6-6 に記載されているグループに分類します。

表 6-6 添付ファイルグループ

添付ファイルグループ名	スキャン対象のファイルタイプ
Document	<ul style="list-style-type: none"> • doc • mdb • mpp • ole • pdf • ppt • pub • rtf • wps • x-wmf • xls
Executable	<ul style="list-style-type: none"> • exe • java • msi • pif <p>(注) Executable グループをフィルタリングすると、.dll ファイルと .scr ファイルもスキャンされます。これらのファイルタイプは個別にスキャンできません。</p>

表 6-6 添付ファイル グループ (続き)

添付ファイル グループ名	スキャン対象のファイル タイプ
Compressed	<ul style="list-style-type: none"> • ace (ACE アーカイバ圧縮ファイル) • arc (SQUASH 圧縮アーカイブ) • arj (Robert Jung ARJ 圧縮アーカイブ) • binhex • bz (Bzip 圧縮ファイル) • bz2 (Bzip 圧縮ファイル) • cab (Microsoft キャビネット ファイル) • gzip* (圧縮ファイル - UNIX gzip) • lha (圧縮アーカイブ [LHA/LHARC/LHZ]) • sit (圧縮アーカイブ - Macintosh ファイル [Stuffit]) • tar* (圧縮アーカイブ) • unix (UNIX 圧縮アーカイブ) • zip* (圧縮アーカイブ - Windows) • zoo (ZOO 圧縮アーカイブ ファイル) <p>* これらのファイルは「本文スキャン」の対象にすることができます。</p>
Text	<ul style="list-style-type: none"> • txt • html • xml

表 6-6 添付ファイルグループ (続き)

添付ファイルグループ名	スキャン対象のファイルタイプ
Image	<ul style="list-style-type: none">• bmp• cur• gif• ico• jpeg• pcx• png• psd• psp• tga• tiff
Media	<ul style="list-style-type: none">• aac• aiff• asf• avi• flash• midi• mov• mp3• mpeg• ogg• ram• snd• wav• wma• wmv

アクション変数

bcc()、bcc-scan()、notify()、notify-copy()、add-footer()、insert-headers() の各アクションには、アクションの実行時に元のメッセージの情報に自動的に置き換えられる所定の変数を使用しているパラメータがあります。これらの特殊な変数をアクション変数といいます。Cisco IronPort アプライアンスでは次のアクション変数がサポートされています。

表 6-7 メッセージフィルタ アクション変数

変数	構文	説明
All Headers	\$AllHeaders	メッセージのヘッダーを返します。
Body Size	\$BodySize	メッセージのサイズをバイト単位で返します。
Certificate Signers	\$CertificateSigners	署名付き証明書の subjectAltName 要素から取得した署名者を返します。詳細については、「 \$CertificateSigners アクション変数 」(P.6-61) を参照してください。
Date	\$Date	現在の日付を MM/DD/YYYY 形式で返します。
Dropped File Name	\$dropped_filename	最後にドロップされたファイルの名前のみを返します。
Dropped File Names	\$dropped_filenames	ドロップされたファイルのリストを表示します (\$filenames と同様です)。
Dropped File Types	\$dropped_filetypes	ドロップされたファイルのタイプを表示します (\$filenames と同様です)。
Envelope Sender	\$EnvelopeFrom	メッセージのエンベロープ送信者 (Envelope From、<MAIL FROM>) を返します。
Envelope Recipients	\$EnvelopeRecipients	メッセージのすべてのエンベロープ受信者 (Envelope To、<RCPT TO>) を返します。

表 6-7 メッセージ フィルタ アクション変数 (続き)

変数	構文	説明
File Names	<code>\$filenames</code>	メッセージの添付ファイルの名前のリストをカンマ区切りで返します。
File Sizes	<code>\$filesizes</code>	メッセージの添付ファイルのサイズのリストをカンマ区切りで返します。
File Types	<code>\$filetypes</code>	メッセージの添付ファイルのタイプのリストをカンマ区切りで返します。
Filter Name	<code>\$FilterName</code>	処理中のフィルタの名前を返します。
GMTimeStamp	<code>\$GMTimeStamp</code>	メッセージの Received: 行に表示される現在の日時を GMT 形式で返します。
HAT Group Name	<code>\$Group</code>	メッセージの送信時に送信者が属していた送信者グループの名前を返します。送信者グループに名前がない場合は、「>Unknown<」が挿入されます。
Matched Content	<code>\$MatchedContent</code>	スキャン フィルタ ルール (body-contains などのフィルタ ルールやコンテンツ ディクショナリを含む) をトリガーした内容を返します。
Mail Flow Policy	<code>\$Policy</code>	メッセージの送信時に送信者に適用された HAT ポリシーの名前を返します。定義済みのポリシー名が使用されていない場合は、「>Unknown<」が挿入されます。
Header	<code>\$Header['string']</code>	引用符で囲まれたヘッダーの値を返します (元のメッセージに該当するヘッダーがある場合)。二重引用符が使用される場合もあります。

表 6-7 メッセージフィルタ アクション変数 (続き)

変数	構文	説明
Hostname	\$Hostname	Cisco IronPort アプライアンスのホスト名を返します。
Internal Message ID	\$MID	内部でメッセージを識別するため使用されているメッセージ ID (MID) を返します。RFC822 の「Message-Id」の値とは異なるので注意してください (この値を取得するには \$Header を使用します)。
Receiving Listener	\$RecvListener	メッセージを受信したリスナーのニックネームに置き換わっています。
Receiving Interface	\$RecvInt	メッセージを受信したインターフェイスのニックネームを返します。
Remote IP Address	\$RemoteIP	Cisco IronPort アプライアンスにメッセージを送信したシステムの IP アドレスを返します。
Remote Host Address	\$remotehost	IronPort アプライアンスにメッセージを送信したシステムのホスト名を返します。
SenderBase Reputation Score	\$Reputation	送信者の SenderBase 評価スコアを返します。評価スコアがない場合は「None」に置き換えられます。
Subject	\$Subject	メッセージの件名を返します。
Time	\$Time	現在地の時間帯での現在時刻を返します。
Timestamp	\$Timestamp	メッセージの Received: 行に表示される現在の日時を現在地の時間帯に従って返します。

非 ASCII 文字セットとメッセージ フィルタ アクション変数

このシステムでは、ISO-2022 スタイル文字コード（ヘッダー値で使用されるエンコードのスタイル）を含むアクション変数の拡張をサポートしています。また、通知内で多言語テキストを使用できます。これらの内容が統合されて通知が生成され、UTF-8 形式の、引用符で囲まれた印刷可能なメッセージとして送信されます。

該当コンテンツの表示

添付ファイル コンテンツ条件、メッセージ本文または添付ファイル条件、メッセージ本文条件、または添付ファイル コンテンツ条件に一致するメッセージに対して検疫アクションが設定されている場合、一致するコンテンツを検疫メッセージで表示できます。メッセージ本文を表示すると、該当コンテンツが黄色で強調表示されます。`$MatchedContent` アクション変数を使用して、該当コンテンツをメッセージの件名に入れることもできます。

メッセージまたはコンテンツ フィルタ ルールをトリガーしたメッセージをローカルの検疫エリアで表示する場合、GUI には実際にはフィルタ ルールをトリガーしていないコンテンツが（フィルタ ルールをトリガーしたコンテンツとあわせて）表示される場合があります。GUI の表示は、該当コンテンツを特定するための目安として使用するもので、該当コンテンツの完全なリストであるとは限りません。この現象が発生するのは、GUI でコンテンツの照合に使用しているロジックがフィルタと比べて厳密でないためです。この問題はメッセージ本文での検索についてのみ発生します。メッセージの各部分について、一致する文字列と関連するフィルタ ルールのリストが記載された表は正確です。

図 6-2 Policy 検査エリアに表示される該当コンテンツ



メッセージフィルタ アクションの例

「残りのメッセージフィルタをスキップ」アクション

skip-filters アクションを実行すると、メッセージフィルタによるメッセージの処理がスキップされ、メッセージは電子メールパイプラインを通過します。アプライアンスでアンチスパム スキャンとアンチウイルス スキャンが使用できる場合、skip-filters アクションを実行したメッセージはこれらのスキャンの対象となります。skip-filters アクションは、メッセージフィルタのデフォルトの最終アクションです。

次のフィルタは、customer@example.com に通知を送信し、boss@admin宛でのメッセージをただちに送信します。

```
bossFilter:
```

```
if(rcpt-to == 'boss@admin$')
{
    notify('customer@example.com');
```

```
skip-filters();  
  
}
```

ドロップアクション

drop アクションを実行すると、メッセージは送信されずに廃棄されます。メッセージは送信者には戻されず、メッセージの本来の宛先にも送信されず、それ以外の処理も一切行われません。

次のフィルタは、まず `george@whitehouse.gov` に通知を送信し、その後件名が「SPAM」で始まるメッセージを廃棄します。

```
spamFilter:  
  
  if(subject == '^SPAM.*')  
  
  {  
  
    notify('george@whitehouse.gov');  
  
    drop();  
  
  }
```

バウンスアクション

bounce アクションは、メッセージを送信者（エンベロープ送信者）に戻し、それ以降の処理は行いません。

次のフィルタは、`@yahoo¥¥.com` で終わる電子メールアドレスから送信されたすべてのメッセージを戻します（バウンスします）。

```
yahooFilter:  
  
  if(mail-from == '@yahoo¥¥.com$')  
  
  {
```

```

bounce ();
}

```

暗号化アクション

encrypt アクションは、設定された暗号化プロファイルを使用して、電子メール受信者に暗号化されたメッセージを送信します。

次のフィルタは、メッセージの件名に **[encrypt]** という語句が含まれている場合に、そのメッセージを暗号化します。

```

Encrypt_Filter:

if ( subject == '¥¥[encrypt¥¥]' )
{
    encrypt('My_Encryption_Profile');
}

```



(注)

このフィルタ アクションを使用するには、ネットワークに **IronPort Exryption** アプライアンスがあるか、ホスト キー サービスが設定されている必要があります。また、このフィルタ アクションを使用するには、暗号化プロファイルの設定が必要です。

通知およびコピー通知アクション

notify および **notify-copy** アクションは、指定した電子メールに対して、メッセージの概要を電子メールで送信します。**notify-copy** アクションは、**bcc-scan** アクションと同様に、元のメッセージのコピーも送信します。通知概要には次の内容が含まれます。

- メッセージのメール転送プロトコル対話から取得したエンベロップ送信者およびエンベロップ受信者 (MAIL FROM および RCPT TO) 指定の内容。
- メッセージのヘッダー。

- メッセージを検出したメッセージフィルタの名前。

受信者、件名行、送信元アドレス、通知テンプレートを指定できます。次のフィルタは、サイズが 4 MB を超えるメッセージを選択し、一致するメッセージのそれぞれについて通知メッセージを `admin@example.com` に送信し、最後にメッセージを廃棄します。

`bigFilter:`

```
if(body-size >= 4M)

{

    notify('admin@example.com');

    drop();

}
```

または

`bigFilterCopy:`

```
if(body-size >= 4M)

{

    notify-copy('admin@example.com');

    drop();

}
```

エンベロープ受信者パラメータとして、有効な任意の電子メールアドレス（上の例では `admin@example.com`）を指定できます。また、メッセージのすべてのエンベロープ受信者を指定するアクション変数 `$EnvelopeRecipients`（「[アクション変数](#)」(P.6-74) を参照）を指定することもできます。

`bigFilter:`

```
if(body-size >= 4M)
```

```

{
    notify('$EnvelopeRecipients');

    drop();
}

```

notify アクションでは最大で 3 つのオプション引数を使用でき、件名ヘッダー、エンベロープ送信者、通知メッセージに使用する定義済みテキストリソースを指定できます。これらのパラメータはこの順序で指定する必要があるため、エンベロープ送信者を設定する場合や通知テンプレートを指定する場合は件名を指定する必要があります。

件名パラメータにはアクション変数（「[アクション変数](#)」(P.6-74) を参照) を指定できます。この変数は元のメッセージから取得したデータで置き換えられます。デフォルトでは、件名は「Message Notification」に設定されています。

エンベロープ送信者パラメータとして、有効な任意の電子メールアドレスを指定できます。また、メッセージのリターンパスを元のメッセージと同じに設定する \$EnvelopeFrom アクション変数を指定することもできます。

通知テンプレートパラメータは、既存の通知テンプレートの名前になります。詳細については、「[通知](#)」(P.6-110) を参照してください。

次の例は前の例を拡張したものですが、件名が「[bigFilter] Message too large」となるように変更し、リターンパスを元の送信者に設定し、「message.too.large」テンプレートを_using_しています。

```

bigFilter:

    if (body-size >= 4M)

    {

        notify('admin@example.com', '[${FilterName}] Message too large',

            '$EnvelopeFrom', 'message.too.large');

        drop();

    }

```

また、`$MatchedContent` アクション変数を使用して、送信者または管理者にコンテンツフィルタがトリガーされたことを通知することもできます。`$MatchedContent` アクション変数は、フィルタをトリガーしたコンテンツを表示します。たとえば、次のフィルタは、電子メールに ABA アカウント情報が含まれる場合に、管理者に通知します。

```
ABA_filter:

if (body-contains ('*aba')){

    notify('admin@example.com', '[${MatchedContent}]Account Information
    Displayed');

}
```

通知テンプレート

[Text Resources] ページまたは `textconfig CLI` コマンドを使用して、`notify()` および `notify-copy()` アクションで使用するテキストリソースとなるカスタム通知テンプレートを設定できます。カスタム通知テンプレートを作成しない場合、デフォルトのテンプレートが使用されます。デフォルトのテンプレートにはメッセージヘッダーが含まれますが、デフォルトではカスタム通知テンプレートにはメッセージヘッダーは含まれません。カスタム通知にメッセージヘッダーを含めるには、`$AllHeaders` アクション変数を使用します。

詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「Text Resources」の章を参照してください。

次の例では、メッセージのサイズが大きい場合に次のフィルタがトリガーされると、本来の受信者に対して、メッセージが大きすぎることを示す電子メールが送信されます。

```
bigFilter:

if (body-size >= 4M)

{

    notify('${EnvelopeRecipients}', '[${FilterName}] Message too large',

        '${EnvelopeFrom}', 'message.too.large');
```

```
drop();

}
```

ブラインドカーボンコピーアクション

`bcc` アクションは、メッセージの無記名コピーを、指定した受信者に送信します。この処理はメッセージレプリケーションとも呼ばれています。元のメッセージにはコピーに関する通知は含まれず、無記名コピーが受信者にバウンスされることはないため、メッセージの元の送信者と受信者はコピーが送信されたことを関知しない場合があります。

次のフィルタは、`sue` から `johnny` に送信されるメッセージのそれぞれについて、ブラインドカーボンコピーを `mom@home.org` に送信します。

```
momFilter:

    if ((mail-from == '^johnny$') and (rcpt-to == '^sue$'))

    {

        bcc('mom@home.org');

    }
```

`bcc` アクションでは最大で 3 つのオプション引数を使用でき、コピーしたメッセージに使用する件名ヘッダーとエンベロープ送信者、および `alt-mailhost` を指定できます。これらのパラメータはこの順序で指定する必要があるため、エンベロープ送信者を設定する場合は件名を指定する必要があります。

件名パラメータにはアクション変数（「[アクション変数](#)」(P.6-74) を参照）を指定できます。この変数は元のメッセージから取得したデータで置き換えられます。デフォルトでは、元のメッセージの件名（`$Subject` と同じ内容）が設定されます。

エンベロープ送信者パラメータとして、有効な任意の電子メールアドレスを指定できます。また、メッセージのリターンパスを元のメッセージと同じに設定する `$EnvelopeFrom` アクション変数を指定することもできます。

次の例は前の例を拡張したもので、件名は「[Bcc] <元の件名>」に設定され、リターンパスは badbounce@home.org に設定されています。

```
momFilter:

    if ((mail-from == '^johnny$') and (rcpt-to == '^sue$'))

    {

        bcc('mom@home.org', '[Bcc] $Subject', 'badbounce@home.org');

    }

```

4 番目のパラメータは alt-mailhost です。

```
momFilterAltM:

    if ((mail-from == '^johnny$') and (rcpt-to == '^sue$'))

    {

        bcc('mom@home.org', '[Bcc] $Subject', '$EnvelopeFrom',
        'momaltmailserver.example.com');

    }

```



警告

`Bcc()`、`notify()`、`bounce()` の各フィルタ アクションを実行すると、ネットワーク内にウイルスが侵入する場合があります。ブラインド カーボンコピーフィルタ アクションは、元のメッセージの完全なコピーであるメッセージを新規作成します。通知フィルタ アクションは、元のメッセージのヘッダーを含むメッセージを新規作成します。まれにはありますが、ヘッダーにウイルスが含まれている場合があります。バウンス フィルタ アクションは、元のメッセージの最初の 10 キロバイトを含むメッセージを新規作成します。3 つのうちいずれの場合についても、新しいメッセージはアンチウイルス スキャンやアンチスパム スキャンの処理対象とはなりません。

複数のホストに送信する場合は、`bcc()` アクションを複数呼び出すことができます。

```
multiplealthosts:

    if (recv-listener == "IncomingMail")

    {

        insert-header('X-ORIGINAL-IP', '$remote_ip');

        bcc ('$EnvelopeRecipients', '$Subject', '$EnvelopeFrom', '10.2.3.4');

        bcc ('$EnvelopeRecipients', '$Subject', '$EnvelopeFrom', '10.2.3.5');

        bcc ('$EnvelopeRecipients', '$Subject', '$EnvelopeFrom', '10.2.3.6');

    }
```

bcc-scan() アクション

`bcc-scan` アクションは `bcc` アクションと同様に機能しますが、送信されるメッセージは新しいメッセージとして扱われるため、電子メールパイプライン全体を経由して送信されます。

```
momFilter:

    if ((mail-from == '^johnny$') and (rcpt-to == '^sue$'))

    {

        bcc-scan ('mom@home.org');

    }
```

検疫および複製アクション

`quarantine('検疫エリア名')` アクションは、検疫エリアと呼ばれるキューに入れるメッセージにフラグを設定します。検疫エリアの詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide*』の「Quarantines」を参

照してください。duplicate-quarantine('検疫エリア名') アクションを実行すると、メッセージのコピーが指定されている検疫エリアにただちに配置されます。検疫エリア名の太文字と小文字は区別されます。

検疫フラグが設定されたメッセージは、電子メールパイプラインの残りの部分をそのまま通過します。メッセージがパイプラインの末尾に到達すると、メッセージに 1 つ以上の検疫に関するフラグが設定されていれば、該当するキューに入ります。それ以外の場合は配信されます。メッセージがパイプラインの末尾に到達しなければ、検疫エリアには配置されません。

したがって、メッセージフィルタに quarantine() アクションがあり、その後に bounce() または drop() アクションが続く場合、最後のアクションによりメッセージはパイプラインの末尾に到達しないため、メッセージは検疫エリアに配置されません。メッセージフィルタに検疫アクションが含まれる場合も同様ですが、メッセージはアンチスパムまたはアンチウイルス スキャン、またはコンテンツ フィルタによりドロップされます。最後の skip_filters() アクションにより、メッセージは残りのメッセージフィルタをスキップしますが、コンテンツ フィルタはそのまま適用される場合があります。たとえば、メッセージフィルタがメッセージに検疫フラグを設定し、同時に最後の skip_filters() アクションも設定している場合、電子メールパイプラインの他のアクションによりメッセージがドロップされる場合を除き、メッセージは残りのメッセージフィルタをすべてスキップした上で検疫されます。

次の例では、メッセージに「secret_word」という辞書にあるいずれかの単語が含まれていると、そのメッセージは Policy 検疫エリアに送信されます。

```
quarantine_codenames:  
  
    if (dictionary-match ('secret_words'))  
  
        {  
  
            quarantine('Policy');  
  
        }
```

次の例では、ある会社に .mp3 ファイル形式の添付ファイルをすべてドロップする公式ポリシーがあるものと仮定しています。受信メッセージに .mp3 形式の添付ファイルがある場合、この添付ファイルは削除され、残りのメッセージ（本文と他の添付ファイル）は本来の受信者に送信されます。元のメッセージにすべて

の添付ファイルが添付されているコピーが検疫（Policy 検疫エリアに送信）されます。ブロックされた添付ファイルを受信する必要がある場合、本来の受信者はメッセージを検疫エリアから解放するよう要求することができます。

```
strip_all_mp3s:

    if (attachment-filename == '(?i)%¥¥.mp3$') {

        duplicate-quarantine('Policy');

        drop-attachments-by-name('( ?i)%¥¥.mp3$');

    }
```

受信者変更アクション

alt-rcpt-to アクションは、メッセージの配信時にメッセージのすべての受信者を指定した受信者に変更します。

次のフィルタは、エンベロープ受信者のアドレスに .freelist.com が含まれているすべてのメッセージを送信し、そのメッセージの受信者を system-lists@myhost.com に変更します。

```
freelistFilter:

    if(rcpt-to == '¥¥.freelist¥¥.com$')

    {

        alt-rcpt-to('system-lists@myhost.com');

    }
```



(注) 秒

配信ホスト変更アクション

alt-mailhost アクションは、選択したメッセージのすべての受信者の IP アドレスを、指定した数値 IP アドレスまたはホスト名に変更します。



(注)

alt-mailhost アクションを実行すると、アンチスパム スキャンによりスパムと分類されたメッセージが検疫されないようにすることができます。

alt-mailhost アクションは検疫アクションに優先して実行され、指定したメールホストにメッセージを送信します。

次のフィルタは、すべての受信者について、受信者のアドレスをホスト example.com に変更します。

```
localRedirectFilter:
```

```
    if(true)
    {
        alt-mailhost('example.com');
    }
```

これにより、joe@anywhere.com に送信されるメッセージの Envelope To アドレスが joe@anywhere.com になり、メッセージは example.com のメールホストに送信されます。smtproutes コマンドで指定された追加ルーティング情報は、引き続きメッセージのルーティングに適用されます。(「ローカルドメインの電子メールのルーティング」(P.2-2)を参照)。



(注)

alt-mailhost アクションではポート番号を指定できません。この操作を行うには、かわりに SMTP ルートを追加します。

次のフィルタは、すべてのメッセージを 192.168.12.5 にリダイレクトします。

```
local2Filter:
```

```
    if(true)
```

```
{  
  
    alt-mailhost('192.168.12.5');  
  
}
```

送信元ホスト (Virtual Gateway アドレス) 変更アクション

alt-src-host アクションは、メッセージの送信元ホストを指定した送信元に変更します。送信元ホストは、メッセージの送信元となる IP インターフェイス、または IP インターフェイスのグループにより構成されます。IP インターフェイスのグループが選択された場合、システムは電子メールの配信時に、グループ内のすべての IP インターフェイスを送信元インターフェイスとして使用する処理を繰り返します。つまり、これにより 1 台の IronPort 電子メールセキュリティアプライアンスに複数の Virtual Gateway アドレスを設定できます。詳細については、「[Virtual Gateway™ テクノロジー](#)」(P.2-86) を参照してください。

IP インターフェイスは、システムで現在設定されている IP インターフェイスまたはインターフェイスのグループにしか変更できません。次のフィルタは、IP アドレスが 1.2.3.4 であるリモートホストから受信したすべてのメッセージに対して、発信（配信）IP インターフェイス outbound2 を使用する Virtual Gateway を作成します。

```
externalFilter:  
  
    if(remote-ip == '1.2.3.4')  
  
    {  
  
        alt-src-host('outbound2');  
  
    }
```

次のフィルタは、IP アドレスが 1.2.3.4 であるリモート ホストから受信したすべてのメッセージに対して、IP インターフェイスのグループ Group1 を使用します。

```
groupFilter:

    if(remote-ip == '1.2.3.4')

        {

            alt-src-host('Group1');

        }

}
```

アーカイブアクション

archive アクションは、元のメッセージ（すべてのメッセージヘッダーと受信者を含む）のコピーを、アプライアンス上の mbox 形式のファイルに保存します。このアクションでは、メッセージを保存するログファイルの名前がパラメータとして使用されます。システムはフィルタの作成時に、指定したファイル名で自動的にログサブスクリプションを作成します。また、既存のフィルタログファイルを指定することもできます。フィルタとフィルタログファイルの作成後は、filters -> logconfig サブコマンドでフィルタログオプションを編集できます。



(注)

logconfig コマンドは filters のサブコマンドです。このサブコマンドの完全な説明については、「[CLI を使用したメッセージフィルタの管理](#)」(P.6-115) を参照してください。

mbox 形式は標準の UNIX メールボックス形式で、メッセージを簡単に表示するためのユーティリティが多数用意されています。大部分の UNIX システムでは、「mail -f *mbox.filename*」と入力するとファイルを表示できます。mbox 形式はプレーンテキストであるため、普通のテキストエディタを使用してメッセージの内容を表示することができます。

次の例では、エンベロープ送信者が `joesmith@yourdomain.com` と一致する場合に、メッセージのコピーが `joesmith` というログに保存されます。

```
logJoeSmithFilter:

    if(mail-from == '^joesmith@yourdomain¥¥.com$')

    {

        archive('joesmith');

    }

}
```

ヘッダー削除アクション

`strip-header` アクションは、メッセージの特定のヘッダーを調べ、配信する前に該当する行をメッセージから削除します。ヘッダーが複数ある場合は、ヘッダーのすべてのインスタンス（「**Received:**」ヘッダーなど）が削除されます。

次の例では、すべてのメッセージで送信前に `X-DeleteMe` ヘッダーが削除されます。

```
stripXDeleteMeFilter:

    if (true)

    {

        strip-header('X-DeleteMe');

    }

}
```

ヘッダーに関する操作を行う場合、ヘッダーの現在の値には処理中に行われた変更（メッセージのヘッダーの追加、削除、変更を行うフィルタ処理など）が含まれている点に注意してください。詳細については、「[メッセージヘッダー ルールおよび評価](#)」(P.6-7) を参照してください。

ヘッダー挿入アクション

`insert-header` アクションは、メッセージに新しいヘッダーを挿入します。AsyncOS は、挿入したヘッダーが規格を満たしているかどうかを検証しません。生成されるメッセージが電子メールのインターネット規格を満たしているかどうかは、ユーザが自分で確認する必要があります。

次の例では、`X-Company` というヘッダーがメッセージにない場合に、このヘッダーに `My Company Name` という値が設定されます。

```
addXCompanyFilter:

    if (not header('X-Company'))

    {

        insert-header('X-Company', 'My Company Name');

    }
```

`insert-header()` アクションでは、ヘッダーのテキストに非 ASCII 文字を使用できます。ただし、ヘッダー名には（規格遵守のため）ASCII 文字しか使用できません。可読性を最大限に高めるため、トランスポートエンコードは `Quoted-Printable` となります。



(注)

`strip-headers` アクションと `insert-header` アクションを組み合わせることにより、元のメッセージにある任意のメッセージヘッダーを書き換えることができます。場合によっては、同じヘッダーを複数回使用することができます（`Received:` など）、それ以外の場合は同じヘッダーを複数回使用すると MUA が混乱する場合があります（`Subject:` ヘッダーを複数回使用する場合など）。

ヘッダーに関する操作を行う場合、ヘッダーの現在の値には処理中に行われた変更（メッセージのヘッダーの追加、削除、変更を行うフィルタ処理など）が含まれている点に注意してください。詳細については、「[メッセージヘッダー ルールおよび評価](#)」(P.6-7) を参照してください。

ヘッダーテキスト編集アクション

`edit-header-text` アクションを実行すると、正規表現の置換機能を使用して、指定したヘッダーテキストを書き換えることができます。このフィルタはヘッダー内で正規表現と一致するテキストを検索し、指定した正規表現に置き換えます。

たとえば、電子メールに次のような件名ヘッダーがあるものとします。

```
Subject: SCAN Marketing Messages
```

次のフィルタは、「SCAN」というテキストを削除し、「Marketing Messages」というテキストをヘッダー内に残します。

```
Remove_SCAN: if true
{
    edit-header-text ('Subject', '^SCAN¥¥s*', '');
}
```

フィルタはメッセージを処理した後、次のヘッダーを返します。

```
Subject: Marketing Messages
```

本文編集アクション

`edit-body-text()` メッセージフィルタの機能は `Edit-Header-Text()` フィルタと同様ですが、メッセージのヘッダーではなく本文が処理対象です。

`edit-body-text()` メッセージフィルタは次の構文を使用します。最初のパラメータは検索のための正規表現で、2 番目のパラメータは置換のためのテキストです。

```
Example: if true {
    edit-body-text("parameter 1",
"parameter 2");
}
```

`edit-body-text()` メッセージ フィルタはメッセージ本文のみが処理対象です。特定の MIME 部分がメッセージの「本文」と見なされるか「添付ファイル」と見なされるかの詳細については、「[メッセージ本文と メッセージ添付ファイル \(P.6-7\)](#)」を参照してください。

次の例では、メッセージから URL が削除され、「URL REMOVED」というテキストに置き換えられています。

```
URL_Replaced: if true {  
  
    edit-body-text("(?i)(?:https?|ftp)://[^\s">]", "URL REMOVED");  
  
}
```

次の例では、メッセージの本文から社会保障番号が削除され、「XXX-XX-XXXX」というテキストに置き換えられています。

```
ssn: if true {  
  
    edit-body-text("(?!000) (?:[0-6]¥¥d{2}|7(?:[0-6]¥¥d|7[012])) ([  
-]?) (?!00) ¥¥d¥¥d¥¥1 (?!0000) ¥¥d{4}",  
  
    "XXX-XX-XXXX");  
  
}
```



(注) 現時点では、`edit-body-text()` フィルタではスマート ID を使用できません。

HTML 変換アクション

RFC 2822 では電子メール メッセージのテキスト形式が規定されていますが、RFC 2822 メッセージ内の他のコンテンツのトランスポートを実現するための拡張機能 (MIME など) があります。AsyncOS は `html-convert()` メッセージ フィルタを使用して、次の構文により HTML をプレーン テキストに変換できます。

```
Convert_HTML_Filter:
```

```
if (true)

{

html-convert();

}
```

IronPort メッセージ フィルタは、特定の MIME 部分がメッセージの「本文」であるか「添付ファイル」であるかを判別します。`html-convert()` メッセージ フィルタはメッセージ本文のみが処理対象です。メッセージの本文と添付ファイルの詳細については、「[メッセージ本文とメッセージ添付ファイル](#)」(P.6-7) を参照してください。

`html-convert()` フィルタが文書内の HTML を削除する方式は、形式によって異なります。

メッセージがプレーン テキスト (`text/plain`) である場合、メッセージは変更されずにフィルタを通過します。メッセージが単純な HTML メッセージ (`text/html`) である場合、すべての HTML タグはメッセージから削除され、残りの本文が HTML メッセージにかわり使用されます。各行の再フォーマットは行われず、HTML がプレーン テキストになることはありません。構造が MIME (`multipart/alternative` 構造) で、同じコンテンツに `text/plain` 部分と `text/html` 部分が含まれている場合、フィルタはメッセージの `text/html` 部分を削除して `text/plain` 部分を残します。その他の MIME タイプ (`multipart/mixed` など) では、すべての HTML 本文部分のタグが削除され、メッセージに再挿入されます。

メッセージ フィルタでは、`html-convert()` フィルタ アクションは処理対象のメッセージにタグを設定するだけで、メッセージ構造の変更はただちには行われません。メッセージの変更は、すべての処理が完了した後に行われます。これにより、変更前に他のフィルタ アクションが元のメッセージを処理することができます。

バウンス プロファイル アクション

`bounce-profile` アクションは、設定済みのバウンス プロファイルをメッセージに割り当てます。（「[バウンスした電子メールの処理](#)」(P.2-50) を参照)。メッセージを配信できない場合、バウンス プロファイルで設定されたバウンス オプションが使用されます。この機能は、リスナーの設定から割り当てられているバウンス プロファイル（割り当てられている場合）に優先して適用されます。

次のフィルタの例では、送信される電子メールのうち、ヘッダーに「`X-Bounce-Profile: fastbounce`」があるすべての電子メールにバウンス プロファイル「`fastbounce`」が割り当てられます。

```
fastbounce:

    if (header ('X-Bounce-Profile') == 'fastbounce') {

        bounce-profile ('fastbounce');

    }
```

アンチスパム システムのバイパス アクション

`skip-spamcheck` アクションは、システムに設定されたコンテンツベースのアンチスパム フィルタリングをすべてバイパスするようシステムに指示します。コンテンツベースのアンチスパム フィルタリングが設定されていない場合、またはメッセージがあらかじめスパム スキャンの対象に設定されていない場合は、このアクションを実行してもメッセージに影響はありません。

次の例では、メッセージの `SenderBase` 評価スコアが高い場合に、メッセージに対するコンテンツベースのアンチスパム フィルタリングがバイパスされます。

```
whitelist_on_reputation:

    if (reputation > 7.5)

    {

        skip-spamcheck ();

    }
```

アンチウイルス システムのバイパス アクション

`skip-viruscheck` アクションは、システムに設定されたウイルス保護システムをすべてバイパスするようシステムに指示します。アンチウイルス システムが設定されていない場合、またはメッセージがあらかじめウイルス スキャンの対象に設定されていない場合は、このアクションを実行してもメッセージに影響はありません。

次の例では、「`private_listener`」というリスナーで受信したメッセージに対して、アンチスパム システムとアンチウイルス システムによる処理がバイパスされています。

```
internal_mail_is_safe:

    if (recv-listener == 'private_listener')

        {

            skip-spamcheck();

            skip-viruscheck();

        }

}
```

ウイルス感染フィルタのスキャン処理バイパス アクション

`skip-vofcheck` アクションは、メッセージのウイルス感染フィルタによるスキャン処理がバイパスされるようシステムに指示します。ウイルス感染フィルタのスキャン処理がイネーブルになっていない場合、このアクションを実行してもメッセージに影響はありません。

次の例では、「`private_listener`」というリスナーで受信したメッセージに対して、ウイルス感染フィルタのスキャン処理がバイパスされています。

```
internal_mail_is_safe:

    if (recv-listener == 'private_listener') Outbreak Filters

        {

}
```

```
skip-vofcheck();  
  
}
```

メッセージタグ追加アクション

tag-message アクションは、RSA Email DLP ポリシー フィルタリングで使用するカスタム用語を送信メッセージに挿入します。RSA Email DLP ポリシーを設定して、スキャン対象をメッセージタグがあるメッセージに限定することができます。メッセージタグは受信者側では表示されません。タグ名には、[a-zA-Z0-9_-.] の範囲の文字のうち任意のものを組み合わせて使用できます。

メッセージのフィルタリングに使用する DLP ポリシーの設定の詳細については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Data Loss Prevention」の章を参照してください。

次の例では、件名に「[Encrypt]」が含まれるメッセージにメッセージタグを挿入しています。IronPort Email Encryption が使用できる場合は、メッセージの配信前にメッセージをこのメッセージタグで暗号化する DLP ポリシーを作成できます。

```
Tag_Message:  
  
if (subject == '^¥¥[Encrypt¥¥]')  
{  
  
    tag-message('Encrypt-And-Deliver');  
  
}
```

ログ エントリ追加アクション

log-entry アクションは、カスタマイズしたテキストを、IronPort テキストメール ログに INFO レベルで追加します。このテキストにはアクション変数を使用することができます。このアクションを使用すると、デバッグ時に便利なテキストや、メッセージフィルタがアクションを実行した理由に関する情報を挿入できます。ログ エントリはメッセージ トラッキングにも表示されます。

次の例では、メッセージに会社の機密情報が含まれていると判断されたためメッセージがバウンスされたことを示すログ エントリが挿入されます。

CompanyConfidential:

```
if (body-contains('Company Confidential'))  
  
  {  
  
    log-entry('Message may have contained confidential  
information.');
```

 bounce();

```
  }
```

添付ファイルのスキャン

AsyncOS は企業ポリシーに準拠していないメッセージの添付ファイルを削除でき、一方で元のメッセージはそのまま配信することができます。

添付ファイルのフィルタリングは、特定のファイル タイプ、フィンガープリント、添付ファイルの内容に基づいて行うことができます。フィンガープリントを使用して添付ファイルの正確な種類を判別することにより、ユーザは悪意のある添付ファイルの拡張子 (.exe など) を一般的な拡張子 (.doc など) に変更して、名前が変更されたファイルが添付ファイル フィルタを通過できるようにすることができなくなります。

添付ファイルのコンテンツをスキャンすると、Stellent 添付ファイル スキャン エンジン は添付ファイルからデータを抽出し、正規表現による検索を実行します。添付ファイルのデータとメタデータの両方が検査対象となります。Excel または Word 文書をスキャンする場合、添付ファイル スキャン エンジン は .exe、.dll、.bmp、.tiff、.pcx、.gif、.jpeg、.png、Photoshop 画像の各埋め込みファイルも検出できます。

添付ファイルのスキャンで使用するメッセージ フィルタ

表 6-8 に記載されているメッセージ フィルタは最終でないアクションです。(添付ファイルはドロップされ、メッセージの処理が続行されます)。

オプションのコメントは、フッターのようにメッセージに追加されるテキストで、メッセージフィルタアクション変数（「添付ファイルのスキャンメッセージフィルタの例」(P.6-111) を参照）を使用することもできます。

表 6-8 添付ファイルのスキャンで使用するメッセージフィルタアクション

アクション	構文	説明
添付ファイルのドロップ (名前別)	drop-attachments-by-name (<regular expression>[, <optional comment>])	メッセージの添付ファイルのうち、指定した正規表現と一致する名前のファイルをすべてドロップします。アーカイブ形式の添付ファイル (zip、tar) 内に該当するファイルがある場合、この添付ファイルはドロップされます。「添付ファイルのスキャンメッセージフィルタの例」(P.6-111) を参照してください。
添付ファイルのドロップ (タイプ別)	drop-attachments-by-type (<MIME type>[, <optional comment>])	メッセージの添付ファイルのうち、指定した MIME タイプまたはファイル拡張子に該当する MIME タイプのファイルをすべてドロップします。アーカイブ形式の添付ファイル (zip、tar) 内に該当するファイルがある場合、この添付ファイルはドロップされます。
添付ファイルのドロップ (ファイルタイプ別)	drop-attachments-by-filename (<fingerprint name>[, <optional comment>])	メッセージの添付ファイルのうち、指定したファイルの「フィンガープリント」と一致するファイルをすべてドロップします。アーカイブ形式の添付ファイル (zip、tar) 内に該当するファイルがある場合、この添付ファイルはドロップされます。詳細については、「添付ファイルグループ」(P.6-71) を参照してください。

表 6-8 添付ファイルのスキャンで使用するメッセージフィルタ アクション (続き)

アクション	構文	説明
添付ファイルのドロップ (MIME タイプ別)	<code>drop-attachments-by-mim etype (<MIME type>[, <optional comment>])</code>	メッセージの添付ファイルのうち、特定の MIME タイプのファイルをすべてドロップします。このアクションではファイル拡張子による MIME タイプの判別は行われず、アーカイブの内容の確認もされません。
添付ファイルのドロップ (サイズ別)	<code>drop-attachments-by-siz e (<number>[, <optional comment>])</code>	メッセージの添付ファイルのうち、ローエンコード形式で指定したサイズ (バイト単位) 以上のサイズであるファイルをすべてドロップします。アーカイブや圧縮ファイルの場合、このアクションでは非圧縮状態でのサイズは計測されず、実際の添付ファイル自体のサイズが計測されます。
添付ファイルのスキャン	<code>drop-attachments-where- contains (<regular expression>[, <optional comment>])</code>	メッセージの添付ファイルのうち、指定した正規表現を含むファイルをすべてドロップします。アーカイブファイル (zip、tar) は、中に含まれているファイルのいずれかが正規表現と一致する場合にドロップされます。
添付ファイルのドロップ (辞書との一致別)	<code>drop-attachments-where- dictionary-match(<dicti onary name>)</code>	このフィルタアクションは、辞書の用語との一致に基づいて添付ファイルを削除します。添付ファイルであると判断される MIME 部分の用語が辞書の用語と一致する場合 (かつ、ユーザ定義のしきい値に達している場合)、添付ファイルが電子メールから削除されます。「添付ファイルのスキャンメッセージフィルタの例」(P.6-111) を参照してください。

イメージの分析

メッセージによってはイメージを含むものがあり、適切でないコンテンツがないかスキャンすることが必要になる場合があります。イメージ分析エンジンを使用すると、電子メール内の適切でないコンテンツを検索できます。イメージ分析は、アンチウイルスおよびアンチスパム スキャン エンジンの補完または代替を目的とするものではありません。この機能は、電子メール内の適切でないコンテンツを特定することにより、許容範囲での使用を促進するためのものです。イメージ分析スキャン エンジンを使用すると、メールの検疫と分析、および傾向の認識ができます。

AsyncOS でイメージ分析を設定すると、イメージ分析フィルタ ルールを使用して、疑わしい電子メールや適切でない電子メールに対してアクションを実行することができます。イメージ スキャンでは、JPEG、BMP、PNG、TIFF、GIF、TGA、ICO、PCX の各添付ファイルのタイプをスキャンできます。イメージアナライザは、スキン カラー、本体サイズ、曲率を測定するアルゴリズムを使用し、画像に適切でないコンテンツが含まれる可能性を判定します。イメージ添付ファイルをスキャンすると、IronPort フィンガープリントによりファイル タイプが特定され、イメージアナライザはイメージ コンテンツを分析するアルゴリズムを使用します。イメージが別のファイルに埋め込まれている場合、Stellent スキャン エンジンによりファイルが抽出されます。Stellent スキャン エンジンは、Word、Excel、PowerPoint 文書などの各種のファイル タイプからイメージを抽出できます。イメージ分析の結果は、メッセージ全体で計算されます。メッセージにイメージがない場合、メッセージのスコアは 0 となります。これは分析結果が「Clean」であることを表します。そのため、イメージがないメッセージに対する分析結果は「Clean」となります。



(注) PDF ファイルのイメージは抽出されません。

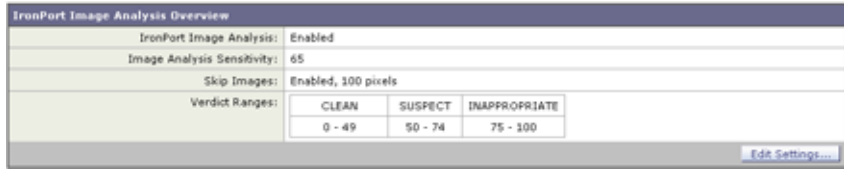
GUI からイメージ分析をイネーブル化するには、次の手順を実行します。

ステップ 1 [Security Services] > [IronPort Image Analysis] の順に進みます。

ステップ 2 [Enable] をクリックします。

成功したことを示すメッセージが表示され、分析結果設定が表示されます。

図 6-3 IronPort イメージ分析の概要
IronPort Image Analysis



イメージ分析フィルタルールを使用すると、次の各分析結果に基づいてアクションを決定できます。

- [Clean] : イメージに適切でないコンテンツはありません。イメージ分析の結果はメッセージ全体で計算されるため、イメージがないメッセージをスキャンすると分析結果は [Clean] となります。
- [Suspect] : イメージに適切でないコンテンツがある可能性があります。
- [Inappropriate] : イメージに適切でないコンテンツがあります。

これらの計算結果には、イメージアナライザのアルゴリズムにより、適切でないコンテンツがある可能性を示す数値が割り当てられます。

次の値が推奨されます。

- [Clean] : 0 ~ 49
- [Suspect] : 50 ~ 74
- [Inappropriate] : 75 ~ 100

精度を設定することによりイメージスキャンを微調整できます。これにより、誤判定を減らすことができます。たとえば、誤判定が発生している場合は、精度を低くします。逆に、イメージスキャンで適切でないコンテンツが検出されていない場合は、精度を高く設定します。精度設定は 0（一切検出しない）と 100（精度が最高である）の間の値です。デフォルトの精度の 65 に設定することを推奨します。

スキャン値の設定

スキャン値を設定するには、次の手順を実行します。

ステップ 1 [Security Services] > [IronPort Image Analysis] の順に進みます。

ステップ 2 [Edit Settings] をクリックします。

[Edit IronPort Image Analysis Settings] ページが表示されます。

図 6-4 Edit IronPort Image Analysis Settings

Image Analysis Settings

Enable IronPort Image Analysis

Image Analysis Sensitivity:
 Enter a value between 0 (least sensitive) and 100 (most sensitive). The recommended value is 65.

Skip Images: Skip image analysis for images smaller than pixels

Verdict Ranges

CLEAN 0 to 49 SUSPECT 50 to 74 INAPPROPRIATE 75 to 100

0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100

Clean	Suspect	Inappropriate
The image is given a verdict of "Clean." The recommended range is 0-49.	The image is given a verdict of "Suspect". Use this verdict to create a rule in content filters to manage these messages. The recommended range is 50-74.	The image is given a verdict of "Inappropriate". Use this verdict to create a rule in content filters to manage these messages. The recommended range is 75-100.

Cancel Submit

- ステップ 3** イメージ分析の精度を設定します。デフォルトの精度の 65 に設定することを推奨します。
- ステップ 4** [Clean]、[Suspect]、および [Inappropriate] の評価を設定します。
 値の範囲を設定する場合、値が重ならないようにしてください。また、すべて整数を使用してください。
- ステップ 5** 任意で、最小サイズの要件を満たさないイメージのスキャンをバイパスするように、AsyncOS を設定します (推奨)。デフォルトで、この設定は 100 ピクセルに設定されています。100 ピクセル未満のイメージをスキャンすると、誤検知が発生する可能性があります。

imageanalysisconfig コマンドを使用して、CLI からイメージ分析設定をイネーブルにすることもできます。

```
test.com> imageanalysisconfig
```

```
IronPort Image Analysis: Enabled
```

```
Image Analysis Sensitivity: 65
```

```
Verdict Ranges: Clean (0-49), Suspect (50-74), Inappropriate (75+)
```

```
Skip small images with size less than 100 pixels (width or height)
```

Choose the operation you want to perform:

- SETUP - Configure IronPort Image Analysis.

[>] setup

IronPort Image Analysis: Enabled

Would you like to use IronPort Image Analysis? [Y]>

Define the image analysis sensitivity. Enter a value between 0 (least sensitive) and 100 (most sensitive). As sensitivity increases, so does the false positive rate. The default setting of 65 is recommended.

[65]>

Define the range for a CLEAN verdict. Enter the upper bound of the CLEAN range by entering a value between 0 and 98. The default setting of 49 is recommended.

[49]>

Define the range for a SUSPECT verdict. Enter the upper bound of the SUSPECT range by entering a value between 50 and 99. The default setting of 74 is recommended.

[74]>

Would you like to skip scanning of images smaller than a specific size? [Y]>

```
Please enter minimum image size to scan in pixels, representing either
height or width of a given image.
```

```
[100]>
```

評価結果の表示

特定のメッセージの評価スコアを確認するには、メールログを参照します。メールログにはイメージ名またはファイル名、特定のメッセージの添付ファイルのスコアが表示されます。また、ログにはファイル内のイメージがスキャン可能かどうかについての情報も表示されます。このログには、各イメージではなく、各メッセージの添付ファイルの結果に関する情報が表示されます。たとえば、メッセージに JPEG イメージを含む zip ファイルが添付されていた場合、ログのエントリには JPEG の名前ではなく、zip ファイルの名前が表示されます。また、zip ファイルに複数のイメージが含まれている場合、ログエントリにはすべてのイメージの最大スコアが表示されます。「unscannable」の通知は、いずれかのイメージがスキャンできないことを意味します。

ログには、スコアがどのように特定の評価 ([clean]、[suspect]、または [inappropriate]) に反映されるかに関する情報はありません。ただし、メールログを使用して特定のメッセージの配信を追跡できるため、メッセージに対して実行されたアクションによって、メールに不適切なイメージまたは疑わしいイメージが含まれていたかがわかります。

たとえば、次のメールログでは、イメージ分析スキャンの結果、メッセージフィルタルールによってドロップされた添付ファイルを示しています。

```
Thu Apr  3 08:17:56 2009 Debug: MID 154 IronPort Image Analysis: image
'Unscannable.jpg' is unscannable.
```

```
Thu Apr  3 08:17:56 2009 Info: MID 154 IronPort Image Analysis:
attachment 'Unscannable.jpg' score 0 unscannable
```

```
Thu Apr  3 08:17:56 2009 Info: MID 6 rewritten to MID 7 by
drop-attachments-where-image-verdict filter 'f-001'
```

Thu Apr 3 08:17:56 2009 Info: Message finished MID 6 done

イメージ分析メッセージフィルタの使用

イメージ分析をイネーブルにしたら、メッセージフィルタを作成して、さまざまなメッセージの評価に対してさまざまなアクションを実行する必要があります。たとえば、問題ないと評価されたメッセージを配信し、不適切なコンテンツを含むと判断されたメッセージを検疫する必要があるとします。



(注)

IronPort では、不適切または疑わしいと評価されたメッセージをドロップまたはバウンスしないことを推奨します。代わりに、後で確認してトレンド分析について把握するために、違反したメッセージのコピーを検疫します。

次のフィルタは、コンテンツが不適切または疑わしい場合にタグを付けられるメッセージを示しています。

```
image_analysis: if image-verdict == "inappropriate" {  
  
strip-header("Subject");  
  
insert-header("Subject", "[inappropriate image] $Subject");  
  
}  
  
else {  
  
if image-verdict == "suspect" {  
  
strip-header("Subject");  
  
insert-header("Subject", "[suspect image] $Subject");  
  
}  
  
}
```


イメージ分析コンテンツ フィルタの使用

イメージ分析をイネーブルにすると、コンテンツ フィルタを作成してイメージ分析の評価に基づいて添付ファイルを削除するか、さまざまなメッセージの評価に対してさまざまなアクションを実行するようにフィルタを設定できます。たとえば、不適切なコンテンツを含むメッセージを検疫することに決定したとします。

イメージ分析の評価に基づいて添付ファイルを削除するには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [Mail Policies] > [Incoming Content Filters] をクリックします。
 - ステップ 2** [Add Filter] をクリックします。
 - ステップ 3** コンテンツ フィルタの名前を入力します。
 - ステップ 4** [Actions] で、[Add Action] をクリックします。
 - ステップ 5** [Strip Attachment by File Info] で、[Image Analysis Verdict is] をクリックします。
 - ステップ 6** 次のイメージ分析の評価から選択します。
 - Suspect
 - Inappropriate
 - Suspect or Inappropriate
 - Unscannable
 - Clean

イメージ分析の評価に基づくアクションを設定するには、次の手順を実行します。

-
- ステップ 1** [Mail Policies] > [Incoming Content Filters] をクリックします。
 - ステップ 2** [Add Filter] をクリックします。
 - ステップ 3** コンテンツ フィルタの名前を入力します。
 - ステップ 4** [Conditions] で、[Add Condition] をクリックします。
 - ステップ 5** [Attachment File Info] で、[Image Analysis Verdict] をクリックします。
 - ステップ 6** 次のいずれかの評価を選択します。
 - Suspect

- Inappropriate
- Suspect or Inappropriate
- Unscannable
- Clean

ステップ 7 [Add Action] をクリックします。

ステップ 8 イメージ分析の評価に基づいてメッセージに対して実行するアクションを選択します。

ステップ 9 変更を送信して確定します。

通知

GUI の [Text Resources] ページまたは `textconfig` CLI コマンドを使用して、カスタム通知テンプレートをテキストリソースとして設定することもできます。これも、添付ファイルのフィルタルールと組み合わせて使用すると便利なツールです。通知テンプレートは非 ASCII 文字をサポートしています（テンプレートを作成するとき、エンコードを選択するように要求されます）。

次の例では、最初に `textconfig` コマンドを使用して、`strip.mp3` という名前の通知テンプレートを作成します。これは、通知メッセージの本文に挿入されます。次に、添付ファイルのフィルタルールを作成し、`.mp3` ファイルがメッセージから削除された場合、予定していた受信者宛てに `.mp3` ファイルが削除されたことを通知する電子メールが送信されるように設定できます。

```
drop-mp3s:

if (attachment-type == '*/mp3')

{ drop-attachments-by-filetype('Media');

    notify ('$EnvelopeRecipients', 'Your mp3 has been removed',
'$EnvelopeFrom', 'strip.mp3');

}
```

詳細については、「[通知およびコピー通知アクション](#)」(P.6-80) を参照してください。

添付ファイルのスキャン メッセージ フィルタの例

次に、添付ファイルに対して実行されるアクションの例を示します。

ヘッダーの挿入

この例では、添付ファイルに指定したコンテンツが含まれている場合に、AsyncOS がヘッダーを挿入します。

次の例では、あるキーワードが含まれるかどうか、メッセージのすべての添付ファイルをスキャンします。すべての添付ファイルにキーワードが存在する場合、カスタムの X-Header が挿入されます。

```
attach_disclaim:

    if (every-attachment-contains('[d]isclaimer') ) {

        insert-header("X-Example-Approval", "AttachOK");

    }
```

次の例では、特定のバイナリ データのパターンがあるかどうか、添付ファイルをスキャンします。フィルタは attachment-binary-contains フィルタ ルールを使用して、PDF ドキュメントが暗号化されていることを示すパターンを検索します。バイナリ データ内にそのパターンが存在する場合、カスタム ヘッダーが挿入されます。

```
match_PDF_Encrypt:

if (attachment-filetype == 'pdf' AND

attachment-binary-contains('/Encrypt')){

strip-header ('Subject');

insert-header ('Subject', '[Encrypted] $Subject');

}
```

ファイルタイプによる添付ファイルのドロップ

次の例では、添付ファイルの「executable」グループ（.exe、.dll、および .scr）がメッセージから削除され、削除されたファイルの名前を列挙するテキストがメッセージに追加されます（\$dropped_filename アクション変数を使用）。drop-attachments-by-filetype アクションは添付ファイルを確認し、3文字のファイル拡張子ではなく、ファイルのフィンガープリントに基づいて添付ファイルを削除します。1つのファイルタイプ（「mpeg」）を指定したり、あるファイルタイプのすべてのメンバ（「Media」）を参照したりできます。

```
strip_all_exes: if (true) {  
  
    drop-attachments-by-filetype ('Executable', "Removed  
attachment: $dropped_filename");  
  
}
```

次の例では、エンベロープ送信者がドメイン example.com 内に存在しないメッセージから、同じ「executable」グループの添付ファイル（.exe、.dll、および .scr）が、削除されます。

```
strip_inbound_exes: if (mail-from != "@example¥¥.com$") {  
  
    drop-attachments-by-filetype ('Executable');  
  
}
```

次の例では、エンベロープ送信者がドメイン example.com 内に存在しないメッセージから、ファイルタイプの特定のメンバ（「wmf」）および同じ「executable」グループの添付ファイル（.exe、.dll、および .scr）が削除されます。

```
strip_inbound_exes_and_wmf: if (mail-from != "@example¥¥.com$") {  
  
    drop-attachments-by-filetype ('Executable');  
  
    drop-attachments-by-filetype ('x-wmf');  
  
}
```

次の例では、添付ファイルの「executable」事前定義グループが、より多くの添付ファイルの名前を含むように拡張されています。（このアクションでは、添付ファイルのファイルタイプは確認されません）。

```
strip_all_dangerous: if (true) {

    drop-attachments-by-filetype ('Executable');

    drop-attachments-by-name ('(?i)¥¥.(cmd|pif|bat)$');

}
```

drop-attachments-by-name アクションでは、非 ASCII 文字をサポートしています。



(注)

drop-attachments-by-name アクションは、MIME ヘッダーでキャプチャされたファイル名に対して正規表現照合を実行します。MIME ヘッダーからキャプチャされたファイル名は、最後にスペースが存在する場合があります。

ディクショナリの一致による添付ファイルのドロップ

この drop-attachments-where-dictionary-match アクションでは、ディクショナリの用語との一致に基づいて、添付ファイルを削除します。添付ファイルであると判断される MIME 部分の用語が辞書の用語と一致する場合（かつ、ユーザ定義のしきい値に達している場合）、添付ファイルが電子メールから削除されます。次の例では、「secret_words」ディクショナリ内の単語が添付ファイル内で検出されると、添付ファイルが削除されます。一致のしきい値は 1 に設定されている点に注意してください。

```
Data_Loss_Prevention: if (true) {

    drop-attachments-where-dictionary-match("secret_words", 1);

}
```

保護された添付ファイルの検疫

attachment-protected フィルタでは、メッセージ内の添付ファイルがパスワード保護されているかをテストします。受信メールに対してこのフィルタを使用して、添付ファイルがスキャン可能かどうかを確認できます。この定義に従い、1 つの暗号化されたメンバと複数の暗号化されていないメンバーを含む zip ファイルは、保護されていると見なされます。同様に、オープンパスワードが設定されていない PDF ファイルは、コピーや印刷がパスワード保護されていたとしても、保護されているとは見なされません。次の例では、保護された添付ファイルが検疫エリア「Policy」に送信されます。

```
quarantine_protected:

if attachment-protected

{

quarantine("Policy");

}
```

保護されていない添付ファイルの検出

attachment-unprotected フィルタは、メッセージ内の添付ファイルがパスワード保護されていないかをテストします。このメッセージフィルタは、attachment-protected フィルタと補完関係にあります。このフィルタを送信メールに使用して、保護されていないメールを検出することができます。次の例では、AsyncOS が送信リスナーで保護されていない添付ファイルを検出し、メッセージを検疫しています。

```
quarantine_unprotected:

if attachment-unprotected

{

quarantine("Policy");

}
```

CLI を使用したメッセージ フィルタの管理

CLI を使用して、メッセージ フィルタの追加、削除、アクティブ化/非アクティブ化、インポート/エクスポート、ログ オプションの設定が可能です。次の表で、コマンドとサブコマンドについてまとめて説明します。

表 6-9 **メッセージ フィルタ サブコマンド**

構文	説明
<code>filters</code>	メイン コマンド。このコマンドは対話形式で、詳細情報を入力するよう要求されます (たとえば、 <code>new</code> 、 <code>delete</code> 、 <code>import</code> など)。
<code>new</code>	新しいフィルタを作成します。場所を指定しない場合、現在のシーケンスにフィルタが追加されます。場所を指定した場合、シーケンスの特定の場所にフィルタが挿入されます。詳細については、「 新しいメッセージ フィルタの作成 」(P.6-116) を参照してください。
<code>delete</code>	名前またはシーケンス番号を指定して、フィルタを削除します。詳細については、「 メッセージ フィルタの削除 」(P.6-117) を参照してください。
<code>move</code>	既存のフィルタを並べ替えます。詳細については、「 メッセージ フィルタの移動 」(P.6-117) を参照してください。
<code>set</code>	フィルタをアクティブまたは非アクティブ状態に設定します。詳細については、「 メッセージ フィルタのアクティベーションとディアクティベーション 」(P.6-118) を参照してください。
<code>import</code>	フィルタの現在のセットを、ファイル (アプライアンスの <code>/configuration</code> ディレクトリ) 内に保存されている新しいセットに置き換えます。詳細については、「 メッセージ フィルタのインポート 」(P.6-123) を参照してください。
<code>export</code>	フィルタの現在のセットを (アプライアンスの <code>/configuration</code> ディレクトリ内の) ファイルにエクスポートします。詳細については、「 メッセージ フィルタのエクスポート 」(P.6-123) を参照してください。
<code>list</code>	1 つ以上のフィルタに関する情報を一覧表示します。詳細については、「 メッセージ フィルタ リストの表示 」(P.6-124) を参照してください。

表 6-9 メッセージフィルタ サブコマンド (続き)

構文	説明
<code>detail</code>	特定のフィルタに関する詳細情報 (フィルタ ルール自体の本文など) を出力します。詳細については、「 メッセージフィルタの詳細の表示 」(P.6-125) を参照してください。
<code>logconfig</code>	フィルタの <code>logconfig</code> サブメニューを入力すると、 <code>archive()</code> フィルタ アクションからログ サブスクリプションを編集できます。詳細については、「 フィルタ ログ サブスクリプションの設定 」(P.6-125) を参照してください。



(注) フィルタを有効にするには、`commit` コマンドを発行する必要があります。

パラメータには、次の 3 つのタイプがあります。

表 6-10 フィルタ管理パラメータ

<code>seqnum</code>	フィルタのリスト内の位置に基づいてフィルタを表す整数です。たとえば、 <code>seqnum</code> が 2 の場合、リスト内の 2 番目のフィルタを表します。
<code>filename</code>	フィルタの表示名。
<code>range</code>	<code>range</code> は、複数のフィルタを表す場合に使用することがあり、「X-Y」の形式で表されます。X と Y は、範囲を指定するための最初と最後の <code>seqnums</code> です。たとえば、「2-4」は、2、3、4 番目の位置にあるフィルタを表します。X または Y のいずれかを省略すると、無制限のリストを表します。たとえば、「-4」は最初から 4 つのフィルタを表し、「2-」は、先頭以外のすべてのフィルタを表します。キーワード <code>all</code> を使用して、フィルタ リスト内のすべてのフィルタを表すこともできます。

新しいメッセージフィルタの作成

```
new [seqnum|filename|last]
```


新しいフィルタを挿入する位置を指定します。省略するか、キーワード `last` を指定すると、入力されたフィルタがフィルタ リストの最後に追加されます。シーケンス番号は連続させる必要があります。現在のリストの範囲を越える `seqnum` は入力できません。不明な `filename` を入力すると、有効な `filename`、`seqnum`、または `last` を入力するように求められます。

フィルタを入力したら、手動でフィルタ スクリプトを入力する必要があります。入力を終了したら、その行自体にピリオド (.) を入力してエントリを終了します。

次の条件ではエラーが発生します。

- シーケンス番号が現在のシーケンス番号の範囲を越えている。
- フィルタに付けた `filename` が一意ではない。
- フィルタに付けた `filename` が予約語である。
- フィルタに構文エラーが発生している。
- インターフェイスなど、存在しないシステム リソースを参照するアクションを実行するフィルタ。

メッセージ フィルタの削除

```
delete [seqnum|filename|range]
```

指定したフィルタを削除します。

次の条件ではエラーが発生します。

- 指定した名前のフィルタが存在しない。
- 指定したシーケンス番号のフィルタが存在しない。

メッセージ フィルタの移動

```
move [seqnum|filename|range seqnum|last]
```

最初のパラメータで指定したフィルタを、2 番目のパラメータで指定した場所に移動します。2 番目のパラメータがキーワード `last` である場合、フィルタはフィルタ リストの最後に移動されます。複数のフィルタを移動する場合、それらのフィルタの相対的な順序は変わりません。

次の条件ではエラーが発生します。

- 指定した名前のフィルタが存在しない。
- 指定したシーケンス番号のフィルタが存在しない。
- シーケンス番号が現在のシーケンス番号の範囲を越えている。
- 移動してもシーケンスが変更されない。

メッセージフィルタのアクティベーションとディアクティベーション

指定されるメッセージフィルタは、*active* または *inactive* のいずれかであり、さらに *valid* または *invalid* のいずれかです。メッセージフィルタは、*active* と *valid* の両方の状態である場合にのみ処理に使用されます。CLI を通じて、既存のフィルタを *active* から *inactive* に変更します（その後、再び戻します）。存在しない（または削除された）リスナーまたはインターフェイスを参照している場合、そのフィルタは *invalid* です。



(注)

フィルタが *inactive* であるかどうかは、構文から判断できます。AsyncOS では、*inactive* であるフィルタのフィルタ名に続くコロンが、感嘆符に変更されます。フィルタを入力またはインポートするときにこの構文を使用すると、AsyncOS はフィルタを *inactive* としてマークします。

たとえば、次のように無害な「filterstatus」という名前のフィルタを入力します。filter -> set サブコマンドを使用して、このフィルタを *inactive* にします。フィルタの詳細が表示され、コロンが感嘆符に変わっている点に注目してください（以下の例で、太字で示されています）。

```
mail3.example.com> filters
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

```
- NEW - Create a new filter.
```

```
- IMPORT - Import a filter script from a file.
```

```
[ ]> new
```

Enter filter script. Enter '.' on its own line to end.

```
filterstatus: if true{skip_filters();}
```

.

1 filters added.

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new filter.
- DELETE - Remove a filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.
- EXPORT - Export filters to a file
- MOVE - Move a filter to a different position.
- SET - Set a filter attribute.
- LIST - List the filters.
- DETAIL - Get detailed information on the filters.
- LOGCONFIG - Configure log subscriptions used by filters.
- ROLLOVERNOW - Roll over a filter log file.

```
[> list
```

```
Num Active Valid Name
```

```
1 Y Y filterstatus
```

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new filter.
- DELETE - Remove a filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.
- EXPORT - Export filters to a file
- MOVE - Move a filter to a different position.
- SET - Set a filter attribute.
- LIST - List the filters.
- DETAIL - Get detailed information on the filters.
- LOGCONFIG - Configure log subscriptions used by filters.
- ROLLOVERNOW - Roll over a filter log file.

```
[>] set
```

Enter the filter name, number, or range:

```
[all]> all
```

Enter the attribute to set:

```
[active]> inactive
```

1 filters updated.

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new filter.
- DELETE - Remove a filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.
- EXPORT - Export filters to a file
- MOVE - Move a filter to a different position.
- SET - Set a filter attribute.
- LIST - List the filters.
- DETAIL - Get detailed information on the filters.
- LOGCONFIG - Configure log subscriptions used by filters.
- ROLLOVERNOW - Roll over a filter log file.

```
[> detail
```

Enter the filter name, number, or range:

```
[> all
```

```
Num Active Valid Name
  1   N       Y  filterstatus
filterstatus! if (true) {
  skip_filters();
}
```

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new filter.
- DELETE - Remove a filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.
- EXPORT - Export filters to a file
- MOVE - Move a filter to a different position.
- SET - Set a filter attribute.
- LIST - List the filters.
- DETAIL - Get detailed information on the filters.
- LOGCONFIG - Configure log subscriptions used by filters.
- ROLLOVERNOW - Roll over a filter log file.

[]>

メッセージフィルタのアクティベーションまたはディアクティベーション

```
set [seqnum|filename|range] active|inactive
```

指定したフィルタを指定した状態に設定します。状態のルールは次のとおりです。

- **active** : 選択したフィルタの状態を **active** に設定します。
- **inactive** : 選択したフィルタの状態を **inactive** に設定します。

次の条件ではエラーが発生します。

- 指定した *filename* のフィルタが存在しない。
- 指定したシーケンス番号のフィルタが存在しない。



(注)

`inactive` であるフィルタは、構文からも判断できます。ラベル（フィルタ名）の後のコロンが、感嘆符 (!) に変更されます。CLI から手動で入力された、またはインポートされたフィルタにこの構文が含まれる場合、自動的に `inactive` とマークされます。たとえば、`mailfrompm!` が、`mailfrompm:` の代わりに表示されます。

メッセージフィルタのインポート

```
import filename
```

処理されるフィルタを含むファイルの名前です。このファイルは、アプライアンスの FTP/SCP ルート ディレクトリの `configuration` ディレクトリ内に存在する必要があります (`interfaceconfig` コマンドを使用してインターフェイスの FTP/SCP アクセスをイネーブルにしている場合)。ファイルは取り込まれて解析され、エラーが存在すれば報告されます。現在のフィルタセット内に存在するすべてのフィルタは、インポートされたフィルタに置き換わります。詳細については、付録 B 「アプライアンスへのアクセス」を参照してください。現在のフィルタリストをエクスポートし（「メッセージフィルタのエクスポート」(P.6-123)を参照）、そのファイルを編集してインポートすることを推奨します。

メッセージフィルタをインポートする場合、使用するエンコードを選択するよう求められます。

次の条件ではエラーが発生します。

- ファイルが存在しない。
- フィルタ名が一意ではない。
- フィルタに付けた `filename` が予約語である。
- フィルタに構文エラーが発生している。
- インターフェイスなど、存在しないシステムリソースを参照するアクションを実行するフィルタ。

メッセージフィルタのエクスポート

```
export filename [seqnum|filename|range]
```

既存のフィルタセットを、アプライアンスの FTP/SCP ルートディレクトリにある **configuration** ディレクトリ内のファイルに所定の形式で出力します。詳細については、[付録 B「アプライアンスへのアクセス」](#)を参照してください。

メッセージフィルタをエクスポートする場合、使用するエンコードを選択するよう求められます。

次の条件ではエラーが発生します。

- 指定した名前のフィルタが存在しない。
- 指定したシーケンス番号のフィルタが存在しない。

非 ASCII 文字セットの表示

このシステムでは、CLI で非 ASCII 文字が UTF-8 で表示されます。お使いのターミナル/ディスプレイが UTF-8 をサポートしていない場合、フィルタが正常に表示されません。

フィルタ内の非 ASCII 文字を管理する最も良い方法は、フィルタをテキストファイルで編集してから、そのテキストファイルをアプライアンスにインポートすることです（[「メッセージフィルタのインポート」\(P.6-123\)](#)を参照）。

メッセージフィルタ リストの表示

```
list [seqnum|filename|range]
```

指定したフィルタの本文を出力せずに、概要を表形式で表示します。表示される情報は次のとおりです。

- フィルタ名
- フィルタ シーケンス番号
- フィルタの active/inactive 状態
- フィルタの valid/invalid 状態

次の条件ではエラーが発生します。

- 範囲の指定が不正です。

メッセージ フィルタの詳細の表示

```
detail [seqnum|filtname|range]
```

フィルタの本文や追加の状態情報など、指定したフィルタの情報をすべて表示します。

フィルタ ログ サブスクリプションの設定

```
logconfig
```

サブメニューを入力し、`archive()` アクションによって生成されたメールボックス ファイルのフィルタ ログ オプションを設定できます。これらのオプションは、通常の `logconfig` コマンドで 사용되는オプションとよく似ていますが、ログを参照するフィルタを追加または削除することによってのみ、ログを作成または削除できます。

各フィルタ ログ サブスクリプションには次のデフォルト値が設定されています。この値は、`logconfig` サブコマンドを使用して変更できます。

- 取得方法 : FTP Poll
- ファイル サイズ : 10MB
- ファイルの最大数 : 10

詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide*』の「Logging」を参照してください。

```
mail3.example.com> filters
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new filter.
- DELETE - Remove a filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.
- EXPORT - Export filters to a file

- MOVE - Move a filter to a different position.
- SET - Set a filter attribute.
- LIST - List the filters.
- DETAIL - Get detailed information on the filters.
- LOGCONFIG - Configure log subscriptions used by filters.
- ROLLOVERNOW - Roll over a filter log file.

```
[> logconfig
```

Currently configured logs:

1. "joesmith" Type: "Filter Logs" Retrieval: FTP Poll

Choose the operation you want to perform:

- EDIT - Modify a log setting.

```
[> edit
```

Enter the number of the log you wish to edit.

```
[> 1
```

Choose the method to retrieve the logs.

1. FTP Poll
2. FTP Push
3. SCP Push

```
[1]> 1
```

```
Please enter the filename for the log:
```

```
[joesmith.mbox]>
```

```
Please enter the maximum file size:
```

```
[10485760]>
```

```
Please enter the maximum number of files:
```

```
[10]>
```

```
Currently configured logs:
```

```
1. "joesmith" Type: "Filter Logs" Retrieval: FTP Poll
```

```
Enter "EDIT" to modify or press Enter to go back.
```

```
[ ]>
```

スキャンパラメータの変更

scanconfig コマンドは、スキャンでスキップするタイプなど、本文と添付ファイルのスキャン動作を制御します。



(注) zip などの圧縮ファイルに含まれる MIME タイプをスキャンする場合、スキャンリストに「compressed」または「zip」または「application/zip」リストを含める必要があります。

scanconfig の使用

次の例では、scanconfig コマンドで次のパラメータを設定します。

- video/*、audio/*、image/* の MIME タイプは、コンテンツをスキャンされません。
- ネストされた（再帰的な）アーカイブ添付ファイルは、最大 10 レベルまでスキャンされます。（デフォルトは 5 レベル）。
- スキャンされる添付ファイルの最大サイズは、25 MB です。これより大きいファイルはすべてスキップされます（デフォルトは 5 MB）。
- 添付ファイルのメタデータ スキャンをイネーブルにします。スキャンエンジンが添付ファイルをスキャンするとき、メタデータを正規表現でスキャンします。これはデフォルトの設定です。
- 添付ファイルのスキャンのタイムアウトは、60 秒に設定されます。デフォルトは 30 秒です。
- スキャンされなかった添付ファイルは、検索パターンに一致しないと見なされます。（デフォルトの動作）。
- メッセージの application/(x-)pkcs7-mime（符号化署名）部分は、multipart/signed（クリア署名）に変換され、メッセージのコンテンツが処理されます。デフォルトでは、符号化署名されたメッセージは変換されません。



(注)

[assume the attachment matches the search pattern] を「Y」に設定すると、スキャンできないメッセージはメッセージフィルタルールによって **true** と評価されます。これにより、ディクショナリに一致しないメッセージの検疫など、予想外の動作が発生することがあります。このようなメッセージは、コンテンツが正しくスキャンできないという理由で検疫されていました。

```
mail3.example.com> scanconfig
```

```
There are currently 5 attachment type mappings configured to be SKIPPED.
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Add a new entry.
- DELETE - Remove an entry.
- SETUP - Configure scanning behavior.
- IMPORT - Load mappings from a file.
- EXPORT - Save mappings to a file.
- PRINT - Display the list.
- CLEAR - Remove all entries.
- SMIME - Configure S/MIME unpacking.

```
[ ]> setup
```

1. Scan only attachments with MIME types or fingerprints in the list.
2. Skip attachments with MIME types or fingerprints in the list.

Choose one:

[2]> 2

Enter the maximum depth of attachment recursion to scan:

[5]> 10

Enter the maximum size of attachment to scan:

[5242880]> 10m

Do you want to scan attachment metadata? [Y]> Y

Enter the attachment scanning timeout (in seconds):

[30]> 60

If a message has attachments that were not scanned for any reason (e.g. because of size, depth limits, or scanning timeout), assume the attachment matches the search pattern? [N]>

If a message could not be deconstructed into its component parts in order to remove specified attachments, the system should:

1. Deliver
2. Bounce
3. Drop

```
[1]> 1
```

```
Configure encoding to use when none is specified for plain body text  
or anything with MIME type plain/text or plain/html.
```

1. US-ASCII
2. Unicode (UTF-8)
3. Unicode (UTF-16)
4. Western European/Latin-1 (ISO 8859-1)
5. Western European/Latin-1 (Windows CP1252)
6. Traditional Chinese (Big 5)
7. Simplified Chinese (GB 2312)
8. Simplified Chinese (HZ GB 2312)
9. Korean (ISO 2022-KR)
10. Korean (KS-C-5601/EUC-KR)
11. Japanese (Shift-JIS (X0123))
12. Japanese (ISO-2022-JP)
13. Japanese (EUC)

```
[1]>
```

```
Scan behavior changed.
```

```
There are currently 5 attachment type mappings configured to be  
SKIPPED.
```

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Add a new entry.
- DELETE - Remove an entry.
- SETUP - Configure scanning behavior.
- IMPORT - Load mappings from a file.
- EXPORT - Save mappings to a file.
- PRINT - Display the list.
- CLEAR - Remove all entries.
- SMIME - Configure S/MIME unpacking.

[]> **SMIME**

Do you want to convert opaque-signed messages to clear-signed? This will provide the clear text content for various blades to process.
[N]> Y

There are currently 5 attachment type mappings configured to be SKIPPED.

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Add a new entry.
- DELETE - Remove an entry.

- SETUP - Configure scanning behavior.
- IMPORT - Load mappings from a file.
- EXPORT - Save mappings to a file.
- PRINT - Display the list.
- CLEAR - Remove all entries.
- SMIME - Configure S/MIME unpacking.

[]> **print**

1. Fingerprint Image
2. Fingerprint Media
3. MIME Type audio/*
4. MIME Type image/*
5. MIME Type video/*

There are currently 5 attachment type mappings configured to be SKIPPED.

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Add a new entry.
- DELETE - Remove an entry.
- SETUP - Configure scanning behavior.

```
- IMPORT - Load mappings from a file.  
- EXPORT - Save mappings to a file.  
- PRINT - Display the list.  
- CLEAR - Remove all entries.  
- SMIME - Configure S/MIME unpacking.  
  
[]>
```

メッセージのエンコードの変更

`localeconfig` コマンドを使用して、メッセージ処理中のメッセージのヘッダーおよびフッターのエンコードの変更に関する AsyncOS の動作を設定できます。

```
example.com> localeconfig
```

```
Behavior when modifying headers: Use encoding of message body
```

```
Behavior for untagged non-ASCII headers: Impose encoding of message body
```

```
Behavior for mismatched footer or heading encoding: Only try encoding  
from
```

```
message body
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

```
- SETUP - Configure multi-lingual settings.
```

```
[]> setup
```

```
If a header is modified, encode the new header in the same encoding as
```

the message body? (Some MUAs incorrectly handle headers encoded in a different encoding than the body. However, encoding a modified header in the same encoding as the message body may cause certain characters in the modified header to be lost.) [Y]>

If a non-ASCII header is not properly tagged with a character set and is being used or modified, impose the encoding of the body on the header during processing and final representation of the message?

(Many MUAs create non-RFC-compliant headers that are then handled in an undefined way. Some MUAs handle headers encoded in character sets that differ from that of the main body in an incorrect way. Imposing the encoding of the body on the header may encode the header more precisely. This will be used to interpret the content of headers for processing, it will not modify or rewrite the header unless that is done explicitly as part of the processing.) [Y]>

Footers or headings are added in-line with the message body whenever possible. However, if the footer or heading is encoded differently than the message body, and if imposing a single encoding will cause loss of characters, it will be added as an attachment. The system will always try to use the message body's encoding for the footer or heading. If that fails, and if the message body's encoding is US-ASCII, the system can try to edit the message body to use the footer's

```
or heading's encoding. Should the system try to impose the footer's
or headings's encoding on the message body? [N]> y
```

```
Behavior when modifying headers: Use encoding of message body
```

```
Behavior for untagged non-ASCII headers: Impose encoding of message
body. Behavior for mismatched footer or heading encoding: Try both
body and footer or heading encodings
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

```
- SETUP - Configure multi-lingual settings.
```

最初のプロンプトは、ヘッダーが（たとえばフィルタによって）変更されていた場合、メッセージヘッダーのエンコードをメッセージ本文に一致するように変更するかどうかを指定します。

2 番目のプロンプトは、ヘッダーの文字セットが適切にタグで指定されていない場合、ヘッダーに対してメッセージ本文のエンコードを強制する必要があるかどうかを制御します。

3 番目のプロンプトは、免責事項のスタンプ（および複数のエンコード）がメッセージ本文でどのように機能するかを制御するために使用されます。詳細については、『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide*』の「Text Resources」の章の「Disclaimer Stamping and Multiple Encodings」を参照してください。

サンプル メッセージ フィルタの作成

次の例では、`filter` コマンドを使用して新しいフィルタを 3 つ作成します。

- 最初のフィルタの名前は、**big_messages** です。これは `body-size` ルールを使用して、**10 MB** より大きいメッセージをドロップします。
- 2 番目のフィルタの名前は、**no_mp3s** です。これは `attachment-filename` ルールを使用して、`.mp3` ファイル拡張子が付いた添付ファイルを含むメッセージをドロップします。
- 3 番目のフィルタの名前は、**mailfrompm** です。これは `mail-from` ルールを使用して、`postmaster@example.com` からのメールをすべて調べ、`administrator@example.com` のブラインドカーボン コピーを作成します。

`filter -> list` サブコマンドを使用し、フィルタのリストを表示して、フィルタがアクティブで有効であることを確認します。次に、`move` サブコマンドを使用して、最初と最後のフィルタの位置を入れ替えます。最後に、変更を確定してフィルタを有効にします。

```
mail3.example.com> filters
```

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.

```
[> new
```

Enter filter script. Enter '.' on its own line to end.

```
big_messages:
```

```
    if (body-size >= 10M) {
        drop();
    }
```

```
.
```

```
1 filters added.
```

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new filter.
- DELETE - Remove a filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.
- EXPORT - Export filters to a file
- MOVE - Move a filter to a different position.
- SET - Set a filter attribute.
- LIST - List the filters.
- DETAIL - Get detailed information on the filters.
- LOGCONFIG - Configure log subscriptions used by filters.
- ROLLOVERNOW - Roll over a filter log file.

```
[> new
```

Enter filter script. Enter '.' on its own line to end.

```
no_mp3s:
```

```
    if (attachment-filename == '(?i)¥¥.mp3$') {  
        drop();  
    }
```

```
.
```

```
1 filters added.
```

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new filter.
- DELETE - Remove a filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.
- EXPORT - Export filters to a file
- MOVE - Move a filter to a different position.
- SET - Set a filter attribute.
- LIST - List the filters.
- DETAIL - Get detailed information on the filters.
- LOGCONFIG - Configure log subscriptions used by filters.
- ROLLOVERNOW - Roll over a filter log file.

```
[ ]> new
```

Enter filter script. Enter '.' on its own line to end.

```
mailfrompm:
```

```
    if (mail-from == "^postmaster$")  
        { bcc ("administrator@example.com");}
```

```
.
```

```
1 filters added.
```

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new filter.

- DELETE - Remove a filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.
- EXPORT - Export filters to a file
- MOVE - Move a filter to a different position.
- SET - Set a filter attribute.
- LIST - List the filters.
- DETAIL - Get detailed information on the filters.
- LOGCONFIG - Configure log subscriptions used by filters.
- ROLLOVERNOW - Roll over a filter log file.

```
[> list
```

```
Num Active Valid Name
     1   Y     Y  big_messages
     2   Y     Y  no_mp3s
     3   Y     Y  mailfrompm
```

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new filter.
- DELETE - Remove a filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.
- EXPORT - Export filters to a file
- MOVE - Move a filter to a different position.

- SET - Set a filter attribute.
- LIST - List the filters.
- DETAIL - Get detailed information on the filters.
- LOGCONFIG - Configure log subscriptions used by filters.
- ROLLOVERNOW - Roll over a filter log file.

```
[> move
```

Enter the filter name, number, or range to move:

```
[> 1
```

Enter the target filter position number or name:

```
[> last
```

1 filters moved.

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new filter.
- DELETE - Remove a filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.
- EXPORT - Export filters to a file
- MOVE - Move a filter to a different position.
- SET - Set a filter attribute.

- LIST - List the filters.
- DETAIL - Get detailed information on the filters.
- LOGCONFIG - Configure log subscriptions used by filters.
- ROLLOVERNOW - Roll over a filter log file.

```
[> list
```

```
Num Active Valid Name
  1   Y      Y   no_mp3s
  2   Y      Y   mailfrompm
  3   Y      Y   big_messages
```

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new filter.
- DELETE - Remove a filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.
- EXPORT - Export filters to a file
- MOVE - Move a filter to a different position.
- SET - Set a filter attribute.
- LIST - List the filters.
- DETAIL - Get detailed information on the filters.
- LOGCONFIG - Configure log subscriptions used by filters.
- ROLLOVERNOW - Roll over a filter log file.

```
[> move
```

Enter the filter name, number, or range to move:

```
[> 2
```

Enter the target filter position number or name:

```
[> 1
```

1 filters moved.

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new filter.
- DELETE - Remove a filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.
- EXPORT - Export filters to a file
- MOVE - Move a filter to a different position.
- SET - Set a filter attribute.
- LIST - List the filters.
- DETAIL - Get detailed information on the filters.
- LOGCONFIG - Configure log subscriptions used by filters.
- ROLLOVERNOW - Roll over a filter log file.

```
[> list
```

```
Num Active Valid Name
  1   Y      Y  mailfrompm
  2   Y      Y  no_mp3s
  3   Y      Y  big_messages
```

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new filter.
- DELETE - Remove a filter.
- IMPORT - Import a filter script from a file.
- EXPORT - Export filters to a file
- MOVE - Move a filter to a different position.
- SET - Set a filter attribute.
- LIST - List the filters.
- DETAIL - Get detailed information on the filters.
- LOGCONFIG - Configure log subscriptions used by filters.
- ROLLOVERNOW - Roll over a filter log file.

```
[ ]>
```

```
mail3.example.com> commit
```

Please enter some comments describing your changes:

```
[ ]> entered and enabled 3 filters: no_mp3s, mailfrompm, big_messages
```

メッセージフィルタの例

このセクションでは、実際のフィルタの例を示し、各フィルタについて簡単に説明します。

オープンリレー防止フィルタ

このフィルタは、次のように、%、余分な @、および ! 文字が電子メールアドレスに含まれるメッセージをバウンスします。

- user%otherdomain@validdomain
- user@otherdomain@validdomain:
- domain!user@validdomain

```
sourceRouted:
```

```
if (rcpt-to == "(%|@|!)(.*)@") {  
  
    bounce();  
  
}
```

IronPort アプライアンスは、従来の Sendmail/Qmail システムを活用するためによく使用される、このようなサードパーティ製のリレーハックの影響を受けません。これらの記号の多く（% など）は正当な電子メールアドレスの一部である可能性があるため、IronPort アプライアンスはこれらを有効なアドレスをとして受け入れ、設定済みの受信者リストと照合し、次の内部サーバに渡します。

IronPort アプライアンスは、これらのメッセージを外部にリレーしません。

このようなフィルタは、このタイプのメッセージをリレーできるように誤って設定されたオープンソース MTA を使用しているユーザを保護するために所定の場所に設定されます。



(注)

このようなタイプのアドレスを処理するように、リスナーを設定することもできます。詳細については、「SMTP アドレス解析オプション」(P.1-13) を参照してください。

ポリシー強制フィルタ

件名に基づき通知するフィルタ

このフィルタは、件名に特定の用語が含まれているかどうかに基づいて通知を送信します。

```
search_for_sensitive_content:

if (Subject == "(?i)plaintiff|lawsuit|judge" ) {

    notify ("admin@company.com");

}
```

競合他社に送信されたメールの BCC およびスキャン

このフィルタは、競合他社に送信されたメッセージをスキャンし、ブラインドコピーを作成します。ディクショナリと `header-dictionary-match()` ルールを使用して、柔軟性の高い競合他社のリストを指定できます（「辞書ルール」(P.6-49)を参照）。

```
competitorFilter:

if (rcpt-to == '@competitor1.com|@competitor2.com') {

    bcc-scan('legal@example.com');

}
```

特定のユーザをブロックするフィルタ

このフィルタを使用すると、特定のアドレスからの電子メールをブロックします。

```
block_harrasing_user:

if (mail-from == "ex-employee@hotmail¥¥.com") {
```

```

        notify ("admin@company.com");

        drop ();
    }

```

メッセージのアーカイブおよびドロップ フィルタ

ファイルタイプが一致するメッセージのみをログ記録およびドロップします。

```

drop_attachments:

if (mail-from != "user@example.com") AND (attachment-filename ==

'(?i)¥¥.(asp|bas|bat|cmd|cpl|exe|hta|ins|isp|js)$')

{

    archive("Drop_Attachments");

    insert-header("X-Filter", "Dropped by: $FilterName MID: $MID");
    drop-attachments-by-name("¥¥.(asp|bas|bat|cmd|cpl|exe|hta|ins|isp|js)$");

}

```

大きい「To:」ヘッダーのフィルタ

「To」ヘッダーが非常に大きいメッセージを検索します。

`archive()` 行を使用して適切なアクションを検証し、`drop()` をイネーブルまたはディセーブルにして安全性を高めます。

```

toTooBig:

if(header('To') == "^.{500,}") {

    archive('tooTooBigdropped');
}

```

```
drop();  
}
```

空白の「From:」フィルタ

空白の「From」ヘッダーを特定します。

このフィルタは、「from」アドレスが空白であるさまざまな形式に対応できません。

```
blank_mail_from_stop:  
  
if (recv-listener == "InboundMail" AND header("From") == "^$|<¥¥s*>") {  
  
    drop ();  
  
}
```

また、Envelope From が空欄のメッセージをドロップする場合は、次のフィルタを使用します。

```
blank_mail_from_stop:  
  
if (recv-listener == "InboundMail" AND (mail-from == "^$|<¥¥s*>" OR  
header ("From") == "^$|<¥¥s*>"))  
  
{  
  
    drop ();  
  
}
```


SRBS フィルタ

SenderBase 評価フィルタ:

```
note_bad_reps:

if (reputation < -2) {

    strip-header ('Subject');

    insert-header ('Subject', '***BadRep $Reputation *** $Subject');

}
```

SRBS フィルタの変更

特定のドメインの SenderBase Reputation Score (SBR; SenderBase 評価スコア) しきい値を変更します。

```
mod_sbrs:

if ( (rcpt-count == 1) AND (rcpt-to == "@domain¥¥.com$") AND (reputation
< -2) ) {

    drop ();

}
```

ファイル名の正規表現フィルタ

このフィルタは、メッセージ本文のサイズの範囲を指定し、正規表現に一致する添付ファイルを検索します (このパターンに一致するファイル名は、「readme.zip」、「readme.exe」、「attach.exe」、など)。

```
filename_filter:

if ((body-size >= 9k) AND (body-size <= 20k)) {

    if (body-contains ("(?i)(readme|attach|information)¥¥.(zip|exe)$")) {
```

```
        drop ();
    }
}
```

ヘッダー内の SenderBase 評価スコアの表示フィルタ

ヘッダーのログが記録されるので、メールログで表示できます（『*Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide*』の「Logging」を参照）。

```
Check_SBRS:

if (true) {

    insert-header('X-SBRS', '$Reputation');

}
```

ポリシーのヘッダーへの挿入フィルタ

どのメールフローポリシーが接続を受け入れたかを示します。

```
Policy_Tracker:

if (true) {

    insert-header ('X-HAT', 'Sender Group $Group, Policy $Policy
    applied.');
```

多数の受信者のバウンス フィルタ

3 つ以上の固有ドメインから 50 人を超える受信者が指定されている発信メールメッセージをすべてバウンスします。

```
bounce_high_rcpt_count:

if ( (rcpt-count > 49) AND (rcpt-to != "@example¥¥.com$") ) {

    bounce-profile ("too_many_rcpt_bounce"); bounce ();

}
```

ルーティングおよびドメイン スプーフィング

仮想ゲートウェイ フィルタの使用

仮想ゲートウェイを使用してトラフィックを区分します。システムに 2 つのインターフェイス「**public1**」と「**public2**」が存在するとします。デフォルトの配信インターフェイスは「**public1**」です。これにより、発信トラフィックはすべて 2 番目のインターフェイスを介すように強制されます。バウンスおよびその他の同様のタイプのメールはフィルタを通過しないため、そのようなメールは **public1** から配信されます。

```
virtual_gateways:

if (recv-listener == "OutboundMail") {

    alt-src-host ("public2");

}
```

配信とインジェクションのリスナーが同じフィルタ

配信と受信に同じリスナーを使用します。このフィルタでは、パブリックリスナー「listener1」で受信したメッセージを、インターフェイス「listener1」から送信できます（設定したパブリックインジェクタごとに、固有のフィルタをセットアップする必要があります）。

```
same_listener:

if (recv-inj == 'listener1') {

    alt-src-host('listener1');

}
```

単一インジェクタ フィルタ

単一のリスナーでフィルタを機能させます。たとえば、システム全体で実行するのではなく、メッセージフィルタを処理する専用のリスナーを指定します。

```
textfilter-new:

if (recv-inj == 'inbound' and body-contains("some spammy message")) {

    alt-rcpt-to ("spam.quarantine@spam.example.com");

}
```

スプーフィングドメインのドロップフィルタ（単一のリスナー）

スプーフィングドメイン（内部のアドレスからであると偽り、単一のリスナーで機能する）が使用されている電子メールをドロップします。以下の IP アドレスは、架空のドメイン（mycompany.com）を表しています。

```
DomainSpoofed:

if (mail-from == "mycompany¥¥.com$") {

    if ((remote-ip != "1.2.") AND (remote-ip != "3.4.")) {
```

```
        drop();
    }
}
```

スプーフィング ドメインのドロップ フィルタ（複数のリスナー）

前述と同じですが、複数のリスナーを使用して動作します。

```
domain_spoof:

if ((recv-listener == "Inbound") and (mail-from == "@mycompany¥¥.com")) {

archive('domain_spoof');

drop ();

}
```

別のスプーフィング ドメインのドロップ フィルタ

概要：ドメイン スプーフィング対策フィルタ：

```
reject_domain_spoof:

if (recv-listener == "MailListener") {

insert-header("X-Group", "$Group");

if ((mail-from == "@test¥¥.mycompany¥¥.com") AND (header("X-Group") !=
"RELAYLIST")) {

notify("me@here.com");

drop();

strip-header("X-Group");

}
```

ルーピングの検出フィルタ

このフィルタを使用して、メールループを発生させている要因を検出、停止、および判断します。このフィルタは、Exchange サーバまたはそれ以外の場所で発生している構成の問題を判断するために役立ちます。

```
External_Loop_Count:

if (header("X-ExtLoop1")) {

    if (header("X-ExtLoopCount2")) {

        if (header("X-ExtLoopCount3")) {

            if (header("X-ExtLoopCount4")) {

                if (header("X-ExtLoopCount5")) {

                    if (header("X-ExtLoopCount6")) {

                        if (header("X-ExtLoopCount7")) {

                            if (header("X-ExtLoopCount8")) {

                                if (header("X-ExtLoopCount9")) {

                                    notify ('joe@example.com');

                                    drop();

                                }

                                else {insert-header("X-ExtLoopCount9", "from
                                    $RemoteIP");}}

                                else {insert-header("X-ExtLoopCount8", "from $RemoteIP");}}

                                else {insert-header("X-ExtLoopCount7", "from $RemoteIP");}}

                                else {insert-header("X-ExtLoopCount6", "from $RemoteIP");}}

                                else {insert-header("X-ExtLoopCount5", "from $RemoteIP");}}

                            }

                        }

                    }

                }

            }

        }

    }

}
```

```
else {insert-header("X-ExtLoopCount4", "from $RemoteIP");}}  
  
else {insert-header("X-ExtLoopCount3", "from $RemoteIP");}}  
  
else {insert-header("X-ExtLoopCount2", "from $RemoteIP");}}  
  
else {insert-header("X-ExtLoop1", "1"); }
```



(注) デフォルトでは、AsyncOS は自動的にメールのループを検出し、100 回ループしたメッセージをドロップします。



CHAPTER 7

高度なネットワーク構成

この章では、NIC ペアリング、VLAN、Direct Server Return など、一般に etherconfig コマンドを使って利用できる高度なネットワーク構成について説明します。この章は、次の内容で構成されています。

- 「イーサネット インターフェイスのメディア設定」 (P.7-1)
- 「ネットワーク インターフェイス カードのペアリング/チーミング」 (P.7-5)
- 「仮想ローカル エリア ネットワーク (VLAN)」 (P.7-13)
- 「Direct Server Return」 (P.7-23)

イーサネット インターフェイスのメディア設定

イーサネット インターフェイスのメディア設定にアクセスするには、etherconfig コマンドを使用します。個々のイーサネット インターフェイスが現在の設定とともに一覧表示されます。インターフェイスを選択すると、可能なメディア設定が表示されます。例については、「メディア設定の編集例」 (P.7-3) を参照してください。

etherconfig を使ったイーサネット インターフェイスのメディア設定の編集

etherconfig コマンドを使って、イーサネット インターフェイスのデュプレックス設定 (全二重/半二重) や速度 (10/100/1000 Mbps) を設定できます。デフォルトでは、インターフェイスが自動的にメディア設定を選択しますが、場合によってはこの設定を上書きする必要があります。



(注) 『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Setup and Installation」の説明に従って GUI のシステム設定ウィザード（またはコマンドラインインターフェイスの `systemsetup` コマンド）を完了し、変更を確定した場合は、デフォルトのイーサネット インターフェイス設定がアプライアンスにすでに設定されています。



(注) 一部の IronPort C3x、C6x、X10x アプライアンスには、光ファイバ ネットワーク インターフェイス オプションが装備されています。装備されている場合は、各アプライアンス上の使用可能なインターフェイスのリストに 2 つの追加イーサネット インターフェイス (Data 3 と Data 4) が表示されます。これらのギガビット光ファイバ インターフェイスは、異種混在構成で銅線 (Data 1、Data 2、および Management) インターフェイスとペアにすることができます。「[ネットワーク インターフェイス カードのペアリング/チーミング](#)」(P.7-5) を参照してください。

メディア設定の編集例

```
mail3.example.com> etherconfig
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- MEDIA - View and edit ethernet media settings.
- PAIRING - View and configure NIC Pairing.
- VLAN - View and configure VLANs.
- LOOPBACK - View and configure Loopback.

```
[> media
```

```
Ethernet interfaces:
```

1. Data 1 (Autoselect: <100baseTX full-duplex>) 00:06:5b:f3:ba:6d
2. Data 2 (Autoselect: <100baseTX full-duplex>) 00:06:5b:f3:ba:6e
3. Management (Autoselect: <100baseTX full-duplex>) 00:02:b3:c7:a2:da

```
Choose the operation you want to perform:
```

- EDIT - Edit an ethernet interface.

```
[> edit
```

```
Enter the name or number of the ethernet interface you wish to edit.
```

```
[> 2
```

Please choose the Ethernet media options for the Data 2 interface.

1. Autoselect
2. 10baseT/UTP half-duplex
3. 10baseT/UTP full-duplex
4. 100baseTX half-duplex
5. 100baseTX full-duplex
6. 1000baseTX half-duplex
7. 1000baseTX full-duplex

[1]> 5

Ethernet interfaces:

1. Data 1 (Autoselect: <100baseTX full-duplex>) 00:06:5b:f3:ba:6d
2. Data 2 (100baseTX full-duplex: <100baseTX full-duplex>) 00:06:5b:f3:ba:6e
3. Management (Autoselect: <100baseTX full-duplex>) 00:02:b3:c7:a2:da

Choose the operation you want to perform:

- EDIT - Edit an ethernet interface.

[]>

Choose the operation you want to perform:

- MEDIA - View and edit ethernet media settings.

```
- PAIRING - View and configure NIC Pairing.  
  
- VLAN - View and configure VLANs.  
  
- LOOPBACK - View and configure Loopback.  
  
[]>
```

ネットワーク インターフェイス カードのペアリング/チーミング

NIC ペアリングで 2 つの物理データ ポートを組み合わせることにより、NIC からアップストリームのイーサネット ポートへのデータ パスに障害が発生した場合に、バックアップイーサネット インターフェイスを提供できます。ペアリングでは、基本的に各イーサネット インターフェイスをプライマリ インターフェイスおよびバックアップ インターフェイスとして設定します。プライマリ インターフェイスに障害が発生した場合（つまり、NIC とアップストリーム ノード間のキャリアが途切れた場合）は、バックアップ インターフェイスがアクティブになり、アラートが送信されます。IronPort のマニュアルでは、「NIC ペアリング」と「NIC チーミング」は同義語です。

十分な数のデータ ポートがあれば、複数の NIC ペアを作成できます。ペアを作成するときは、任意のデータ ポートを組み合わせることができます。次の例を参考にしてください。

- Data 1 と Data 2
- Data 3 と Data 4
- Data 2 と Data 3
- その他

C1x アプライアンスと M シリーズ アプライアンスでは、NIC ペアリングを使用できません。一部の C3x、C6x、X10x アプライアンスには、光ファイバネットワーク インターフェイス オプションが装備されています。装備されている場合は、各アプライアンス上の使用可能なインターフェイスのリストに 2 つの追加イーサネット インターフェイス (Data 3 と Data 4) が表示されます。これらのギガビット光ファイバインターフェイスは、異種混在構成で銅線 (Data 1、Data 2、および Management) インターフェイスとペアにすることができます。

NIC ペアリングと VLAN

VLAN（「仮想ローカルエリア ネットワーク (VLAN)」(P.7-13) を参照）は、プライマリ インターフェイスにのみ設定できます。

NIC ペアの名前

NIC ペアを作成するときは、そのペアを参照するときに使用する名前を指定する必要があります。バージョン 4.5 よりも前の AsyncOS で作成した NIC ペアには、アップグレード後、自動的に「Pair 1」というデフォルト名が指定されません。

NIC ペアリングに関して生成されたアラートは、特定の NIC ペアを名前で参照します。

NIC ペアリング/チーミングの設定とテスト

イーサネットのメディア設定を確認したら、etherconfig コマンドを使って NIC ペアリングを設定します。ペアを参照するときに使用する名前を入力するように求められます。

アクティブなインターフェイスを切り替えるには、failover サブコマンドを使用します。プライマリ NIC がオンライン状態に戻っても、自動的にプライマリ NIC には切り替わりません。その場合は、(failover コマンドを使用して) 明示的にプライマリ NIC に切り替えるか、バックアップ NIC に障害が発生するまで、バックアップ インターフェイスがアクティブな状態を維持します。「NIC ペアリングに対する failover サブコマンドの使用」(P.7-10) を参照してください。

NIC ペアを削除するには、delete サブコマンドを使用します。

NIC ペアリングを設定するときは、failover を除くすべての設定変更で確定が必要であることを注意してください。failover コマンドは、NIC ペアリングの設定を確定した後 15 秒ごとに行われるポーリングの次の間隔で強制的にフェールオーバーを実行します。

NIC ペアリングと既存のリスナー

リスナーが割り当てられたインターフェイスで NIC ペアリングをイネーブルにすると、バックアップ インターフェイスに割り当てられた全リスナーの削除、再割り当て、ディセーブル化のいずれかを選択するように求められます。

etherconfig コマンドを使った NIC ペアリングのイネーブル化

```
mail3.example.com> etherconfig
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- MEDIA - View and edit ethernet media settings.
- PAIRING - View and configure NIC Pairing.
- VLAN - View and configure VLANs.
- LOOPBACK - View and configure Loopback.

```
[> pairing
```

```
Paired interfaces:
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new pairing.

```
[> new
```

```
Please enter a name for this pair (Ex: "Pair 1"):
```

```
[> Pair 1
```

```
Warning: The backup (Data 2) for the NIC Pair is currently configured  
with one or more IP addresses. If you continue, the Data 2 interface  
will be deleted.
```

```
Do you want to continue? [N]> y
```


The interface you are deleting is currently used by listener "OutgoingMail".

What would you like to do?

1. Delete: Remove the listener and all its settings.
2. Change: Choose a new interface.
3. Ignore: Leave the listener configured for interface "Data 2" (the listener will be disabled until you add a new interface named "Data 2" or edit the listener's settings).

[1]>

Injector OutgoingMail deleted for mail3.example.com.

Interface Data 2 deleted.

Paired interfaces:

1. Pair 1:

Primary (Data 1) Active, Link is up

Backup (Data 2) Standby, Link is up

Choose the operation you want to perform:

- FAILOVER - Manually failover to other port.
- DELETE - Delete a pairing.
- STATUS - Refresh status.

[>

```
mail3.example.com> commit
```



(注) NIC ペアを作成したら、必ずテストしてください。詳細については、「[NIC ペアリングの確認](#)」(P.7-12)を参照してください。

NIC ペアリングに対する failover サブコマンドの使用

この例では、手動のフェールオーバーを実行し、Data 2 インターフェイスを強制的にプライマリ インターフェイスにします。CLI で変更を確認するには、`status` サブコマンドを実行する必要があります。

```
mail3.example.com> etherconfig
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- MEDIA - View and edit ethernet media settings.
- PAIRING - View and configure NIC Pairing.
- VLAN - View and configure VLANs.
- LOOPBACK - View and configure Loopback.

```
[ ]> pairing
```

```
Paired interfaces:
```

```
1. Pair 1:
```

```
    Primary (Data 1) Active, Link is up
```

```
    Backup (Data 2) Standby, Link is up
```

Choose the operation you want to perform:

- FAILOVER - Manually failover to other port.
- DELETE - Delete a pairing.
- STATUS - Refresh status.

```
[> failover
```

Paired interfaces:

1. Pair 1:

Primary (Data 1) Active, Link is up

Backup (Data 2) Standby, Link is up

Choose the operation you want to perform:

- FAILOVER - Manually failover to other port.
- DELETE - Delete a pairing.
- STATUS - Refresh status.

```
[> status
```

Paired interfaces:

1. Pair 1:

Primary (Data 1) Standby, Link is up

Backup (Data 2) Active, Link is up

```
Choose the operation you want to perform:
```

- FAILOVER - Manually failover to other port.
- DELETE - Delete a pairing.
- STATUS - Refresh status.

```
[ ]>
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- MEDIA - View and edit ethernet media settings.
- PAIRING - View and configure NIC Pairing.
- VLAN - View and configure VLANs.
- LOOPBACK - View and configure Loopback.

```
[ ]>
```

NIC ペアリングの確認

NIC ペアリングが正常に機能していることを確認する必要があります。そのためには、次の手順を実行します。

- ステップ 1** CLI の ping コマンドを使って、ペアになっているインターフェイスをテストします。NIC ペアと同じサブネット上に存在し、独立したソースによって ping が返ることが確認された IP アドレスに対して、次のように ping を実行します。

```
mail3.example.com> ping x.x.x.x
```

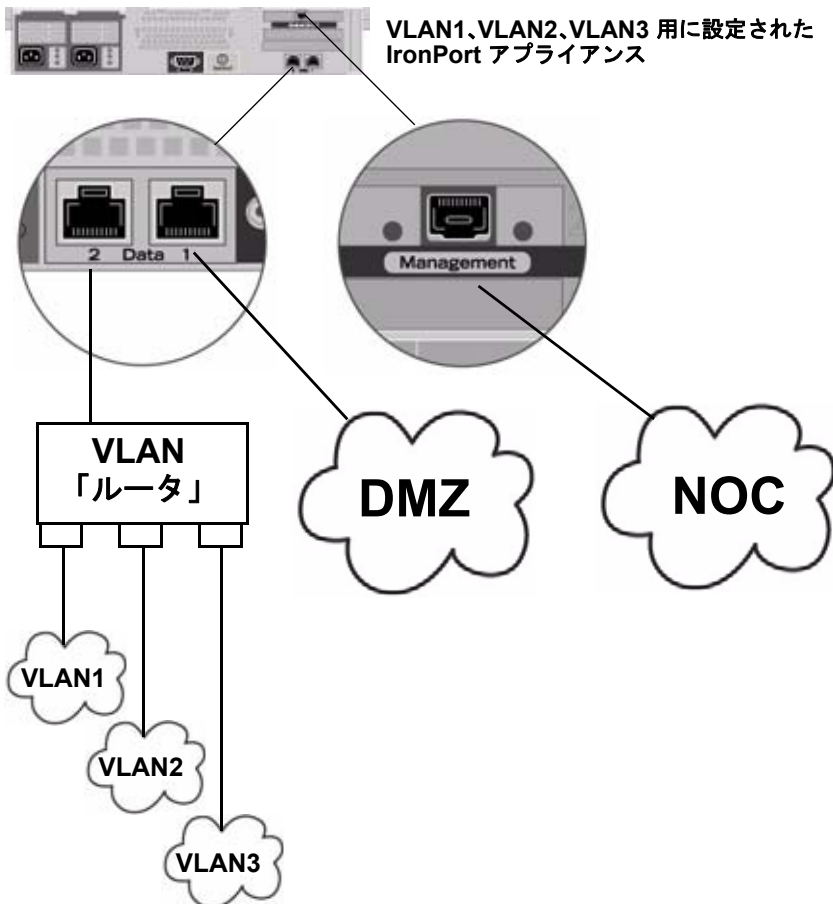
- ステップ 2** failover コマンドを実行します (etherconfig -> pairing -> failover)。15 秒間待機します。

- ステップ 3** バックアップ NIC がアクティブなインターフェイスになったら、再度 CLI の ping コマンドを使って、ペアになっているインターフェイスをテストします。
- ステップ 4** 最後に、再度 failover を実行して NIC ペアをデフォルトの（プライマリ インターフェイスがアクティブな）状態に戻します。

仮想ローカル エリア ネットワーク (VLAN)

VLAN は、物理データ ポートにバインドされた仮想的なローカル エリア ネットワークです。VLAN を設定することにより、Cisco IronPort アプライアンスが接続できるネットワークの数を、装備されている物理的なインターフェイスの数よりも増やすことができます。たとえば、IronPort C6x アプライアンスには Data 1、Data 2、および Management の 3 つのインターフェイスがあります。VLAN を使って、既存のリスナーに対応する別個の「ポート」上に追加のネットワークを定義できます。（詳細については、[付録 B「アプライアンスへのアクセス」](#)を参照してください）。任意の物理ネットワーク ポートに複数の VLAN を設定できます。[図 7-1](#) に、Data 2 インターフェイスに複数の VLAN を設定する例を示します。

図 7-1 VLAN を使用したアプライアンス上の使用可能なネットワーク数の増加



VLAN を使ってネットワークを分割することにより、セキュリティを向上させたり、管理作業を軽減したり、帯域幅を拡大したりできます。VLAN は、「VLAN DDDD」という形式の名前を持つ動的な「データ ポート」として表示されます。「DDDD」は最大 4 桁の ID です（たとえば、VLAN 2、VLAN 4094 など）。AsyncOS は、最大 30 の VLAN をサポートします。同じ Cisco IronPort アプライアンス上で重複する VLAN ID は設定できません。

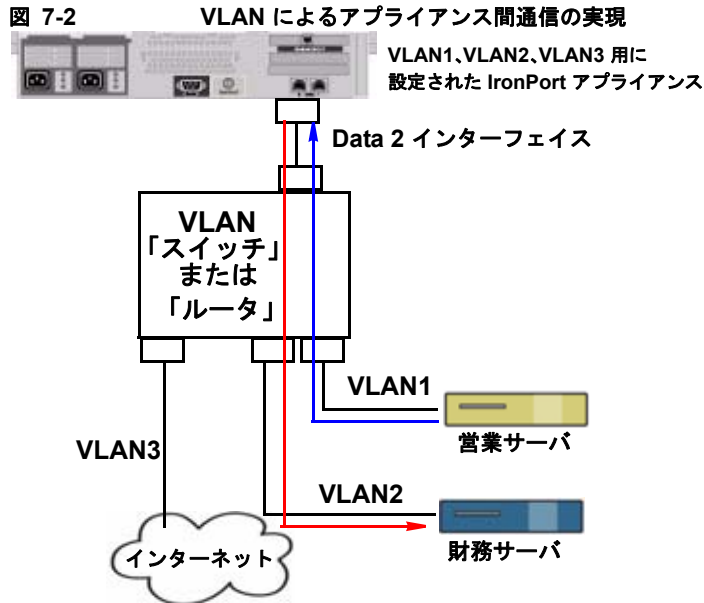
VLAN と物理ポート

物理ポートを VLAN に追加するために IP アドレスを設定する必要はありません。VLAN を作成した物理ポートに VLAN 以外のトラフィックを受信する IP アドレスを設定できるため、VLAN のトラフィックと VLAN 以外のトラフィックの両方を同じインターフェイスで受信できます。

VLAN は、一部の IronPort X10x、C3x、および C6x アプライアンスで使用可能な光ファイバ データ ポートを含むすべての「Data」ポートおよび「Management」ポート上に作成できます。

VLAN は、NIC ペアリング（ペアになっている NIC で使用可能）や Direct Server Return（DSR）とともに使用できます。

図 7-2 は、VLAN の制限事項のために直接通信できない 2 台のメール サーバが IronPort アプライアンス経由でどのようにメールを送信するかを示す使用例です。青い線は、営業ネットワーク（VLAN1）からアプライアンスに送信されたメールを示しています。アプライアンスはこのメールを通常どおりに処理し、配信時に VLAN の情報を含むタグをパケットに追加します（赤い線）。



VLAN の管理

VLAN の作成、編集、および削除を行うには、`etherconfig` コマンドを使用します。作成した VLAN は、[Network] > [Interfaces] ページまたは CLI の `interfaceconfig` コマンドを使って設定できます。必ずすべての変更を確定してください。

etherconfig コマンドによる新しい VLAN の作成

この例では、Data 1 ポート上に 2 つの VLAN (VLAN 31 と VLAN 34) を作成します。

```
mail3.example.com> etherconfig
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

```
- MEDIA - View and edit ethernet media settings.
```


- PAIRING - View and configure NIC Pairing.
- VLAN - View and configure VLANs.
- LOOPBACK - View and configure Loopback.

```
[> vlan
```

```
VLAN interfaces:
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- NEW - Create a new VLAN.

```
[> new
```

```
VLAN ID for the interface (Ex: "34"):
```

```
[> 34
```

```
Enter the name or number of the ethernet interface you wish bind to:
```

1. Data 1
2. Data 2
3. Management

```
[1]> 1
```

```
VLAN interfaces:
```

1. VLAN 34 (Data 1)

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new VLAN.
- EDIT - Edit a VLAN.
- DELETE - Delete a VLAN.

```
[> new
```

VLAN ID for the interface (Ex: "34"):

```
[> 31
```

Enter the name or number of the ethernet interface you wish bind to:

1. Data 1
2. Data 2
3. Management

```
[1]> 1
```

VLAN interfaces:

1. VLAN 31 (Data 1)
2. VLAN 34 (Data 1)

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new VLAN.

```
- EDIT - Edit a VLAN.
```

```
- DELETE - Delete a VLAN.
```

```
[ ]>
```

Choose the operation you want to perform:

```
- MEDIA - View and edit ethernet media settings.
```

```
- PAIRING - View and configure NIC Pairing.
```

```
- VLAN - View and configure VLANs.
```

```
- LOOPBACK - View and configure Loopback.
```

```
[ ]>
```

interfaceconfig コマンドによる VLAN 上の IP インターフェイスの作成

この例では、VLAN 31 イーサネット インターフェイス上に新しい IP インターフェイスを作成します。



(注)

インターフェイスに変更を加えると、アプライアンスとの接続が閉じることがあります。

```
mail3.example.com> interfaceconfig
```

Currently configured interfaces:

```
1. Data 1 (10.10.1.10/24: example.com)
```

```
2. Management (10.10.0.10/24: example.com)
```

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new interface.
- EDIT - Modify an interface.
- GROUPS - Define interface groups.
- DELETE - Remove an interface.

[]> **new**

Please enter a name for this IP interface (Ex: "InternalNet"):

[]> **InternalVLAN31**

IP Address (Ex: 10.10.10.10):

[]> **10.10.31.10**

Ethernet interface:

1. Data 1
2. Data 2
3. Management
4. VLAN 31
5. VLAN 34

[1]> **4**

Netmask (Ex: "255.255.255.0" or "0xfffff000"):

```
[255.255.255.0]>
```

```
Hostname:
```

```
[ ]> mail31.example.com
```

```
Do you want to enable FTP on this interface? [N]>
```

```
Do you want to enable Telnet on this interface? [N]>
```

```
Do you want to enable SSH on this interface? [N]>
```

```
Do you want to enable HTTP on this interface? [N]>
```

```
Do you want to enable HTTPS on this interface? [N]>
```

```
Currently configured interfaces:
```

1. Data 1 (10.10.1.10/24: example.com)
2. InternalVLAN31 (10.10.31.10/24: mail31.example.com)
3. Management (10.10.0.10/24: example.com)

```
Choose the operation you want to perform:
```

```
- NEW - Create a new interface.  
- EDIT - Modify an interface.  
- GROUPS - Define interface groups.  
- DELETE - Remove an interface.  
  
[]>
```

```
mail3.example.com> commit
```

[Network] > [Listeners] ページを使って VLAN を設定することもできます。

図 7-3 GUI で新しい IP インターフェイスを作成するとき VLAN を使用する

Add IP Interface

IP Interface Settings													
Name:	InternalVLAN31												
Ethernet Port:	VLAN 31												
IP Address:	10.10.31.10												
Netmask:	255.255.255.0												
Hostname:	mail31.example.com												
Services:	<table border="1"> <thead> <tr> <th>Service</th> <th>Port</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td><input type="checkbox"/> FTP</td> <td>21</td> </tr> <tr> <td><input type="checkbox"/> Telnet</td> <td>23</td> </tr> <tr> <td><input type="checkbox"/> SSH</td> <td>22</td> </tr> <tr> <td><input type="checkbox"/> HTTP</td> <td>80</td> </tr> <tr> <td><input type="checkbox"/> HTTPS</td> <td>443</td> </tr> </tbody> </table>	Service	Port	<input type="checkbox"/> FTP	21	<input type="checkbox"/> Telnet	23	<input type="checkbox"/> SSH	22	<input type="checkbox"/> HTTP	80	<input type="checkbox"/> HTTPS	443
Service	Port												
<input type="checkbox"/> FTP	21												
<input type="checkbox"/> Telnet	23												
<input type="checkbox"/> SSH	22												
<input type="checkbox"/> HTTP	80												
<input type="checkbox"/> HTTPS	443												
Redirect HTTP Requests to HTTPS: <input type="checkbox"/> Enable Redirect (HTTP and HTTPS Services will be turned on)													
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> Cancel Submit </div>													

Direct Server Return

Direct Server Return (DSR) は、同じ Virtual IP (VIP; 仮想 IP) を共有する複数の Cisco IronPort アプライアンス間で負荷を分散するための軽量負荷分散メカニズムをサポートする機能です。

DSR は、Cisco IronPort アプライアンスの「ループバック」イーサネットインターフェイス上に作成された IP インターフェイスを介して実装されます。



(注) Cisco IronPort アプライアンスの負荷分散の設定は、このマニュアルでは取り上げません。

Direct Server Return のイネーブル化

DSR をイネーブルにするには、参加している各アプライアンスの「ループバック」イーサネットインターフェイスをイネーブルにします。次に、CLI の `interfaceconfig` コマンドまたは GUI の [Network] > [Interfaces] ページを使っ

てループバック インターフェイス上に Virtual IP (VIP; 仮想 IP) を持つ IP インターフェイスを作成します。最後に、CLI の `listenerconfig` コマンドまたは GUI の [Network] > [Listeners] ページを使って新しい IP インターフェイス上にリスナーを作成します。必ずすべての変更を確定してください。



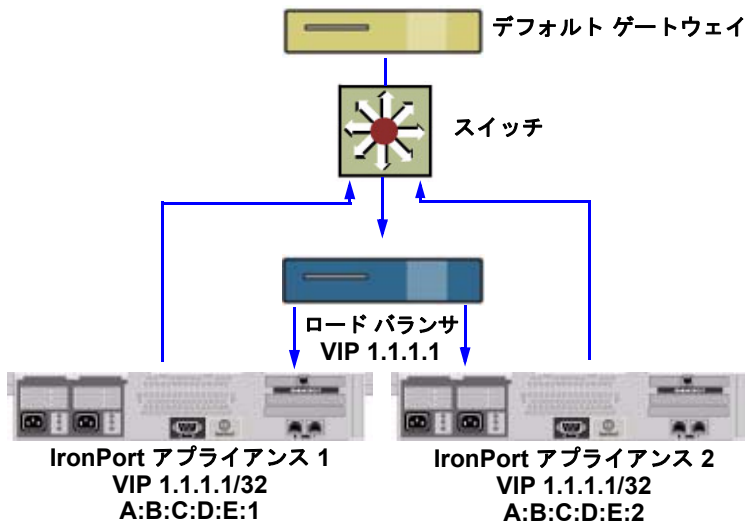
(注)

ループバック インターフェイスを使用した場合、アプライアンスはそのインターフェイスの ARP 応答を発行しません。

DSR をイネーブルにするときは、次のルールが適用されます。

- すべてのシステムが同じ Virtual IP (VIP; 仮想 IP) アドレスを使用します。
- すべてのシステムがロード バランサと同じスイッチおよびサブネット上にある必要があります。

図 7-4 DSR を使用した同じスイッチに接続された複数の IronPort アプライアンスの負荷の分散



etherconfig コマンドによるループバック インターフェイスのイネーブル化

イネーブルになったループバック インターフェイスは、他のインターフェイス (Data 1 など) と同じように扱われます。

```
mail3.example.com> etherconfig
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- MEDIA - View and edit ethernet media settings.
- PAIRING - View and configure NIC Pairing.
- VLAN - View and configure VLANs.
- LOOPBACK - View and configure Loopback.

```
[>] loopback
```

```
Currently configured loopback interface:
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- ENABLE - Enable Loopback Interface.

```
[>] enable
```

```
Currently configured loopback interface:
```

1. Loopback

```
Choose the operation you want to perform:
```

```
- DISABLE - Disable Loopback Interface.
```

```
[]>
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

```
- MEDIA - View and edit ethernet media settings.
```

```
- PAIRING - View and configure NIC Pairing.
```

```
- VLAN - View and configure VLANs.
```

```
- LOOPBACK - View and configure Loopback.
```

```
[]>
```

interfaceconfig コマンドによるループバック上の IP インターフェイスの作成

ループバック インターフェイス上に IP インターフェイスを作成します。

```
mail3.example.com> interfaceconfig
```

```
Currently configured interfaces:
```

```
1. Data 1 (10.10.1.10/24: example.com)
```

```
2. InternalV1 (10.10.31.10/24: mail31.example.com)
```

```
3. Management (10.10.0.10/24: example.com)
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

```
- NEW - Create a new interface.
```

- EDIT - Modify an interface.
- GROUPS - Define interface groups.
- DELETE - Remove an interface.

```
[ ]> new
```

Please enter a name for this IP interface (Ex: "InternalNet"):

```
[ ]> LoopVIP
```

IP Address (Ex: 10.10.10.10):

```
[ ]> 10.10.1.11
```

Ethernet interface:

1. Data 1
2. Data 2
3. Loopback
4. Management
5. VLAN 31
6. VLAN 34

```
[1]> 3
```

Netmask (Ex: "255.255.255.0" or "0xffffffff00"):

```
[255.255.255.0]> 255.255.255.255
```

Hostname:

[> **example.com**

Do you want to enable FTP on this interface? [N]>

Do you want to enable Telnet on this interface? [N]>

Do you want to enable SSH on this interface? [N]>

Do you want to enable HTTP on this interface? [N]>

Do you want to enable HTTPS on this interface? [N]>

Currently configured interfaces:

1. Data 1 (10.10.1.10/24: example.com)
2. InternalV1 (10.10.31.10/24: mail31.example.com)
3. LoopVIP (10.10.1.11/24: example.com)
4. Management (10.10.0.10/24: example.com)

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Create a new interface.

- EDIT - Modify an interface.
 - GROUPS - Define interface groups.
 - DELETE - Remove an interface.
- []>

```
mail3.example.com> commit
```

新しい IP インターフェイス上のリスナーの作成

GUI または CLI を使って新しい IP インターフェイス上にリスナーを作成します。たとえば、[図 7-5](#) に示すように、新たに作成した IP インターフェイスを GUI の [Add Listener] ページで選択できます。

図 7-5 新しいループバック IP インターフェイス上のリスナーの作成
Add Listener

Listener Settings	
Name:	<input type="text"/>
Type of Listener:	<input checked="" type="radio"/> Public <input type="radio"/> Private
Interface:	<input type="text" value="Data 1 (10.10.1.10/24; example.com)"/> <div style="border: 1px solid gray; padding: 2px;"> Data 1 (10.10.1.10/24; example.com) InternalV1 (10.10.31.10/24; mail31.example.com) LoopVIP (10.10.11.10/24; mail11.example.com) Management (10.10.2.10/24; example.com) </div>
Bounce Profile:	Data 1 (10.10.1.10/24; example.com)
Disclaimer Above:	<input type="text" value="LoopVIP (10.10.11.10/24; mail11.example.com)"/> <small>Disclaimer text will be applied above the message body.</small>
Disclaimer Below:	<input type="text" value="None"/> <small>Disclaimer text will be applied below the message body.</small>
SMTP Authentication Profile:	<input type="text" value="None"/>
Certificate:	<input type="text" value="System Default"/>



CHAPTER 8

中央集中型管理

IronPort の中央集中型管理機能（機能キーを使って実行可能）を使用して複数のアプライアンスを同時に管理、設定することにより、管理に要する時間を短縮し、ネットワーク全体で設定の一貫性を確保することができます。複数のアプライアンスを管理するためにハードウェアを追加購入する必要はありません。中央集中型管理機能によって、ネットワーク内の信頼性、柔軟性、およびスケーラビリティが向上し、ローカルポリシーを順守しながらグローバルな管理を行うことができます。

クラスタとは、設定情報を共有する一連のマシンのことです。クラスタの内部では、マシン（IronPort アプライアンス）がグループに分割されます。どのクラスタにも 1 つ以上のグループがあります。個々のマシンは、必ずいずれかのグループのメンバになります。管理者ユーザは、システムのさまざまな要素をクラスタ単位、グループ単位、またはマシン単位で設定できます。これにより、IronPort アプライアンスを、ネットワーク、地域、部署、または論理的な関係に基づいて分割できます。

クラスタはピアツーピアアーキテクチャで実装されるため、クラスタ内にマスター/スレーブの関係は存在しません。どのマシンにログインしても、クラスタの制御と管理を行うことができます。（ただし、一部のコンフィギュレーションコマンドは制限されます。「制限コマンド」(P.8-22) を参照してください）。

ユーザデータベースはクラスタ内のすべてのマシン間で共有されます。つまり、ユーザのセットと管理者（および対応するパスワード）はクラスタ全体で 1 つしか存在しません。クラスタに参加するすべてのマシンは 1 つの管理者パスワードを共有します。これをクラスタの管理パスワードと呼びます。

この章の内容は、次のとおりです。

- 「クラスタの要件」(P.8-2)
- 「クラスタの構成」(P.8-3)

- 「クラスタの作成とクラスタへの参加」 (P.8-6)
- 「クラスタの管理」 (P.8-15)
- 「GUI でのクラスタの管理」 (P.8-23)
- 「クラスタ通信」 (P.8-27)
- 「ベストプラクティスとよくあるご質問」 (P.8-34)

クラスタの要件

- クラスタ内の各マシンには、DNS で解決可能なホスト名が必要です。代わりに IP アドレスを使用することもできますが、両者を混在させることはできません。

「DNS とホスト名の解決」 (P.8-27) を参照してください。クラスタの通信は、通常、マシンの DNS ホスト名を使って開始されます。

- 1 つのクラスタは、全体として同じシリーズのマシンで構成されている必要があります (X シリーズと C シリーズには互換性があります)。

たとえば、IronPort X1000、C60、C600、C30、C300、および C10 アプライアンスを同じクラスタに含めることはできますが、C60 と A60 アプライアンスを同じクラスタに含めることはできません。互換性のないアプライアンスを既存のクラスタに追加しようとすると、そのアプライアンスをクラスタに追加できない理由を示すエラー メッセージが表示されます。

- 1 つのクラスタは、全体として同じバージョンの AsyncOS を実行しているマシンで構成されている必要があります。

クラスタのメンバをアップグレードする方法については、「クラスタ内のマシンのアップグレード」 (P.8-18) を参照してください。

- 各マシンは、SSH (通常はポート 22) と Cluster Communication Service (CCS) のいずれかを使ってクラスタに参加できます。

「クラスタ通信」 (P.8-27) を参照してください。

- クラスタに参加したマシンは、SSH または CCS 経由で通信できます。使用するポートは設定可能です。SSH は通常ポート 22 上でイネーブルになっており、CCS はデフォルトでポート 2222 上でイネーブルになっていますが、どちらのサービスも別のポートに設定できます。

アプライアンスに対して開く必要がある通常のファイアウォール ポートに加えて、クラスタ化されたマシンが CCS 経由で通信する場合は、各マシンが CCS ポート経由で相互に接続できる必要があります。「[クラスタ通信 \(P.8-27\)](#)」を参照してください。

- クラスタの作成、クラスタへの参加、およびクラスタの設定を行うには、**Command Line Interface (CLI; コマンドライン インターフェイス)** の `clusterconfig` コマンドを使用する必要があります。

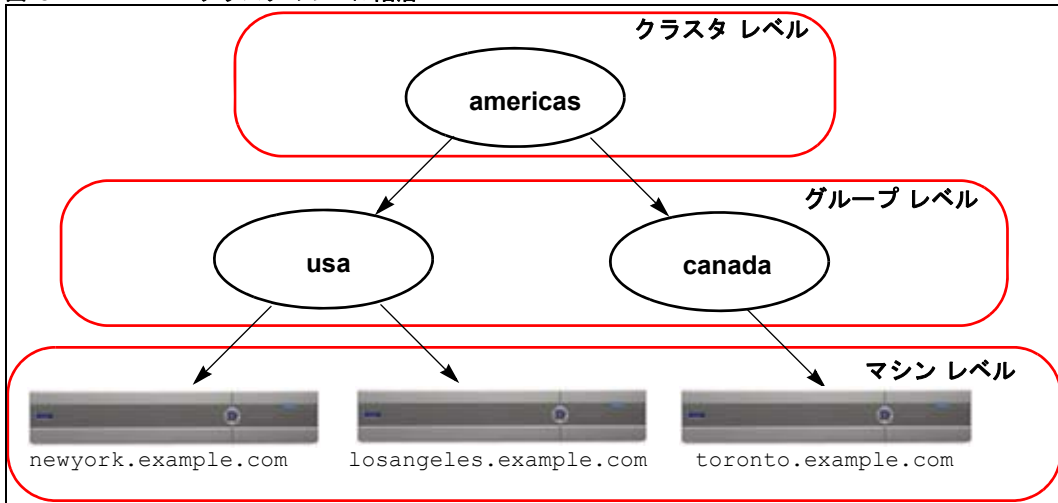
クラスタを作成した後は、クラスタ以外の設定を GUI または CLI から管理できます。

「[クラスタの作成とクラスタへの参加 \(P.8-6\)](#)」および「[GUI でのクラスタの管理 \(P.8-23\)](#)」を参照してください。

クラスタの構成

クラスタでは、設定情報が 3 つのグループ (レベル) に分かれています。最上位レベルはクラスタの設定、中位レベルはグループの設定、最下位レベルはマシンごとの設定をそれぞれ表します。

図 8-1 クラスタのレベル階層



各レベルには、設定が可能なメンバが 1 つ以上存在します。これらをモードと呼びます。モードは特定のレベルに含まれる名前の付いたメンバを表します。たとえば、「usa」グループは図に示した 2 つのグループモードの 1 つです。レベルは一般的な用語ですが、モードは具体的なものを示します。モードは常に名前でも参照されます。図 8-1 に示したクラスタには 6 つのモードがあります。

設定は特定のレベルで設定されますが、それらは常に**特定のモードに対して**設定されます。すべてのモードに対する設定を 1 つのレベルで設定する必要はありません。クラスタモードは特別なケースです。クラスタは 1 つしか存在しないため、クラスタモードの設定はすべてクラスタレベルで設定されると言えます。

通常、ほとんどの設定はクラスタレベルで設定する必要があります。ただし、下位レベルで個別に設定された設定は上位レベルで設定された設定よりも優先されます。したがって、クラスタモードの設定をグループモードやマシンモードの設定で上書きできます。

たとえば、最初にクラスタモードでグッドネイバーテーブルを設定し、クラスタ内のすべてのマシンでその設定を使用するとします。次に、このテーブルをマシンモードでマシン newyork 用に設定します。この場合、クラスタ内の他のすべてのマシンは引き続きクラスタレベルで定義されたグッドネイバーテーブルを使用しますが、マシン newyork はクラスタの設定をマシンモードの個別の設定で上書きします。

特定のグループやマシン用にクラスタの設定を上書きする機能によって、非常に柔軟な設定が可能になります。ただし、多くの設定をマシンモードで個別に設定すると、クラスタの当初の目的である管理のしやすさが大きく損なわれます。

初期設定

ほとんどの機能については、新しいモードで設定を始めたときのデフォルトの初期設定は空です。設定が空であることとモードの設定が存在しないことは明確に区別されます。例として、1つのグループと1台のマシンからなる非常に簡単なクラスタを考えます。LDAP クエリーがクラスタ レベルで設定されているとします。グループ レベルとマシン レベルでは何も設定されていません。

クラスタ	(LDAP クエリー : a、b、c)
グループ	
マシン	

ここで、グループに対して新しい LDAP クエリーの設定を作成したとします。その結果は次のようになります。

クラスタ	(LDAP クエリー : a、b、c)
グループ	(LDAP クエリー : なし)
マシン	

すると、クラスタ レベルの設定がグループ レベルの設定で上書きされますが、新しいグループ設定は初期状態では空です。グループ モードには、独自に設定された LDAP クエリーが実際には存在しません。このグループ内のマシンは、この「空の」LDAP クエリーをグループから継承します。

次に、このグループに次のような LDAP クエリーを追加します。

クラスタ	(LDAP クエリー : a、b、c)
グループ	(LDAP クエリー : d)
マシン	

これで、クラスタ レベルで設定されたクエリーとは別に、グループにもクエリーが設定されました。マシンはグループのクエリーを継承します。

クラスタの作成とクラスタへの参加

クラスタの作成とクラスタへの参加は、Graphical User Interface (GUI; グラフィカル ユーザ インターフェイス) からはできません。クラスタの作成、クラスタへの参加、およびクラスタの設定を行うには、Command Line Interface (CLI; コマンドライン インターフェイス) を使用する必要があります。クラスタの作成後は、GUI と CLI のどちらからでも設定を変更できます。

クラスタを作成する前に、必ず中央集中型管理機能キーをイネーブルにしてください。



(注)

ご使用の IronPort アプライアンスには、中央集中型管理機能の評価キーは付属していません。中央集中型管理機能をイネーブルにするには、30 日間の評価を要求するか、キーを購入する必要があります。キーをイネーブルにするには、CLI の `featurekey` コマンドまたは `[System Administration] > [Feature Keys]` ページを使用します。

clusterconfig コマンド

マシン上でクラスタの作成やクラスタへの参加を行うには、`clusterconfig` コマンドを使用します。

- 新しいクラスタを作成すると、そのクラスタのすべての初期設定はそのクラスタを作成したマシンから継承されます。マシンがすでに「スタンドアロン」モードで設定されている場合は、クラスタを作成したときにそのスタンドアロンの設定が使用されます。
- マシンがクラスタに参加すると、そのマシンのすべてのクラスタ化可能な設定がクラスタ レベルから継承されます。つまり、そのマシン固有の設定 (IP アドレスなど) を除くすべての設定が消失し、そのマシンが参加したクラスタ、グループ、またはその両方の設定に置き換わります。マシンがすでに「スタンドアロン」モードで設定されている場合は、クラスタを作成するときにそのスタンドアロンの設定が使用され、マシン レベルの設定は保持されません。

現在のマシンがまだクラスタに含まれていない場合は、`clusterconfig` コマンドを実行すると、既存のクラスタに参加するか、新しいクラスタを作成するかのオプションが表示されます。

```
newyork.example.com> clusterconfig
```

```
Do you want to join or create a cluster?
```

1. No, configure as standalone.
2. Create a new cluster.
3. Join an existing cluster over SSH.
4. Join an existing cluster over CCS.

```
[1]> 2
```

```
Enter the name of the new cluster.
```

```
[> americas
```

```
New cluster committed: Wed Jun 22 10:02:04 2005 PDT
```

```
Creating a cluster takes effect immediately, there is no need to commit.
```

```
Cluster americas
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

- ADDGROUP - Add a cluster group.

```

- SETGROUP - Set the group that machines are a member of.

- RENAMEGROUP - Rename a cluster group.

- DELETEGROUP - Remove a cluster group.

- REMOVEMACHINE - Remove a machine from the cluster.

- SETNAME - Set the cluster name.

- LIST - List the machines in the cluster.

- LISTDETAIL - List the machines in the cluster with detail.

- DISCONNECT - Temporarily detach machines from the cluster.

- RECONNECT - Restore connections with machines that were previously
detached.

- PREPJOIN - Prepare the addition of a new machine over CCS.

[]>

```

この時点で、新しいクラスタにマシンを追加できます。これらのマシンは、SSH または CCS を使用して通信できます。

既存のクラスタへの参加

既存のクラスタに参加するには、クラスタに追加するホスト上で `clusterconfig` コマンドを実行します。SSH と CCS のどちらを使用してクラスタに参加するかを選択できます。

既存のクラスタにホストを参加させるには、次の要件を満たす必要があります。

- クラスタ内のマシンの SSH ホスト キーを検証できること
- クラスタ内のマシンの IP アドレスを知っており、そのマシンに（SSH や CCS 経由で）接続できること
- クラスタに属するマシン上の管理ユーザの管理者パスワードを知っていること

**(注)**

クラスタにマシンを追加する前に、追加しようとしているすべてのマシンに中央集中型管理機能キーをインストールする必要があります。あらかじめ中央集中型管理の機能キーがシステムにインストールされており、クラスタがすでに存在する場合は、CLI の `systemsetup` コマンドによるシステム設定ウィザードを使って既存のクラスタに参加することもできます。管理者パスワードの変更、アプリケーションのホスト名の設定、およびネットワーク インターフェイスと IP アドレスの設定の後で、クラスタの作成とクラスタへの参加のいずれかを選択するプロンプトが表示されます。

SSH を使った既存クラスタへの参加

次の表に、SSH オプションを使ってマシン「`losangeles.example.com`」をクラスタに追加する例を示します。

```
losangeles.example.com> clusterconfig
```

```
Do you want to join or create a cluster?
```

1. No, configure as standalone.
2. Create a new cluster.
3. Join an existing cluster over SSH.
4. Join an existing cluster over CCS.

```
[1]> 3
```

```
While joining a cluster, you will need to validate the SSH host key of the remote machine to which you are joining. To get the public host key
```

```
fingerprint of the remote host, connect to the cluster and run: logconfig -> hostkeyconfig -> fingerprint.
```

WARNING: All non-network settings will be lost. System will inherit the values set at the group or cluster mode for the non-network settings. Ensure that the cluster settings are compatible with your network settings (e.g. dnsconfig settings)

Do you want to enable the Cluster Communication Service on

losangeles.example.com? [N]> **n**

Enter the IP address of a machine in the cluster.

[]> *IP address is entered*

Enter the remote port to connect to. The must be the normal admin ssh port, not the CCS port.

[22]> 22

Enter the admin password for the cluster.

The administrator password for the clustered machine is entered

Please verify the SSH host key for IP address:

Public host key fingerprint:
xx:xx:xx:xx:xx:xx:xx:xx:xx:xx:xx:xx:xx:xx:xx:xx

Is this a valid key for this host? [Y]> **y**

Joining cluster group Main_Group.

Joining a cluster takes effect immediately, there is no need to commit.

```
Cluster americas
```

Choose the operation you want to perform:

- ADDGROUP - Add a cluster group.
- SETGROUP - Set the group that machines are a member of.
- RENAMEGROUP - Rename a cluster group.
- DELETEDGROUP - Remove a cluster group.
- REMOVEMACHINE - Remove a machine from the cluster.
- SETNAME - Set the cluster name.
- LIST - List the machines in the cluster.
- LISTDETAIL - List the machines in the cluster with detail.
- DISCONNECT - Temporarily detach machines from the cluster.
- RECONNECT - Restore connections with machines that were previously detached.
- PREPJOIN - Prepare the addition of a new machine over CCS.

```
[ ]>
```

```
(Cluster americas)>
```

CCS を使った既存クラスタへの参加

SSH を使用できない場合は、代わりに CCS を使用します。CCS の唯一の利点は、そのポートではクラスタ通信しか行われない（ユーザ ログインや SCP など行われない）ことです。CCS を使って既存のクラスタにマシンを追加するに

は、`clusterconfig` の `prepjoin` サブコマンドを使ってクラスタに追加するマシンの準備を行います。次の例では、マシン「`newyork`」上で `prepjoin` コマンドを実行して、クラスタに追加するマシン「`losangeles`」の準備を行っています。

`prepjoin` コマンドを実行してから、クラスタに追加するホストの CLI で「`clusterconfig prepjoin print`」と入力し、現在クラスタに含まれているホストのコマンドラインにキーをコピーすることにより、クラスタに追加するホストのユーザ キーを取得します。

Choose the operation you want to perform:

- ADDGROUP - Add a cluster group.
- SETGROUP - Set the group that machines are a member of.
- RENAMEGROUP - Rename a cluster group.
- DELETEDGROUP - Remove a cluster group.
- REMOVE MACHINE - Remove a machine from the cluster.
- SETNAME - Set the cluster name.
- LIST - List the machines in the cluster.
- LISTDETAIL - List the machines in the cluster with detail.
- DISCONNECT - Temporarily detach machines from the cluster.
- RECONNECT - Restore connections with machines that were previously detached.
- PREPJOIN - Prepare the addition of a new machine over CCS.

[]> **prepjoin**

Prepare Cluster Join Over CCS

No host entries waiting to be added to the cluster.

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Add a new host that will join the cluster.

```
[> new
```

Enter the hostname of the system you want to add.

```
[> losangeles.example.com
```

Enter the serial number of the host mail3.example.com.

```
[> unique serial number is added
```

Enter the user key of the host losangeles.example.com. This can be obtained by typing "clusterconfig prepjoin print" in the CLI on mail3.example.com. Press enter on a blank line to finish.

```
unique user key from output of prepjoin print is pasted
```

Host losangeles.example.com added.

Prepare Cluster Join Over CCS

```
1. losangeles.example.com (serial-number)
```

Choose the operation you want to perform:

- NEW - Add a new host that will join the cluster.

```
- DELETE - Remove a host from the pending join list.
```

```
[]>
```

```
(Cluster americas)> commit
```

マシンがクラスタに追加された後は、`clusterconfig` コマンドを使ってクラスタのさまざまな設定が可能です。

```
(Cluster Americas)> clusterconfig
```

```
Cluster americas
```

```
Choose the operation you want to perform:
```

```
- ADDGROUP - Add a cluster group.
```

```
- SETGROUP - Set the group that machines are a member of.
```

```
- RENAMEGROUP - Rename a cluster group.
```

```
- DELETEGROUP - Remove a cluster group.
```

```
- REMOVEMACHINE - Remove a machine from the cluster.
```

```
- SETNAME - Set the cluster name.
```

```
- LIST - List the machines in the cluster.
```

```
- LISTDETAIL - List the machines in the cluster with detail.
```

```
- DISCONNECT - Temporarily detach machines from the cluster.
```

```
- RECONNECT - Restore connections with machines that were previously detached.
```

```
- PREPJOIN - Prepare the addition of a new machine over CCS.
```

```
[ ]>
```

グループの追加

すべてのクラスタには 1 つ以上のグループが含まれている必要があります。新しいクラスタを作成すると、「Main_Group」という名前のデフォルトのグループが自動的に作成されます。しかし、クラスタ内に追加のグループを作成することもできます。次の例は、既存のクラスタ内に追加のグループを作成し、そのグループにマシンを割り当てる方法を示しています。

-
- ステップ 1** clusterconfig コマンドを実行します。
 - ステップ 2** addgroup サブコマンドを選択し、新しいグループの名前を入力します。
 - ステップ 3** setgroup サブコマンドを使用して、新しいグループに割り当てるマシンを選択します。

クラスタの管理

CLI でのクラスタの管理

クラスタに含まれるマシンでは、CLI を異なるモードに切り替えることができます。モードはあるレベルに含まれる特定の（名前の付いた）メンバを表していることを思い出してください。

CLI のモードに応じて、設定が変更される正確な場所が決まります。デフォルトは、ユーザがログインしたマシン（ログイン ホスト）を示す「マシン」モードです。

別のモードに切り替えるには、`clustermode` コマンドを使用します。次の例を参考にしてください。

表 8-1 クラスタの管理

コマンド例	説明
<code>clustermode</code>	クラスタ モードへの切り替えを確認するプロンプトが表示されます。
<code>clustermode group northamerica</code>	グループ「northamerica」用のグループ モードに切り替わります。
<code>clustermode machine losangeles.example.com</code>	マシン「losangeles」用のマシン モードに切り替わります。

CLI のプロンプトが変更され、次のように現在のモードが表示されます。

```
(Cluster Americas)>
```

または

```
(Machine losangeles.example.com)>
```

マシン モードでは、プロンプトにマシンの完全修飾ドメイン名が表示されます。

設定のコピーと移動

すべての非制限コマンド（「[制限コマンド](#)」(P.8-22) を参照）に、新しい操作として `CLUSTERSHOW` と `CLUSTERSET` が追加されました。`CLUSTERSHOW` は、コマンド設定のモードを表示するときに使用します（「[新たに追加された操作](#)」(P.8-21) を参照）。`CLUSTERSET` 操作は、（現在のコマンドで設定できる）現在の設定をモード間またはレベル間で（たとえば、あるマシンからあるグループへ）移動またはコピーするときに使用します。

copy を使用すると、現在のモードの設定が保持されます。*move* を使用すると、現在のモードの設定がリセット（クリア）されます。つまり、移動した後は、現在のモードに設定が設定されなくなります。

たとえば、(*destconfig* コマンドで) グループ「northamerica」にグッド ネイバー テーブルを設定し、クラスタ全体にこの設定を適用する場合は、*destconfig* コマンド内で *clusterset* 操作を使って現在の設定をクラスタ モードにコピー（または移動）できます。（「新しい設定の実験」(P.8-17) を参照）。



警告

設定を移動またはコピーするときは、依存関係に矛盾が生じないように注意してください。たとえば、免責事項のスタンプが設定されたリスナーを別のマシンに移動またはコピーしても、その新しいマシンに同じ免責事項が設定されていない場合、新しいマシンでは免責事項のスタンプがイネーブルになりません。

新しい設定の実験

クラスタの最も効果的な使用方法の 1 つは、新しい設定を実験することです。まず、分離された環境で、マシン モードでの変更を行います。次に、設定に問題がなければ、設定変更を上位のクラスタ モードに移動し、すべてのマシンに適用します。

次の例は、あるマシンでリスナーの設定を変更し、準備ができたならその設定をクラスタの残りのマシンにパブリッシュする手順を示しています。通常、リスナーはクラスタ レベルで設定されるため、この例では最初に設定をあるマシンのマシン モードに格下げしてから、設定の変更を行い、テストしています。このような実験的な変更は、クラスタ内の他のマシンで同じ変更を行う前に、1 つのマシン上でテストする必要があります。

-
- ステップ 1** `clustermode cluster` コマンドを使ってクラスタ モードに変更します。
- `clustermode` コマンドは、モードをクラスタ、グループ、およびマシン レベルに変更するときに使用する CLI コマンドです。
- ステップ 2** `listenerconfig` を実行して、クラスタに設定されたリスナーの設定を表示します。
- ステップ 3** 実験するマシンを選び、`clusterset` コマンドを使って設定をクラスタから下位のマシン モードにコピーします。
- ステップ 4** 次のように `clustermode` コマンドを使って実験マシンのマシン モードに移行します。

```
clustermode machine newyork.example.com
```

- ステップ 5** 実験マシンのマシン モードで `listenerconfig` コマンドを実行し、実験マシンに固有の変更を行います。
- ステップ 6** 変更を確定します。
- ステップ 7** 実験マシン上で設定変更の実験を続行し、必ず変更を確定します。
- ステップ 8** 新しい設定を他のすべてのマシンに適用する準備ができれば、`clusterset` コマンドを使って設定を上位のクラスタ モードに移動します。
- ステップ 9** 変更を確定します。

クラスタからの脱退（削除）

マシンをクラスタから永続的に削除するには、`clusterconfig` の `REMOVEMACHINE` 操作を使用します。マシンをクラスタから永続的に削除すると、その設定は「平板化」され、そのマシンはクラスタに含まれていたときと同じように動作します。たとえば、クラスタ モードのグローバル配信停止テーブルしかない場合にマシンをクラスタから削除すると、そのグローバル配信停止テーブルのデータがマシンのローカル設定にコピーされます。

クラスタ内のマシンのアップグレード

クラスタには、異なるバージョンの AsyncOS を実行しているマシンを接続できません。AsyncOS のアップグレードを行う前に、`clusterconfig` コマンドを使ってクラスタ内の各マシンを切断する必要があります。すべてのマシンをアップグレードしたら、`clusterconfig` コマンドを使ってクラスタを再接続します。マシンを同じバージョンにアップグレードする間は、2 つのクラスタを別個に稼働させることができます。また、GUI の [Upgrades] ページでクラスタ化されたマシンをアップグレードすることもできます。



- (注)** クラスタから個々のマシンを切断する前にアップグレード コマンドを使用すると、AsyncOS によってクラスタ内のすべてのマシンが切断されます。マシンをアップグレードする前に、各マシンをクラスタから切断することを推奨します。各マシンを切断してアップグレードしている間、他のマシンは引き続きクラスタとして動作します。

CLI を使ってクラスタ内のマシンをアップグレードするには、次の手順を実行します。

ステップ 1 クラスタ内のマシン上で、`clusterconfig` の `disconnect` 操作を使用します。たとえば、マシン `losangeles.example.com` を切断するには、`clusterconfig disconnect losangeles.example.com` と入力します。`commit` は必要ありません。

ステップ 2 必要に応じて、`suspendlistener` コマンドを使ってアップグレード処理中の新しい接続やメッセージの受信を停止します。

ステップ 3 `upgrade` コマンドを実行して、`AsyncOS` を新しいバージョンにアップグレードします。



(注) クラスタ内のマシンをすべて切断するように求める警告または確認メッセージは無視してください。マシンがすでに切断されているため、この時点で `AsyncOS` によってクラスタ内の他のマシンが切断されることはありません。

ステップ 4 マシンの `AsyncOS` のバージョンを選択します。アップグレードが完了すると、マシンがリブートします。

ステップ 5 アップグレードされたマシン上で `resume` コマンドを使って新しいメッセージの受信を開始します。

ステップ 6 クラスタ内のマシンごとにステップ 1 ~ 5 を繰り返します。



(注) クラスタからマシンを切断すると、そのマシンを使って他のマシンの設定を変更できません。クラスタの設定を変更することはできますが、設定の同期が取れなくなるため、マシンが切断されている間は設定を変更しないでください。

ステップ 7 すべてのマシンをアップグレードした後で、アップグレードされたマシンごとに `clusterconfig` の `reconnect` 操作を実行してマシンを再接続します。たとえば、マシン `losangeles.example.com` を再接続するには、`clusterconfig reconnect losangeles.example.com` と入力します。クラスタに接続できるのは、同じバージョンの `AsyncOS` を実行しているマシンだけです。

コンフィギュレーション ファイル コマンド

設定情報は、クラスタ内の個々のシステムに保存されます。([System Administration] > [Configuration File] ページまたは `exportconfig` コマンドを使って) マシンモードでコンフィギュレーション ファイルをエクスポートすると、現在設定中のマシンのローカル ディスクにファイルがエクスポートされます。クラスタ モードまたはグループ モードでは、現在ログインしているマシンにファイルが保存されます。ファイルのエクスポート先となるマシンは、ユーザに通知されます。



(注)

[System Administration] > [Configuration File] ページまたは `loadconfig` コマンドを使ってクラスタ全体（またはクラスタ化されたマシン）の設定をあらかじめ保存しておき、後でその設定を一連の（同じまたは異なる）マシンに復元する方法はサポートされていません。

設定のリセット

クラスタに含まれるマシン上で（ローカル マシン モード限定で）、([System Administration] > [Configuration File] ページまたは `resetconfig` コマンドを使って) 設定をリセットすると、そのマシンは工場出荷時のデフォルト設定に戻ります。そのマシンがそれまでクラスタに含まれていた場合は、設定をリセットすることで、その設定がクラスタからも自動的に削除されます。

CLI コマンドのサポート

すべてのコマンドがクラスタに対応

AsyncOS のすべての CLI コマンドがクラスタ対応になりました。一部のコマンドは、クラスタ モードで実行したときの動作がやや異なります。たとえば、次のコマンドをクラスタに含まれるマシン上で実行すると、コマンドの動作が変更されます。

commit および clearchanges コマンド

commit

`commit` コマンドは、現在のモードに関係なく、すべての変更をクラスタの 3 つのレベルのすべてで確定します。

commitdetail

`commitdetail` コマンドは、クラスタ内のすべてのマシンに反映された設定変更の詳細を表示します。

clearchanges

`clearchanges` (`clear`) コマンドは、現在のモードに関係なく、すべての変更をクラスタの 3 つのレベルのすべてでクリアします。

新たに追加された操作

CLUSTERSHOW

各コマンドに、コマンド設定時のモードを表示する `CLUSTERSHOW` 操作が追加されました。

下位レベルの既存の設定で上書きされる操作を実行する CLI コマンドを入力すると、通知メッセージが表示されます。たとえば、クラスタ モードでコマンドを入力すると、次のような通知メッセージが表示されることがあります。

Note: Changes to these settings will not affect the following groups and machines because they are overriding the cluster-wide settings:

```
East_Coast, West_Coast
```

```
facilities_A, facilities_B, receiving_A
```

グループ モードの設定を編集した場合も、同じようなメッセージが表示されます。

制限コマンド

ほとんどの CLI コマンドとそれに対応する GUI ページは、任意のモード（クラスタ、グループ、マシン）で実行できます。しかし、一部のコマンドとページは 1 つのモードだけに制限されています。

システム インターフェイスには（GUI と CLI のどちらにも）、コマンドが制限されること、およびどのように制限されるかが必ず明示されます。コマンドを設定するための適切なモードに簡単に切り替えることができます。

- GUI では、[Change Mode] メニューまたは [Settings for this features are currently defined at:] リンクを使ってモードを切り替えます。
- CLI では、`clustermode` コマンドを使ってモードを切り替えます。

次のコマンドは、クラスタ モードに制限されます。

表 8-2 クラスタ モードに制限されるコマンド

<code>clusterconfig</code>	<code>sshconfig</code>
<code>clustercheck</code>	<code>userconfig</code>
<code>passwd</code>	

上記のコマンドをグループ モードまたはマシン モードで実行しようとする、警告メッセージが表示され、適切なモードに切り替えることができます。



(注)

`passwd` コマンドは、ゲスト ユーザが使用できるようにするための特例です。ゲスト ユーザがクラスタ内のマシン上で `passwd` コマンドを実行すると、警告メッセージは表示されず、ユーザのモードを変更せずにクラスタ レベルのデータに対して操作が行われます。他のすべてのユーザに対しては、上記の（他の制限されるコンフィギュレーション コマンドと同じ）動作が行われます。

次のコマンドは、マシン モードに制限されます。

<code>antispamstatus</code>	<code>etherconfig</code>	<code>resume</code>	<code>suspenddel</code>
<code>antispamupdate</code>	<code>featurekey</code>	<code>resumedel</code>	<code>suspendlistener</code>
<code>antivirusstatus</code>	<code>hostrate</code>	<code>resumelistener</code>	<code>techsupport</code>
<code>antivirusupdate</code>	<code>hoststatus</code>	<code>rollovernow</code>	<code>tophosts</code>
<code>bouncerecipients</code>	<code>interfaceconfig</code>	<code>routeconfig</code>	<code>topin</code>
<code>deleterecipients</code>	<code>ldapflush</code>	<code>sbstatus</code>	<code>trace</code>

delivernow	ldapttest	setgateway	version
diagnostic	nslookup	sethostname	vofflush
dnsflush	quarantineconfig	settime	vofstatus
dnslistflush	rate	shutdown	workqueue
dnslistttest	reboot	status	
dnsstatus	resetcounters	suspend	

上記のコマンドをクラスタ モードまたはグループ モードで実行しようとする、警告メッセージが表示され、適切なモードに切り替えることができます。

次のコマンドは、さらにログイン ホスト（ユーザがログインしているマシン）に制限されます。これらのコマンドを使用するには、ローカル ファイル システムにアクセスできる必要があります。

表 8-3 ログイン ホスト モードに制限されるコマンド

last	resetconfig	tail	upgrade
ping	supportrequest	telnet	who

GUI でのクラスタの管理

GUI では、クラスタの作成、クラスタへの参加、およびクラスタ固有の設定の管理（`clusterconfig` コマンドと同等の操作）を行うことはできませんが、クラスタ内のマシンの参照、設定の作成や削除、およびクラスタ間、グループ間、マシン間での設定のコピーや移動（つまり、`clustermode` および `clusterset` と同等の操作）を行うことができます。

GUI に最初にログインすると、[Incoming Mail Overview] ページが表示されます。現在のマシンがクラスタのメンバとして設定されている場合は、中央集中型管理機能が GUI でイネーブルになっていることも通知されます。

[Incoming Mail Overview] ページは、表示しているメール フロー モニタリングのデータがローカル マシンに格納されるため、ログイン ホストに制限されるコマンドの例です。別のマシンの [Incoming Mail Overview] レポートを表示するには、そのマシンの GUI にログインする必要があります。

アプライアンス上でクラスタリングがイネーブルになっている場合は、ブラウザのアドレス フィールドの URL に注意してください。この URL には、必要に応じて machine、group、または cluster という単語が含まれています。たとえば、最初にログインしたときの [Incoming Mail Overview] ページの URL は次のように表示されます。

`https://ホスト名/machine/連番/monitor/incoming_mail_overview`



(注)

[Monitor] メニューの [Incoming Mail Overview] ページと [Incoming Mail Details] ページは、ログインマシンに制限されます。

[Mail Policies]、[Security Services]、[Network]、[System Administration] の各タブには、ローカルマシンに制限されないページが表示されます。[Mail Policies] タブをクリックすると、GUI 内の中央集中型管理情報が変更されます。

図 8-2 GUI の中央集中型管理機能：設定が規定されていない場合

Incoming Mail Policies モードインジケータ

Mode — Machine:example.com Change Mode...

Centralized Management Options

Inheriting settings from Cluster: americas

> Override Settings

Settings for this feature are currently defined at:

- Cluster: americas

Find Policies

Email Address:

Recipient

Sender

Policies

Order	Policy Name	Anti-Spam	Anti-Virus	Virus Outbreak Filters	Content Filters	Delete
	Default Policy	IronPort Positive: Deliver Suspected: Disabled	Repaired: Deliver Encrypted: Deliver Unscannable: Deliver Virus Positive: Drop	Enabled	Disabled	

Key: Default Custom Disabled

中央集中型管理ボックス

継承された設定プレビュー紛示

図 8-2 では、このマシンの現在の機能に関する設定がクラスタ モードから継承されています。継承された設定は薄いグレーで表示（プレビュー）されます。これらの設定を保持することも、クラスタ レベルの設定をこのマシン用に上書きして変更することも可能です。



(注)

継承された設定（プレビュー表示）には、常にクラスタから継承した設定が表示されます。グループレベルとクラスタレベルの間で依存するサービスをイネーブルまたはディセーブルにするときは注意してください。詳細については、「[設定のコピーと移動](#)」（P.8-16）を参照してください。

[Override Settings] リンクをクリックすると、この機能に対応する新しいページが表示されます。このページでは、マシンモードの新しい設定を作成できます。デフォルト設定をそのまま使用することもできますが、別のモードですでに設定している場合は、それらの設定をこのマシンにコピーすることもできます。

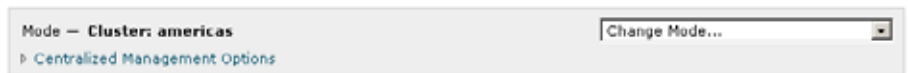
図 8-3 GUI の中央集中型管理機能：新しい設定の作成



または、[図 8-2](#) に示すように、この設定がすでに規定されているモードに移動することもできます。これらのモードは、中央集中型管理ボックスの下部にある [Settings for this feature are currently defined at:] に表示されます。ここには、設定が実際に規定されているモードだけが表示されます。別のモードで規定された（別のモードから継承された）設定のページを表示すると、ページ上にそれらの設定が表示されます。

表示されたいずれかのモード（たとえば、[図 8-2](#) に示す [Cluster: Americas] リンク）をクリックすると、そのモードの設定を表示して管理できる新しいページが表示されます。

図 8-4 GUI の中央集中型管理機能：定義された設定

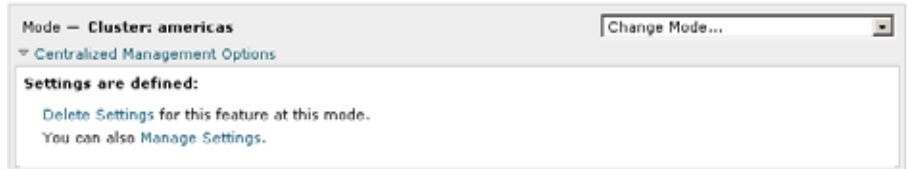


特定のモードで設定を規定すると、中央集中型管理ボックスがすべてのページに最小化された状態で表示されます。[Centralized Management Options] リンクをクリックすると、ボックスが展開され、現在のモードで現在のページに関して設

定できるオプションのリストが表示されます。[Manage Settings] ボタンをクリックすると、現在の設定を別のモードにコピーまたは移動したり、設定を完全に削除したりできます。

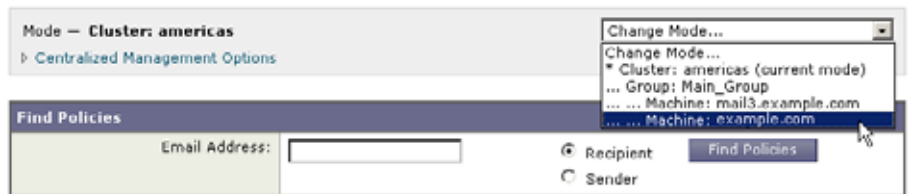
たとえば、[図 8-5](#) では、[Centralized Management Options] リンクがクリックされ、設定可能なオプションが表示されています。

図 8-5 GUI の中央集中型管理機能：設定の管理



ボックスの右側には [Change Mode] メニューが表示されます。このメニューには現在のモードが表示され、このメニューを使っていつでも他のモード（クラスター、グループ、またはマシン）に移動できます。

図 8-6 [Change Mode] メニュー
Incoming Mail Policies



別のモードを表すページに移動すると、中央集中型管理ボックスの左側にある [Mode —] というテキストが一時的に黄色で点滅し、モードが変更されたことを知らせます。

特定のタブに含まれる一部のページは、マシンモードに制限されています。ただし、(現在のログインホストに制限される) [Incoming Mail Overview] ページとは異なり、これらのページはクラスター内のどのマシンでも使用できます。

図 8-7 中央集中型管理機能：マシンに制限される機能



[Change Mode] メニューから管理するマシンを選択します。テキストが一時的に点滅し、モードが変更されたことを知らせます。

クラスタ通信

クラスタ内のマシンは、メッシュ ネットワークを使って相互に通信します。デフォルトでは、すべてのマシンが他のすべてのマシンに接続します。1 つのリンクが切断されても、他のマシンが更新を受信できなくなることはありません。

デフォルトでは、クラスタ内のすべての通信が SSH を使って保護されます。各マシンは、ルート テーブルのコピーをメモリ内に保持し、リンクの切断と確立に応じてメモリ内のテーブルを変更します。また、クラスタに含まれる他のすべてのマシンに対して定期的に（1 分間隔で）「ping」を実行します。これにより、リンクの最新状態を確認し、ルータや NAT がタイムアウトした場合でも接続を維持します。

DNS とホスト名の解決

マシンをクラスタに接続するには、DNS が必要です。クラスタの通信は、通常、(マシン上のインターフェイスのホスト名ではなく) マシンの DNS ホスト名を使って開始されます。ホスト名を解決できないマシンは、形式的にはクラスタに含まれていても、実際にはクラスタ内の他のマシンと通信できません。

ホスト名がアプライアンス上の SSH または CCS をイネーブルにした正しい IP インターフェイスを指すように、DNS を設定する必要があります。これは非常に重要です。DNS が SSH または CCS をイネーブルにしていない別の IP アドレスを参照すると、ホストが見つかりません。中央集中型管理では、インターフェイスごとのホスト名ではなく、sethostname コマンドで設定した「メイン ホスト名」が使用されます。

IP アドレスを使ってクラスタ内の他のマシンに接続する場合は、接続先のマシンが接続元の IP アドレスの逆ルックアップを実行できる必要があります。DNS 内にその IP アドレスがないために逆ルックアップがタイムアウトすると、そのマシンはクラスタに接続できません。

クラスタリング、完全修飾ドメイン名、およびアップグレード

AsyncOS をアップグレードすると、DNS の変更によって接続が失われることがあります。(クラスタ内のマシン上のインターフェイスのホスト名ではなく) クラスタ内のマシンの完全修飾ドメイン名を変更する必要がある場合は、AsyncOS をアップグレードする前に、sethostname を使ってホスト名の設定を変更し、そのマシンの DNS レコードを更新する必要があることに注意してください。

クラスタ通信のセキュリティ

Cluster Communication Security (CCS) は、標準の SSH サービスに似たセキュアシェル サービスです。IronPort に CCS が実装されたのは、クラスタ通信に標準の SSH を使用することに対する懸念に応えるためです。マシン間の SSH 通信では、同じポートで (管理者などの) 通常のログインを開きます。多くの管理者は、クラスタ化されたマシン上で通常のログインを開くことを好みません。

ヒント: CCS はデフォルトですが、クラスタ化されたマシン間のポート 22 の通信がファイアウォールによってブロックされない場合は、CCS をイネーブルにしないでください。クラスタリングでは、すべてのマシン間でフルメッシュの SSH トンネル (ポート 22 上) が使用されます。いずれかのマシンですでに CCS をイネーブルにした場合は、クラスタからすべてのマシンを削除し、最初からやり直してください。クラスタ内の最後のマシンを削除すると、クラスタが削除されます。

CCS は、管理者が CLI へのログインではなく、クラスタ通信を開始できるように強化されています。デフォルトでは、このサービスはディセーブルです。アプライアンスの中央集中型管理機能をイネーブルにすると、interfaceconfig コマンドで他のサービスをイネーブルにするためのプロンプトが表示されたときに、CCS をイネーブルにするかどうかの選択を求められます。次の例を参考にしてください。

```
Do you want to enable SSH on this interface? [Y]>
```

```
Which port do you want to use for SSH?
```

```
[22]>
```

```
Do you want to enable Cluster Communication Service on this
interface?
```

```
[N]> y
```

```
Which port do you want to use for Cluster Communication Service?
```

```
[2222]>
```

CCS のデフォルトのポート番号は 2222 です。必要な場合は、これを別の開いている未使用のポート番号に変更できます。マシンの参加が完了し、参加したマシンにクラスタのすべての設定データが適用されると、次の質問が表示されます。

```
Do you want to enable Cluster Communication Service on this
interface? [N]> y
```

```
Which port do you want to use for Cluster Communication Service?
```

```
[2222]>
```

クラスタの整合性

中央集中型管理をイネーブルにすると、「クラスタ対応」のマシンはクラスタ内の他のマシンへのネットワーク接続を継続的に確認します。この確認は、クラスタ内の他のマシンに対する定期的な「ping」によって行われます。

特定のマシンとの通信の試行がすべて失敗すると、通信を試行したマシンはリモート ホストが切断されたことを示すメッセージをログに記録します。システムはリモート ホストがダウンしたことを示すアラートを管理者に送信します。

マシンがダウンしても、確認用の ping は引き続き送信されます。マシンがクラスタのネットワークに再び参加すると、それまでオフラインだったマシンが更新をダウンロードできるように、同期コマンドが実行されます。この同期コマンド

は、一方のマシンに含まれる変更がもう一方のマシンに含まれるかどうかも判定します。含まれない場合は、それまでダウンしていたマシンが更新をサイレントでダウンロードします。

切断 / 再接続

マシンは、クラスタから切断できます。ときには、たとえばマシンをアップグレードするために、マシンを意図的に切断することがあります。切断は、たとえば停電やソフトウェアまたはハードウェアのエラーのために突発的に起きることもあります。クラスタから切断されたマシンに直接アクセスしてマシンを設定することはできますが、切断されたマシンを再接続するまでは、クラスタ内の他のマシンに変更が反映されません。

マシンをクラスタに再接続すると、そのマシンはただちにすべてのマシンに再接続しようとしています。

理論的には、クラスタから 2 台のマシンを切断した場合、同じような変更が各マシンのローカル データベースに同時に確定される可能性があります。これらのマシンをクラスタに再接続すると、これらの変更の同期が試行されます。競合がある場合は、最新の変更が記録されます（他の変更はすべて破棄されます）。

アプライアンスは、変更されるすべての変数を確定時にチェックします。確定データには、バージョン情報、連番 ID、その他の比較可能な情報が含まれます。変更しようとしているデータが以前の変更と競合することがわかった場合は、変更を破棄するオプションが表示されます。たとえば、次のようなメッセージが表示されます。

```
(Machine mail3.example.com)> clustercheck
```

```
This command is restricted to "cluster" mode. Would you like to
switch to "cluster" mode? [Y]> y
```

```
Checking Listeners (including HAT, RAT, bounce profiles)...
```

```
Inconsistency found!
```

```
Listeners (including HAT, RAT, bounce profiles) at Cluster
enterprise:
```

```
mail3.example.com was updated Mon Sep 12 10:59:17 2005 PDT by
'admin' on mail3.example.com
```

```
test.example.com was updated Mon Sep 12 10:59:17 2005 PDT by
'admin' on mail3.example.com
```

How do you want to resolve this inconsistency?

1. Force entire cluster to use test.example.com version.
2. Force entire cluster to use mail3.example.com version.
3. Ignore.

```
[1]>
```

変更を破棄しなかった場合、変更は（確定されませんが）保持されます。変更を現在の設定に照らして確認し、その後の処理方法を決めることができます。

また、いつでも `clustercheck` コマンドを使ってクラスタが正常に動作していることを確認できます。

```
losangeles> clustercheck
```

```
Do you want to check the config consistency across all machines in
the cluster? [Y]> y
```

```
Checking losangeles...
```

```
Checking newyork...
```

```
No inconsistencies found.
```

互いに依存する設定



クラウド電子メールセキュリティ アプライアンスでは次の設定を行わないことをお勧めします。

中央集中型管理環境では、互いに依存する設定が異なるモードで設定されることがあります。設定モデルの高い柔軟性によって複数のモードで設定できるため、個々のマシンでどの設定が使用されるかは継承の法則に基づいて決まります。しかし、一部の設定は他の設定に依存しており、依存する設定の適用範囲は同じモードの設定に制限されません。したがって、あるレベルで特定のマシン用に設定された設定を参照する設定を別のレベルで設定することも可能です。

互いに依存する設定の最も一般的な例は、ページ上の別のクラスタ セクションからデータを取得する選択フィールドに関するものです。たとえば、次の機能をそれぞれ異なるモードで設定できます。

- LDAP クエリーの使用
- ディクショナリまたはテキスト リソースの使用
- バウンス プロファイルまたは SMTP 認証プロファイルの使用。

中央集中型管理には、制限コマンドと非制限コマンドがあります。（「[制限コマンド](#)」(P.8-22) を参照）。非制限コマンドは、通常、クラスタ全体で共有できるコンフィギュレーション コマンドです。

`listenerconfig` コマンドは、クラスタ内のすべてのマシンに設定できるコマンドの例です。非制限コマンドは、クラスタ内のすべてのマシンに反映できるため、マシンごとにデータを変更する必要がないコマンドです。

一方、制限コマンドは特定のモードだけに適用されるコマンドです。たとえば、ユーザを特定のマシン用に設定することはできません。ユーザはクラスタ全体に 1 セットしか設定できません（そうしないと、同じログイン名でリモートマシンにログインできなくなります）。同じように、メール フロー モニタのデータ、システム概要のカウンタ、およびログファイルは、マシン単位でしか保持されないため、これらのコマンドやページはマシンだけに制限する必要があります。

定期レポートはクラスタ全体で同じに設定できますが、レポートの表示はマシン別に行われます。したがって、GUI の [Scheduled Reports] ページは 1 つでも、設定はクラスタ モードで行い、レポートの表示はマシン モードで行う必要があります。

[System Time] のページには、`settz`、`ntpconfig`、`settime` の各コマンドが含まれ、制限コマンドと非制限コマンドが混在しています。この場合、`settime` は（時間の設定がマシンに固有のものであるため）マシン モードだけに制限する必要がありますが、`settz` と `ntpconfig` はクラスタ モードまたはグループ モードで設定できます。

次の例について考えてみます。

図 8-8 互いに依存する設定の例

Mode — Cluster: americas Change Mod

▶ Centralized Management Options

Listener Settings

Name:	IncomingMail
Type of Listener:	Public
Interface:	Data 1 TCP Port: 25
Bounce Profile:	Default
Disclaimer Above:	None <i>Disclaimer text will be applied above the message body.</i>
Disclaimer Below:	<div style="border: 1px solid red; padding: 2px;"> None None disclaimer (- Unavailable on Machine: buttercup.run) </div>
SMTP Authentication Profile:	
Certificate:	test
▶ SMTP Address Parsing Options:	Optional settings for controlling parsing in SMTP "MAIL FROM" and "RCPT
▶ Advanced:	Optional settings for customizing the behavior of the Listener
▶ LDAP Queries:	Optional settings for controlling LDAP queries associated with this Listene

この図では、リスナー「IncomingMail」がマシン レベルでのみ設定された「disclaimer」という名前のフッターを参照しています。使用可能なフッター リソースのドロップダウン リストには、クラスタでは使用できるのにマシン「buttercup.run」では使用できないフッターが表示されています。このジレンマを解消するには、次の 2 つの方法があります。

- フッター「disclaimer」をマシン レベルからクラスタ レベルに格上げする
- リスナーをマシン レベルに格下げして、相互依存を解消する

中央集中型管理されたシステムの特長を最大限に活かすためには、1 つめの方法を推奨します。クラスタ化されたマシンの設定を調整するときは、設定間の相互依存に注意してください。

ベスト プラクティスとよくあるご質問

ベスト プラクティス

クラスタを作成すると、現在ログインしているマシンが自動的に最初の実機としてクラスタに追加され、**Main_Group** にも追加されます。マシンのマシンレベルの設定は、できる限りクラスタレベルに移動されます。グループレベルの設定は存在せず、マシンレベルに残された設定は、クラスタレベルでは意味を成さないでクラスタ化できません。例として、IP アドレスや機能キーなどがあります。

設定はできる限りクラスタレベルに残します。クラスタ内の 1 つの実機にだけ異なる設定が必要な場合は、そのクラスタ設定をそのマシンのマシンレベルにコピーします。この場合は、設定を移動しないでください。工場出荷時のデフォルト値がない設定（HAT テーブル、SMTPROUTES テーブル、LDAP サーバプロファイルなど）を移動すると、クラスタ設定を継承するシステムに空のテーブルが作成され、電子メールが処理されなくなるおそれがあります。

マシンにクラスタ設定を再度継承させるには、**CM** の設定を管理し、マシンの設定を削除します。マシンがクラスタ設定を上書きするかどうかは、次のメッセージが表示されたときにわかります。

```
Settings are defined:
```

```
To inherit settings from a higher level: Delete Settings for this feature at this mode.
```

```
You can also Manage Settings.
```

```
Settings for this feature are also defined at:
```

```
Cluster: xxx
```

または、次のメッセージが表示されます。

```
Delete settings from:
```

```
Cluster: xxx
```

```
Machine: yyyy.domain.com
```


コピーと移動

コピーする必要がある場合：クラスタに設定を作成し、グループまたはマシンには設定を作成しないか、別の設定を作成する場合。

移動する必要がある場合：クラスタには設定を作成せず、グループまたはマシンに設定を作成する場合。

適切な CM の設計方法

LIST 操作で CM マシンのリストを出力すると、次のように表示されます。

```
cluster = CompanyName
Group Main_Group:
    Machine lab1.example.com (Serial #: XXXXXXXXXXXX-XXXXXXX)
    Machine lab2.example.com (Serial #: XXXXXXXXXXXX-XXXXXXX)
Group Paris:
    Machine lab3.example.com (Serial #: XXXXXXXXXXXX-XXXXXXX)
    Machine lab4.example.com (Serial #: XXXXXXXXXXXX-XXXXXXX)
Group Rome:
    Machine lab5.example.com (Serial #: XXXXXXXXXXXX-XXXXXXX)
    Machine lab6.example.com (Serial #: XXXXXXXXXXXX-XXXXXXX)
```

現在変更しているレベルを忘れないように注意してください。たとえば、(RENAMEGROUP を使って) Main_Group の名前を変更した場合は、次のように表示されます。

```
cluster = CompanyName
Group London:
    Machine lab1.cable.nu (Serial #: 000F1FF7B3F0-CF2SX51)
    ...
```

しかし、最初にグループ レベルで London のシステムを変更すると、クラスタ レベルを基本的な設定を行うための通常の設定レベルとして使用しなくなるため、このような設定は管理者にとって混乱の元です。

ヒント：グループにクラスタと同じ名前を付けること（クラスタ「London」とグループ「London」など）は推奨しません。グループ名としてサイト名を使用する場合、クラスタに場所を表す名前を付けることは推奨しません。

正しい方法は、前述のように、できるだけ多くの設定をクラスタ レベルに残すことです。ほとんどの場合、プライマリ サイトや主要なマシン群を **Main_Group** に残し、グループを追加のサイト用に使用してください。これは、両方のサイトを「同等」に扱う場合にも当てはまります。**CM** にはプライマリ/セカンダリ サーバやマスター/スレーブ サーバがなく、クラスタ化されたすべてのマシンがピアになることを思い出してください。

ヒント：追加のグループを使用する場合は、マシンをクラスタに追加する前にグループを簡単に準備できます。

手順：サンプル クラスタの設定

このサンプル クラスタを設定するには、`clusterconfig` を実行する前に、すべてのマシン上ですべての GUI からログアウトします。プライマリ サイトのいずれかのマシン上で `clusterconfig` を実行します。次に、他のローカルマシンとリモート マシンのうち、(IP アドレスなどのマシン専用の設定を除いて) できるだけ多くの設定を共有する必要があるマシンだけをこのクラスタに追加します。`clusterconfig` コマンドを使ってリモート マシンをクラスタに追加できません。リモート マシン上の CLI を使って `clusterconfig` (既存のクラスタへの参加) を実行する必要があります。

前述の例では、**lab1** にログインし、`clusterconfig` を実行して **CompanyName** という名前のクラスタを作成しています。同じ要件のマシンは 1 つしかないのので、**lab2** にログインし、`saveconfig` で既存の設定を保存します (この設定は **lab1** の設定のほとんどを継承して大幅に変更されます)。次に、**lab2** 上で `clusterconfig` を使って既存のクラスタに参加します。他にも同じようなポリシーと設定を必要とするマシンがこのサイトにある場合は、上記の手順を繰り返します。

`CONNSTATUS` を実行して、DNS でホスト名が正しく解決されることを確認します。マシンがクラスタに追加されると、新しいマシンのほとんどの設定は **lab1** から継承され、古い設定は消失します。追加されたマシンが運用マシンである場合は、これまでの設定の代わりに新しい設定を使ってメールが引き続き処理されるかどうかを予測する必要があります。マシンをクラスタから削除しても、そのマシンが古い専用の設定に戻ることはありません。

次に、例外となるマシンの数を数えます。例外が 1 台しかない場合は、マシンレベルの設定をいくつか追加すればよく、そのマシン用に追加のグループを作成する必要はありません。そのマシンをクラスタに追加し、設定をマシン レベルにコピーする作業を始めます。このマシンが既存の運用マシンである場合は、設定をバックアップし、前述のように電子メール処理の変更を検討する必要があります。

前述の例のように、例外が 2 台以上ある場合は、それらのマシンがクラスタで共有されない設定を共有するかどうかを判断します。共有する場合は、これらのマシン用のグループを 1 つ以上作成します。共有しない場合は、各マシンでマシンレベルの設定を作成すればよく、追加のグループを作成する必要はありません。

前述の例では、クラスタにすでに含まれているいずれかのマシン上で CLI の `clusterconfig` を実行し、**ADDGROUP** を選択する必要があります。この作業を 2 回行います (**Paris** に対して 1 回、**Rome** に対して 1 回)。

これで、**GUI** と **CLI** を使ってクラスタ用の設定とすべてのグループ (まだマシンがないグループも含む) 用の設定を作成できます。各マシンのマシン固有の設定を作成できるようになるのは、マシンをクラスタに追加した後です。

上書き (例外) 用の設定を作成する最適な方法は、上位レベル (クラスタなど) から下位レベル (グループなど) に設定をコピーすることです。

たとえば、クラスタを作成した後の `dnsconfig` の初期設定は次のようになります。

```
Configured at mode:
Cluster: Yes
Group Main_Group: No
Group Paris: No
Group Rome: No
Machine lab2.cable.nu: No
```

この DNS の設定を「グループにコピー」すると、次のようになります。

```
Configured at mode:
Cluster: Yes
Group Main_Group: No
Group Paris: Yes
Group Rome: No
Machine lab2.cable.nu: No
```

ここで、**Paris** グループ レベルの DNS の設定を編集すると、**Paris** グループの他のマシンはその設定を継承します。**Paris** グループ以外のマシンは、マシン固有の設定がない限り、クラスタの設定を継承します。DNS の設定に加えて、**SMTPROUTES** の設定もグループ レベルで作成するのが一般的です。

ヒント：CLI のさまざまなメニューで CLUSTERSET 機能を使用するときは、設定をすべてのグループにコピーする特別なオプションを使用できます。このオプションは GUI では使用できません。

ヒント：完成されたリスナーは、グループまたはクラスタから自動的に継承されるため、通常はクラスタ内の最初のシステム上でのみリスナーを作成します。これによって管理作業が大幅に軽減されます。ただし、そのためにはグループまたはクラスタ全体でインターフェイスに同じ名前を付ける必要があります。

設定をグループレベルで正しく規定した後は、マシンをクラスタに追加し、このグループに含めることができます。これには次の 2 つの手順が必要です。

まず、残りの 4 つのシステムをクラスタに追加するため、各システム上で `clusterconfig` を実行します。大きく複雑なクラスタほど、追加処理にかかる時間も長くなり、数分かかることもあります。LIST および CONNSTATUS サブコマンドを使って追加処理の進行状況をモニタできます。追加処理が完了したら、SETGROUP を使ってマシンを Main_Group から Paris および Rome に移動します。クラスタに追加されたすべてのマシンが最初に Paris や Rome の設定ではなく Main_Group の設定を継承することは避けられません。これは、新しいシステムがすでに稼動中である場合、メールフローのトラフィックに影響する可能性があります。

ヒント：試験用マシンを運用マシンと同じクラスタに含めないでください。試験用システムには新しいクラスタ名を使用してください。これによって、予期しない変更（たとえば、誰かが試験用システムを変更し、誤って運用メールを消失するなど）に対する防御層が追加されます。

GUI でクラスタのデフォルト以外の CM 設定を使用する場合のオプションの要約

設定の上書き（デフォルトの設定から開始）。たとえば、SMTPROUTES 設定のデフォルトの設定は空のテーブルであり、テーブルを最初から作成できます。

設定の上書き（ただし、クラスタ「xxx」またはグループ「yyy」から現在継承している設定のコピーから開始）。たとえば、SMTPROUTES テーブルの新しいコピーをグループレベルで使用できます。このテーブルは、初期状態ではクラスタのテーブルとまったく同じです。（SETGROUP で）同じグループに追加されたすべての IronPort アプライアンスにこのテーブルが適用されます。このグループに含まれないマシンでは、引き続きクラスタレベルの設定が使用されます。この独立したテーブルで SMTPROUTES を変更しても、他のグループ、クラスタの設定を継承するマシン、および個々のマシンレベルで設定が規定されているマシンには影響しません。これが最も一般的な選択です。

中央集中型管理オプションのサブメニューである [Manage Settings]。このメニューでは、上記のように設定をコピーできますが、設定を移動または削除することもできます。SMTPROUTES をグループまたはマシン レベルに移動すると、ルート テーブルはクラスタ レベルでは空になり、より具体的なレベルに存在することになります。

[Manage Settings]。同じ SMTPROUTES の例で削除オプションを使用した場合も、クラスタの SMTPROUTES テーブルが空になります。SMTPROUTES をグループ レベルまたはマシン レベルですでに設定している場合は、これで問題ありません。クラスタ レベルの設定を削除し、グループまたはマシンの設定だけに依存することは推奨しません。クラスタ全体の設定は、新しく追加したマシンに対するデフォルトとして有用であり、これを保持することによって、管理する必要があるグループまたはサイトの設定の数が 1 つ減ります。

セットアップと設定に関する質問

Q. 中央集中型管理の機能キーを受け取るにはどうすればよいですか。

A. IronPort アプライアンスをクラスタに追加する前に、すべてのアプライアンスに中央集中型管理用の一意の機能キーをインストールする必要があります。キーを入手するには、IronPort のカスタマー サポートに連絡してください。個々のキーをインストールするには、[System Administration] > [Feature Keys] ページ (GUI) または featurekey コマンド (CLI) を使用します。

Q. 設定が完了し、リスナーやユーザからメールを受信しているスタンドアロンのアプライアンスがあります。中央集中型管理の機能キーを適用し、新しいクラスタを作成すると、これまでの設定はどうなりますか。

A. アプライアンスがすでに「スタンドアロン」モードで設定されている場合は、クラスタを作成したときにそのスタンドアロンの設定が使用されます。つまり、clusterconfig -> create cluster コマンドを使って新しいクラスタを作成すると、最初にすべての設定がクラスタ レベルで設定されます。次にクラスタに参加したマシンは、これらの設定をすべて受け取ります。

Q. これまでスタンドアロンとして設定されていたマシンがあり、既存のクラスタに参加しました。これまでの設定はどうなりますか。

A. マシンがクラスタに参加すると、そのマシンのすべてのクラスタ化可能な設定がクラスタ レベルから継承されます。クラスタに参加した時点で、ローカルで設定されたネットワーク以外の設定は消失し、クラスタや関連するグループの設定で上書きされます。（これにはユーザ/パスワードのテーブルも含まれ、パスワードとユーザはクラスタ内で共有されます）。

Q. クラスタ化されたマシンがあり、それをクラスタから（永続的に）削除しました。これまでの設定はどうなりますか。

A. マシンをクラスタから永続的に削除すると、その設定階層は「平板化」され、そのマシンは引き続きクラスタに含まれていたときと同じように動作します。マシンに継承されたすべての設定が、スタンドアロンとして設定されたマシンに適用されます。

たとえば、クラスタ モードのグローバル配信停止テーブルしかない場合にマシンをクラスタから削除すると、そのグローバル配信停止テーブルのデータがマシンのローカル設定にコピーされます。

一般的な質問

Q. 中央集中型管理されるマシン間でログ ファイルは集約されますか。

A. いいえ。ログ ファイルは引き続き個々のマシンごとに保持されます。IronPort の Mail Flow Central ソフトウェアを使って複数のマシンのメールログを集約し、トラッキングやレポート作成に利用できます。

Q. ユーザ アクセスはどうなりますか。

A. IronPort アプライアンスはクラスタ全体で 1 つのデータベースを共有します。特に、admin アカントはクラスタ全体で 1 つしかありません。

Q. データセンターをクラスタ化するにはどうすればよいですか。

A. データセンターは、それ自体をクラスタにせずに、クラスタ内の「グループ」にするのが理想的です。しかし、データセンター間で共有する設定が多くない場合は、各データセンターを別個のクラスタにした方がうまくいく場合があります。

Q. オフラインのシステムを再接続するとどうなりますか。

A. クラスタにシステムを再接続すると、システム間の同期が試行されます。

ネットワークに関する質問

Q. 中央集中型管理機能は「ピアツーピア」アーキテクチャと「マスター/スレーブ」アーキテクチャのどちらですか。

A. すべてのマシンにすべてのマシン用のあらゆるデータ（使用されないマシン固有の設定を含む）があるため、中央集中型管理機能は「ピアツーピア」アーキテクチャと見なすことができます。

Q. ピアにならないようにアプライアンスをセットアップするにはどうすればよいですか。「スレーブ」システムを設定する必要があります。

A. このアーキテクチャでは、本物の「スレーブ」マシンは設定できません。しかし、マシン レベルで HTTP アクセス (GUI) と SSH/Telnet アクセス (CLI) をディセーブルにすることは可能です。このように GUI アクセスや CLI アクセスができないマシンは、`clusterconfig` コマンドでのみ設定可能です（つまり、ログイン ホストではなくなります）。これはスレーブを設定するのに似ていますが、ログイン アクセスを再度イネーブルにすると、この設定は無効になります。

Q. 複数のセグメント化されたクラスタを作成できますか。

A. クラスタを「島」のように分離することは可能です。実際、たとえばパフォーマンス上の理由などで、このようなクラスタを作成するのが有益な場合もあります。

Q. クラスタ化されたアプライアンスのうち、1 台の IP アドレスとホスト名を再設定したいのですが、再設定した場合、リポート コマンドを実行できるようになる前に GUI/CLI セッションが終了しませんか。

次の手順を実行します。

- a. 新しい IP アドレスを追加します。
- b. リスナーを新しいアドレスに移動します。
- c. クラスタを脱退します。
- d. ホスト名を変更します。
- e. どのマシンから表示した `clusterconfig` の接続リストにも、古いマシン名が表示されないことを確認します。
- f. すべての GUI セッションがログアウトしたことを確認します。
- g. (`interfaceconfig` または `[Network] > [Listeners]` を使って) どのインターフェイスでも CCS がイネーブルになっていないことを確認します。
- h. マシンを再びクラスタに追加します。

Q. 宛先制御機能をクラスタ レベルで適用できますか。それともこの機能はローカル マシン レベル専用ですか。

クラスタ レベルでも設定できますが、制限はマシン単位で適用されます。したがって、接続を 50 個に制限すると、クラスタ内のそれぞれのマシンにその制限が設定されます。

計画と設定

Q. クラスタをセットアップするときに、効率を最大限に高め、問題を最小限に抑えるにはどうすればよいですか。

1. 初期の計画

- できるだけ多くの項目をクラスタ レベルで設定します。
- 例外のみをマシン単位で管理します。
- データセンターが複数ある場合は、たとえば、グループを使ってクラスタ共通でもマシン固有でもない特性を共有します。
- 各アプライアンスのインターフェイスとリスナーに同じ名前を使用します。

2. 制限コマンドに注意してください。

3. 設定間の相互依存に注意してください。

たとえば、`listenerconfig` コマンドは、(クラスタ レベルでも) マシンレベルにしか存在しないインターフェイスに依存します。クラスタ内のどのマシンにもマシンレベルのインターフェイスが存在しない場合、そのリスナーはイネーブルになります。

インターフェイスの削除も `listenerconfig` に影響します。

4. 設定に注意してください。

すでに設定されているマシンがクラスタに参加すると、そのマシン単独の設定は消失します。前に設定した設定の一部を再び適用する場合は、クラスタに参加する前にすべての設定をメモしてください。

「切断された」マシンは、まだクラスタに含まれています。マシンを再接続すると、オフライン中に行った変更がクラスタの他のマシンと同期化されず。

マシンをクラスタから永続的に削除すると、そのマシンはクラスタのメンバとして持っていたすべての設定を保持します。しかし、考えを変えて再びそのマシンをクラスタに追加すると、そのマシンのスタンドアロンの設定はすべて消失します。この場合、設定を意図した状態に復元することはほぼ不可能です。

`saveconfig` コマンドを使って設定の記録を取ってください。



APPENDIX **A**

AsyncOS クイック リファレンス ガイド

この付録のクイック リファレンス ガイドは、適切な CLI コマンドとその目的を調べるときに使用します。

表 A-1 CLI コマンド (確定が不要なもの)

<code>antisppamstatus</code>	Anti-Spam ステータスを表示します。
<code>antisppamupdate</code>	スパム定義を手動で更新します。
<code>antivirusstatus</code>	Anti-Virus ステータスを表示します。
<code>antivirusupdate</code>	ウイルス定義を手動で更新します。
<code>bouncerecipients</code>	キューからメッセージをバウンスします。
<code>clearchanges</code> または <code>clear</code>	変更をクリアします。
<code>commit</code>	変更を確定します。
<code>commitdetail</code>	最後の確定に関する詳細情報を表示します。
<code>diagnostic</code>	ハードウェアおよびソフトウェアのトラブルシューティングユーティリティです。
<code>deleterecipients</code>	キューからメッセージを削除します。
<code>delivernow</code>	メッセージのスケジュールを即時配信用に再設定します。
<code>dnsflush</code>	DNS キャッシュからすべてのエントリをクリアします。
<code>dnslistflush</code>	現在の DNS リスト キャッシュをフラッシュします。

表 A-1 CLI コマンド (確定が不要なもの) (続き)

<code>dnsliststest</code>	DNS ベースのリスト サービスの DNS ルックアップをテストします。
<code>dnsstatus</code>	DNS 統計情報を表示します。
<code>encryptionstatus</code>	PXE エンジンとドメインマッピング ファイルのバージョンを表示します。
<code>encryptionupdate</code>	PXE エンジンの更新を要求します。
<code>featurekey</code>	システム機能キーを管理します。
<code>help</code> または <code>h</code> または <code>?</code>	ヘルプを表示します。
<code>hostrate</code>	特定のホストのアクティビティをモニタします。
<code>hoststatus</code>	特定のホスト名のステータスを取得します。
<code>last</code>	システムに最近ログインしたユーザを表示します。
<code>ldapflush</code>	キャッシュされている LDAP の結果をフラッシュします。
<code>ldaptest</code>	1 つの LDAP クエリー テストを実行します。
<code>mailconfig</code>	現在の設定を電子メールアドレスに送信します。
<code>netstat</code>	ネットワーク接続、ルーティング テーブル、およびいくつかのネットワーク インターフェイス統計情報を表示します。
<code>nslookup</code>	ネームサーバに問い合わせます。
<code>outbreakflush</code>	キャッシュされている発生ルールをクリアします。
<code>outbreakstatus</code>	現在の発生ルールを表示します。
<code>outbreakupdate</code>	発生フィルタ ルールを更新します。
<code>packetcapture</code>	ネットワーク経由で送受信されたパケットを傍受して表示します。
<code>ping</code>	ネットワーク ホストに対して ping を実行します。
<code>quit</code> または <code>q</code> または <code>exit</code>	終了します。
<code>rate</code>	メッセージのスループットをモニタします。
<code>reboot</code>	システムを再起動します。
<code>redirectrecipients</code>	すべてのメッセージを別のリレー ホストにリダイレクトします。

表 A-1 CLI コマンド (確定が不要なもの) (続き)

resetconfig	工場出荷時のデフォルト設定を復元します。
resetcounters	システム内のすべてのカウンタをリセットします。
resume	受信と配信を再開します。
resumedel	配信を再開します。
resumelister	受信を再開します。
rollovernow	ログ ファイルをロール オーバーします。
saveconfig	設定をディスクに保存します。
sbstatus	SenderBase クエリーのステータスを表示します。
settime	システム クロックを手動で設定します。
showconfig	すべての設定値を表示します。
showmessage	メッセージを表示します。
showrecipients	キューからメッセージを表示します。
shutdown	システムをシャットダウンして電源を切ります。
status	システム ステータスを表示します。
supportrequest	IronPort のカスタマー サポートにメッセージを送信します。
suspend	受信と配信を中断します。
suspenddel	配信を中断します。
suspendlister	受信を中断します。
systemsetup	最初のシステム セットアップを実行します。
tail	ログ ファイルの最新部分を継続的に表示します。
techsupport	IronPort のカスタマー サービスがシステムにアクセスできるようにします。
telnet	リモート ホストに接続します。
tlsverify	リモート ホストに対する発信 TLS 接続を確立し、TLS 接続の問題をデバッグします。
tophosts	キューのサイズの順に上位のホストを表示します。
topin	着信接続の数の順に上位のホストを表示します。
trace	システムを通過するメッセージのフローを追跡します。

表 A-1 CLI コマンド (確定が不要なもの) (続き)

<code>traceroute</code>	リモート ホストまでのネットワーク ルートを表示します。
<code>tzupdate</code>	時間帯ルールを更新します。
<code>updatenow</code>	すべてのコンポーネントを更新します。
<code>upgrade</code>	アップグレードをインストールします。
<code>version</code>	システムのバージョン情報を表示します。
<code>who</code>	ログイン中のユーザのリストを表示します。
<code>whoami</code>	現在のユーザ ID を表示します。
<code>workqueue</code>	作業キューの一時停止ステータスを表示および変更します。

表 A-2 に示すコマンドの実行結果を有効にするには、`commit` コマンドを実行する必要があります。

表 A-2 CLI コマンド (確定が必要なもの)

<code>addressconfig</code>	システム生成メールの From: アドレスを設定します。
<code>adminaccessconfig</code>	ネットワーク アクセス リストとバナー ログインを設定します。
<code>alertconfig</code>	電子メール アラートを設定します。
<code>aliasconfig</code>	電子メール エイリアスを設定します。
<code>altsrchoost</code>	Virtual Gateway(tm) のマッピングを設定します。
<code>antisppamconfig</code>	Anti-Spam ポリシーを設定します。
<code>antivirusconfig</code>	Anti-Virus ポリシーを設定します。
<code>bounceconfig</code>	バウンスの動作を設定します。
<code>bvconfig</code>	IronPort バウンス検証を設定します。
<code>certconfig</code>	セキュリティの証明書とキーを設定します。
<code>clusterconfig</code>	クラスタ関連の設定値を設定します。
<code>deliveryconfig</code>	メール配信を設定します。
<code>destconfig</code>	宛先制御を設定します。
<code>dictionaryconfig</code>	コンテンツ ディクショナリを設定します。
<code>dnsconfig</code>	DNS のセットアップを設定します。

表 A-2 CLI コマンド (確定が必要なもの) (続き)

<code>dnslistconfig</code>	DNS リスト サービスのサポートを設定します。
<code>domainkeysconfig</code>	DomainKeys のサポートを設定します。
<code>etherconfig</code>	イーサネットの設定値を設定します。
<code>exceptionconfig</code>	ドメイン例外テーブルを設定します。
<code>filters</code>	メッセージ処理オプションを設定します。
<code>incomingrelayconfig</code>	着信リレーを設定します。
<code>interfaceconfig</code>	イーサネット IP アドレスを設定します。
<code>listenerconfig</code>	メール リスナーを設定します。
<code>ldapconfig</code>	LDAP サーバを設定します。
<code>loadconfig</code>	設定ファイルをロードします。
<code>localeconfig</code>	多言語対応の設定値を設定します。
<code>logconfig</code>	ログ ファイルへのアクセスを設定します。
<code>ntpconfig</code>	NTP タイム サーバを設定します。
<code>outbreakconfig</code>	発生ルールを設定します。
<code>password</code> または <code>passwd</code>	自分のパスワードを変更します。
<code>policyconfig</code>	受信者単位または送信者ベースのポリシーを設定します。
<code>quarantineconfig</code>	システムの検疫を設定します。
<code>routeconfig</code>	IP ルーティング テーブルを設定します。
<code>scanconfig</code>	添付ファイルのスキャン ポリシーを設定します。
<code>senderbaseconfig</code>	SenderBase の接続設定値を設定します。
<code>setgateway</code>	デフォルト ゲートウェイ (ルータ) を設定します。
<code>destconfig</code>	発信ホストの制限値と配信の設定値を設定します。
<code>sethostname</code>	マシンの名前を設定します。
<code>settz</code>	ローカル タイム ゾーンを設定します。
<code>sievechar</code>	Sieve 電子メール フィルタリングの文字を設定します。
<code>smtppathconfig</code>	SMTP 認証プロファイルを設定します。
<code>smtproutes</code>	永続的なドメイン転送を設定します。
<code>snmpconfig</code>	SNMP を設定します。

表 A-2 CLI コマンド (確定が必要なもの) (続き)

<code>sshconfig</code>	SSH キーを設定します。
<code>sslconfig</code>	SSL を設定します。
<code>stripheaders</code>	削除するメッセージ ヘッダーを設定します。
<code>textconfig</code>	テキスト リソースを設定します。
<code>unsubscribe</code>	グローバル配信停止リストを更新します。
<code>updateconfig</code>	システム更新パラメータを設定します。
<code>userconfig</code>	ユーザ アカウントと外部の認証ソースへの接続を管理します。



APPENDIX **B**

アプライアンスへのアクセス

アプライアンスに作成したインターフェイスには、さまざまなサービスを通してアクセスできます。

デフォルトでは、以下のサービスが各インターフェイスに対してイネーブルまたはディセーブルに設定されます。

表 B-1 インターフェイスに対してデフォルトでイネーブルになるサービス

サービス	デフォルト ポート	デフォルトでイネーブルになる	
		管理インターフェイス ^a	新規作成されたインターフェイス
FTP	21	No	No
Telnet	23	Yes	No
SSH	22	Yes	No
HTTP	80	Yes	No
HTTPS	443	Yes	No

a. ここに示した「管理インターフェイス」の設定は、IronPort C10 アプライアンスのデータ 1 インターフェイスのデフォルト値でもあります。

- アプライアンスに Graphical User Interface (GUI; グラフィカル ユーザー インターフェイス) 経由でアクセスする場合は、インターフェイスに対して HTTP と HTTPS の一方または両方をイネーブルにする必要があります。
- アプライアンスにアクセスする目的がコンフィギュレーション ファイルのダウンロードまたはアップロードの場合は、インターフェイスに対して FTP または Telnet をイネーブルにする必要があります。

- ファイルのアップロードやダウンロードは、セキュア コピー (scp) を使用して行うこともできます。

FTP アクセス

アプライアンスに FTP 経由でアクセスする手順は、次のとおりです。

ステップ 1 [Network] > [IP Interfaces] ページまたは `interfaceconfig` コマンドを使用して、インターフェイスに対して FTP アクセスをイネーブルにします。

警告： サービスを `interfaceconfig` コマンドでディセーブルにすると、CLI との接続が解除されることがあります。これは、アプライアンスにどのように接続しているかによって異なります。このコマンドを使用してサービスをディセーブルにする場合は、別のプロトコル、シリアル インターフェイス、または管理ポートのデフォルトの設定を使用してアプライアンスに再接続できることを必ず確認してください。

この例では、FTP アクセスをポート 21（デフォルトのポート）に対してイネーブルにするように管理インターフェイスが編集されています。

図 B-1 [Edit IP Interface] ページ
Edit IP Interface: Management

IP Interface Settings													
Name:	Management												
Ethernet Port:	Management												
IP Address:	172.19.0.86												
Netmask:	255.255.255.0												
Hostname:	buttercup.run												
Services:	<table border="1"> <thead> <tr> <th>Service</th> <th>Port</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td><input checked="" type="checkbox"/> FTP</td> <td>21</td> </tr> <tr> <td><input checked="" type="checkbox"/> Telnet</td> <td>23</td> </tr> <tr> <td><input checked="" type="checkbox"/> SSH</td> <td>22</td> </tr> <tr> <td><input checked="" type="checkbox"/> HTTP</td> <td>80</td> </tr> <tr> <td><input checked="" type="checkbox"/> HTTPS</td> <td>443</td> </tr> </tbody> </table>	Service	Port	<input checked="" type="checkbox"/> FTP	21	<input checked="" type="checkbox"/> Telnet	23	<input checked="" type="checkbox"/> SSH	22	<input checked="" type="checkbox"/> HTTP	80	<input checked="" type="checkbox"/> HTTPS	443
Service	Port												
<input checked="" type="checkbox"/> FTP	21												
<input checked="" type="checkbox"/> Telnet	23												
<input checked="" type="checkbox"/> SSH	22												
<input checked="" type="checkbox"/> HTTP	80												
<input checked="" type="checkbox"/> HTTPS	443												
Redirect HTTP Requests to HTTPS:	<input checked="" type="checkbox"/> Enable Redirect (HTTP and HTTPS Services will be turned on)												

Cancel Submit



(注) 次のステップに進む前に、必ず変更の commit を実行してください。

ステップ 2 インターフェイスに FTP 経由でアクセスします。インターフェイスの正しい IP アドレスを使用していることを確認してください。次の例を参考にしてください。

```
$ ftp 192.168.42.42
```



(注) 多くのブラウザでも、インターフェイスに FTP 経由でアクセスできます。

ステップ 3 実行しようとしているタスクのディレクトリまで移動します。インターフェイスに FTP 経由で接続した後は、一覧から以下のディレクトリを選択してファイルのコピーや追加 (GET と PUT) を行うことができます。次の表を参照してください。

ディレクトリ名	説明
/configuration	<p data-bbox="633 289 1237 375">以下のコマンドからのデータがこのディレクトリにエクスポートされるか、このディレクトリからデータがインポート（保存）されます。</p> <ul data-bbox="633 396 1237 829" style="list-style-type: none"><li data-bbox="633 396 1237 423">• Virtual Gateway マッピング (altsrghost)<li data-bbox="633 431 1237 488">• XML 形式のコンフィギュレーションデータ (saveconfig、loadconfig)<li data-bbox="633 496 1237 524">• ホストアクセステーブル (HAT) (hostaccess)<li data-bbox="633 532 1237 560">• 受信者アクセステーブル (RAT) (rcptaccess)<li data-bbox="633 568 1237 596">• SMTP ルートエントリ (smtproutes)<li data-bbox="633 604 1237 631">• エイリアステーブル (aliasconfig)<li data-bbox="633 639 1237 667">• マスカレードテーブル (masquerade)<li data-bbox="633 675 1237 703">• メッセージフィルタ (filters)<li data-bbox="633 711 1237 738">• グローバル配信停止データ (unsubscribe)<li data-bbox="633 747 1237 774">• trace コマンド用のテストメッセージ<li data-bbox="633 782 1237 829">• セーフリスト/ブロックリストバックアップファイル (sbl<タイムスタンプ><シリアル番号>.csv 形式で保存)

ディレクトリ名	説明
/antivirus	Anti-Virus エンジンのログ ファイルが保存されるディレクトリです。このディレクトリにあるログ ファイルを検査すると、ウイルス定義ファイル (scan.dat) のダウンロードに前回成功したのがいつであるかを手動で調べることができます。
/configuration	ロギングのために自動的に、logconfig コマンドおよび rollovernow コマンドによって作成されます。各ログの詳しい説明については、『Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide』の「Logging」を参照してください。
/system_logs	
/cli_logs	ログ ファイル タイプの違いについては、「Log File Type Comparison」を参照してください。
/status	
/reportd_logs	
reportqueryd_logs	
/ftpd_logs	
/mail_logs	
/asarchive	
/bounces	
/error_logs	
/avarchive	
/gui_logs	
/sntpd_logs	
/RAID.output	
/euq_logs	
/scanning	
/antispam	
/antivirus	
/euqgui_logs	
/ipmitool.output	

ステップ 4 任意の FTP プログラムを使用して、ファイルを該当するディレクトリにアップロードするか、ディレクトリからダウンロードします。

セキュア コピー (scp) アクセス

クライアントのオペレーティング システムがセキュア コピー (scp) コマンドをサポートしている場合は、前の表に示したディレクトリとの間でファイルのコピーを実行できます。たとえば次の例では、クライアント マシンのファイル /tmp/test.txt が、ホスト名 mail3.example.com のアプライアンスの configuration ディレクトリにコピーされます。

このコマンドを実行すると、ユーザ (admin) のパスワードの入力を要求されます。この例は、参考のみを目的として示すものです。セキュア コピーの実装は、オペレーティング システムによって異なることがあります。

```
% scp /tmp/test.txt admin@mail3.example.com:configuration
```

```
The authenticity of host 'mail3.example.com (192.168.42.42)' can't be
established.
```

```
DSA key fingerprint is
69:02:01:1d:9b:eb:eb:80:0c:a1:f5:a6:61:da:c8:db.
```

```
Are you sure you want to continue connecting (yes/no)? yes
```

```
Warning: Permanently added 'mail3.example.com ' (DSA) to the list of
known hosts.
```

```
admin@mail3.example.com's password: (type the password)
```

```
test.txt          100% |*****| 1007
00:00
```

```
%
```

この例では、同じファイルがアプライアンスからクライアント マシンにコピーされます。

```
% scp admin@mail3.example.com:configuration/text.txt .
```

```
admin@mail3.example.com's password: (type the password)
```

```
test.txt          100% |*****| 1007
00:00

%
```

セキュア コピー (scp) は、FTP に代わる手段として Cisco IronPort アプライアンスとの間でファイルを転送するのに使用できます。



(注)

セキュア コピー (scp) を使用してアプライアンスにアクセスできるのは、オペレータ/管理者グループのユーザのみです。詳細については『Cisco IronPort AsyncOS for Email Daily Management Guide』の「Common Administrative Tasks」の章の「Adding Users」を参照してください。

シリアル接続経由のアクセス

アプライアンスにシリアル接続経由で接続する（『Cisco IronPort AsyncOS for Email Configuration Guide』の「Connecting to the Appliance」を参照）場合のシリアル ポート コネクタのピン番号については図 B-2、シリアル ポート コネクタのピン割り当てとインターフェイス信号については表 B-2 を参照してください。

図 B-2 シリアル ポートのピン番号

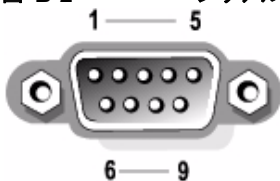


表 B-2 シリアル ポートのピン割り当て

ピン	信号	I/O	定義
1	DCD	I	データ キャリア検出
2	SIN	I	シリアル入力

ピン	信号	I/O	定義
3	SOUT	O	シリアル出力
4	DTR	O	データ ターミナル レディ
5	GND	n/a	信号用接地
6	DSR	I	データ セット レ ディ
7	RTS	I	送信要求
8	CTS	O	送信可
9	RI	I	リング インジケータ
シェル	n/a	n/a	シャーシ グラウンド



INDEX

記号

/dev/null、エイリアス テーブル内 **2-4, 2-13**

/etc/mail/aliases **2-11**

/etc/mail/genericstable **2-24**

数字

1 時間当たりの最大受信者数 **1-23**

4XX エラー コード **2-50**

5XX エラー コード **2-50**

A

Active Directory **3-30**

aliasconfig コマンド **2-13, 2-17**

altsrchoost コマンド **2-25, 2-88**

auto-select **2-82**

B

Base DN **3-18**

bounceconfig コマンド **2-57**

C

Call-Ahead SMTP サーバ **4-1**
ルーティング **4-13**

CRAM-MD5 **3-56**

CSR **1-34**

D

deliveryconfig コマンド **2-83**

destconfig コマンド **1-48, 2-65**

Direct Server Return (DSR) **7-23**

DKIM

DNS TXT レコード **5-7**

署名 **5-4**

ドメインプロファイル **5-4**

メールフローポリシーでのイネーブル化 **5-4**

DKIM の検証 **5-24**

Authentication-Results ヘッダー **5-24**

DNSBL **6-47**

DNS TXT レコード **5-4**

DNS リスト **6-47**

DomainKey-Signature ヘッダー **5-5**

drop-attachments-where-dictionary-match **6-113**

DSN (遅延通知のメッセージ) **2-56**

DSR **7-23**

仮想 IP (VIP) **7-23**

ループバック インターフェイス **7-23**

ロード バランシング **7-23**

E

Envelope To **2-12**

Envelope To、エイリアス テーブルでの書き換え **2-12**

F

FTP **B-1**

FTP アクセス **B-2**

G

genericstable ファイル **2-27**

global unsubscribe

commenting **2-103**

H

HAT

遅延拒否 **1-10**

HAT delayed rejections **1-10**

HTTP **B-1**

HTTPS **B-1**

証明書 **1-53**

I

interface コマンド **2-82**

IP インターフェイス

listenerconfig コマンドでの定義 **1-2**

IP ポート

listenerconfig コマンドでの定義 **1-3**

IronPort スпам検疫

LDAP クエリーの「SMTP:」の削除 **3-65**

L

LDAP

LDAPS 証明書 **3-20**

Microsoft Exchange 5.5 サポート **3-14**

OpenLDAP クエリー **3-28**

SSL **3-20**

SunONE クエリー **3-29**

エイリアス拡張 **3-30**

エイリアス統合クエリー **3-67**

エンドユーザ認証のクエリー **3-65**

外部認証 **3-61**

クエリー トークン **3-19**

クエリーのテスト **3-17, 3-25**

グループ クエリー **6-34, 6-35**

サーバのテスト [3-9](#)

再帰クエリー [3-20](#)

承認クエリー [1-18](#)

接続 [3-24](#)

接続プール [3-51](#)

チェーンクエリー [3-41](#)

テストサーバ [3-9](#)

匿名クエリー [3-20](#)

ドメインベースのクエリー [3-39](#)

フェールオーバー [3-69](#)

複数サーバ [3-69](#)

ベース DN [3-18](#)

ロードバランシング [3-69](#)

LDAPS 証明書 [3-20](#)

LDAP エラー [3-27](#)

LDAP 承認クエリー [1-18](#)

LDAP ルーティングクエリー

SMTP Call-Ahead 受信者検証との使用 [4-12](#)

listenerconfig コマンド [1-2](#)

M

mailertable 機能 [2-2](#)

MAIL FROM [2-24, 6-14](#)

masquerade サブコマンド [2-28](#)

mbox 形式 [6-91](#)

Microsoft Exchange、LDAP クエリー [3-30](#)

MTA [1-1, 1-33](#)

N

NIC チーミング [7-5](#)

NIC ペアリング [7-5](#)

アップグレード時の命名 [7-6](#)

アラート [7-6](#)

P

PEM 形式、証明書用 [1-36](#)

Possible Delivery [2-82, 2-83](#)

R

RBL [6-20](#)

RCPT TO [6-15](#)

RCPT TO コマンド [2-12](#)

Received ヘッダー [1-17](#)

Received: ヘッダー、ディセーブル化 [1-17](#)

Recipient Access Table (RAT)

定義 [1-4](#)

RFC

1035 [2-12](#)

2487 [1-33](#)

2821 [1-13](#)

S

SBRS

- none **6-49**
- scanconfig
 - 添付ファイルの再帰レベルのスキ
ン **6-128**
- scanconfig
 - スキャンされるファイルの最大サイズの設
定 **6-128**
 - 添付ファイル タイプのスキップ **6-128**
- scp コマンド **B-6**
- Secure LDAP **3-20**
- SenderBase **1-23**
 - IP プロファイリングの使用 **1-17**
 - 接続ごとのタイムアウト **1-17**
- SenderBase データのキャッシング **1-7**
- SIDF 検証
 - 準拠レベル **5-30**
- SIDF の検証 **6-16**
 - イネーブル化 **5-29**
 - 結果 **5-40**
 - 設定 **5-26**
 - テスト **5-45**
- SIDF レコード
 - テスト **5-27**
 - 有効 **5-27**
- SMTP Call-Ahead サーバ プロファイル
 - リスナーでのイネーブル化 **4-11**
- SMTP Call-Ahead サーバ プロファイル
 - 作成 **4-5**
 - 設定 **4-7**
- SMTP Call-Ahead 受信者検証 **4-1**
- LDAP ルーティング クエリーとの使
用 **4-12**
- SMTP Call-Ahead サーバ プロファイ
ル **4-7**
- SMTP サーバ応答 **4-10**
- 通信フロー **4-3**
- バイパス **4-15**
- SMTP アドレス解析
 - Loose モード **1-13, 1-14**
 - Strict モード **1-13**
- SMTP クエリーのワークフロー **4-14**
- SMTP 通信
 - SMTP Call-Ahead サーバ **4-3**
- SMTP 通信中の LDAP 承認 **1-18**
- SMTP 認証 **3-3, 3-48**
 - DIGEST-MD5 **3-56**
 - MD5 **3-50**
 - SHA **3-50**
 - TLS **3-57**
 - サポートされる認証メカニズム **3-50**
- SMTP 認証済みユーザの一致するフィルタ
ルール **6-55**
- SMTP 認証プロファイル **3-55**
- SMTP ルート **2-2**
 - USEDNS **2-5**
 - 再帰的なエントリ **2-3**
 - すべての削除 **2-8**
 - 制限 **2-4**
 - 複数ホストのエントリ **2-4**
 - メール配信および分裂 **2-5**

SMTP ルート、最大 **2-2**
 SMTP ルートと DNS **2-5**
 spf-passed フィルタ ルール **5-44, 6-16**
 spf-status フィルタ ルール **5-41, 6-16**
 SPF 検証 **6-16**
 準拠レベル **5-30**
 SPF の検証
 Received-SPF ヘッダー **5-39**
 イネーブル化 **5-29**
 結果 **5-40**
 設定 **5-26**
 テスト **5-45**
 SPF レコード
 テスト **5-27**
 有効 **5-27**
 SSL **3-20**
 STARTTLS
 定義 **1-33**
 strip-header フィルタ アクション **6-92**
 systemsetup コマンド **1-6**

T

TCP リッスン キュー **1-18**
 Telnet **B-1**
 TLS
 証明書 **1-33**
 デフォルト **1-45**
 必須 **1-46**

優先 **1-46**

TLS (必須) **1-42**

U

uuencoded 添付ファイル **6-8**

V

Virtual Gateway アドレス **2-91, 6-90**

Virtual Gateway アドレスのモニタ **2-97**

Virtual Gateway キュー **2-87**

Virtual Gateway™ テクノロジ **2-86**

virususerstable。「エイリアス テーブル」を参照

VLAN

定義済み **7-13**

ラベル **7-14**

X

X.509 証明書 **1-33**

あ

宛先制御 **2-65**

および中央集中型管理 **8-42**

コンフィギュレーションのインポートおよびエクスポート **2-69**

アドレス タギング キー

削除 [2-80](#)

アドレス タギング キーの削除 [2-80](#)

アドレスの書き換え [2-11](#)

アドレス リテラル [1-16](#)

暗号化 [1-22](#), [1-33](#)

アンチスパム

HAT パラメータ [1-23](#)

い

一部のドメイン

マスカレード内 [2-26](#)

イメージ スキャン [6-103](#)

イメージのスキャン [6-103](#)

イメージの判定 [6-103](#)

インジェクション カウンタのリセット期間 [1-8](#)

インジェクション制御期間 [1-29](#)

インジェクション制御のカウンタ リセット [1-29](#)

インターフェイスのサービス [B-1](#)

インバウンド電子メール ゲートウェイ [1-1](#)

う

ウィザード

リスナーの [1-2](#)

え

エイリアス テーブル

aliasconfig コマンド [2-13](#)

CLI を使用した設定 [2-12](#)

virtusertable [2-11](#)

コメント [2-14](#)

定義 [2-11](#)

複数のエントリ [2-13](#)

エンベロープ受信者 [2-12](#), [6-34](#)

エンベロープ受信者、書き換え [2-11](#)

エンベロープ送信者 [6-35](#)

エンベロープ送信者、書き換え [2-24](#)

お

大文字と小文字の区別

LDAP クエリー [3-19](#), [3-27](#)

メッセージフィルタ内 [6-27](#)

か

解析不可能なメッセージ [6-32](#)

解析不可能なメッセージのフィルタリング [6-32](#)

外部認証 [3-61](#)

仮想 IP (VIP) [7-23](#)

仮想テーブル [2-41](#)

仮想ドメイン [2-24](#)

画像分析 [6-103](#)

カンバセーションでないバウンス [2-50](#)

カンバセーション バウンス [2-50](#)

き

キー サイズ [5-5](#)

キュー [1-3](#)

く

空白ヘッダーの一致 [6-33](#)

空白文字 [6-23](#)

クエリー

SMTP 認証 [3-49](#)

受け入れ [3-28](#)

外部認証 [3-61](#)

グループ [3-33](#)

スパム検疫のエイリアス統合 [3-67](#)

スパム検疫へのエンドユーザ認証 [3-65](#)

チェーンクエリー [3-41](#)

ドメイン ベース [3-39](#)

マスカレード [3-31](#)

ルーティング [3-30](#)

グッドネイバー テーブル [1-47](#)

グローバル エイリアス [2-13](#)

グローバル配信停止

インポートおよびエクスポート [2-103](#)

概要 [2-99](#)

構文 [2-99](#)

最大エントリ [2-99](#)

追加 [2-100](#)

け

形式が不正なエントリ、エイリアス テーブル内 [2-13](#)

検証

SIDF [5-26](#)

SPF [5-26](#)

こ

コマンドのクイック リファレンス [A-1](#)

コメント [2-9](#)

インポートしたファイル内のコメント [2-9](#)

さ

再帰クエリー、LDAP [3-20](#)

再帰的なエントリ

SMTP ルート内 [2-3](#)

エイリアス テーブル内 [2-13](#)

最大値

HAT 内での 1 メッセージあたりの受信者数 [1-22](#)

HAT 内での 1 メッセージあたりの接続数 [1-22](#)

HAT 内でのメッセージ サイズ [1-22](#)

最大同時接続数 [1-7](#)

サブドメインの削除 [2-24](#)

し

失敗した着信接続または効果のない着信接続のクローズ [1-8](#)

自動配信機能 [2-82](#)

受信者検証 [4-1](#)

受信者、メッセージフィルタ内の数 [6-41](#)

準拠レベル

 SPF/SIDF 検証 [5-30](#)

証明書

 インポート [1-33](#)

 エクスポート [1-37](#)

 中間証明書 [1-34](#)

 追加 [1-35](#)

 独自の生成および署名 [1-34](#)

 認証局 [1-34](#)

 認証局リスト [1-38](#)

 要求の生成 [1-36](#)

署名

 DKIM [5-4](#)

 デュアルドメインキーおよび
 DKIM [5-4](#)

 ドメインキー [5-4](#)

署名キー

 サイズ [5-5](#)

 指定キーの削除 [5-17](#)

 すべての既存のキーの削除 [5-18](#)

署名キーのインポート [5-17](#)

シリアル接続のピン割り当て [B-7](#)

す

数値 [1-22](#)

スキャン可能なアーカイブファイルのタイプ [6-43](#)

スタティックルート [2-82](#)

すべてのエントリ

 マスカレード内 [2-26](#)

せ

制限

 altsrchost [2-92](#)

 SMTP ルート [2-4](#)

セキュア HTTP (https) [1-33](#)

セキュア コピー [B-6](#)

セキュア ソケット レイヤ (SSL) [1-33](#)

そ

送信元ルーティング [1-16](#)

そのままのアドレス [1-15](#)

た

代替 MX ホスト [2-2](#)

単項形式、メッセージ フィルタ内 **6-40**

定義 **3-52**

ち

チェーン、エイリアスの **2-13**

チェーン クエリー

LDAP **3-41**

作成 **3-42**

遅延バウンス **2-50**

着信接続

失敗した接続または効果のない接続のクローズ **1-8**

着信接続のタイムアウト **1-8**

中央集中型管理

および宛先制御 **8-42**

て

ディレクトリ ハーベスト攻撃 (DHA) **3-43**

デフォルト

送信者のドメイン **1-15**

デモ証明書 **1-34, 1-43**

デュアル DKIM および DomainKey 署名 **5-11**

電子メール

アドレスの書き換え **2-11**

電子メール アドレス

送信元ルーティング **1-16**

電子メールのリダイレクト **2-2**

転送で使用する SMTP 認証

と

ドメイン

デフォルトのドメインの追加 **1-15**

ドメインキー **5-2**

DNS TXT レコード **5-7**

DNS テキスト レコード **5-18**

検証 **5-2**

署名 **5-4**

署名キーのインポート **5-17**

署名キーのサイズ **5-5**

署名の検証 **5-3**

セレクタ **5-8**

ドメイン プロファイル **5-4**

ドメイン プロファイルのインポート **5-20**

ドメイン プロファイルのエクスポート **5-20**

ドメイン プロファイルのテスト **5-19**

標準化 **5-8**

メール フロー ポリシーでのイネーブル化 **5-4**

ドメイン コンテキスト

エイリアス テーブル内 **2-12, 2-17**

ドメイン テーブル **2-41**

ドメインの付加 **1-15**

ドメインのマッピング **2-2**

ドメイン プロファイル

インポート [5-20](#)

エクスポート [5-20](#)

すべての既存のプロファイルの削除 [5-21](#)

テスト [5-19](#)

ドメイン プロファイルの削除 [5-20](#)

ドメイン プロファイルのインポート [5-20](#)

ドメイン マップ

インポートおよびエクスポート [2-48](#)

概要 [2-41](#)

コメント [2-48](#)

制限 [2-41](#)

不正なエントリのインポート [2-48](#)

カンバセーション [2-50](#)

カンバセーションでない [2-50](#)

バウンス検証 [2-75](#)

バウンス プロファイル [2-58](#)

パブリック ブラックリスト [6-47](#)

ひ

ひとかたまりにする [2-3](#)

秘密キー [1-33](#)

標準化 [5-8](#)

ふ

フィルタ [6-2](#)

解析不可能なメッセージ [6-32](#)

空白ヘッダーの一致 [6-33](#)

コメント文字 [6-5](#)

辞書用語の一致 [6-21, 6-49](#)

スキャン可能なアーカイブ ファイルのタイプ [6-43](#)

正規表現および Python [6-26](#)

複数の IP インターフェイス [2-91](#)

部分ドメイン

エイリアス テーブル内 [2-12](#)

ブラックホール リスナー [1-3](#)

プロトコル

「メール プロトコル」を参照

に

二重設定、編集 [7-1](#)

ね

ネットワーク トポロジの隠蔽 [1-17, 2-24](#)

は

配信 [2-1](#)

暗号化 [1-33](#)

バイパス

アンチスパム [6-97](#)

バウンス

へ

ヘッダー [2-11](#), [2-24](#), [2-26](#)
 ヘッダーの削除 [6-92](#)
 ヘッダー、メッセージ フィルタでの削除 [6-92](#)

ほ

ホスト アクセス テーブル (HAT)
 定義 [1-4](#)
 本文スキャン [6-42](#)

ま

マスカレード
 CLI を使用した設定 [2-25](#)
 LDAP クエリー使用 [2-24](#)
 インポートおよびエクスポート [2-27](#)
 および `altsrchost` コマンド [2-25](#)
 コメント [2-26](#)
 制限 [2-26](#)
 静的テーブル使用 [2-24](#)
 定義 [2-24](#)
 テーブルの構文 [2-25](#)
 不正なエントリのインポート [2-27](#)

め

メールの配信 [2-63](#)

Possible Delivery [2-82](#)

宛先ドメインへのメールの制御 [2-63](#)
 制御 [2-63](#)

メッセージのタイムアウト [2-82](#)

メールのループ、検出 [6-154](#)

メールフロー ポリシー

`listenerconfig` コマンド [1-2](#)

メールフロー ポリシーでの DomainKeys および DKIM のイネーブル化 [5-4](#)

メールプロトコル

`listenerconfig` コマンドでの定義 [1-3](#)

メッセージのエンコード [1-11](#)

 ヘッダーおよびフッターの設定 [1-11](#)

 変更 [1-11](#), [6-134](#)

メッセージのリレー [1-1](#)

メッセージのレプリケーション [6-65](#), [6-84](#)

メッセージ フィルタ

`attachment-protected` [6-18](#)

`attachment-unprotected` [6-19](#)

`body-dictionary-match` [6-50](#)

 MIME タイプ [6-43](#)

 SenderBase 評価スコア [6-48](#)

 アクティブ化 (非アクティブ化) [6-118](#)

 暗号化 [6-44](#)

 移動 [6-117](#)

 インポート [6-123](#)

 エクスポート [6-123](#)

 概要 [6-2](#)

 組み合わせ [6-5](#), [6-23](#)

 構文 [6-4](#)

削除 [6-117](#)

時間および日付 [6-39](#)

順番 [6-6](#)

ステータス [6-118](#)

追加 [6-116](#)

フィルタ アクション [6-64](#)

変数 [6-74](#)

ランダムな番号 [6-40](#)

ルール [6-3](#)

メッセージ ヘッダー [6-39](#)

メッセージ ヘッダー、メッセージ フィルタでの追加 [6-93](#)

メッセージ本文のスキャン [6-43](#)

も

元の状態への切り替え [7-6](#)

ら

ラウンドロビン方式の Virtual Gateway [2-87](#)

り

リスナー

LDAP 承認クエリー [1-18](#)

Received: ヘッダーの追加 [1-17](#)

SenderBase データのキャッシング [1-7](#)

暗号化 [1-22, 1-33](#)

インジェクション カウンタのリセット期間 [1-8](#)

グローバル設定の編集 [1-11](#)

厳密な SMTP アドレス解析 [1-13](#)

最大同時接続数 [1-7](#)

削除 [1-20](#)

失敗した着信接続のタイムアウト [1-8](#)

すべての着信接続の合計時間の制限 [1-9](#)

定義 [1-1](#)

デフォルトのドメインの追加 [1-15](#)

不正な MAIL FROM およびデフォルトドメイン [1-16](#)

編集 [1-20](#)

リスナーの追加 [1-11](#)

ルーズな SMTP アドレス解析 [1-14](#)

リスナーの最大接続数 [2-82](#)

リバース DNS ルックアップ [2-86](#)

リンク集約 [7-5](#)

る

ルーティング [2-1](#)

SMTP Call-Ahead サーバ [4-13](#)

ループバック インターフェイス [7-23](#)